

キノの旅 —the Infinite World—

ウレリックス

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

世界は思いのほか狭い。そして無限大に広がっている。

※この小説は「Infinite Dendrogram」の二次創作です。キノの旅というタイトルではありませんが、完全なクロスオーバーではなく「キノの旅」の登場人物は出てきません。あくまで「キノの旅」を読んだ主人公によるキノのRPです。

話を出すのはこの順ではありませんが、キノの旅順はだまかにドライフ↓アルター↓レジエンダリア↓天地↓グランバロア↓黄河↓カルディナ↓アルター です。時系列の参考にしてください。（展開によっては訂正を入れます）

デンドロ二次小説の感想欄において、私が使用しているのはウレリックス◆LbDcvr6ARRAです。

# 目次

	第1話 迷惑な話   H u n t i n g	1
	第2話 歓迎する話   W h a t t o D o	7
	第3話 夢見る者達の話   H e l l o , W o r l d !	14
	第4話 忘れられない話   S h u t u p !	21
	第5話 壊せない話   I c a n ' t D o I t .	27
	第6話 殺しあう話   S e r i o u s M a t c h	35
	第7話 依頼主の話   M a s t e r m i n d	45
	第8話 廃墟の話   L o s t H o m e	53
	第9話 爆発する話   C a u t i o n	60
	第10話 お茶会の話   M a t e r n a l L o v e	68
	第11話 わがままな話①   D o n ' t f o r g e t m e .	76
	第12話 わがままな話②	85
	第13話 わがままな話③	93
	第14話 愚痴をこぼす話   T i t f o r T a t	103
	第15話 待ち焦がれた話   D e m a n d a R e m a t c h	111
	第16話 手紙の話   G a m e o r W o r l d ?	120
	第17話 惑わされる話   I m p o s t o r	130
	第18話 向かうべき話   H e w a s a H e r o .	139
	第19話 かき乱す話①   W h o a m I ?	150
	第20話 かき乱す話②	157
	第21話 かき乱す話③	165

第22話	歌う話	—	H e r	f l o w e r	—	177
第23話	知らなかった話	—	J u d g e m e n t	—	—	185
第24話	堂々とした話	—	B i g	B o d y	—	195
第25話	信念の話	—	M y	R e a s o n	t o	D i e
203						
第26話	仲間たちの話①	—	Y o u	a r e	N o t	A l o n
e						
第27話	仲間たちの話②	—				221
第28話	約束の話	—	I	w a n t	t o	M e e t
						Y o u .
第29話	愉悦の話①	—	P l e a s u r e	—	—	239
第30話	愉悦の話②	—				246
第31話	追いかける話	—	H a r d	D a y s	—	255
第32話	信じていた話	—	P r a y e r	f o r	P a s t	—
264						
第33話	信じている話	—	P r a y e r	f o r	F u t u r e	—
第34話	予測できない話	—	E q u i t y	—	—	281
第35話	ある奴隷の話	—	I	l i v e .	—	292
第36話	手を取り合う話	—	F a s t	W i n !	—	302
第37話	尽くす話	—	L e a v e	t o	O t h e r s	—
318						311
第38話	幻の話	—	O n e	o f	t h e	F r e e d o m
第39話	使い方の話①	—	F e a r	—	—	325
第40話	使い方の話②	—				332

第41話	使い方の話③	339
第42話	味気ない話   See you Later.	350
第43話	拉麺の話   dining manners 	362

## 第1話 迷惑な話 — H u n t i n g —

よく晴れた日のイースター平原。

アルター王国首都・アルテアの東に位置するこの平原を、一台のバイクが走っている。

「この辺りにくるのも久しぶりだね、ヘルメス」

『そうだね。戦争を避けて東方の国へ行つてたきりだったからね』

「今度は西方の国をうろうろしようか」

バイクに乗っているのは一人だけ。

にもかかわらず、平原には二人が会話する声流れる。

バイクに乗っている人物は帽子をかぶってゴーグルをつけており、顔はつきりと見ることはできない。

しかしその帽子からこぼれる黒い髪は短く、肩ほどもなかった。

着こんだコートが風に揺れながら、その人物はバイクを走らせる。

「アルテアか……戦争の関係で人が減っているっていう噂だけだ」

その人物の口から出る声は、紛れもなく先ほどの会話していた声の片方。

では、もう一つの声の主は誰か？

それは人ではない。

もう一つの声は、平原を走っているバイクから流れていた。

『キノはまた起こると思う？ 戦争』

「もちろん」

『その時も逃げるの？ それとも参加する？』

「どうかな。ドライブは報酬が多かったみたいだから損したとは思ってたけど、戦力の変化があるだろうし、そもそもボクみたいな流れ者が参加できるかわからないし」

そんな雑談を続けながら、バイクの搭乗者……キノと呼ばれた人物は久しぶりに訪れる街が遠目に見えてきたことから心高ぶるままにバイクの速度を上げる。

だが、突如のどかな平原には似合わない、大きなほら貝の音が響く。『ブオオ、ブオオ』とあちこちで鳴り響く音と共に、拡声アイテムを

使っているだろうアナウンスが響く。

『エリア〈ヘイスター平原〉を通過中、あるいは狩猟中の〈マスター〉にご連絡します。今から一〇分後、この〈ヘイスター平原〉にて、PK克蘭〈K&R<sup>かある</sup>〉のハンティングを行います。対人戦をお望みでない方は、一〇分以内にご退去ください』

『……何これ？』

「K&Rって、確か王国の克蘭キングにも入っているハンティング克蘭……だったと、思う」

『ここ初心者用の狩場でしょ？ そんなところでやるの？』

キノはこの〈Infinite Dendrogram〉というゲームにおいて“旅人プレイ”をしている。

各国を旅してまわる上で、襲ってくるPK克蘭などに対して対処できるような有名どころについては大体抑えている。

だからこそ、K&Rのことは知っていたし、初心者狩場でハンティングを行うと言う彼らの行動を疑問に思った。

初心者を相手にしたPKというのは、実のところうまみは少ない。

初心者をPKしたところで、彼らが落とすドロップアイテムなどがしれているし、何よりここは王都のすぐ側だ。王都の側で暴れて国に目をつけられようものなら王国に拠点を置く彼らにとっては痛手となる。

しかし、事情はどうあれ、すでに賽は投げられている。

キノたちもまた、巻き込まれることがほぼ確定していた。

「迷惑だなあ……もう少しで王都に着くのにな」

『で、どうするのさ。キノなら始まる前に逃げられるでしょ？』

「確かに、全速力を出せば逃げられると思うけど……。でもさ」

腰にさげた銃にほんぽんと手を当てながら、キノは微笑む。

「たまには、自分の最高の全力を出すべきだ」

『いつつもへU B M』とかに出会ってはデスペナルティにされてるけど？』

「うるさいよ、ヘルメス」

キノとしては戦闘をしておきたい気持ちもあるが、もちろん最悪は逃げる気満々である。

そのため、MP消費が増えないようにいつも通りの速度でバイクを走らせる一方、逃げる時に備え少しでも王都に近づいていようとバイクの進行方向を王都へと向ける。

無論、同じことを考える人は多いだろうから、まず王都の方にPKクランのメンバーはいるだろうな、と思っけていても。

『繰り返します。今から一〇分後、このヘイスター平原にて、PK克蘭へK&R』のハンティングを行います。対人戦をお望みでない方は、一〇分以内にご退去ください。——《生体探査陣・【人間】》』

イースター平原で狩りをしていた初心者たちは何が何だかわかっておらず、右往左往している中キノは気にせずバイクを走らせ、またキノが乗っているバイクは感心した声をあげる。

『なるほど！ あのアナウンス、《詠唱》の効果もあるんじゃない？』  
『それに《生体探査陣》のスキル名まで言うってことは、隠れても無駄だから逃げるか戦うかしろっていう警告も含んでるんだらうね。よくできてるなあ』

やがて、「これよりハンティングを開始する」という旨のアナウンスが周囲に響き渡る。

逃げられなかったへマスター、来るなら来いと警戒していたへマスターが構える中、開始を知らせるアナウンスが終わったと同時に、空から何百、何千もの矢が降り注ぐ。

これは天地の上級職【強弓武者】のスキル《五月雨矢羽》によるもので、一射で百の矢を放つこのスキルが集団で使用されたことにより何千もの数へと膨れ上がっていた。

「始まったね、《ギアシフト》」

『まずは範囲攻撃。しかも威力じゃなくて数の暴力による攻撃だね。特定範囲を狩りの対象としているわけだから安定の選択肢かな。』



もつとも、キノには何の意味もないけれど』

そう、多くの矢が降り注ぐにもかかわらず、キノにはほとんどダメージがない。

正確にはいくつか矢が当たっているのだが、その矢はキノに刺さることもなく、ただぶつかるだけで地面に落ちていく。

キノが呟いたスキル《ギアシフト》はバイクの速度を上げるためのものであり、今回の攻撃を防いだのはまた別の理由である。

速度を上げたことで王都がどんどん迫る中、キノの《殺気感知》スキルが先にある茂みに複数の殺気を感じ取る。十中八九、矢を抜けて逃げようとする《マスター》を待ち構えるPK克蘭のメンバーだと予想できた。

「……ここからは、いつも通りやろうか」

『気をつけてねー』

「いくよ。——《<sup>へ</sup>を<sup>ル</sup>《<sup>メ</sup>《<sup>ス</sup>》》」

キノがスキル名……TYPE:ギアである自身のエンブリオへ疾駆二輪 ヘルメス〉の名を冠した必殺スキルの名を口にした次の瞬間。

キノを待ち構えていたPK達の視界からその姿が消え

パァン！ パァン！

「えっ？」

次に彼らが目にしたのは、自分たちの仲間のうち二人の頭部が弾け飛んだ姿だった。

そして、その先にいるのは銃口から煙を出す、銃を構えたキノの姿。何があつたのかは一目瞭然だった。

「あ、あいつー！」

「今向こうにいたよな!? いくら猛スピードのバイクに乗ってたからって」

パァン！

また一人、キノが引き金を引くとともにPKの頭部が弾け飛ぶ。的確に頭部を打ち抜く技量も相当だが、何より一切の動揺もなく頭を打ち抜いている。

冷たくPK達を見つめるキノの目は……PKである自分たちよりも、よほどPKらしい目であると、彼らは恐怖した。

「申し訳ありませんが、ボクは先を急いでいますので」

PK達が応戦しようとするも、武器を向けた次の瞬間にはキノの姿が別のところにある。

キノはいわゆるAGI型と呼ばれるビルド構成であり……高速で移動しながらの戦闘スタイルであった。彼らのトップである「抜刀神」カシミヤなら追いつくことはたやすかっただろうが、今その場にいるメンバーのAGIではキノに追いつくことができない。

キノが全員を撃ち殺すまで、さほど時間はかからなかった。

『おつかれー』

「おつかれさま」

PK達がいなくなったので元のようにヘルメスに乗って先へと進むキノ。

PKとして実力があつただろうにもかかわらず、十数人はいた彼ら逃亡者対応チームを全員殺した上に猛スピードで走っていくキノを追いかける気は他の〈K&R〉のメンバーにはなく、サブオーナーである狼桜もあんなのが標的の初心者わけがない、と判断しこれ以上は追わなくていいと指示を出した。

『ねえねえ、キノ』

「何？」

『たぶんあのPK、計画的なものだね。PKクランが初心者狩場でわざわざ初心者を狩るって、それなりの理由があるでしょ？』

「そうだろうね。王都に所属するPKクランがわざわざ？　って思ったけど、よくよく考えればへマスターだけを狙うなら国からのペナルティはないだろうし」

王都アルテアにまもなく着くという頃に、ヘルメスはキノへと話しかける。

『迷惑だっただろうね』

「ああ、そうだね。確かに初心者狩場でクランによる広範囲PKが行われたらそりゃあ迷惑だろうさ。初心者の多くがデスペナルティになっただろうから」

『あー、うん。それはそうなんだけど、そうじゃなくなつて』

ヘルメスはゆっくりと速度を落としていく。

アルテアの入り口にたどり着き、降りたキノにヘルメスは答えた。

『統制されたクランにおいて、あれだけメンバーを殺されたらきつと計画とか予定は狂うよ。逃げることでできたのに好き好んで暴れまわったんだから、さぞかしキノはPKクランにとっていい迷惑だっただろうね』

## 第2話 歓迎する話 — What to Do —

アルター王国の首都・アルテアに入ったキノはヘルメスを手で押して中世風な街並みを眺めながら、街の中を歩いていた。

以前来た時よりもどこかしら商店が減っているようにも見受けられ、やはり人の流出があるのは間違いないらしい。

そして、そんな状態ではあっても、人々は笑顔で生活している。

彼らの顔に、国が亡ぶかもしれないと言う悲愴な様子は全く見られない。

「思った以上に人はいるね。掲示板とかじゃもう王国は終わり、みたいなことが多く書かれていたから亡国寸前なのかとも思ったけど」

『国の人だつてまた戦争があるかもしれないっていうのはわかっているだろうね。けれど、彼らは笑って生きている。紛れもなく、今をしっかりと生きているんだよ』

「……そうだね」

旅をしていく中で、キノは様々な人間に出会っている。

人によって異なるリアルを抱えた〈マスター〉にも、このデンドロの中での人間であるティアンにも。

マスターとティアン、異なる存在ではあるが両方と交流し続けたキノは、ティアンのことをただのNPCであるとは考えていない。紛れもなく一つの生命であると考えており、いわゆる《世界派》の考えを持っている。

だからこそ、戦争が起こるかもしれないこの状況でもティアンたちが前を向いて生きている姿を目にして、キノは改めて思わずにはいられない。彼らは確かに、人として、生命として、ここで生きているのだと。

『前を向いて生きるって言うのは、人しかできないことであるし、人だからこそできるんだよ』

「だから彼らは……そして、ボクたちは前を向いて生きていけないといけない。何があっても」

キノが現実で○○○として生きていく中で……そしてこの世界

で「キノ」として生きていく中で。

何もかも楽しいことだけ、だなんてことはなかった。

悲しいことも、辛いことも。どうしようもないとわかっていてもやりきれないことだってあった。

それでも、キノは今ここにいます。ここで前を向いて生きています。

「違う！ 私がもつと強ければよかったのだ!!」

思いにふけっていたキノの耳に突然叫び声が届く。

辺りを見回してみると、声の主はセーブポイントにもなっている中央広場の噴水にいた。

黒く長い髪をした少女が、金髪の青年の前で悔しそうな顔を浮かべている。

「お主がプレイヤーでなければ私は……自分の命もお主も失っていたのだ……。私は……。それが恐ろしくてたまらぬ……」

ぽろぽろと涙をこぼす少女。

その光景を見て、ヘルメスはキノに小声で伝える。

『あの子マスターじゃなくてエンブリオみたいだね』

「ヘルメスのご同類？ ガードナーかな」

『そうかもしれないし、そうじゃないかもしれない。さすがにわからないよ』

その後、少女と青年は決意を新たに、二人で前を向いて進んでいくと誓う。

当然、彼らの熱い思いは周りにいた皆が聞いていたので、全員が拍手した。キノも拍手した。

二人は恥ずかしくなったらしく、「森で狩りができなくなったがこれからどうするのだ？」「考えがある」などの言葉を交わしつつ、さっ

さと人の多いところが商業区の方へと走っていった。

すれ違いざまに、キノは少女の「マスター」であろう青年に向かって《看破》を使う。

「……「レイ・スターリング」、か。合計レベルが低いし、ルーキーだろうね」

『スターリング?』

覚えのある名字を持つ青年が走っていく姿を、キノをしばらく見つめていた。

彼らもまた、前を向いて生きている。

自分がチュートリアルを終え、どこか人を突き放したような話し方をする管理AIに見送られながらこの世界へと歓迎されたことを思い出す。

「ようこそ。ボクたちは、君を歓迎する」

柄でもないし、誰も聞いていないけれど。

キノは遠ざかる背を見ながら、この世界に加わったルーキーへとはなむけの言葉を送った。

キノが広場から離れてすぐ。

『おや、ずいぶんと珍しい顔クマー』

『あれ、その声はもしかして?』

「お久しぶりです」

せっかくアルテアへ来たのだからおいしいものを食べようと足を運んだ料理店で、キノは偶然にも心当たりのあった「スターリング」と再会を果たす。

大きなクマの着ぐるみを着た男の名はシュウ・スターリング。

着ぐるみであるにもかかわらずむしやむしやと食事を口に運ぶ彼と一緒にいたチャイナドレスの女性に断りを入れて、キノを手招きで自分たちの席へと誘う。

『アルテアにはいつ来たクマー?』

「つい先ほどです。初心者エリアにもかかわらずイースター平原でP

Kに巻き込まれて大変でした」

『PKは迷惑クマー』

クマの顔がうんうんと頷く横で、北欧系の顔をしたチャイナドレスの女性はにこやかに自らの隣の席に座ったキノへとコップを手渡した。

「えーつと……」

「あ、私はレイレイダヨー」

「ボクはキノと言います。このバイクがボクのエンブリオ、ヘルメスです」

『よろしくー!』

「よろしくネー。さき、これをどーぞ」

レイレイが差し出したコップを、キノはにこやかに左手で受け取る。

そして、右手は

「……えーつ、と。お姉さん、そういうの良くないと思うナー」

「そうですね。ボクも、こういうのは良くないと思います」

《瞬間装備》で即座に装備した拳銃を持ち、その銃口をレイレイの腹へとつきつけていた。

左手を出して相手の視線を集めたその一瞬に、流れるように今の状況を作り出したキノにレイレイは冷や汗を流しながらも笑顔を作る。

こんな状況でも笑顔を作れるのは、彼女が芸能人であるからこそだろうか。

「出会ったばかりの人に銃を突きつけるのは」

「繰り返します。ボクも、出会ったばかりの人に何か混入した飲み物を差し出すのは良くないと思います」

そこまで言われると、レイレイは降参とばかりに両手を上げる。

事実、彼女は差し出した飲み物に、飲んだ者が軽い《酩酊》状態になるよう仕込んでいたからだ。

ちなみに、レイレイが出会った新顔に状態異常を仕込んだ飲み物を飲ませようとする、いたずら好きな側面を知っていたシユウは、何も言わずに内心ニヤニヤしながら二人の様子を見ていた。

状態異常を仕込むというのも、彼女なりの歓迎ではあるのだが。

「……はー。なんでわかったのかナー……《危険察知》くらいじゃわからないと思うんだけど」

「その、なんで、と言われると説明しづらいのですが……」

『キノの《危険察知》ははずば抜けてるからねー。あれはセンススキルの一つだし、天地でお師匠さんに散々鍛えられたから』

数あるスキルの中でも、『料理』や『危険察知』をはじめとしたセンススキルと言われる部類がある。これらは主に“現実から持参した技術やセンス”で代用できるスキルの通称であり、つまりはスキルに頼らずとも似た結果を出すことができるものである。

キノの場合、リアル事情も多少は関係していたがそれ以上に天地での修行の結果が大きかった。

事実、天地に来る前と後では危険察知の度合いが天と地ほどの差もあった。

『あれって鍛えればつくものクマ?』

「シユウさんがそれを言うのは納得できませんが……その、これくらい察知できないととてもあそこで生活することは……」

『気が付いたらデスペナルティになってるのが日常茶飯事だったよね、9割9分油断してたところを師匠に撃たれて』

「どんだけ修羅の国なんだよあそこ、とシユウはぼやきながら飲み物（もちろん安全なもの）を口にする。

『何の話だったか……ああ、PKか。ウエズ海道では結構暴れてたらしいなー、さつきもティアンの交易商人が襲われて荷物根こそぎ持っていかれたって話を聞いたクマ』

「エ?」

シユウの言葉に凍り付くレイレイ。

実はこの日、レイレイが前々から楽しみにしていた海の珍味が交易商人によって運ばれてくる、はずだった。

しかし荷物を奪われたということは、その中にレイレイが楽しみにしていたものも……。

「……ちよつと、やることができたから行ってくるネー」



『お、おう。行ってらっしゃいクマ』

フンスと鼻息を荒くしたレイレイが去っていき、シユウはあーあと天井を見上げる。

レイレイは王国にいる4人の〈超級〉の一人。おまけにシユウを含め他の3人の超級全員が「相手にしたくない」と思うほどの人物なのだ。

『全く……初心者狩りにテイアン襲撃か。まず《ゴブリンストリート》だろうな』

「でも、イースター平原にいたのは《K&R》でしたよ?」

《ゴブリンストリート》も《K&R》同様、王国では有名なPK克蘭だ。

ただ、こちらはハンティング克蘭というよりは野盗克蘭といったほうが正しい。

『つてことは複数の克蘭が動いているつてことクマ? 初心者狩りのために?』

『初心者つて言えば、さつきデスペナから復帰した様子の“レイ・スターリング”つていう初心者のマスターがいたみたいんだけど』

『その話、詳しく』

ヘルメスは彼らが新たなスタート地点として立ち上がったあの熱く華々しい話をしようと思っただのだが、デスペナから復帰したということにシユウは敏感に反応した。

やはり知り合いであつたらしい。

「確かあのマスターとエンブリオに今度こそ、みたいなことも言つてましたから、まずPKされたのかと」

『あいつらが襲われた場所、わかるか?』

『森で狩りができなくなった……とか言つてたよね』

『森……ノズ森林か。ちよつとやるべきことができたからこのへんでお暇するクマ』

レイレイに続き、シユウもまた店から出ていった。

一人残されたキノは、ゆつくりと自分の分の食事を楽しみ、その余韻を楽しんでゆつくりしてからようやく店を出る。

ヘルメスは『これからどこに行く?』と声をかけたが、キノは微笑んで北を指さした。

これが自分のやるべきことだと言わんばかりに。

「とりあえず、ボク達がきつかけを作っちゃったノズ森林がどうなったか見に行こう」

「あああああ! き、キノさん! 助けてください! ヘルメスくんに乗せてここから逃げさせてええ!!」

「……………ええー……………」

『ニヤロウどこいったクマ、出てきやがれえええ!!』

「は、薄情ものお! <UBM> 狩りの手伝いとか貸しが一個はあるじゃないですか! その借りを返して! あとようこそ王国へ!」

砲撃による爆音が響く中、かつての天地での知り合いが隠形を解除して助けを求めてきたのを見て……キノはやれやれとため息をついた。

### 第3話 夢見る者達の話 — Hello, World

！――  
〈Infinite Dendrogram〉。

一大ムーブメントを巻き起こしたこのダイブ型VRMMOに、新たな来訪者が現れた。

やってきたのは、一人の少女。驚いた表情で辺りを見回している。ゲームを起動したと思ったら、次の瞬間には見覚えのない庭に立っていたのだから無理もない。

風で揺れる木、水の流れる川……これがゲームの中とは思えないほど、現実感のある庭に少女はいた。

「ようこそ、〈Infinite Dendrogram〉へ」

突然かけられた声に、少女はビクツツとして振り返る。

「時間が勿体ないんだ、さっさと説明を始めさせてもらうよ」

木陰に立ってそう言ったのは一人……いや、一匹の白いウサギ。

しかし人のように二本足で立ち、おまけに布製の衣服を着て上着を羽織り、さらにネクタイまでしている。

手に持った懐中時計を見て顔をしかめると、あっけにとられている少女のことを気にもかけず己の業務をこなす。

「僕はこのゲームの管理AI12号、ラビット。さっそくだけどいくつか決めてもらうよ。まずは描画選択だ。現実視、3DCG、2Dアニメの中から……」

「現実視。世界を見て回るために来たこの世界で、現実視以外はあり得ない」

少女に説明をさえぎられ、ラビットの説明が止まる。

しかし、これはそれまで黙っていた少女に突然遮られたから、ではない。少女が口にした言葉の中に、ラビットが聞き逃せない言葉があったからだ。

「世界を、見て回る？」

「そう。私はそのためにここに来た。現実の世界を見て回ることはで

きなくとも、ここなら自由に世界を見て回れる。見たことのない土地、人、建物と出会うことができる。たくさん思い出を得ることが出来る」

そこで少女の、無表情だった顔が僅かに微笑む。

「この世界なら、私にそんな可能性をくれるのでしょうか？」

少女……星野 桜は、旅を愛していた。

否。愛し、そして何よりも求め欲していた。

彼女が「星野 桜」ではなく「○○ 桜」であった時から。

16歳である彼女は現在、叔父夫婦に引き取られて生活している。

元の両親が……桜の親権を失ったためだ。

桜は過去を振り返って思う。

かつての両親だった者たちは、あまりに小さな世界で生きていた、と。

子供に対する自分たちの考えはすべて正しいと考え。

だからこそ、桜に対し一切の「主張」を認めなかった。

「子供は大人の言うことにただ従っていればいい」のだと、本気で思っていた。

一つでも自分たちの思い通りに動かなければ、即座に暴力を振るった。

だからこそ、人形のように従順に見えた少女が自分たちを虐待で告発したとき、その事実が受け入れられなかった。

彼らは気づくべきだったのだ、少女にだって意思があるのだと。

身体的な暴力、そして桜の「主張」を一切認めない心理的虐待に、親権停止の処分が下された結果、桜は彼らから離れることに成功した。

そして今。

彼女は、虐待から抜け出すために頼った叔父夫婦の元で生活している。

妻は病弱で子供を産むことができないだろうと医者に言われていた。だからこそ、子供がないことを寂しく思っており、姪の桜を大

層かわいがっていた。

そのため、桜の両親が虐待をしていると判明したとき、ぜひ自分たちが、と桜を受け入れた。

さて。

話を「彼女は旅を求め欲していた」という点に戻そう。

桜の両親は、旅行が嫌いだった。

何故高い金を使って遠くまで行かねばならないのか。

写真で見れるようなものをわざわざ遠出してまで見て、いったい何が面白いのか、そう思っていた。

結果、旅行というものは一切しなかったのである。当然、桜が「旅行へ行きたい」と駄々をこねようと、殴って黙らせた。

「小さな世界で生きていた」という両親に対する考えは、このことも理由の一つである。

一方で桜は、幼稚園、そして小学校と通い続けるうえで当然同級生というものがいる。

そして聞かされるのだ、家族で旅行に行った思い出話を。

聞くことしかできない旅行の話を、桜がどれだけうらやんだか。

遠出することができない中で、写真でしか見られない世界を、どれだけ自分の目で見てみたいと焦がれたことか。

小学6年生の修学旅行。さすがに両親も止めることはしなかった。

桜の両親は旅行が嫌いだったが、それ以上によそ様から奇異の目で見られることを嫌った。

だから修学旅行に最初から「行かせない」というわけにもいかない。ちなみに、桜への虐待の跡も、人には見られないよう服の下に隠れる所を殴ったりしていた。

桜はついに旅行へ行けるのだと、修学旅行という存在を知ったその日からずっと心待ちにしていたのだ。

しかし。桜は「風邪」というどうしようもない理由で修学旅行を欠席する。

前日に熱を出し、念願の旅行に行けないと知った桜は深く絶望した。

ようやくつかんだと思ったチャンスを失ったことに、目の前が真っ暗になった。

中学生になった頃から、今までの虐待生活から抜け出すため、桜は動き出す。

詳細はここでは語らないが、その結果は上で述べた通りだ。

そして、中学生での修学旅行……初めての旅行で、桜は涙を流した。新幹線、流れる風景、そしてたどり着いた見知らぬ世界。

全てが彼女の刺激となり、初めて見る風景が、初めて訪れた場所が、桜を感動させた。

あの時胸にこみあげてきたあらゆる感情を、桜は生涯忘れまい。

そしてその後……桜が日をまたいだ旅行に行くことはなかった。

夫婦としても大変心苦しくはあった。しかし……病弱な妻を旅行に連れて行くとなると、どうしても彼女に負担がかかる。かといって、一人残すわけにも行かない。それでも、せめて日帰り程度ならばと休日に夫が連れて行った。桜は叔父夫婦に大層感謝していたので、桜としても不満を感じることはない。

しかし……と思いあぐねていたところに、叔父夫婦と共に見ていたテレビで〈Infinite Dendrogram〉の存在を知った。

見渡す限りの世界が、そこにある。

そして時間加速により実際よりも遙かに長く世界を見て回れる。

これらの要素に桜は大層心惹かれ、その場で夫婦に懇願。両親のせいで滅多に自己主張する事がない桜を密かに心配していた夫婦は虐待を知らされたとき以来の姪の……いや、義娘の頼みを喜んで受け入れ、少女は〈Infinite Dendrogram〉にやってきた。

「……ああ。〈Infinite Dendrogram〉は、新世界

と君だけの可能性を提供する。その言葉に偽りはない」

ラビットは桜の言葉を肯定する。

桜が満足そうな顔で頷いたのを見て、ラビットは次にアバター作成について説明した。

自由にアバターを製作出来ることを知り、桜は自分の現実の姿をベースにしたうえで、ラビットにある依頼をした。

「参考画像を出したら、その顔に似せることはできる?」

「イラストを現実視にするなら完全に同じにはできないけど、似せることは可能だよ」

桜が提示した画像は、一人の人物のまわりにたくさんの青い鳥が飛ぶイラスト。

その人物は短い黒髪で少年のようにも少女のようにも見える。無表情で静かにこちらを見つめてくるようなイラストを元に少しだけ調整を入れ、桜のアバターは完成した。

「それじゃ、所属する国を決めてくれ。長々と迷う人もいるんだけど時間はかけないでくれると嬉しい。時間が勿体ないからね」

ラビットが出したスクロールから、7つの国の様子が浮かび上がる。

一通り眺めた少女は、ラビットの期待通りさほど時間をかけずに決定する。

「それじゃ、ドライブ王国で」

「ちなみに、理由はあるのかい?」

「絶対に必要なものがあるんだ。あの主人公のように、モトラド……いや、バイクに乗って旅をしたい。それが一番手に入りそうなのは、この機械の国と考えた」

スタート国家を決め、最後に……ラビットがあえて最後に回した質問をする。

「君の、プレイヤーネームは?」

「……………」

アバターを作った時から……いや、〈Infinite Dendrogram〉を始めるときから桜は決めていた。

自分の大好きな物語である「キノの旅」……あの物語の旅人のような旅をしたい、ずっとそう思っていた。

だから……彼女はこう名乗る。

「キノ。ボクは……キノだよ」

姿と口調を似せ、名前は同じ名を名乗る。

初期装備にもちようど似た茶色のコートを見つけて選択し、武器には銃を選ぶ。

「以上でチュートリアルは終わりだ。せいぜいこの世界を好きに見て回るんだね」

「ありがとう。……君も、ね」

キノの言葉にラビットは大きく目を見開き、驚愕と共に視線を向ける。

「……君は、ボクと……いや、私と同じ目をしてる。同じ夢を持つてる。そりゃあ、わかるよ」

微笑んで手を振るキノに唾然とした後、ラビットは天を仰いで手で顔を覆った。

（そう、その通りだよ。僕は世界を見たい。マスター達が増えて、第6形態まで達するマスターが増えれば……僕はようやく、ようやくアバターを得て世界に立てる。僕のマスターが望んだ、本物の世界を見ることができる……いつか、マスターに話せる世界の思い出を、僕はたくさん目にしたいんだ……）

顔を元に戻したとき、ラビットはそれまでと違い、まっすぐ……キノと視線を合わせ、まっすぐに彼女を見る。

世界の思い出をたくさん得たい。

そんな同じ夢を持った、同士の来訪を歓迎する言葉と共に。



「ようこそ。僕たちは、君を歓迎する」

次の瞬間、キノの体はどこかの世界の上空へと投げ出され……  
キノは、笑いながら大きな声で叫んだ。

第4話 忘れられない話 — S h u t u p ! —

キノは相棒のヘルメスと共に、とある酒場を訪れていた。薄暗い店内には人の数が思いのほか少ない。

一方で喧騒が外から聞こえるため、この静かな酒場だけが騒がしい外から取り残されたかのようにだった。

『人いないね、こんな時なのに』

「しーっ。向こうの方が大賑わいになってるから、騒ぎたい人はみんなそっちに行ってるんじゃないかな」

つまり、ここにいるのは騒ぎたくない、けど静かに酒を飲むくらいはしたい、という者だということだ。

もつとも、キノは未成年のため酒を飲むことはできないのだが。

キノがここにいるのも、どちらかといえば騒ぎから少し距離をおいてゆつくりしたい、という気持ちからだ。

「それしても良かったよ、穴場のような場所があつて」

マスターは皆騒ぎに参加しているのか、それともログアウトしてしまつたのか、キノしかいない。

キノがグラスをかたむけ、カラカラと氷を回していると後ろの扉の方からチリンチリンとベルが鳴った。

扉に取りつけられたベルが来店を告げた客は男のマスターであり……キノとヘルメスの姿を見つけると、顔色を変えて店内から出ようとしたが……それより先に、ヘルメスが声をかけた。

『ここでゆつくりしていきなよ、外に出ても騒がしくなるだけだよ。』  
ヘルメスの言葉に男は……どこかうなだれた様子で、しかしその一方でその通りだと頷いた。

キノの隣に座った男は、飲み物を注文すると大きくため息をつく。

『……あれ、そんなにため息ついてどうしたの？ 騒ぎになりたくないからここに来たんだと思つたけど、他にも何かあるの？』

ヘルメスの疑問に男は嫌そうな顔をして、そして騒がしい外の方を指さした。

それだけでキノは事情を察する。

「なるほど。でも、仕方のないことだと思えますよ。偉業をなせばその人は讃えられる。ずっと昔から、そうです」

名誉なことですよ？ と微笑むキノに、男は嫌みのつもりか、とやはり顔をしかめて出された飲み物を一気に飲み干す。

そのままおかわりを注文した男は、旅人さん、とキノの二つ名で呼ぶ。

いい二つ名だな、自分もこんな二つ名が欲しかった。

そう男は心から羨ましそうにキノの方を見る。キノだって男の二つ名は知っている。いや、キノより有名だろう。

そう指摘したのだが、男はこんなの自分から名乗れやしないと手を振る。

キノが外のマスターやティアンと違って男を褒めはやしたりする事がなかったからだろう、男は少し気をよくしたようで自分の思いを吐露した。

「こんなはずじゃなかった」

男は自分の行いを振り返る。

最初は、ほんの思いつきだった。

本当にとりとめのない、ただの思いつきにすぎなかったのだ。

ほんのふざけ心でしたことだったが、今こんなことになるなら、こんな思いをするとかわかっていたら絶対にしなかった。

ただでさえデンドロ世界に降り立ってから後悔したって言うのに。

男はそう悔やむが、もはや後の祭りだった。

「何気ないことでも、後でどんな結果が出るかわからない。それでも、それをしたのは間違いなく自分なんです。だから、人は自分の行いに対して責任をとらなきゃいけない」

『そうそう。やったことはもう取り返しがつかないんだから、あとはどう向き合うかだよ』

キノ達にそう言われ、男はわかつてはいるさ、と外の方を見る。

外では今も大きな祭りの真っ最中であり……誰かが男の名を讃えるように叫んでいる。

外の祭りは、言わば祝賀会だ。

その立役者の一人である男の名が讃えられるのは当然と言えば当然であり、何の違和感もない。

だが……男は絶対に祭りに参加することはないだろう。

あのお祝いの中心となって騒ぐなど、とてもできるわけがなかった。

なんで、こんなことになったんだろうな……と男は遠い目をして呟いた。

自分は何もわかってなかったんだ……と男は頭を抱える。

こんなことができるようになるなんて最初は思ってもいなかった。ただ最初はこのゲームに対して酷評する気で始めた。

しかし、このゲームが、デンドロ口がずつと待ち望んでいた夢のゲームだと理解した後はただただ、この世界を楽しみたかった。それだけだったんだ、と半分涙まじりに男は呟いた。

男が悔やむ横で、キノは自分の飲み物を口に入れる。

男が後悔する気持ちはわからないでもなかったが……だからといって、キノにできることなど何も無い。

「あなたが今日成し遂げたことは、ボクの知る限りでは初の偉業です。今騒いでいる人たちが笑っていられるのだから、あなたがいればこそです。ボクには、とても不可能だったでしょう」

男がいなければ、こんなお祭り騒ぎにはなっていなかったかもしれない。

いや、それ以上に多くの人が死に、正反対の悲痛な状況になっていったかもしれない。

だからこそ、男が讃えられるのは必然なのだ。

この国のティアン達が、彼の名を忘れることはないだろう。

『で、これからどうするの？』

どうしたもんかな、と男は考えた。

自分はティアンではない、マスターなのだから……この In finite Dendrogram から離れる選択肢だってある。それもまた、自由の一つなのだから。

そうだな、そうしよう。

男は頷くと立ち上がり、キノに礼を言う。

自分だけで一人頭を抱えるよりも、胸に溜まっていたことをはき出せてすっきりしたのだろう。

あるいは、自らの友人の仇を討てたことで、気持ちが軽くなっていたのかもしれない。ここにずっといなければならぬという気負いがなくなっていたのかもしれない。

料金を払って、男は酒場から出て行った。

男が去った後、キノは彼が出て行った扉をしばらく見つめていたが、やがて視線を戻し座り直す。

『あの人、どうするかな?』

「さあね。永遠にこの世界から去るとまでは思わないけど、それでもしばらくは帰ってこないかもしれないね」

キノの言葉は的中した。

翌日も、その次の日も。男は帰ってこなかった。誰も男の姿を目にすることはなかった。

次の日も、その次の日も……

キノが国から出て行くまでに、男が戻ってくることはなかった。

キノ達は酒場を出た後、ヘルメスを手で押しながら上へ上がる。船上では、まだまだ騒がしい声が上がっている。

この国……グランバロアで起こった大事件。

〈SUBM〉、スペリオル・ユニーク・ボス・モンスターの襲来を退け、グランバロアを襲った〈SUBM〉、【双胴白鯨 モビーディック・ツイン】の討伐を祝う祭りがまだ続いていた。

「まさか醤油抗菌さんとあんなに話ができるとは思わなかったよ」

『ラツキーだったね』

人間爆弾の異名を持つ【大提督】醤油抗菌はグランバロアに所属する〈超級〉の一人であり、今回のモビーディック・ツイン討伐において辺りの海水を全て爆破することで海水を取り入れ回復するモビーディック・ツインの回復を防いだ。そして、見事討伐MVPの一人となったのだ。

「彼のことは誰も忘れないだろう。国を救った彼は、英雄として名を残すことになるわけだ」

『まさに、歴史に名がはばかる、ってヤツだね！』

「……歴史に名が残る？」

『そうそれー』

もつとも……彼としては、あまり嬉しいことではなかったようで。彼の醤油抗菌というプレイヤーネームは、周瑜公瑾のもじりらしい。

自分の本名のもじりでもあるとこのもじりをプレイヤーネームにしたようだが……当時はさすがに自分が〈超級〉となり、有名なプレイヤーの一人になるなんて想像もしていなかったのだろう。

そもそも、彼はゲームを始める前には、〈Infinite Denrogram〉そのものに期待なんかしていなかった。

だが、彼は自分の二つ名が人間爆弾という物騒なものになった上に、呼び名まで頭を抱えるようなものになってしまったのだ。

「でも、このゲームは名前のつけ直しなんてできないからね」

『エンブリオならともかく、自分でつけた自分の名前だからね。どうしようもないよ』

自分の名前をキノにして後悔したことある？ とヘルメスに聞かれ、キノは当然のように答えた。

「もちろん、あるわけないさ。ボクはこの名前で、ヘルメスと共にこの世界で旅をする旅人。そのことに、何の不满もないよ」

よかった、とヘルメスは笑顔のキノに返事をする。

言葉にはしなかったが、自分のマスターが変な名前で呼ばれることもなくて良かった、とも思った。

キノ達が笑う横で、酒に酔って興奮したマスターやティアン達が大

きな声で叫ぶ。

「本当に、醤油抗菌さんには助けられたな」

「醤油様々だな！」

「醤油万歳！」

「」「醤油！ 醤油！ 醤油！ 醤油！」「」

第5話 壊せない話 — I c a n , t D o I  
t. —

太陽が照りつける砂漠を、一台のバイクが走っている。

通常ならば砂にタイヤが沈みすぐに運転に支障が出てしまいそんなものだが、運転手は何事もないかのようにゴーグルを装着し、バイクを走らせる。

運転手の名はキノ。

そして彼女が騎乗しているバイクはただのバイクではない。

マスターが一人一つずつ持っている独自の力……それをエンブリオという。このバイクもまた、へ疾駆二輪 ヘルメスという名のエンブリオだ。

『キノー！ 後でパイプ周りの整備をしておいてね！』

「街に入れたらね。ジョブを切り替えるにはセーブポイント以外だとジョブクリスタルを使わなきゃいけないから。あれ高いから使いたくない」

キノはサブジョブとして【整備士】についているが……キノのメイソジョブでは【整備士】のスキルを使うことができない。

ならばなぜそんなジョブについているかという話になるが……一つは銃を扱う上で関係するDEXが伸びること。そしてもう一つはキノが”旅人”であるからだ。

キノがへInfinite Dendrogramを開始した時、最初に訪れた国は機械の国ドライフ皇国。

そこであれば機械を整備してくれる店などたくさんあったが、他の国だとなかなかない。

なので素材をあらかじめ買って置いて、自分で整備するという選択をしたのだ。

あちこちの国を回るキノにとって、たとえスキルが常時使えないとしても、サブジョブの一枠を使ってまで【整備士】をとった効果は大きい。



素材とジョブ変更さえクリアすれば、どの国でもヘルメスのメンテナンスができるのだから。

ちなみに、エンブリオである以上壊せば元に戻るといふ荒技はあるが……当然ながら意思あるエンブリオのヘルメスがこれを許容するわけがない。

世の中には爆炎の中にエンブリオを使い捨てたり自爆させたりするマスターもいるらしいが、キノはそこまでヘルメスを酷使するようなことはなかった。

「とりあえず、クエストが終わるまではお預けかなあ……」

『そんなー』

悲痛な声を上げるヘルメスを笑いながら、キノはクエストを受けたときのことを思い出していた。

「キノさん、ですかな？」

キノが声をかけられたのはカルディナにある商業都市の一つ。

商業国家であるカルディナは良くも悪くもお金で物事の成否が決まることが多い。

そしてそんなカルディナの特徴として、「どの国のものでも売られている」というものがある。

アルター王国にある神造ダンジョンのドロップ品も、ドライブ皇国の機械製品も、レジェンダリアのマジックアイテムも。

キノはカルディナの市場で、旅をする中でヘルメスのメンテナンスに使う部品や銃の弾丸などを補充したため、手持ちのお金がそれなりに減っていた。

なので金策にクエストでも受けようと冒険者ギルドを訪れたのだが……そこで警備兵の制服を着た男性に話しかけられたのである。

「はい、そうですが。あなたは……」

「私はこの都市の警備兵隊長を務めております、ダーソンと申します。見たところ、クエストを探しに来たようですが」

キノが頷くと、ダーソンはちやうど良かったと顔をほころばせた。

まずは座って話しましょう、とキノとダーソンは近くにあつた席へとテーブルをはさんで座る。

「つい先ほどクエストを出したばかりなのですが……この依頼をぜひ受けて頂きたい。えーと……このクエストですな」

机の上に置かれていた、クエスト一覧が記載されている魔法のカタログをぱらぱらとめくるダーソンだったが、目当てのものを見つけそのページを開いたままキノへとカタログを差し出した。

難易度：六【討伐依頼―【死霊騎士】】

【報酬：80000リル】

『砂漠に出現した死霊騎士を討伐してほしい。』

なお、以前討伐依頼を受けた「ヘマスター」によると、看破によって名前を見ることができなかつたという報告があつたため死霊騎士と呼称していますが、特徴として看破・鑑定眼が高確率でレジストされること、そして黒い鎧をつけています」

『※対象の防御力が高いため、攻撃力が高いか対処手段を持つ者の受注を推奨』

『ふーん。討伐系のクエストか』

『参考までにうかがいたいのですが、なぜボクに?』

キノの質問にダーソンは当然の質問ですな、と頷いて事情を話す。そもそもキノのことは、先日都市に入ってきた商隊から聞いたのだという。商隊がモンスターに襲われているところをたまたま通りかかったキノが助け、その話を聞かされたそうだ。

そして、この時キノが倒したモンスターが、今回ダーソンがキノに依頼をする理由だった。

「あなたが倒した鋼殻亜竜は、このあたりに生息するものの中でも特に防御力が高く、硬いことで有名なモンスターです。そのモンスターをいともたやすく倒して見せた。だからこそ、私はあなたならあの兵士の防御力を貫けると思っっているのです」

現に、クエストの依頼文にも高い防御力に対処できる者であることを推奨する文がある。

なるほど、とキノは頷き、腰のホルスターに入れている自分の銃を

見る。

彼女が持っている銃はただの武器ではない……〈UBM〉を倒したことによる特典武具だ。

伝説級特典武具、【要砕銃 ガルカノン】。

【ガルカノン】には二種類の装備スキルがついている。

アクティブスキル・《一砕貫通》はMPを装填し、注いだMPの分だけ相手の元のENDを減算した攻撃を放つスキル。

最大で五万までは、あらかじめMPを銃にチャージしておくことができる。

そしてもう一つは……パッシブスキル・《鎧砕貫通》。

こちらは対象の装備による防御力、装備補正、及び装備スキルを無視してダメージを与えるというもの。

《一砕貫通》と違ってこのスキルは消費ではなく、【ガルカノン】による全ての攻撃に適用される。

防御貫通に特化したこの特典武具があったからこそ、キノは鋼殻亜竜を葬ってみせた。

「わかりました。そのクエストを受けましょう」

「おお、助かります。では……」

話がまとまったところでカウンターに行き、クエスト受注の手続きをする。

よろしくお願ひします、とダーソンが頭を下げ去って行ったあと、その様子を見ていたらしいへマスターがキノに声をかけてきた。

「あんた、さつき聞いてた感じだと砂漠に出たって言う死霊騎士の討伐クエストを受けたのか？」

「ええ。どうかしましたか？」

実はよ、とそのへマスターは苦笑いして話をした。

なんでも、彼はキノが来る前に一度そのクエストを他のへマスターと共にパーティを組んで受注したらしい。しかしその難易度が聞いていたよりも高かったためこれを断念。

彼らの報告を受け、ダーソンはクエストの内容や報酬を改めて再度クエストを出すことにしたらしい。



あくまで牽制のつもりだったのだ。  
しかし。

『GUGYAGYAGYA!?!』

「え?」

大きなダメージをおったかのように叫び声をあげた鎧。

聖属性の弾丸を使ったわけでもないのに、どうやらダメージが通ったらしい。

「……………」

ある可能性に思い当たりながら、キノはヘルメスで一度鎧から距離をとる。

鎧の剣の技量はキノが知るへマスターへほどではないが、それでも十分強いと思えるレベルだ。

しかし速度はそこまでではない。耐久性に特化しているのだろう。ならば。

距離を詰められない以上キノにとってただの的でしかない。

日の沈んできた夕暮れに、キノは警備兵の本部を訪れた。

「ダーソン隊長から依頼された鎧討伐を終えたので報告に来ました」と伝えると、すぐに隊長室へと通される。

案内され移動する間、キノに向かって頭を下げる警備兵が何人かいた。

「失礼します! 依頼報告に来たキノさんをお連れしました!」

「……………そうか、通してくれ」

ノックに対してやや強ばった声が入室を許可し、キノは隊長室へと入る。

書類がたくさん乗った机の上で腕を組み、わずかに震えているようにも見えるダーソンは静かにキノを見た。

彼の視線を受け、キノは歩み寄ると懐から箱型の物を取り出し、机の上に置いた。

「……………」

「依頼はこれで完了、でいいでしょうか」

机に置かれた箱型のアイテムボックスを見つめたまま沈黙するダーソンに、言葉を続ける。

「依頼された黒い鎧とは遭遇しました。なるほど、確かに”呼称する”、でしたね。あれはモンスターではなかった」

モヒカン頭のマスターは鎧をモンスター、と呼んだ。

しかし……ダーソンは一度たりとも鎧を”モンスター”とは呼ばなかった。依頼文の上でもあくまで呼称として死霊騎士と呼んだだけで、決してモンスターとは断定していなかった。

「あなたは……知っていたのですね？　それが、誰なのかも」

キノの質問に、ダーソンはすぐには答えなかった。

だがしばらくの沈黙の後、ゆつくりと顔を上げる。

ティアンの間では棺桶と呼ばれる箱型のアイテムボックスから視線をキノへと移し、そして静かに頷いた。

「彼は……私の息子です」

ダーソンの息子……ティムはダーソンと同じく警備兵の一員だった。

ある日、密輸組織の一行を追いかけた帰りに砂漠でモンスターの討伐を行っていたところ、突如それまで戦っていたモンスターより明らかに格上のモンスターが出現。

このままでは全滅すると思ったティムは、密輸組織から没収した鎧を装着した。

その鎧は装着者のENDを大幅に引き上げ、またそれとは別に高い防御力を有するが、代償として装着者の正気を奪い、荒れ狂う怪物にするものだった。

「鑑定させた者の話では、一度装着すればたとえ鎧を破壊しても装着した者の意識は戻らない、そのまま死ぬのだと……。生きたまま死んだようなものです。死霊騎士、という呼称は決して間違いではないですよ」

タイムが一人足止めとなったおかげで他の者は無事だった。

しかし、その代償にタイムは帰らぬ人……否、人ですらなくなつた。ダーソンは街を守る者として、鎧、つまり息子の討伐をすべきではあつた。

彼にはそのための武器もある。そのための技量もある。

しかし……できなかった。

警備兵隊長として街が襲われる前に討伐すべきではあつたが。

父として、たとえもう息子の正気が失われているとしても。

鎧の破壊は息子の死を意味する。

そう思うと、どうしても自分の手ではできなかった。

「親としての気持ちと隊長としての義務に挟まれた貴方は……せめて、他人の手で討伐してもらおうと考えた。だから報酬を上げても、依頼を出したのですね」

「おっしゃる、通りです。どうしても……。どうしても私には、あの鎧を壊すことなど、できなかった……!」

この後、タイムの遺体を棺桶に入れて持ってきてくれたキノに、ダーソンは深く感謝して頭を下げた。

これで、警備兵の皆と彼を弔える、と。

報酬を受け取り、警備兵達の敬礼に見送られて本部を出たキノは黙ってヘルメスを押し、人通りの減ったバザールを歩いた。

「……改めて思ったよ。ティアンの人たちは、ボク達と同じ。悩み、苦しむ心がある」

『そう』

空を見上げたキノの視線の先では、すっかり暗くなった空に星が輝き始めていた。

第6話 殺しあう話 — S e r i o u s M a t c

h—

「うー……」

『さつきから唸ってばかりだよ、キノ。そんなに悔しかった？』

七大国家の一つ、天地にて。

【銃士】キノは顔をゆがめながら森の中をヘルメスに乗って走っていた。

空は青く晴れ、鳥の鳴き声も聞こえるいい天気だというのに、キノの表情はすぐれない。

「また負けた……今度こそはと思ったのに」

『お師匠さんにはキノの奇襲なんてまるわかりなんだろうね』

「それでも！ 最初の一撃は避けられたんだ、だから今度こそはやった、と思った、のに……」

銃を構えた瞬間、師匠の姿はキノの視界から消えていた。

いつも師匠には一撃でやられていただけに、鍛えられた《危険察知》でフェイントも含め最初の一撃を避けられたことで気が緩んだのだろう。

思考が空白になったキノは次の瞬間、右側に回っていた師匠によって頭を撃たれていた。

『訓練弾だったからデスペナにならなくてよかったじゃない。模擬戦じゃなかったら死んでたよ？』

「模擬戦以外でも危険察知訓練とか容赦なく撃ってくるからなあ……」

師匠曰く、「私は銃より素手の方が強いです」とのことらしいが。

しかも天地とはいえ、彼女は紛れもなくティアンだというのだからキノは師匠の化け物じみた強さに対し、ため息を隠せない。

レジエンダリアにいた時、突然アクシデントサークルによる転移魔法に巻き込まれ、天地を右往左往していたキノを世話してくれる上に修行もつけている「師匠」と自らを呼ばせる女性。



詳しくはキノも知らないが、彼女がただ者ではないということは身をもって叩きこまれた。

「絶対、ゼーつたいあの入超級職だ。賭けてもいい」

『でも看破じゃわからないんでしょ?』

「その看破でも合計レベルの桁すら見えないんだよ……? とんでもなくレベル差があると思えない」

ふーん、とヘルメスは返事をするが、今もなおキノの表情は晴れない。

なのでヘルメスは少し明るい方に話を持っていくことにした。

『でもさ、危険察知で師匠の攻撃を避けられたからこそ、今回の指示につながったんじゃない? 師匠だってキノの成長を認めてるんだと思うよ?』

「む……それは、まあ、そう、かな?」

キノ達が普段生活と修行をしているのは森の奥だが、今回師匠が出した指示は「近くの街で行われる武芸大会に参加してきなさい」、というものだった。

天地では野試合が盛んではあるが、それでも決闘設備は他の国と同様に存在する。

キノが参加する武芸大会もまた、この決闘設備を使ったティアン、〈マスター〉入り混じる大会である。

「今から行く武芸大会は、この辺りを治めている大名が新戦力になりそうな人を見つけるものなんだってさ。だから、上級職ありの部門と、下級職だけの入限定の部門とあるらしい。ボクが参加するのは後者」

『まだ未熟な人材でも見逃さないよう、ジョブやレベルで差が大きくなりすぎないようにしてるんだね』

上級職をとる前に武芸大会に出る指示を師匠が出したのも、部門の存在を知っていたからだろう。

「上級職をとるのは少し待ってください」と師匠が止めていたのも、下級職を先に鍛えておくという理由もあるだろうが、まずこの武芸大会も一因と思われた。

『キノはどこまでやれるかな?』

「さあね。なるようになるさ」

『あまり結果が良くないと、師匠がなんていうか知らないけど』

「……頑張ろう」

キノは目的地に到着すると、そのまま武芸大会に参加するための手続きをとり、大会に参加した。

大会はトーナメント形式、1対1で行われる。

上級職ありの部門では希望者が多く予選があるらしいが、下級職まで、と限定すると参加者がガクツツと減るためこちらでは予選が行われない。

トーナメントをキノは順調に勝ち上がる。

ステータス頼りで突進してきた槍を持つ〈マスター〉は即座に頭を撃ち抜き。

隠形を使う【隠密】らしきティアンは鍛え上げられたキノの《危険察知》によって奇襲に失敗し撃ち抜かれ。

弓のエンブリオを持った〈マスター〉は善戦したものの、キノに懐に入り込まれて弓の利点を活かせず、敗北した。

そして迎えた、次の試合。

反対側の入口から出てきたのは、腰に一振りの刀を差している、緑色の小袖に紺の袴を着た少女だった。

ニコニコと朗らかな笑顔を浮かべる彼女は、舞台上上がるとキノへ一礼する。

「初めまして! 私【武士】の雫と申します!」

「あ、はい。キノです。メインジョブは【銃士】」

元気はつらつ、という言葉が似あう雫に押され、思わずキノも一礼する。

雫は笑顔のまま腰の刀へと手を伸ばし、キノもホルスターに入れた銃へと手を伸ばす。

(……………)

キノの顔に、わずかに冷汗が流れる。  
今までこの大会で相対した相手とは、違う。

ニコニコと浮かべる笑顔のその奥に……確かな殺気を隠している。  
キノにはそう思えてならない。

戦いが始まるその前から、キノの《危険察知》がセンススキルとして疼いていた。

キノの内心をよそに、審判が声をあげる。

「いざ尋常に……始めえー！」

瞬間、二人は同時に全速力で動く。

雫は前へ。キノは後ろへ。

「……む」

刀を抜いて振り上げた状態から、手ごたえがなくキノを斬り損ねたと察した雫はすぐに体勢を戻し、刀は抜いたまま両手で構える。

一方、キノは自分の判断に安堵すると同時に、雫への警戒を跳ね上げていた。

もしキノが開始直後に後ろへ飛んでいなければ、即座に斬り捨てられ、敗北していただろう。

(けど、それだけじゃない……！)

消えない不安を胸に、キノは右手に持った銃を発砲する。

雫の肩を狙ったその弾丸は

キーン！

「くっ……」

「いい狙いだけど、当たらないー！」

なんと、雫の刀によって弾かれる。

雫はキノが向けた銃身の向き、視線、それらからキノの狙いを瞬時に察して防いで見せたのだ。

そのまま、雫は足に力を入れて一気にキノへと詰め寄ろうとする。

「次はこちらから、行くよー！」

「なら……これでっー！」

再度キノが引き金を引く。

キノの視線や銃身に対する見切り、そしてAGI補正により雫は再

び弾丸を刀で弾く。

これならいける、と僅かに頬が緩みそうになる雫だったが、弾丸をはじいたその先に視線をやって凍り付く。

「もう一発!？」

続いてキノが撃つたのは、“左手”の銃。

右手で発砲すると同時に、左手でもう一つベルトに挟んでいた銃を抜いて発砲したのだ。

しかも二発目は最初に狙ったのは反対側を狙っていた。

「くうううー！」

(これは、防げない……！)

刀で弾いたとは言うが、決して雫は【神】に至れるほどの技量を持っているわけではない。

故に、刀をわずかに動かすだけで弾丸を弾くというレベルの行為までできないのだ。

当てて弾くと言うより刀を振って弾いていただけに、二発目まで弾くことはできそうにない。

「それ、ならっ……！」

雫は体を無理やり動かすことで回避を選択する。

しかし、その隙にキノが距離を取りつつ右手の銃で新たに発砲した。

僅かに狙いがそれて雫には当たらなかったものの、雫が危機感を抱くには十分だ。

キノのその目が、雫から余裕を奪う。

彼女を見つめるキノの目は……相手を殺そうとする、殺意ある目だった。

「……強いね」

「ボクだって余裕があるわけじゃありません」

お互いに距離を取り、双方構えなおしたところで雫から声をかけた。

雫は微笑んで見せるが、その笑顔は先ほどまで浮かべていた笑顔とは違う。

余裕はない、しかし決して相手にそう悟らせるわけにはいかない。  
そして何より、戦うことが楽しいという……戦士の笑み。

「キノさん」

「何ですか」

「今、あなたは何を考えている？」

双方ともに相手から視線をそらさず、言葉を交わす。

「あなたを、殺すことを」

「奇遇だね……私もそうだよ」

雫は思う。

これまでの試合で対決した相手は、皆ここまでの熱を持っていなかった。

敵を倒そうとする者、勝ちたいと思う者。

別に彼らのそんな思いを否定するわけではない。

ただ……これが結果を用いた決闘だからだろうか。野試合ではない試合だからだろうか。

誰も……「相手を殺そう」と思っている者がいなかった。

本気で、命のやり取りを交わしている心構えの者はいなかった。  
ティアンでさえも。

雫はこのへ Infinite Dendrogram で最初のデスペナルティになった時の、初めてティアンの死を目にし、エンブリオすら目覚めていない自らの無力さを嘆きながら自身も死に向かったあの思いを、忘れたことはない。

故に、彼女は戦いとは命の奪い合いだと、強く思っている。

だから今までの相手に落胆していた。

ようやく話に聞いていた決闘に触れることができたのに、結果を用いた「絶対に死なない」戦いに失望していた。

しかし、今日の前にいる相手は違う。

本気で、殺されまいと自分を殺そうとしている。

そのことが、なぜかとても嬉しく思えた。

丁寧な言葉で、心からの感謝と共に雫は謝罪を口にする。

「こちらの事情で大変申し訳ないのですが、今私は全力を出せません」  
故に残念だ。

「決闘がこんなものならわざわざ手の内を明かすようなことをする意味はない」と、相方を観戦させるにとどめたことが。

己の、全力で戦えないことが。

「しかし……せめて、本気であなたを殺します」

「……………」

もはやキノは答えず、手早く銃の再装填を行った。

にらみ合った後……二人は、同時に動く。

「はああああああああああ!!」

キノが撃つ銃弾を、先ほどの反省からできるだけ最小限の動きで防ぐ。

距離を詰めようとする雫に対し、キノもまた雫の間合いから逃れようと移動を続ける。

しかし……動き方については、雫が僅かに上回った。

キノの間合いに捕らえ、雫は《瞬間装備》で納刀状態の刀を腰に装備する。

(……取ったっ!!)

雫が有するジョブスキルに、《居合い》というものがある。

納刀状態で相手を間合いにとらえた時のみ、自らのAGIを倍にするパッシブスキル。

これでとどめと、全力で刀を抜いてキノの首へと刃を走らせた雫は

……

「……な」

「くうっ……!」

キノが咄嗟に、右手で《瞬間装備》したナイフで軌道を逸らされた。間合いという一番近い距離。これは確かに近距離戦闘の側にとつて有利ではあるが……逆に言えば、狙いが定まりやすい距離でもあ

る。

ナイフが砕け散りながらも、左手の銃が雫の頭へと向けられ、一発の銃声と共に、この戦いは終わりを告げた。

『おつかれー！ 強かったねえ相手』

「本当だよ……ずっと神経張り巡らせていてようやく勝てた。少しでも集中が切れていたらこつちが負けてたよ」

試合後、キノはヘルメスからいたわりの言葉をかけられたあと、決闘施設の廊下を歩いていった。

「キノさん」

後ろから声をかけられたので振り返ってみると、そこには反対側からわざわざ走ってきたのであろう雫と、一匹の白い犬がいた。

確か天地のモンスターにこんな犬がいたな、と思いながらキノは雫へと向き直る。

「おつかれさまでした」

「おつかれさまでした！ いやー強かったですねキノさん……。悔しいけれど完敗です」

たはは、と頭をかく雫。

キノもまた微笑むと、雫の横から犬が前に出てキノへと頭を下げる。

「先ほどの試合、お見事でした……。わたくし、雫様にお仕えしております、タマと申します」

『犬が喋った!? なんてー!?!』

「……バイクが喋るよりは、よっぽどまともかと思えますが?」  
ヘルメスとタマの掛け合いを見てキノと雫は吹き出す。

それから、天地での日々やキノが昔いった国の話などで盛り上がる。

その後、またいつか機会があったら、今度はぜひ外で戦おうと約束し、キノは次の試合があるからとその場から立ち去って行った。

「ねえ、ヘルメス」

『何？ キノ』

「緑の服を着た刀使いに白い犬って……まるで「キノの旅」に出てきたあの人みたいだ。性格とかは全然違ってたけど」

『へえ。驚いた？』

「そりゃあ驚いたさ。しかもボクと違って特に意識してないだろうし。もしかしたら……」

『もしかしたら？』

「あの人のエンブリオは、刀と犬に関係したものなのかも、しれないね」

「……雫様」

「うん」

しばらく沈黙していたが、廊下に残っていた雫は顔を隠すようにタマに背を向ける。

「負けた……負けたよ。あの殺し合いで、私は死んだ」

「そうですね」

でも次は絶対に、絶対に負けない……と雫は強くこぶしを握り締める。

その頬に、一滴の雫を流しながら。

「次は勝つよ。絶対に」

「はい。次はわたくしをお使いになってくださいませ。タマの力は、あなたのために」

そう、タマと名乗る犬は……否。

犬と偽って自らの姿を隠す彼女の〈エンブリオ〉は、静かに頭を下げた。

これより先の、いつかの未来に。



“野試合無敗” “一斬必殺” “劍靈”など。

様々な二つ名で呼ばれるようになる雫は〈超級〉へと至る。

だからと言って、彼女は決して最強でもなければ無敵でもない。敗北に涙したことだってある。

これはいつか〈超級〉へと至る少女が、“旅人”と出会った話。

そして初めて、ライバルと思う相手に出会った話。

## 第7話 依頼主の話 — Mastermind —

「と、いうわけで。君にはこの依頼を受けて欲しい」  
「……………なるほど。了解しました」

机の上に置いてあった飲み物を一気に飲み干して、キノは立ち上がる。

まだメインジョブである「操縦士」のレベルを上げている最中であり、合計レベルが50に達していない以上紛れもなく自分がルーキーと呼ばれる存在だと自覚はしている。

それでも、話を聞き、戦力に乏しい自分でもなんとか成し遂げられそうな依頼であると考えてキノは依頼を引き受けた。

「そういうわけで、これから隣の街へ向かうことになったよ、ヘルメス」

『りようかーい。でもキノ、道中には何が出るかわからないよ?』  
「もちろん、基本逃げる。ヘルメスならそれなりの速度は出るんだし大丈夫だよ、きつと」

ドライブ王国の首都、ヴァンデル Heim でキノは手で押しているバイクへとこれからの予定を伝えた。

先日第1形態へと進化してその姿を見せたキノのエンブリオ。

TYPE：チャリオッツで自我を持ち喋るバイク。それがヘルメスだ。

ヘルメスのスキルである《走行》スキルは、エンブリオであるからか《操縦》スキルがなくとも運転することはできる仕様だった。

しかしだからといってスキルをとる意味がないわけではない。《操縦》スキルのレベルが上がればその分ヘルメスの《走行》も効果が上乘せされる。だからキノは最初に上げるジョブとして「操縦士」を選んだのだ。

しばらく歩くと、キノは目的の人物を見つける。

向こう側もキノのことに気がついたのか、手を振ってキノを呼ぶ。「無事合流できましたね。用意の方は終わりましたか？」

「ああ、待たせて悪かったな。これが依頼の品物だ」

この〈マスター〉の名はグラシヤン。

バイクのエンブリオを持ち、冒険者ギルドで配達依頼を受けようとしていたキノを見つけると、同じ目的地である隣町まで一緒に運んで欲しいものがあると依頼してきたのだ。

用意があるからとその場で一旦分かれ、ここで合流したということになる。

グラシヤンはアイテムボックスから嚴重に梱包された箱を取り出すと、それとは別に【契約書】と呼ばれるアイテムを取り出してキノへと見せる。

「マスター間の配達依頼だしな、念のため頼むわ。内容を確認してくれ」

【契約書】はマスター間で約束事を決めるときなどに用いられるアイテム。

内容を反故にしたものにはステータス低下やペナルティなどの罰則が発生する。

今回提示された【契約書】には、「キノが配達依頼を完了した後、その完了通告をもってグラシヤンはキノに報酬を支払うこと」「キノは配達する荷物を横領してはいけない」「キノが自らの都合で期限内に配達できなかった場合、荷物の返品と罰金の支払いを行う」の三つが記載されていた。

「あんたが予期せぬ相手に襲われた、ならともかく狩りをしてたらペナルティになって間に合いませんでした、とかだと契約書に引つかかるからな、気をつけてくれよ」

「はい。余裕がそこまであるわけでもないし、買い物したら出発しようと思います」

「それじゃ頼んだぜ。このルートで行けばモンスターとかもそう強いのは出ないと思うからよ」

教えられたルートを頭に入れ、キノはグラシヤンと別れた。

その後、買い物物を済ませたキノは首都から出て荒れた道を走る。通常、デンドロにおける機械はMPを消費して動かすものがほとんどらしいが、ヘルメスは例外のようで《走行》にMPの消費はない。もとはドライブでバイクを確保しようと思っていたキノであったが、その場合はMPが必要になっだろう。さらに言えば、まだルーキーのキノがバイクを購入できたかも疑わしい。

『ご機嫌だね、キノ』

「ああ。つくづくいいエンブリオだなあつて」

『そりゃあ、キノの行動や考えを観察した結果だからね』

風と一体になったかのように走るその感覚に、将来リアルでもバイクに乗ろうかな、などという考えが浮かぶ。

バイクでの移動を楽しむキノだったが……首都から少し離れた場所で、大勢のヘマスター達道道をふさいでいるのが見え、一気に機嫌が悪くなる。

『ありやりや。Uターンする?』

「それも無理みたいだ。反対側にもいる」

『そりゃあ大勢だ』

強引に突破することも考えたが、魔法使いらしき服装も混じっていることから断念する。

まだ《操縦》も上がりきっておらず、第1形態のヘルメスではそこまで速度も出せない。遠距離攻撃からは逃れられないだろう。

キノが速度を落とすと、周りもゆっくり近づいてくる。

その中心にいたのは……キノが見知った顔だった。

「説明をしてほしいのですが……なぜ、あなたがここに?」

「まあ、そうなるよな?」

ニヤニヤと笑みを浮かべるヘマスターの名は……グラシヤン。

キノに配達依頼をした張本人だった。

キノはアイテムボックスからグラシヤンに渡された荷物を取り出

すと、グラシヤンに向かって放り投げる。

「それはお返しします。」 予期せぬ相手に襲われた”のですから、罰金は不要ですよね?」

「ああいらねえ。ただし、襲われるってことは、俺達が襲う理由もある、ってわかってるよな?」

グラシヤン、そしてキノを逃さないように囲んでいる周りの面々は全員一つの克蘭のメンバー。

皇国において「盗賊克蘭」と位置づけられている克蘭の、だ。

正確には、グラシヤンは加入していない。盗賊克蘭の人間とばれないよう克蘭とは別に動き、獲物をおびき出すのが役目だ。

わざわざキノにルートを教えたのも、荷物を用意するから少し待つてほしいと嘘をついたのも、待ち伏せするため。

グラシヤンはキノのアイテムボックスを指差すと、自分たちの目的を告げる。

「俺が依頼をする前に、別の配達依頼を受けていたろ?……へ叡智の三角」の荷物を運ぶ依頼をよお!」

それこそがグラシヤンの狙い。

数日前、グラシヤン達の克蘭に依頼がもたらされた。

『数日後に、へ叡智の三角』が配達依頼を装ってマジングアの設計図などを輸送する。それを奪ってほしい』

この値段で買い取ろう、と提示された報酬は破格であり、彼らはすぐに引き受けた。実際自分たちで他に流すとしてもここまでの値段はつかないだろうと思うほどの高額だったから。

恐らくはカルディナの商人だろうとグラシヤンは依頼人について予想しているが今は関係ない。

彼らがやることは獲物を誘いこみ、奪って売り払うだけだ。

「騙したのはまあ悪かったな。だからおとなしく荷物を渡してくれれば別にキルしたりはしねえよ。やる意味もないしな。ただ、断るってんならそうもいかねえ。どうする?」

「……………」

まさか逃げられるとは思ってないよな、とグラシヤンは笑う。

わざわざ時間を稼ぎつつ用意をしたのだ。相手がルーキーであることから、逃げられるとは思わなかった。

キノは黙り込む。

しばらく黙り込んだあと、両手を上げた。その姿を見て、グラシヤン達は要求を受け入れ、降参したのだと考えて武器を持つ手の力を抜く。

そして、キノは口を開き……

「そろそろ手に負えませんから、変わってくれませんか？」

『はいはい、ご苦労さまだったねえ』

キノ、そしてもう一人別人の声にグラシヤン達の思考が硬直した。

次の瞬間、彼らの周りに次々とへマスター、そして彼らがジユエルから出したモンスター達が現れる。キノもまた、あらかじめ渡されていたジユエルからモンスターを出す。

一部の盗賊クランのメンバーには見えていた。

それまで小鳥がいたはずの場所に、突然へマスター達が現れたのが。

「な、な、これは……」

「見ての通りだけれどねえ」

うろたえるグラシヤンに声をかけたのは、白衣を着て眼鏡をかけた男性。

ニヤニヤと笑みを浮かべる彼は、キノの横に立つと

「お前、は……Mr. フランクリン!？」

「だああああいせええええかああああい！」

グラシヤンの悲鳴じみた叫びに、両手を広げて返して見せた。

Mr. フランクリン。

彼はモンスター生産を得意とする人物であり……〈叡智の三角〉の克蘭オーナー。

放たれたモンスターやマスターたちが次々に盗賊克蘭のメンバー達をキルしていく。

その様子を見つめながら、フランクリンは頭をかきつつ全てを明かした。

なぜ襲撃するのもかも、なぜこうなったのかも。

「君たちさあ、前にもうちの克蘭のメンバー襲ったでしょ？ おかげで大事な素材とか奪われてかーなーり！ 迷惑だったんだよねえ」

そのことはグラシヤンにも覚えがあった。

むしろ〈叡智の三角〉のメンバーを襲った儲けがかなり大きかったからこそ、今回の依頼も信用したのだ。

だが……

「だからさあ。もう邪魔しないように、人を雇って罠を張ることにしたわけ。キノもそうだし、カルディナの商人にも声をかけたりしてねえ」

つまり、キノは最初から知っていたのだ。

グラシヤンが自分を裏切ることも、その目的も。

だがグラシヤンにとっては、問題はそこではなかった。

「カルディナの商人、って……お前、まさか！」

「そう！ 君達が受けた強奪依頼……あれも私の仕込みってことさあ！」

やっと気づいたか、とフランクリンはゲラゲラ笑う。

盗賊克蘭を動かすために偽の依頼をし、実際にキノを囿として動かす。

盗賊克蘭が待ち伏せする場所にフランクリンが作った第三者と場所を入れ替えるモンスターを配置。

そして、キノにはあらかじめ【P S S】が入った飲み物を飲んでもらい、「P S S」を通じてキノや周りの音声を拾ってタイムリングを図り、襲撃を仕掛けたというのが今回の出来事の全貌である。

「まあ、大半はティアンまで襲って指名手配みたいだから……〈監獄〉でゆっくりしてねえ」

「ちっ、くしょおお！」

最後の一人が叫びと共に光の塵となり、キノを待ち伏せした盗賊克蘭は全滅した。

「今回は依頼を引き受けてくれて助かったよ」

「いえ。最初に全て説明してもらいましたし、ここの【整備士】の皆さんにはお世話になってますから」

今回の罠を仕掛けるにあたり、念のため克蘭メンバーとは別の匣を用意したいと考えていたところ……フロッシュという【整備士】のメンバーから紹介されたのがキノだった。

キノは時折【整備士】のレベルを【整備士】ギルドのギルドクエストで上げていたためつながりがあったのだ。

バイクのエンブリオを持つルーキーのキノは配達役の匣としては格好の人物であり……フランクリンが話をして人格など確認した上で、今回の依頼を打診していた。

「……提案なんだけどさ。このまま、うちの克蘭にはいらない？」

「………ありがたいお話ですが。ボクはレベルを上げれば各国を旅したいと思っています。なので、克蘭に入るつもりはありません」

「………そう。残念だけど、仕方ないねえ」

僅かに惜しむような顔を見せたが、フランクリンは首を振ってキノを見つめた。

「まあ、これからは顔パスで入れるよう客分扱いだと話を通しておくから。【整備士】ギルドじゃなくても、好きなきに来るうちでフロッシュやらロボロマンやらに【整備士】について習うといいわ」

「………わ？」



「あーうん。習うといいさあ」

リアルにおける女性としての口調が思わずこぼれてしまい、訂正するフランクリンだった。

結局、最後までキノが〈叡智の三角〉に入ることにはなかったが……。

キノが旅立つ日の前日には、克蘭全体で彼女の送迎会が行われ、フランクリンや克蘭メンバーからは旅先で使えるテントやら整備セットやら（克蘭メンバーがそれぞれの技術を持ち寄って作った）を渡された。

それらのアイテムは、キノの旅において修理しつつずっと使用されている。

第8話 廃墟の話 — Lost Home —

黄河帝国にある森の中を、バイクが走って行く。

バイクにまたがった人物は、何も言わずにただバイクを運転する。いつもは沈黙を退屈に感じ話しかけるバイクも、今回は何も言わずに黙っていた。

「……………ヘルメス」

『なんだい、キノ』

あまりにも長い沈黙の末、ようやく口を開いた自分のマスターに、彼女のエンブリオは優しく答えた。

「だいぶ進んだし、この辺りまで行けば町があるって村の人たちが言ってたよね。今日はそこで休もう」

ここに来る前に立ち寄った村での出来事で、深く傷ついたキノだったが……………少しずつ立ち直ってきたらしい。

『賛成。できればセーブポイントがあるとなおよし』

『どうして?』

『そりゃあ整備して欲しいからだよ。もう少しで壊れるかと思った!』

「あはは、ごめんごめん。そうだね……………なかったら「ジヨブクリスタル」を……………あ、いや、また戻すなら二つ使っちゃうね、やめとこ」

『そんな!』

幸い、セーブポイントはあった。

町に着くと一旦ログアウトしたため、次にログインしたときにはすっかり気持ちをリフレッシュできていたキノ。

町を歩いて回る中、大きな建物の前で足を止める。

「( )は……………」

そばの看板を読んでみると、どうやら博物館らしい。

黄河に来る前にも様々な国を回っているが、そういえばデンドロで博物館を初めて見つけたなど興味がわく。

もしかしたらキノが見落とした国もあったかもしれない。しかしそうだとすると、グランバロアと天地にはないだろうな、なんて思っていた。

入ってみると、受付をしていたティアンの女性が軽い説明をしてくれる。

ここでは黄河の歴史、そして町自体の歴史についての展示が主だという。

世界を旅して回る上で、その国の歴史を知ることができるとはとてもいいことだ、とキノは喜んで展示を見て回る。

別の国では図書館に入ったり、また昔から語り継がれてきた話を聞いたりしてこの世界の歴史に触れてきたキノだが、展示を見るのは新鮮だと感じた。

「これは？」

「こちらはこの街の……前身となった都市の復元模型です」

ガイドが話すことには……

今キノがいるこの町は、比較的新しいものであり、かつては別のところに住んでいた人々が集まってできた町なのだそうです。

では彼らが以前住んでいた場所はどうしたのかという……戦乱に巻き込まれ、壊滅的被害を受けたのだという。

その戦乱とは……次期皇帝を争う戦乱。

この内乱はただただ巡り合わせが悪かった結果起こったものだ。

皇帝が亡くなった際、後継について意見できる【龍帝】はその数年前に死んだばかりであった。

しかし、弟が継ぐと思われていたところに、側室が皇帝の遺児を孕んでいるとわかったことで事態は混乱へと叩き落とされた。

黄河は二分され争い続け……最後には遺児が政治には関わられぬ掟である【龍帝】として生まれたことで、あっけなく戦乱は終わりを告げた。

あと少し、何かの時期さえずれていればおきる意味もなかった戦いは、ただ傷だけを黄河に残した。

その影響は各地に残った。例えば、土龍人は「龍」の名を返上し、荒

れ果てた故郷から今のアルター王国へと去った。  
そして。

キノがいる町もまた、戦乱の結果荒れ果てた故郷を去った人々が集まってできた町なのだ。

『なるほどね。それで、前身となった都市、と』

「はい。この都市は現在は完全に廃墟となっていてしまっています。しかしせめて昔の姿を忘れないよう、こうして復元模型として残したのだそうです。ここから離れてはいますが、実際に見に行くこともできま  
すよ」

ガイドの説明を受け、キノは次の目的地をこの前身となった都市の廃墟へと決めた。

ガイドから教えられた道をヘルメスに乗り進んでいく。

進むにつれて段々と周りから建物が消えて木や草ばかりになり、やがては森へと突入した。

当然、道も舗装されていない場所へと進んでいくのだが、ヘルメスには上級エンブリオに進化した際追加された《行路適応》というスキルがある。どこを走るかによって消費MPは変わるが、荒れた地面や砂漠、さらには水面や空中までも舗装された道路のように走行できるという、まさに様々な地へ行く旅にはピッタリなスキル。

地面が荒れている程度では消費MPもそこまで大きくはなく、快適にキノは進んでいく。

たまにモンスターが現れるものの、そこまで強くないのでキノは片手で銃を抜き、襲ってくるものだけを撃っていく。

弱いモンスター相手のため特典武器の「ガルカノン」は使わず、追尾制に優れた「森の狩人」という銃を使う。この銃は以前、あるクエストで報酬として手に入れたものだ。

『そんなにバカスカ撃って大丈夫なのー!? 弾丸なくなっても知らないよー!』

「大丈夫ー!」

なお、ドロップアイテムは拾わない。というかバイクで走りながらだと拾うに拾えない。

だからこそ、余計な敵は無視して近くまで来て襲ってくるものだけを撃っていた。

それから二、三日経った後。

キノは古い建物だらけの場所へと到着していた。

ボロボロになった建物の一部には草木が生えており、時間の経過を感じさせる。

「ここみたいだね」

『見事に廃墟だね、こりゃ』

中にはモンスターが棲みついたものもあるらしく、迂闊に中に入ったりしたら襲われるかもしれない。

《殺気感知》スキルでモンスターがいそうな場所を避けながら、キノは廃墟を見て回った。

その時、奥に人影があることに気づく。

「おや」

「こんにちは」

魔法職と見て分かる装備をしたその男性は、振り返るとキノを見て驚いた声を出す。

「こんな廃墟で人に、しかもへマスター〜に会うとは思いませんでした……」

「ボクも驚きました。ボクは観光のようなものですが……あなたも？」

「まあ、そのようなものですね」

自己紹介した男性は、キノ同様彼もまた各地を旅しているのだと語る。

そんな折に、この廃墟を見つけて思うことがありとどまっていたのだと。

キノがこの廃墟の過去について語ると、男性は納得したように頷い

た。

「なるほど……だからこうも大きな都市が廃墟としてあつたわけだ」  
少し歩こう、とキノに声をかけ男性は歩き出す。

廃墟の過去について男性は自分の過去と重ねながら話をした。

「私が旅に出る前は、ある都市を本拠地として活動していました。あの頃は楽しかった……。クランに入り、オーナーや仲間と戦いに明け暮れたあの頃は」

過去を思い返す男性は、懐かしそうに目を細めた。

キノは続きをせかさず話を聞く。やがて男性が視線を落としたことで、キノはその後何かあつたのかを何となく察する。

「ですが、今はもう昔のことです。オーナーはこの世界から去り、私もまたクランを離れて旅に出ました。あんなことさえ、なければ……」

キノが何かを言おうとした、その時。

《殺気感知》スキルが近づいてくる敵意を警告した。

「グオオオオオ！」

猛獣型のモンスターが、二人へと襲いかかる。

真つ先に近づいてきたモンスターはキノが撃ち抜くも、複数いるように周囲から唸り声が聞こえる。

「急に襲ってきましたね」

「あまりこのような狭いところで使いたくはありませんが……仕方ない」

男性は手の甲にある紋様を発行させ、自らのエンブリオを呼び出した。

「来い、ラフム！」

『BO・BO・BO』

手の甲から出てきたのは、大きな泥でできた人型。

男性……【超付与術士】シャルカは、エンブリオのラフムとキノに全体バフと個別バフをそれぞれかけ、援護する。

「ラフムを盾にしてください！ 私は後方支援型なので……」

「助かります！」

シャルカとキノにより、瞬く間にモンスターは一掃される。

戦いが終わると、シャルカは遠い目をしてキノに笑った。

彼の視線の先にあるのはキノ、そして廃墟となった都市。

「誰かと共闘したのは久しぶりです。……ハハ、この廃墟にいますね。私たちが本拠地ホームが廃墟と化した、あの事件を」

シャルカはかつてアルター王国のクランランキング2位のクランである《バビロニア戦闘団》のサブオーナーだった。

しかし、《SUBM》であるグローリアの来襲により……本拠地であつた都市、クレールミルは滅んだ。

「ここに住んでいた人々がうらやましい。彼らは傷ついたとしても全滅することはなく、新たな町を作った。しかし……」

しかし、クレールミルの住民は全員死亡した。

グローリアの攻撃により、壊滅したクレールミルで、生存者は見つからなかったという。

「私が旅に出たのも、あの辛い思い出のある場所にはいられなくなつたからです。ティアンの奥さんを失つたオーナーも、帰つては来なかつた。キノさんは、旅をしているようですが辛かつた思い出があるのですか？」

「ええ、あります」

つい最近の、胸に痛みを残した出来事を思い出して、ぎゅつと着ているコートの袖を反対の腕で握りしめる。

一度目を閉じたキノは、前に聞いたような、口にしたような言葉を返事として返した。

「旅に出る前も、そして旅に出た後も。でも、辛い記憶も悲しい記憶も嬉しかつた記憶も。全て今のボクを形作るものであり、ボクが旅を続ける理由です。だからボクは、旅を続ける」

あなたは、どうですか？

旅を続けたいか、帰りたいかと逆に問われ、シャルカは複雑な表情を浮かべた。

サブオーナーを託した人物にも、似たようなことを聞かれたことを思い出して。

「オーナーが戻ってきたら帰ってくるのか、と仲間に聞かれました。私はそうなることを祈っています、そう答えました」

帰る場所がなくなったわけでは、ないのだろう。

確かに本拠地のクレームルは、そこで過ごした思い出を胸に残してなくなった。

けど、それでも。

帰る場所は、まだあるのだろう。そのために、あの仮面騎兵はサブオーナーとしてクランを預かってくれたのだろうから。

一人の旅人が、別れを告げてその場所から去っていく。

遠ざかっていくその後ろ姿を、もう一人の旅人は見えなくなるまでずっと見つめていた。

しばらくの間立ち尽くした後。残された旅人は視線を誰も見えなくなった先から廃墟へと移す。

「……………」

黙ったまま、廃墟を眺めていた旅人は。

やがて背を向けて、その場から立ち去っていった。

誰もいなくなった廃墟は、静かに日の光を浴びていた。



## 第9話 爆発する話 — C a u t i o n —

キノはレジエンダリアにある、草木の少ない山地を歩いてきた。通常、外を移動する場合にはヘルメスに乗って移動するのだが、今回は徒歩である。

もちろん、それには理由があった。

「あとどれくらいになりますか、レッドさん」

「うーん、もう少し先ですねー。せつかくキノさんがいるので、少し奥まで行こうと思うのです」

今回、キノには同行者がいた。

名をレッド・ウイザードというへマスターであり、ジョブは【紅蓮術士】。

見た目は十代の少女であり、幼い印象を与える顔つきだ。

魔術師系統のジョブである彼女だが、一方では生産職もとっている。【花火師】のスキルなど何に使うのだろう、キノはそう思ったが詳しくは聞いていない。

キノ達が山道を歩いているのは、とある鉱物の獲得が目的だ。

【サラマンドル鉱石】と呼ばれるその鉱物は火属性に親和の高い金属を作り出すことができる。

レッドのジョブを聞いていたキノは装備を作るのにでも使うのだろう、と思っていた。

「《クリムゾン・スファイア》！」

新たに現れたモンスターに向かって、レッドが【紅蓮術士】のスキルを放つ。《クリムゾン・スファイア》は火力の高いスキルとして有名なものの一つだ。

しかし……だからこそ、疑問はある。

「これ、ボク必要でしたか？」

キノがレッドと同行しているのは、パーティー募集をしていた彼女から誘われたからだ。

彼女が言うには、採取の協力をして欲しい、と。

当初キノは生産職によくある、戦闘力がない故の護衛依頼と思って

いた。

しかし……【紅蓮術士】のレッドの力を見て、本当に自分は必要だったのか、そう思わずにはいられないのだ。

「いえいえ、必要ですとも！ 私はスピードのある人の協力がどうしても必要でして……」

「スピード、ですか」

なるほど、確かにそれなら納得がいく。

今は出していないが、レッドに声をかけられた時にはヘルメスがいたし、A G I型の戦闘スタイルであることも伝えている。

彼女が求めた力がスピードならばキノに当てはまるし、魔法職のレッドに足りないものでもある。

「とは言え、説明も必要ですね。まず、鉱石集めが目的とは言いましたが、それは通常の採取によるものではありません。フィールドボスクラスのモンスターのドロップです」

一般的にボスモンスターというと、デンドロではへUBMのこと  
を指しがちだが、ボスモンスターと呼べるモンスターは他にも数多く  
存在する。

へUBMはあくまで、ボスモンスターの中でも一体しかない上に倒  
すと討伐MVPが特典武器を得るものを指すにすぎない。

「名を【サラマンドル・ヒュージゴーレム】。サラマンドル鉱石ででき  
たゴーレムで……その、とにかくデカイのです」

「大きい……それが、スピードとどのような関係が？」

ゴーレムならスピードのある敵とは思えない。

しかし、レッドが必要としたのはスピードだ。当然、そこには理由  
があるはずである。

「それを説明するには、私の戦闘スタイルの話をする必要があります  
ね」

「戦闘スタイル……それは、今までのようなものではなく？」

「はい。つまり、私は、【紅蓮術士】ではありませんが魔法使いではない、  
ということですよ」

話しながら歩いていたその先で、地面がぼこり、と割れ下からモン

スターが沸く。

出てきたのは地竜種のモンスターであり、頑丈なモンスターだ。

「これは今までのようにはいきませんね……。ちようどいいです、私の真の力を見せて差し上げましょう！ キノさん、牽制して近寄せないでください！」

テンションの上がりだしたレッドは、手術前の外科医のように両手を目の前に上げる。

その手につけられた右手に白、左手に黒の手袋……。これが彼女のエンブリオ、「二物一体 ジキル・ハイド」。

「まずは左手に、『レッド爆弾・レベル2』！」

アイテムボックスから取り出したのは、彼女が自作した……。爆弾。筒状の爆弾を左手に持ち、続いて右手に視線を向けた。

「そして右手に、『クリムゾン・スファイア』！」

スキルを宣言したというのに、その手から炎の球は放たれない。

彼女の手のひらの上に停止し、燃えあがっている。

「レッドさん、早く……。！」

「ではいきますよ！ 《表の姿に裏の顔》！」

彼女がスキルを宣言すると、両手にあつたものが消え、代わりにジキル・ハイドが輝きを放つ。

そのままレッドは両手を握り合わせた。

「キノさん、下がってください！」

モンスターを抑えていたキノが後ろに飛んで下がったのを見て、レッドはモンスターに向かって大きく右手を振った。

彼女の右手から放たれたのは、一見ただの《クリムゾン・スファイア》だったが……。モンスターの方まで飛んで行った次の瞬間。

それまでとは桁違いの威力で、モンスターたちを巻き込んだ爆発を起こした。

大きな音と爆風、そして衝撃がキノ達を襲う。

落ちついたところでキノが目を開くと、そこにはもうモンスターはいなかった。

あるのはただ、焦げた地面といった爆発の跡。

「……これは」

【紅蓮術士】のスキルだけではない、その火力の大きさに言葉を失うキノ。

これがレッドのいう”本当の戦闘スタイル”か、とレッドの方を振り向こうとして……

「ああ……イイっ！ 全てが吹き飛ぶ轟音、ズシンと響くこの衝撃っ！ やはり爆発こそ至高、爆発こそ我が道！ リアルの気苦労が全部吹き飛ぶようなこの解放感、たまらないっ……」

実に晴れ晴れとした笑顔を浮かべるレッドの姿に、キノの表情は硬直した。

固まったキノに気づくことなく、レッドは目を輝かせる。

「美しい……芸術は爆発だ、という言葉がありますがきつとそれは半分正しく、半分は間違っている！ 芸術は爆発です、しかし、爆発こそ芸術なのです！」

ちよつと何を言っているのかわからない。

真つ白になったキノの思考が必死に正常に戻ろうとしていたところで、ようやくレッド自身も正気に戻る。

「ふわ、ふわあああああああ!? い、今のは忘れてくださいー！」

「ア、ハイ」

顔を真つ赤にしてMP回復用のポジションを飲むレッドの横で、キノはなんともしがたい表情を浮かべて共に歩き、ついに目的のモンスター、【サラマンドル・ヒュージゴーレム】の元へたどり着く。

一端陰に隠れて作戦、そしてレッドの作戦について話を進めていく。

ようやく話ができ確認できたのだが、レッドの戦闘スタイルはやはり「火属性魔法」ではなく「エンブリオを用いた爆発」がメインなのだという。

レッドのエンブリオの固有スキル、《表の姿に裏の顔》は合成のスキル。

右手に持った物、あるいはセットしたスキルをベースとして左手に持った物、またはスキルの能力を合成するものだと言う。

彼女のジキル・ハイドは現在第4形態。当初は物と物、スキルとスキルしか組み合わせることができなかつたらしく、せいぜいスキルを組み合わせて少し強くする、程度しか戦闘では利用できなかったらしい。

それが上級エンブリオに進化することで「物とスキル」という異なった性質のものすら組み合わせられるようになり、一気に幅が広がったという。

「それで、その。私は名前の通りもとは火属性魔法をメインにしているつもりだったのですが、エンブリオとのシナジーを探った結果“爆弾”という答えに行き当たりまして……」

爆発による爽快感に、すっかりとりこになったという。

もしかしたらリアルでは何かため込んでいるのかもしれない。

「と、とにかくですね。先ほどは《クリムゾン・スフィア》の方をベースにしたので爆発力のあるスキル、となったのですが……逆も可能でして」

「つまり、強力な火力のある、爆弾？」

「はい。《魔法威力拡大》や《魔法多重発動》といった魔法拡張スキルを併用した《クリムゾン・スフィア》を私特性の爆弾に合成したものがこちらになります」

アイテムボックスから取り出したのは見ただけで何かしら力が込められているのがわかる真っ赤な爆弾。

「しかし、これとスピードと何の関係が？」

「そのですね……実は一度、私は同様の物を作って試したことがあるのです。スキルベースに爆弾を合成したものや威力の低い爆弾では倒し切れず」

彼女もいろいろ試してみたらしい。

しかし、爆弾をそもそも相手に投げつける前に襲われて自分が死んでしまったり、今回のような強力な爆弾を用いたところ爆発に巻き込まれて自分も死んだり……とまあ散々な結果だったらしい。

「私の速度ではゴーレムの近くに設置して爆発に巻き込まれないよう逃げる、ということができないのです。あまり離れすぎたところからだと起爆ができませんし……」

そこで、速度のあるキノの出番だ。

レッドが気を引いているうちにゴーレムの側に爆弾を置き、起爆してから全力で逃走。これがレッドの考えたプランであった。

「起爆は手に持った状態でなければできません。私もいろいろ調整したのですがリモコンのような遠隔起爆だとしても威力がガクツと下がりますし、なによりそんな複雑なアイテムとはエンブリオで合成できないんです。なんでもかんでも合成できる、というわけでもないんです……」

正確には、MPの消費が莫大なものとなつてとても足りないらしい。

レッドは誤爆しないよう、すでにスキルと合成済みの爆弾を一度アイテムボックスにしまうと使い方の説明を始める。

「使うときには、手に持って『起動』と宣言してください。三秒後に爆発するようになってます」

「……わかりました。どうにかやってみます」

「〔武運を〕」

その後。

予定通りレッドがゴーレムに対して遠距離からヘイトをとる程度に攻撃を打ち込んでいる間に、キノがヘルメスを用いて近づいた。

「起動！」と叫んだキノは言うが早いか持つていた爆弾をゴーレムに放り投げると全力でその場から離脱し……

三秒後、キノが爆風で体が浮くほどの爆発が「サラマンドル・ヒュージゴーレム」へと炸裂した。

「あー……肝が冷えました」

「ありがとうございました！ これで、ようやくトップクラスの【サラ

「マンドル鉱石」が手に入りました……！」

危うく爆死するところだった、とキノがぐったりしている横で、レッドは満面の笑みを浮かべていた。

「それにしても、すごい火力でしたねあの爆弾……。レッドさんの爆弾って、エンブリオの能力とはいえ相当強力なんですね」

「わかりますか！ わかりますか!？」

目をキラキラさせて顔を近づけるレッド。

理解してくれるのはとても嬉しいです！ とレッドは追加報酬もかねて20個ほどの自作爆弾を取り出してキノへと渡す。もちろん、《クリムゾン・スフィア》と合成済みだ。

ゴーレムに使ったほどの質ではなく、合成されたクリムゾン・スフィアも強化されていない程度のものだが、それでも十分な爆発力はあるだろう。

キノもそのことはわかっていたため、危険物であることはともかく、たくさん渡された強力なアイテムに目を白黒させた。

「こんなたくさん、その、いいんですか?」

「いいんですいいんです。あ、でもアイテムボックスから出していると3分もすれば合成効果が消えてしまうので、アイテムボックスから出すときや使うときは気をつけてくださいね」

「いいものもらいました……。ありがとうございます」

「いーえいえ、なんのなんの!」

キノが全てアイテムボックスに入れた横で、自分が作ったものを称賛してもらい有頂天になっているレッドは渡さなかつた分の爆弾を持ってキノに伝える。

……すでに教えたことも忘れて、その、使い方を。

「使うときは、こうやって手に持って“起動”、と……」

爆弾は所有者の言葉に従い、熱をもって光り始める。

その威力は、近くにいるプレイヤー二人を吹き飛ばすぐらい造作もない。

「あ」

「あ」

【致死ダメージ】

【レッド・ウイザード】が死亡しました】

【キノ】が死亡しました】

【パーティ全滅】

【蘇生可能時間経過】

【デスペナルティ：ログイン制限24h】



第10話 お茶会の話 — Maternal Love —

「お久しぶりですね、キノさん」

「お久しぶりです、カルチエラタン伯爵夫人。またお茶会に招待していただき、ありがとうございます」

大きな屋敷のバルコニーにキノはいた。

やわらかな日差しと花の香りが包むこのバルコニーで、用意された椅子の一つに座って正面にいる人物……カルチエラタン伯爵夫人と話す。

庭園の方からは、子供たちの声と演奏された音楽が聞こえてくる。

曲の中にはキノもよく知っている曲があり、あの人らしいチヨイスだな、とほほが緩んでいた。

「ここに来る前に、少し周辺をまわりました。あの事件からまだ日が浅いのに、復興が進んでいましたね」

「ええ。近くに遺跡が見つかった関係でもともと〈マスター〉の数が増えている。彼らの助けがあつて、復興が進んでいます」

先日、このカルチエラタン領ではドライブの〈超級〉である「魔将軍」ローガン・ゴッドハルトの悪魔による襲撃事件が起こっていた。

しかし、ローガンはある〈マスター〉によつて討たれ、遺跡から出てきたという巨大な兵器も破壊され、事件は収束したのだそうだ。

「……貴方としては複雑なのかしら？ ドライブの〈マスター〉が事件を起こしたと聞いて」

「ええ。ボクは……元々はドライブの〈マスター〉、でしたからね」

『とは言つても、今はもう無所属じゃない。気にすることないと思うけどなあ』

キノが夫人のお茶会に招待されたのは、これが二度目となる。

前回のキノはドライブから出たばかりの駆け出し旅人。

当時はまだアルター王国とドライブ皇国の間で戦争なぞ起こって

おらず、キノがお茶会の中「どこから来たのか」と問われてなんのためらいもなくドライフと答えることができた。

一口紅茶を飲むと、キノは紅茶に映った自分の顔をじっと見つめる。

そんなキノに対して、夫人はキノの全身を見て、以前とは服装がだいぶ変わったことを指摘した。

「それにしても、昔とは随分格好が変わっていらっしやるのね。コートも気に入っているから当面変えたくない、と言っていたと思うのだけれど」

「そう、ですね。前着ていたコートは〈UBM〉との戦いで燃えてしまつて……。今着ているものは特典武器です」

「まあ！ 〈UBM〉の特典武器を……！」

夫人が驚くのも無理はない。

本来、〈UBM〉というのは遭遇するのも稀な上に、その強さから倒すのは簡単ではない。まして、特典武器を得られるのは討伐MVPになつた一人だけだ。

「ひよつとして、他にも特典武器を持っているのかしら？」

「ええ。コートの他だと、ブーツとこの銃です」

キノとしても、自分が特典武器を3つも持っているのは珍しいレベルだと理解はしている。

二体は他の〈マスター〉やティアンと共に複数で戦つたが、一体はソロで戦つた。

この一体は、他の二つの特典武器や自分のジョブやエンブリオ、スキル、それらが相手の〈UBM〉に対してうまく噛み合ったからこそ倒せたのだと思つている。

一人で挑んだのは無謀と言えば無謀だったが……その時のキノにとっては、そんなこと思えもしなかった。

「キノさんは、とてもたくさんの修羅場をくぐつてこられたのね。ふふ、あの時の初々しい旅人さんが立派になつたものね」

『無茶もその分多かつたけどね』

「ヘルメス、余計なこと言わなくてもいいよ……」

微笑む夫人は、つい昨日のことにように思い出ししていた。  
キノが以前に、この地を訪れた時のことを。

それは、ある晴れた日のことだった。

〈マスター〉の旅人がこの街に来た、という話をメイドから聞き、話をしたいと思って呼んだのがことの始まりだった。

「はじめまして。キノと申します」

「はじめまして。わざわざ来てくれてありがとうございます。ぜひ貴方と一度お話ししてみたかったのよ」

案内された旅人は初心者用装備のコートに加え、全体的にランクとしては下の方の装備を着た少女だった。

一部の使用人は少年と見間違えていたようだが、カルチェラタン伯爵夫人はすっかり彼女の性別を見抜いていた。

「旅人ということは、アルター王国は初めてかしら？」

「はい。そもそもボクは旅人としてはまだまだ駆け出しで。ここが初めての外国です」

「ということとは、ご出身は」

「ええ、ドライフ皇国から来ました」

はにかむように笑うキノ。

紅茶を一口口にすると、夫人はキノがどうして旅人になったのかを尋ねた。

当時〈マスター〉は増えていたものの、国外に出て、さらに旅をするという話は聞いたことがなかった。ほとんどの〈マスター〉は最初に現れた国において活動する者ばかりと聞いていたのだ。

「旅に出る理由、ですか？」

「ええ。貴方のような〈マスター〉が、しかも見たところ熟練者とも言えないような貴方が、どうして旅人になったのかとても興味があるわ」

夫人はとある理由から、旅人と接する機会が何度かある。

しかしキノはそんな彼らとは違い、まだ発展途上であるにも関わら

ず旅に飛び出したように見えた。

上級職を目指し、より自分の強さを求める〈マスター〉がほとんどだっただけに、キノが〈マスター〉の中でも特異に見えたのだ。

「簡単な話です。ボクは……旅をするために、この世界に来たからです」

「……………」

〈マスター〉は来訪者とも形容されることがある。

ティアンにとって〈マスター〉は、エンブリオに選ばれた代償に、時に別の世界へ身を飛ばされる存在。

故に別の世界から来た存在ともとることができ。

そんな彼らであるが、キノはこの世界で旅をする、それこそが目的だったのだという。

「まだ見ぬ世界、まだ知らない場所……。ボクはそんな世界を巡る旅人になりたかった。たくさん場所を訪れて、たくさんの人と出会いたかった。それだけですよ」

「そう。キノさんは、今まさにその夢の第一歩を踏み出したばかりなのね」

「はい。だからボクとしても、こうしてお話しする機会を設けてくださったことを嬉しく思います」

笑顔で紅茶を飲むキノ。

まだ年若い彼女が自分の抱いた夢を叶えようとするその姿が夫人にはとても尊く、そしてとても羨ましく思えた。

……自分の息子でもし生きていたら。もしここにいれば、どんな夢を語ったのだろうかと思えてしまつて。

「ねえ、キノさん。これから旅を続けるなら、お願いしたいことがあるの」

「はい、何でしょう？」

夫人は領地を訪れた旅人に会って話をしては、一つのことをお願いしていた。

それは自分の息子について。

かつて、カルチェラタン伯爵とその息子、エミリオはドライブ皇国

へ行く途中、神話級〈UBM〉である「エデルバルサ」に襲撃された。伯爵……つまり、夫人の夫は死体が見つかったが、エミリオの死体は見つかっていない。

だから、夫人は一つの希望を抱いているのだ。

もしかしたら、エミリオは生きているのかもしれない、と。

それ故に、夫人は旅人に尋ねるのだ。

「私の息子は……昔、夫と共にエデルバルサという〈UBM〉に襲われたの。夫の死体は見つかったけれども、息子の死体は見つかっていない。だからね、もしかしたら……もしかしたら、誰かが助けてくれたのかもしれない。まだ生きているのかもしれないと思っているの」  
「……………」

「私と同じ目をした青年を、あなたは知らないかしら……？」

青と緑のオッドアイで、じつとキノを見つめる。

キノもまた、真正面から夫人の瞳を見つめ……そして、静かに首を横に振った。

「いいえ。ボクは知りません」

「そう……。あなたがこれから旅を続けるのなら、いつか出会うことがあるかもしれない。あるいは情報を得ることがあるかもしれない。その時は……教えてもらえるかしら」

「わかりました、約束します」

その後は、またたわいのない話に移る。

せっかくだから門出祝いに新しいコートをあげようかと夫人は提案したが、キノは「このコートは自分が憧れた旅人のものとそっくりだから着続けているのだ」と断ったため、代わりにAGI増加のアクセサリーをあげた。

本来ならそこまではしないのだが……側にいない息子と重ねてしまったのかもしれないと夫人は思っている。

お茶会が終わった後、今日はありがとうございました、と頭を下げて退出したキノ。

外に出た彼女がヘルメスに乗って遠ざかっていく姿を、夫人はバルコニーから静かに見つめていた。

懐かしいあの時を思い出して夫人は目の前の、あの時とは違う成長した旅人に視線を向ける。

どこか幼い印象もあったのだが、今のキノからは修羅場をくぐってきた貫禄のようなものが感じられた。

そして、当時を思い出したことで、つい最近の出来事もまた思い出す。

「そういえばキノさん。以前、息子の話をしたと思うのだけど……」

「！　そうでした、ボクも、そのことについて」

「エミリオに、会ったわ」

夫人の言葉に、キノは驚いて言葉を失う。

穏やかな表情を浮かべた夫人は、先日悪魔襲撃の事件の中で、息子と出会ったときのことを話す。

「顔は、理由があるようで見せてくれなかったけれど……それでも、あの子はエミリオだつてわかったの。不思議なものね、何年も会っていなかったのに」

「……………そう、ですか」

「キノさんも、あの子の手がかりをつかんでくれていたのね。ありがとう。あの子は妻と娘がいる、と言っていたのだけれど……あなたの知っている情報とは重なっているかしら？」

キノがエミリオについての情報を得たきっかけは「エデルバルサ」という〈UBM〉の名前だった。

VRチャットで知人であるフランクリンと話をしていた時に、ものついでと聞いてみたところフランクリンが妙だな、と答えたのだ。

『エデルバルサ？　……おかしいねえ。その名前の特典武器を持っている人物ならつい最近知り合っただけど』

『そうなんですか!?!』

『でも年齢が合わない。そんな昔に出現した〈UBM〉の特典武器を得るには若すぎる。当時は子供、いや、赤ん坊くらいなんじゃ……』

『赤ん坊……いや、まさか。確か夫人の息子さんは当時赤ん坊だった

と、言つて……』

『へえ？　なるほどなるほど……ティアンは死んだら討伐MVPにはなれない……もし相打ち同然だったのなら、唯一の生き残りがMVPに選ばれる可能性も……』

フランクリンからその特典武具を持った人物のことを聞き、他にも情報を集めて……そして、彼こそが夫人の息子であるエミリオ・カルチエラタンではないかと考えた。

今回お茶会に招待されたとき、その人物の立場からどう伝えるかキノは迷っていたのだが……。

「はい。ボクが聞いたところでは、確かにその男性には妻と娘さんがいる、と」

「そう。……キノさんが言いづらそうにしているということは、やはりエミリオは難しい立場にいるのね」

でもいいの、と夫人は紅茶を口にする。

息子が生きていることが分かった。ならそれでいいのだ。

いつか必ず、また来ると約束してくれた。ならば……無理にその正体を知ることはない。

『よかったの、キノ？』

「どうしたんだい、ヘルメス」

お茶会からの帰り道、ヘルメスは不思議そうにキノへと尋ねた。

『息子さんについて詳しく教えてあげればよかったじゃない。今どんな名前なのかとか、どこにいるのか、とか。言わないでくれ、って伯爵夫人は言わなかったでしょ？』

「でもね、教えてくれ、とも言わなかったよ。本当に知りたいならボクに聞くはずさ」

本当なら知りたかっただろう。今息子がどうしているのか知りたくてたまらなかつただろう。

でも、エミリオ自身が名を明かせない、顔も見せることができない、

と夫人に言ったのだ。

そして、夫人は彼の意思を尊重した。

「それが彼女の思いだよ。息子さんをとてても大事に思っているんだ。だったら……そこにボクたちが余計なことをすることはない。そう思ったんだ」



第11話 わがままな話① — Don't for  
get me. —

黄河にある山奥を、一台のバイクが走っていた。

バイクに乗っているのは一人の少女。

初心者用装備である枯葉色のコートを着ており、それが運転による風によってはためいていた。

森の中を進んでいるところで、運転手が口を開く。

「このあたりはね、掲示板を見てるとへマスター」の間でたまに話題になる」

『え？ どうして？』

「この山にはどうもへUBM」がいるみたいなんだけれど……誰もその姿を見たことがない」

『何それ。どうしているってわかるのさ』

バイク……エンブリオであるヘルメスの疑問はもつともである。運転手のキノは、掲示板で知った話をヘルメスへと話す。

「見えない、でも一方的に攻撃されたんだって。どうやら黄河のクラランキング1位のところが集まって討伐に来たけれど、それでも失敗したんだとか」

『うっわー……。隠蔽対策とかはしてた、よね？』

「もちろん。それでも見つからないんだからへマスター」のエンブリオでなければへUBM」しかありえない、って話らしい。でも広域殲滅型のへマスター」が辺り一帯を攻撃しても、相手からの攻撃は止まらなかったんだって」

結局、そのクラランは撤退し、その話がネットにあげられたのをキノが読んだ、ということだ。

「運営のミス」「管理AI仕事しろ」という意見から「神話級かそれ以上だったか?」「あるいは条件特化型では」などと意見が散見され、未だに真相が分かってはいない。

ただ、全体的にどうしようもない、という意見が多い。

「だから、この辺は街から離れているというのもあって、ほとんど人がいないらしい。せいぜいが村を作ってるティアンくらいしかいないって」

『で、そんなところにわざわざ行くと。物好きだねーキノも』

「だからこそ、さ。別にへU B Mへに挑むつもりじゃないけど、こういう場所に行ってみるのも、旅の醍醐味だと思うんだ」

人があまりいない山奥の村。

旅に憧れた少女は、まだ見ぬ場所を想像し期待に目を輝かせていた。

どんな場所なのだろう、どんな出会いがあるのだろうか。

それこそが、キノの胸を高まらせてならないのだから。

『そ。もしかしたら、一生忘れられない思い出になるかもしれないね』

「ああ。そうだといいいね」

日が暮れてきたし早めに着くといいいんだけどな、とキノはヘルメスのスピードを上げた。

夜になって、キノはようやく目的の村にたどり着いた。

山奥だからもつと暗いかと思っていたのだが、何やら今日は明かりが数多くつけられ、賑やかであった。

どうしたんだろうと思ひヘルメスから降りる。

手でヘルメスを押しながら村に入ると、村人の一人がキノに気づいて駆け寄ってきた。

「こんな遅くに……誰だ？」

「ボクはキノといいます。旅人のへマスターです」

キノが自らをへマスターと名乗ったとたん。

彼女に気づいてそちらを見ていた村人達が驚いた顔をして互いの顔を見合わせた。

いや、驚いたというだけではない。とまどい、期待、不安……様々な感情があったようにキノは思えた。

「へマスター……。それってあれか、エンブリオを持っていて、たま

に異世界に体が飛ばされる、っていう」

「はい。そうですけど……」

もしかしたらへマスターへお断りの場所なのだろうか、とキノは考える。

実のところ、大きな街ではないが、こうした小さな集落だとへマスターへを歓迎しない場所もある、ということを知っている。キノは経験している。ティアンと違って死なず、特異な力を持つマスターを恐れる人々もいるのだ。

「あの、へマスターへが受け入れられない、ということでしたら……」「どうしたの？」

その時、困ったような村人の後ろから、二人の人物がやってきた。

一人は年をとった男性。杖をつき、特徴的な首飾りをしている。この人物が村長にあたる人物かもしれない、とキノは考えた。

もう一人は小学生くらいの少女。

紫の髪を肩くらいまで伸ばしており、他の村人とは違ってやや豪華な服装をしていた。

「そ、村長！ 実はその、旅人だ、というへマスターへが……」

「なんと……へマスターへか……！」

村長もまた、驚いた顔をしてキノの方を見る。

キノとしてはどうしたらいいかわからないので立ったまま様子を見ていたが、少女の方が村長へと口を開いた。

「村長さん、私、旅人さんもお祭りに参加して欲しい！ ね、いいでしょ？ 村長さん……」

「……そうじゃな。今日の主役はおまえさんじゃ。主役のわがままは可能な限り聞かんと……」

頷いた村長は、他の人と先に行っていないさ、と少女へ言う。

村人達に連れられて少女がいなくなった後、一人残った村長はキノに話しかけた。

「ようこそ、旅人さん」

「はじめまして、キノといいます。あの、ボクはお邪魔でしたでしょうか……」

「いやいや。ちよつとまあ、戸惑っただけじゃ。それにあの子が参加して欲しいと言った以上、貴方がよければぜひ今夜の祭りにも参加して欲しい」

村長の話によると、今日は村で祭りがあるという。

先ほどの少女は祭りの中心人物であり、それで衣装を着ていたのだそう。村人達が戸惑ったのも、祭りの日に「マスター」が来るというのははじめてのことだったからだ。

「なら、お言葉に甘えようかと思えます」

「そうかそうか。まあ、祭り自体毎年あるわけでもないし、「マスター」が現れてきたのはここ最近の話じゃからな。ぜひ楽しんでおくれ。ただし」

ここで、村長はキノにある条件を出した。

キノとしては特に問題ない条件であったため、これを受け入れ村の奥へと進んでいった。

村の中心では、かがり火が焚かれる中、木で作られた壇の上に先ほど見た少女が座っていた。

その周りで村人達が、並べられた料理を食べたり踊ったりしている。

「あつ！ 旅人さん！」

キノの姿を見つけた少女は、嬉しそうに声を上げるとキノを手招きで呼ぶ。

近くには両親らしき男女がおり、共に料理を食べていた。

「この方は……？」

「旅人さんだよ！ 旅人の、えつと」

『名前かな？』

「あ、ボクはキノといいます」

「キノさん！ 私は紫苑シイワンつていいいますー！」

嬉しそうに自己紹介する紫苑。

旅人さんも参加してほしいってお願いしたの、と紫苑が言うと両親

は納得したように頷いた。

「なるほど、紫苑が呼んだのかい。それなら私たちも歓迎しないとね」  
「紫苑ちゃんが言ったから、ですか？」

「今日のお祭りは紫苑が主役なんだ。だから、村の皆は紫苑のわがままはできる範囲で叶えてあげないといけない。もちろん、無理に聞く必要はないけどね」

『へー。わがままをいってもいいお祭りなんだ』

「そうだよ！ だから、キノさんも私のわがままを聞くんだよ！」

困ったな、とキノは苦笑いする。

もちろん、それがお祭りのルールだというのだからキノも従う。無理なお願ひ、わがままを聞く必要はないと言われてるし、紫苑の方もそれを分かった上でやってくれそうなものを選んでいるのだから。「じゃあね、えつと……私たちと一緒にご飯を食べて！ そして、旅の話がたくさん聞かせて欲しいの！」

「旅人さんの話、私も是非聞きたいわ」

『良かったねキノ。芸をしてみせるとか無茶ぶりじゃなくて』

「ははは、仕方ありませんね。それじゃあ、いくつか印象に残った話を……」

黄河のこの村に来るまでに、キノはドライブ、アルター、レジエンドリア、天地、グランバロアとすでに5カ国を訪れている。

その中から子供に聞かせても問題なさそうな、印象に残った話を語っていった。

ドライブで出会った大きな怪獣と小さな怪獣の話。

アルターで大量の狼に襲われて逃げ回った話。

レジエンドリアで、知り合いのうっかりミスで二人とも爆発に巻き込まれた話。

天地で師匠にボロボロになるまで鍛えられた話。

グランバロアに行ったときに経験した不思議な話。

それらのお話を、面白おかしく語ってあげた。

それらはいそが紫苑のお気に召したらしく、ご褒美にアーンしてあげる！ と言われキノは断りきれず照れながら口をあけた。

他にも、紫苑の両親に「マスター」の話をしたり、村人達が勧めた料理に舌鼓を打ったり。

紫苑が選ばれたという祭りの巫女の衣装を紫苑が見せびらかしたり、後で祭壇に行くんだよ！と山の方を指さしたり。とても、楽しい時間だった。

「キノさん。そろそろ……」

「そうですか。もうそんな時間か……」

楽しんでいたところに、村長や紫苑の母親をはじめ何人かの村人がキノを呼びに来る。

村に入るとき、キノが出された条件。それは大きく分ければ二つ。一つは、お祭りを楽しんだ後、頃合いを見て村長達呼びに来るので、その後村から出ること。

「旅人さん、もう行っちゃうんだね」

「うん。ありがとう、紫苑のおかげでとても楽しいお祭りだったよ」

キノが笑顔で言う。

実際、紫苑に話をしているときにのめり込むように聞いてくれ、リアクションをしてくれて。そして紫苑とご飯を食べたり話したり遊んだことが、キノにとってとても楽しい思い出となっていた。

寂しそうにする紫苑の横で、途中から席を外していた紫苑の母親が封筒を差し出した。

「これは、戻ってきたときに読んでください」

「あのね、紫苑も書いたんだよ！」

いつの間に、とキノは驚いたが

『紫苑ちゃんが書いたのはあのときじゃない？ ほら、キノが大きな鳥肉を勧められてむしやむしや食べてたとき』

「え？ あー」

そういえばそんなときもあった。

封筒を受け取ってアイテムボックスにしまうと、お世話になりました

た、とキノは村人達に礼をした。

「キノさん！」

出発しようとする、紫苑が駆け寄ってきてキノの袖をぎゅっと握った。

「私のことを、忘れないでね！」

「うん。忘れないよ」

しゃがむとキノは涙ぐむ紫苑の頭を優しくなでた。

ほんと？　と言う紫苑にほんとだよ、と繰り返す。

おずおずと袖を放した紫苑に微笑むと、キノはヘルメスに跨がり、《走行》のスキルを発動させようとエンジンをかける。

最後に振り返ると、紫苑はポロポロと涙を流しながら小さく手を振っていた。

「私のことを、忘れないでね……」

キノの背に向けられたその声が、妙に印象に残った。

「ただいま、ヘルメス」

『おかえり、キノ』

ログインしたときの定例になった挨拶を交わす。

今キノ達がいるのは、村から少し離れた空き地。

キノに告げられたもう一つの条件。それは、村から出た後に村から離れてログアウトすること、だった。

正確には、村から出た後に別の世界に離れていて欲しい、と言われた。ティアンにとって、ヘマスターのログアウトやデスペナルティは体を別の世界へ飛ばされるものだとされている。

リアルとデンドロでは時間の流れが違うので、すでに1日以上がデンドロでは経過していた。

『ねえねえ。渡された封筒、何が入ってるの？』

ヘルメスに言われ、戻ってきたときに、つまり再ログインしたときに読んでほしいと紫苑の母親に渡されていた封筒を開ける。

どうやら手紙が入っているらしい。

『読んでよ』

「わかった。えーつと……ん？」

その出だしを見て、キノは首をかしげた。

『キノさんへ』

最初に、あなたに尋ねなければならないことがあります。

あなたは、「紫苑」のことを覚えていますか？

覚えていないのなら……この手紙を読むのをやめ、手紙を処分してください。

覚えていないのならば、もう関係のないことです。

もし、覚えていてくださっているのなら……続きを、読んでください。』

『えつと、一応聞くけど、覚えているよね？』

「そりゃあ覚えてるさ」

『じゃあ続きをお願い』

わかった、と言ってキノは続きを目で追った。

そして……どんだん顔が青ざめていく。

手紙を持った手は震え、崩れ落ちそうになる衝動を覚える。

「なんだ……なんなんだよ、これ……っ！」

『紫苑のことを覚えていてくださって、ありがとうございます。』

しかし……あなたにとってショックでしょうが、全てをお伝えしな



くてはなりません。

この手紙をあなたが読んでいる頃には……もう、この世から紫苑という存在は、いなくなっているでしょう。

あの子は、もういないのです。』

## 第12話 わがままな話②

森の中をバイクが走る。

バイクに乗った人間の顔はグーグルで目元が見えず、うかがい知ることができない。

今、キノが向かっているのは祭りの中紫苑が指さした祭壇。

手紙を読んだ後、村にはもう寄らなかつた。

……寄つたところで、何の意味もなかつたから。

「なんで、どうして…っ！」

もう紫苑はいない、と書かれていた手紙。

いったいどういうことなのかとキノは手紙を読み進めた。

『キノさんにはお伝えしていなかつたのですが……あのお祭りは祝いのお祭りではありません。』

依り代に選ばれた者へ最後の思い出になるように。そして、残される者が皆その出来事を共有するためのものなのです』

依り代。

それこそが重要なのだとキノは瞬時に悟る。

『キノさんはご存知か分かりませんが……この山には“忘界様”と呼ばれる存在がいます。以前村に来たへマスターの方々によるとへU BM」と言われるものです。その方々は凄腕の集団のようでしたが、忘界様を認識することすらできず、敗北したそうです。』

その話ならキノも知っていた。村に向かう途中でヘルメスに語つた存在がまさにそれだ。

『忘界様は守護神として、何年かに一度、依り代を求めます。依り代に選ばれた子は、祭壇にて忘界様をその身に宿すことになりました。私たちは村を離れようにも他の生活を知りません。そして、逃げたところで無駄だと言われてはどうしようもありません。』

つまり、今回その依り代に選ばれたのが紫苑だつたのだ。

そして忘界様とやらを倒そうにも、認識することすらできないなら

倒しようがない。

『そして、依り代となった子は自我を失い忘界様となり……』

その後が、問題だった。

『残された者達は、依り代となった子についての記憶を全て失います。』

なんだそれは、と手紙を持つ手が震える。

手紙の冒頭にあつた『紫苑のことを覚えているか』という言葉は、これが理由だったのだ。

そして、祭りの本当の意味がようやくわかる。

依り代との祭りの記憶を共有することで……全員がその記憶を失う。

誰がいなくなったのか。誰の家族がいなくなったのか。それがわからないようにするためだったのだ。

村の誰かがいなくなったことは分かっても、それ以上の悲しみを味わうことのないように。

『手紙という形で全てをお伝えするのも、これが理由です。私はきつと、もう紫苑のことを覚えてはいないのでしようから。しかし……記憶が失われるのは、忘界様が新たな依り代に身を宿すときのことです。』

だから、へマスターの存在を彼らが知ったとき……「もしかしたら」という思いが芽生えた。

『もし、その瞬間この世界にいなければ……記憶は失わないかもしれない。だからあなた方が祭りの日に訪れてくださったとき、私はとても嬉しかった。貴方だけでも、娘のことを覚えていてくれるかもしれない。それが私達にとって、どれだけ大きな希望だったことか。』

キノはぐつと歯を食いしぼる。

『私のことを、忘れないでね……』

あの言葉の、本当の意味が分かってしまったから。

『紫苑のことを覚えておいて欲しい。そんな私たちのわがままを押しつけることになってしまつてごめんさい。それでも……それでも、どうか娘のことを、紫苑のことを覚えていてください。』

この辺りから、字が歪んでいる。紙の一部が何かで濡れたかのような跡がある。

紫苑の母親がどんな思いでこの手紙を書いていたのか、嫌が応にも理解できてしまった。

『そして。もう一つわがままを言わせてください。』

『いいの？ 手紙には倒して欲しい、だなんて一言も書いてなかったのに。そもそも、他の人と同じように認識できず一方的にやられるだけかもよ？』

「それで納得できるわけ……ないだろ」

祭壇が近づき、遠目に見えてきたその時。キノは咄嗟に進路を大きく変更した。

突如上から放たれた光線に《危機察知》で気づいたから。

『今の！』

「ああ、間違いない……。でも、もつと重要なことがある」  
見えた。

キノの目には確かに、光線を放った浮遊霊のような存在が見えていた。

似たようなものが前からわらわらと飛んできて光線をキノに向かって放つ。

しかし、発射が見えるのなら今のキノにとって避けることなど容易だ。

『ほう、珍しいものよな……』

やがて辿り着いたその場所に。

『妾が見えるか、人の子よ。依り代の名と顔を記憶しておらねば妾を

見ることも触れることもかなわぬのが我が結界の一つであるのに。なぜ依り代の記憶を持つ?』

「絶対に忘れないって約束したんだ。忘れたりなんかしない」

祭壇の上に、それはいた。

顔は紫苑だが、その顔は醜悪に歪み、嘲るような笑みを浮かべている。髪は黒くなっており、また一目で化生とわかるほどに長く伸び、浮き上がっていた。

祭りの時は衣装として可愛らしかった服も、今の姿と合わせるとまるで呪術師のような不気味ささえ感じられる。

『ならばそのまま消えていけ、愚かな侵入者よ!』

古代伝説級〈UBM〉、【微霊忘界 エリクシア】。

今まで戦った〈UBM〉よりも格上である敵の前に、鋭い目をしたキノも叫んだ。

自らの全力戦闘の要になるスキル。

——エンブリオの名を冠した、必殺スキルを。

「《世界を駆ける旅人》!」

ヘルメス。

ギリシヤ神話におけるオリンピア十二神の一柱であり、俊足を誇る神々の伝令使として知られている。

また、旅人や商人、盗人の守護神としての側面を持つなど実に多面的な側面もある。

ヘルメスは伝令使として様々な英雄譚にも登場するが、その中で自らの持つ道具を貸し与えることもある。

ペルセウスに貸し与えられた道具の一つには、空を駆け神速をもたらす、ヘルメスの伝令使としての活躍を大きく後押しするものがある。

その名をタラリア。

翼のついたサンダルであり、これによって大空を駆けるという……。

キノが跨がっていたバイクが消え、代わりにキノのブーツの両脇にパイプやエンジンなど、機械の集合体が翼を模した形となって現れる。

『往け、我が眷属達よ！』

エリクシアの叫び声に、合計で20体もの眷属が浮かび先ほど同様、キノに向かって光線を放つ。

白い布をローブのように体に纏い、顔しか見えない彼女らの顔はそれぞれ違っているものの、全員が幼い女の子。

かつてエリクシアに依り代にされた子ども達が、虚ろな目でキノを見つめていた。

「……《ギアシフト》」

必殺スキルを発動させたキノは、さらにスキルを重ねて走り出す。《ギアシフト》はMPを消費してAGIを増加させるスキル。効果は段階的に変化させることが可能であり、一定時間ごとの消費量によって倍率も変化する。

『おのれ、ちょこまかとっ！』

そして必殺スキル、《世界を駆ける旅人》もまたAGIを倍加させるスキル。《ギアシフト》などの補正を受けたAGIを、最終的に5倍にするのがこのスキルだ。

しかし……キノが戦闘をする上で、このスキルには重要な点がある。

それは、キノの両手が空き、その足で走れること。

《世界を駆ける旅人》が発動している間も、システム上は“ヘルメスに騎乗中”とされる。

つまり、《ギアシフト》だけでなくヘルメスに乗っていることで発動する、操縦士系統派生上級職「疾風操縦士」のパッシブスキルによる

AGI増加、もう一つの上級職でありメインジョブのパッシブスキルによる速度補正、さらにはレベル上限が開放されヘルメスの性能を200%引き出せる《操縦》スキルなどなど。

騎乗状態であるとしてこれらの補正を受け、さらにその上で必殺スキルにより5倍に増え、その上でバイクに乗っていない、手足を制限されない状態で活動できる。

強化を重ねたAGIは超音速機動の域へと達し、AGI型の超級職すら超える速度を叩き出す。

無論超級職についた《マスター》は新たに必殺スキルを使えるわけだから未だカンスト止まりのキノが一步劣ることは否めない。

しかし、それでもキノの高速戦闘は準《超級》の域へと達している。

『速い……っ。だが速さだけで、妾は倒せぬわあああ！』

攻撃をかいくぐったキノは「ガルカノン」を抜いて引き金を引く。

銃火器を用いることが前提のメインジョブのスキルによって、その弾丸に速度補正が加えられ、大きな攻撃力を生み出す。

しかし……その攻撃は、エリクシアに何のダメージも与えない。

ニヤリと笑うエリクシアは、ゴミがついたと言わんばかりに弾丸が当たった場所を払ってみせる。

『言っただであらう？ 妾は速さだけでは倒せぬと。そして速かろうが、避けられなければ意味もあるまい！』

一度身を抱くように体を縮めるが、エリクシアは即座に開放されたかのように腕を広げる。

そしてその動きに合わせ、全身から黒いオーラを放った。

「ぐ、ああっっ！」

エリクシアを中心とした全方位範囲型攻撃。

速さだけが爆発的に増加しても、防御力は変わらない。

咄嗟に腕で顔を覆い、死亡は免れたものの受けたダメージは大きかった。

ずっと気に入っていた初心者装備のコートが、ダメージにより燃えて壊れてしまう。

『ハハハハハハハ！ 不様よのう！』

「……………」

嘲笑われようと、キノは務めて無視し、エリクシアを睨みつける。その様子が気に入らず、エリクシアは舌打ちをする。

『貴様のその速度、確かに段違いだがそう長くは持つまい。速いからこそ短期決戦を挑んだつもりであろう？ だが妾の三重結界、やすやすと超えられるわけもなし！』

エリクシアの指摘は正しい。

今この瞬間にも、キノのMPはどんどん削れている。必殺スキルやギアシフトは秒単位でMPを消費していくため、MPの多いジヨブ構成をしたキノでも長期戦は不可能だ。

眷属がすかさず光線を放ってくる。

キノはその攻撃を避けると、次々に眷属を撃ち落とす。

眷属はエリクシア本体と違って謎の防御力は持っていないようで、補正強化だけで倒せていた。

「…………眷属が厄介だね。なら」

走りながらキノはアイテムボックスからあるアイテムを取り出した。

それは伝説級へUBM〔要塞亀艦 ガルカノン〕の討伐にも大きく寄与したアイテム。

レジエンダリア屈指の爆発狂がエンブリオによってさらなる付与を施し生み出した爆弾、【レッド爆弾・レベル3】。

「起動！」

超音速機動が可能である今ならば、ギリギリまで爆弾を持っていようとも爆発から逃れることは造作もない。

エリクシアが逃げられぬよう、爆発間近になって放たれたそれは。

『貴様、それは…………っ！』

「まとめて、吹き飛ばっ！」



辺りを飛んでいた眷属も全て巻き込み、辺り一面を吹き飛ばす大爆発を起こした。

## 第13話 わがままな話③

『……ハハ』

キノが使った爆弾の威力は、紛れもなく伝説級へUBMの装甲を吹き飛ばしたものと同等だった。

『ハハハ』

キノが放った銃弾をもともしなかったエリクシア本体はともかく、【ガルカノン】のスキルを用いるまでもなく倒せた眷属なら確実に一掃できた爆発。

『ハハハハハハハハハハ！』

しかし……エリクシアどころか、眷属までもが健在であった。

浮遊するエリクシアは余裕の笑みを浮かべ高笑いしている。

この結果にはさすがのキノでも驚きを隠せない。

エリクシアまで倒せるとまでは期待していなかったが、それでも光線を放ってくる眷属は倒せると思っていたからだ。

だが結果は、よりにもよって無傷。

『妾に攻撃が効かぬからと眷属を全滅させるつもりだったか？ だが無駄だ！ 妾の第二の結界は、眷属を含め守り、貴様の戦い方を強制する！ ただ巻き込むだけの、妾をはつきり狙いもしない攻撃など、妾は決して許さぬ！』

古代伝説級へUBMとしての特性……それは、エリクシアが纏う三重結界。

第一の結界は依り代の顔と姿を記憶していなければエリクシア本体や眷属の姿を認識できず、攻撃することもできない《忘却結界》。

このスキルによって多くのへマスターやティアンは返り討ちにあっていく。攻撃ができないだけでなく認識すらできないのだから。

そして爆発を防いだのが第二の結界、《忘憂結界》。

この結界はエリクシアとの戦いにおいてあらゆる面からエリクシアが憂う攻撃を防ぐ結界だ。

狙いを気にせぬ広範囲攻撃を無効化し。

数の暴力で攻める多重攻撃を無効化し。

距離をとり放つ遠距離攻撃を無力化する。

『範囲攻撃は許さぬ。数に頼った軍勢の攻撃も許さぬ。遠距離からの攻撃も許しはせぬ!』

つまり。エリクシアに攻撃しようと思うなら、一定範囲内からの単発攻撃を個人で重ねていくしかないということだ。

《忘憂結界》により、エリクシアは広範囲攻撃を行う広域殲滅型や、軍勢を操る広域制圧型に対して圧倒的有利を誇る。

そして……

「くっ……」

『近くからの銃撃に切り替えたか。だが先ほどの攻撃といい、妾には傷ひとつ付いておらぬぞ?』

眷族にはないがエリクシア本体にのみ展開されている、第三の結界。

これにより、キノはエリクシアに対して1ダメージも入れられていなかった。

広域殲滅型でもなく広域制圧型でもない個人戦闘型の者は……この最後の結界を越えられなければ、攻撃などできはしない。

『貴様に勝機などないわ侵入者ア!』

眷属が光線を放ち、そしてさらに本体から一回り大きい光線がキノへと放たれる。

現在超音速機動で駆け回るからこそ回避できてはいるが、長くは持たない。

そうしてスキルの効果が切れてしまえば、光線に対処できず敗北してしまうだろう。

しかし、キノとてただ追いやられているわけではなかった。

エリクシア本体に銃が効かない理由を考えながら戦っていた。その行動の一つとして、エリクシアに《看破》をかけ続ける。

キノのアクセサリー枠のうち、一つは限定的ではあるものの、特定のステータスに対し看破を補強するものだ。今回キノが装備しているのはENDの看破成功率を引き上げるもの。

だからこそ、わかったことがある。

(間違いなく、エリクシアを守っているのは……この、莫大なEND)  
キノが看破したENDがこれだ。

END:12650(+1265000)

元の値はともかく、スキルで増加しているであろう数値が尋常ではない。

百万を超えるこの防御力は、例え物理ステータスが他に類を見ないほどだという”物理最強”ですら手こずるであろう数値。

ガルカノンを使うにも、ただでさえMPがどんどん減っているというのに百万以上のMPを装填できるわけがなかった。

「こ、のおー」

自分を狙う眷属に銃を向け、二体の眷属を撃って撃破する。

これまでに倒した眷属はその都度エリクシアが補充しており、今も18と数が減ったようには感じられない。今倒した眷属だって、数秒もたたず元の数に……

「……今の」

その時、キノが気づいた。

END:12650(+1138500)

増加した値が変動している。

先の数値から……ちょうど126500、元のENDの十倍の数字が減っていた。

そのきっかけとなったのは何か？

答えは一つ……銃で撃ち抜いた、二体の眷属。

「まさか、眷属の数に応じたEND増加!?!」

『気づいたか侵入者！ だが、気づいたところで何とする！』

最後の結界の名は《忘我結界》。

健在で飛んでいる眷属一体につき、元の値の5倍の数字がENDに追加されるスキル。

眷属が最大20体、つまり最大で百倍の値が追加されるということになる。

これによって、ただでさえ倒す障害の多いエリクシアに対し相応の莫大な攻撃力でもなければ攻撃を届かせることはできなくなっ

まう。

しかし、何より厄介なのは……眷属に対しては《忘憂結界》が適用されているということだ。

広域殲滅技で眷属を一掃することはできない。それはキノが先ほど【レッド爆弾】を使って失敗したとおり。

かといって、数に頼ることもできない。

したがって一体ずつ倒していくしかないが、眷属が減ればすぐにエリクシアが眷属を再召喚してしまう。

『ならばもう分かったであろう、貴様の足掻きなど無駄なのだ！  
妾の結界を破れはせぬ』

エリクシアは笑う。自分の勝利を確信して。

そして……キノは。

(これは……もしかしたら！)

彼女もまた、口元に笑みを浮かべていた。

一筋の光明が差す。もしかしたら、と。

最後の結界が、ただの固定数値増加だったらどうしようもなかったかもしれない。

しかし……眷属の数に応じて、増加率が変動。

そして……何よりも大事なのは。

増加する数値は……何を参考に計算されている？

最後の大勝負だと、キノは光線を避けながらエリクシアへと駆け寄る。

その右手には【ガルカノン】を持ち、エリクシアへと狙いを定めて。

『また銃撃か！ 学習しない愚か者め！』

「装填<sup>セット</sup>、” 12650”！」

しかし、愚か者は果たしてどちらだったのか。

一発の銃声の後、叫び声が森に響き渡った。

『ああああああああああああああああああ!!?』

エリクシアの左腕が吹き飛ばされている。

『なぜだ、何故!?!』

「……思った、通りだ……!」

エリクシアの《忘我結界》は、元のENDの値を基準にして、眷属の数に応じて倍加した数値をENDに追加する。

ならば。

元の値が、0だったらどうなるのか？

0は5倍しようが、100倍しようが……0のまま。

そしてキノの特典武器、「ガルカノン」の固有スキル《一碎貫通》は……MPを装填し、注いだMPの分だけ相手の元のENDを減算した攻撃を放つスキル。

固定数値の追加分は、元のENDをマイナスになるまで減算して、追加分と相殺することになる。つまり、相殺するための追加分のMPも注ぎ込む必要がある。

だがもし、追加分が元の数値を基準にして変動するのなら話は違うのだ。

すなわち。

元のENDを0まで減算して計算するのなら、着弾時における追加分のENDもまた……”0”なのだ。

例えば「鎧巨人」のスキル《アストロガード》も、《一碎貫通》が元のENDを0にするほどのMPを注ぎ込まれていれば倍加効果は事実上発生しない。

そして、防御力が事実上消滅したエリクシアに対し、キノの攻撃は必殺スキルの影響で強化されている。

キノのメインジョブは、騎兵系統派生上級職【竜騎士】ドラグナー。

レジエンダリアで就ける【竜騎士】ドラゴンナイトが竜に乗る騎乗職であるのに対し、【竜騎士】は同じ要素をもつ反面、中世ヨーロッパの”竜騎士”と同様の面を持つ。

すなわち……竜の咆哮のとき、銃火器を用いる騎兵である。

【竜騎士】とは、銃火器の使用に特化した騎兵系統派生上級職と言える。

騎乗して戦う前提である【竜騎士】のパッシブスキルには……騎乗物の速度に応じた速度補正が、騎乗状態限定で銃火器にも適用されるものがある。

そして、ヘルメスの必殺スキルは速度を爆発的に上昇させた上で、騎乗状態を保っている。

防御力のない相手の腕を吹き飛ばすことなど、当然の結果なのだ。さらにキノが一撃を放つが、それは外れる。

『ああ、ああああああああ!!?』

ここに来てエリクシアは恐怖した。

第一の《忘却結界》は紫苑を覚えているキノには効果がない。

第二の《忘憂結界》は範囲内の単発銃撃には意味がない。

第三の《忘我結界》は今まさに貫かれた。

もはや、エリクシアを守るものは……何も無い。

『眷属達よ！ ヤツを、ヤツを足止めしろおおー!』

眷属をキノへと向かわせ、自らは空へと上昇する。

空に上がってしまったら攻撃は届かない。仮に届いたとしても、離れた遠距離からの攻撃は《忘憂結界》で防ぐことができる。

そして自らは光線による遠距離攻撃が可能。

そう思つての退避だった。なのに……

『馬鹿な……ここは空中であるぞ！ 何故走れる!?!』

キノは、エリクシアを追いかけ……空中を走っていた。

何も無い空気をまるで足場のようにして、エリクシアの元へと駆け上がる。

これはヘルメスの固有スキル、《行路適応》を用いているだけ。

つまり、必殺スキル状態のキノは……水面だろうが空中だろうが、どこだろうと駆けることができる。

《世界を駆ける旅人》というスキル名は、伊達ではない。

文字通り、どんな場所をも駆けるスキルなのだ。

眷属が足止めしているものの、眷属は《一碎貫通》がなくとも倒せる。エリクシアを倒すためのMPを削るには至らない。

「逃がしたりなんか、しない……!」

『何故だ……何故、そうまでして妾にこだわる！ 妾は守護神であるぞ！ 依り代として妾の身を保つには必要なこと!』

エリクシアは守護神だ。それは事実。

遠い昔、かつては守護神として人々に寄り添い、村を、そして町を守ってきた。

だが……時が経つにすれ、少しずつ異変が起こってきた。

『時と共に、人は妾のことを忘れていった！ 信奉することをやめて忘却の彼方に妾を追いやっていった！ この苦しみがわかるか?! 守ってきたはずの人々から、忘れられていくこの虚しさがわかるか!?!』

だから、彼女は考えを歪めてしまった。

ならば、二度と忘れぬようにしてやろうと。

忘れてしまう恐怖を思い知らせた上で、自らのことを恐怖と共に記憶に刻みつけよう。

『その何が悪い!? 変わらず土地は守り続けた、妾が見えぬ侵入者だつて蹴散らしてきた！ なのに、忘れられたくない苦しみが貴様には』

「うるさい」

そんなもの、お前が依り代にした子供たちだつて苦しんだだろうに。

そんな苦しみを他の人にも押しつけたのはお前だろうに。

そんな気持ちもあったが、それ以上に。

「これは、わがままで」

手紙にはエリクシアを倒してくれなんて書いてなかった。

そんなクエストだつて発生はしていない。

これは、ただの、わがまま。

「ボクはただ……お前が存在しているのが我慢できないだけなんだ」

眷属を蹴散らし、一気にエリクシアへと駆け上がる。

『わ、忘れろー！ 記憶よ消えろー！』

最後のあがきと、キノに対して記憶の消去を試みる。

キノが依り代となった紫苑のことを忘れてしまえば、《忘却結界》により攻撃は不可能となり、認識もできなくなる。

だが、キノは止まらない。

『ああああああ!! 消えろ、消えろー!』



「装填、12650」

エリクシアは知らない。

〈マスター〉にはプレイヤー保護機能と呼ばれるものが存在していることを。

管理AIによって保護され、記憶を奪うなどといった精神操作は効かないということ。

駆けるキノはブーツの逸話級特典武具、「走爪狼脚 モロク」の装備スキルを発動させる。

その名は《刹那》。

10秒という短い効果時間ではあるが……発動時のAGIに応じた倍率で攻撃力を倍加させるといふものだ。効果時間が短い分その倍率はただでさえ高く、必殺スキル状態のキノならなおさらだ。

『消えろ、消えろ、消えろっ、消えろ、消えろお、消えろ！消えろ、消えろっ、消えろ、消えろお、消えろ！消えろっ、消えろ！消えろ、消えろお、消えろっ、消えろお、消えろ！消えろ、消えろお、消えろっ、消えろお、消えろ！消えろ、消えろお、消えろっ、消えろお、消えろ！消えろ』

凄まじい形相のエリクシアに、冷たい目と共に銃口をキノは向ける。

《一砕貫通》と併用して放つのは、【竜騎兵】の奥義。

「お前が、消えろ。——<sup>ドラゴノス・ファイアー</sup>《竜の咆哮》」

それはまさに、竜が咆哮したかのような大火力による砲撃。

《刹那》によって強化された上に凄まじい熱量と速度を持ったこの攻撃を、全ての防御を失ったエリクシアが耐えきれるはずもなかった。

【UBM】【微霊忘界 エリクシア】が討伐されました

【MVPを選出します】

【キノ】がMVPに選出されました

【キノ】にMVP特典【紫苑界套 エリクシア】を贈与します」

キノは地上に降りると必殺スキルをはじめとした諸々のスキルを解除する。

《行路適応》によって空中歩行までしたのもあり、MPはほとんどなくなってしまうていた。

疲れてはいたが、キノは特典武具の名前を見て焦るように手に入れた特典武具を取り出していた。

【エリクシア】は、キノがこの戦いで失った初心者用装備のコートにどこか似ているコートだった。

しかしとどころで違う点が多い。まるで、誰かがうろ覚えだったものを再現したかのように。

そしてもう一つ、以前と大きく違うのは……左の二の腕部分に、紫苑の花の紋様が描かれていたこと。

「……………」

そのままウインドウで説明を読もうとして……泣きそうになった。

【紫苑界套 エリクシア】

〈古代伝説級武具〉

遠距離攻撃を防ぎ、数や範囲の利を減する守護神の概念を具現化した至宝。

最後の依り代となった少女は、貴方の旅を見守り続ける。

※譲渡売却不可アイテム・装備レベル制限なし

・装備補正

なし

・装備スキル

《適温保持》

《忘憂結界》

キノは新たなコートをぎゅっと抱きしめる。

今となっては、もう言葉を交わすことはできない。

それでも……それでも、彼女が最期に残したものは、ずっとキノ共にあり続けるのだ。

『ねえキノ。エリクシアを倒したこと、紫苑のお母さん達には』

「言わないよ。倒してくれと頼まれたわけでもないし、紫苑のことを話すこともできない。ボクがまた行く必要性もないさ」

もう依り代を求められることもない。だから、これでいい。

キノは手紙に書かれていた、最後の文面を思い出す。

『私たちに、紫苑のことを思い出させようとはしないでください。記憶は消え、戻ることはありません。今頃私は、自分の娘がいることさえ忘れてしまっているでしょう。そこに娘のことを伝えられても、私は紫苑が生まれた時の喜びも、共に過ごした思い出も、何一つ思い出すことはできないのです。思い出せないという苦しみと悲しみに、私は耐えられる自信がありません。』

だから、どうか。

貴方だけでも、紫苑のことを覚えていてください。』

「忘れないさ、絶対に」

キノは紫苑の花が描かれたコートを羽織ると、バイクに戻ったヘルメスに跨がる。

「ヘルメス、紫苑の花言葉を知ってるかい？」

『知らない。どんな意味なの？』

「ふふっ、それはね……」

バイクがエンジン音と共に、祭壇から離れていく。

” 貴方を忘れない ”

第14話 愚痴をこぼす話 — T i t f o r T

a t —

カチャカチャと、部屋に金属がぶつかり合う音が響く。

部屋の中には二人の人間がおり、寡黙なまま手を動かしていた。

二人は台を挟むようにして立っており、それぞれ作業に従事していた。

「クツソ、デンドロの中なのに」

「ハア、ボクはたまたま近くにいただけなのに」

「どうしてこんなことしてるんだか……」

二人ともそれはそれは、うんざりした顔で。

「確かにクエスト受けたのは俺だけだよ？ リアルと変わらないこと

してるのはな……。お前はどうかんだ？」

「そもそも、ボクは受けたくて受けたわけではないんですよ」

キノの言葉に、ブルースクリーンは手を止めた。

「ん？ どういうことだ？」

「もともとはカルチエラタン伯爵夫人に挨拶に来たんですが、その後

【女教皇】に会いまして……このクエストを押しつけられました」

「……災難だったな」

【女教皇】 扶桑月夜とキノが出会ったのはこれが最初ではない。

かつて王国を訪れた時に、キノが「キノ」のRPをしていると知った彼女は、「森の狩人」という銃を報酬としてちらつかせる代わりにクエストを押しつけてきたのだ。

『あ、そういえば最近、ウチんとこの信者がピッタリな装備手に入れてたんやけどなー。ほら、名前とかピッタリやあらへんかなー（チラツチラツ）』

『……………』

性能も悪くない上に、RP的にもいい。

おまけに月夜に煽られたものだからキノとしては仕方なく、それはもう仕方なくクエストを引き受けた。

そして、今回、また出会ってしまったのである。

キノがこの国にいと情報的事前に掴んでいたようで、カルチエラタンの近くにいた扶桑月夜はキノを狙ったのだ。逃げようとしたものの彼女のエンブリオで速度を6分の1にされては彼女の秘書である【暗殺王】月影からは逃げられず。

キノとしても抵抗はしたのだが、様々な妨害をちらつかされた結果キノはクエストを受けざるを得なかった。

どうやら月夜は、遺跡の出現に伴い募集された【整備士】などの王国に少ないジョブを持った人を紹介することで、国に恩を売ったり仲介料を得たらしい。

「で、その結果ボクはここにいます。一応こちらも交渉した末に、『扶桑月夜はキノが求める武具の入手を手伝う』との報酬を契約書で確保しました」

「ほー。それじゃあまだ」

「……でも、補則で『時間的拘束は12時間のみ』『一定額以上の代金を扶桑月夜は支払わない』というものが……」

抜け目のない契約書の内容にブルースクリーンは閉口した。

さすが扶桑月夜えげつない。

「あーもう、やめだやめ。こんな気分で続けても集中できないし休憩しようぜ」

「賛成です」

ただでさえブルースクリーン自身もリアル同様機械作業で気が滅入っていたのだからと、彼らは作業を一時中断する。

そして、せっかくならとブルースクリーンはキノに旅の話をしてもらうことにした。

「これまで全部の国を回ったんだろ？ ずいぶんとまあ旅をしたもんだよな」

「ええ、いろんな経験ができました」

頷いたキノに対して、ブルースクリーンは尋ねる。

「だったらよ、その分色んなへマスターとかエンブリオとか見てるんだろ？ 何かこう、スゲー印象に残ったものとかねーか？」

活動範囲が狭いと、どうしても実際に見たり聞いたりできる「マスタ」は限られてくる。

たいていのマスタは国家所属のため、どうしても活動範囲が狭まってしまふことが多い。

国によっては並大抵の力量では行き来できないだろうし、移動手段とて必要となる。

キノの場合は旅に特化した「エンブリオス」のおかげでMP消費のない移動、空中や水面まで走行できるスキルなどと他のものよりはるかに移動についてはハードルが低い。

だからブルースクリーンは、キノの話に面白いものがないか聞きたかった。

有名どころであればネットなどで情報も得られるが、それ以外にも何かあるかもしれない。

「トップランカーとか「超級」以外で頼むぜ、と注文をつけるブルースクリーンにキノは考えこむ。

「そうですね……まずエンブリオ」  
「おう」

「グランバロアにいたときの話ですが、モンスターが回遊する海のと真ん中に大きな灯台がありました」

灯台……海に？

ブルースクリーンは首をかしげる。

通常、灯台は海岸の陸地にある。それが海のと真ん中に？

しかもエンブリオの話である以上、モンスターがいる中にその「マスタ」はいたのだ。

「てことはなんだ、その灯台は」

「ええ、エンブリオです。「マスタ」は灯台のてっぺんに座って釣りをしていました」

「何してんだオイ……」

思わずあきれた声が出る。

とは言え、デンドロは自由だ。海のと真ん中でのんびり釣りをするのもまた自由。

とりあえず、ブルースクリーンは続きを促すことにした。

「もう一つエンブリオの話をするのなら、酒瓶のエンブリオ持ちと会ったことがありますよ」

「なんだそりゃ?」

「酒専用のアイテムボックス、と言えばいいのでしょうか。量の増加と、その瓶から飲んだ酒で自らを強化する能力がありました」

なんかうらやましいな、とブルースクリーンはこぼす。

世の中に酒好きは大勢いる。個人のパーソナリティーから生まれるエンブリオとしては確かにあつておかしくないだろう。

「続いて〈マスター〉となると……まず思いつくのはやはり【蹴姫】さんですね」

「準〈超級〉じゃねえか……」

「あの人は印象的でしたね……性格も、エンブリオも」

超級職を持つ〈マスター〉は準〈超級〉と呼ばれ、超級エンブリオを持つ〈超級〉に準じた実力を持つとされる。

もつとも、超級職を得ていなくとも準〈超級〉と呼ばれる実力者は存在する。キノもまたその一人である。

「他には、貴方もご存じと思いますが……」

「?」

「現在カルチエラタンで働きまくっているホワイトキャップさんです……」

「……あー。ありや確かに印象的だわ」

リアルの関係でログイン時間は多くないようだが、ログインしている間はひたすらカルチエラタン中を駆け回っては人々のために活動している女性の姿が二人の脳裏に浮かぶ。

かつては〈月世の会〉に所属しながらも、クランオーナーであり〈超級〉の扶桑月夜と大口論の末脱退したという逸話を持つ〈マスター〉だ。

キノは他にも、レジエンダリアの爆発狂やドライブのパパラッチの話をする。

最も、印象に大きく残っていたが語らなかつた者も当然多い。

その中には、〈超級〉になったと聞いた、かつて天地で殺しあつた少女も含まれている。

彼女の語る様々な人物に、ブルースクリーンは様々な想像を膨らませていった。

「まあ色々といったもんだな……」

しかし、と彼は思う。

確かに皆印象的ではあつたが、それら全てはまともと言えばまとも。つまり、ブルースクリーンのような指名手配をくらうほどの何かをしでかした人物の話ではなかつた。

だからついで、好奇心から聞いてしまった。

「しかし、指名手配されるようなやつの話はなんかねえのか？」

イリーガル・フロンティア

「I F くらいなら会ってそうだけだよ」

「………確かに〈IF〉の方と会つたことはあります。しかし、他にもあると言えはあるんですよ……」

あまり気乗りしないようだったが、キノは語り始める。

「ボクが他の人と協力して倒したヤツがいます。確かにアイツは〈超級〉でもランカーでもなかつたようですが」

「おつ？ なんだ、やっぱりいるんじゃないやねえか」

「カルデイナでペンタゴン・キャラバンというクランが全滅した事件、覚えてますか？」

ああ、とブルースクリーンは頷いた。

カルデイナにおけるクランランキング2位であるそのクランがたつた一人の〈マスター〉によって全滅した事件は有名だ。

その犯人もまた〈超級〉であり、【殺人姫】である彼女はあまりにも有名である。

「その事件がどうしたんだよ」

「どうも、その事件を裏で誘導したのがヤツ……ノーフエイスなんです」

「は、あ……？」

ノーフエイスはとにかく、物事をかき乱すことを好んだ。

ジョブ構成やエンブリオだつて、戦うためよりも、事件を起こすこ



とに傾いた構成。

それがノーフェイス。

人を誘導し、事件の種火を撒き、そして最後にはキノ達によってデスペナルティとなった。

そう。

戦いには向いてないように見えるジョブ構成で、戦闘型ビルドの複数人を相手にした。

人の予想を超え、自分の土俵に相手を引きずりこむ。そんな末恐ろしさのある人物だった。

そしてキノは口にしなかったが……ノーフェイスの死に際も不気味なものだった。

キノに殺される直前のその顔を、彼女は今でも忘れてはいない。

休憩を終え、二人はまた作業に戻る。

「『電気羊の夢』。相変わらず周回プログラム多いな」

「便利ですね。ドライブにとっては鬼門でしょうに」

「だから指名手配くらってここにいるんじゃないやねえか。あーもう、そのくせなんで整備士系統とか技師系統とかとちまったんだか」

愚痴をこぼし続けるブルースクリーンに、キノは苦笑した。

「言われてみれば確かに。なんで普段うんざりしている系統を、とは思いますね。それでも、慣れてる分使いやすかったんじゃないですか？」

「そりゃあ、自分が培って持つてるもんだから使えると言えば使えるからな……。エンブリオは逆に周りを巻き込んで問題起こせるもんだったからな、鬱憤晴らすには良かったんだよな……。おい、どうしたそんな顔して」

ブルースクリーンの言葉に、ポカンとした顔を見せるキノ。

やがて考えを纏めると、すみませんと言って作業に戻る。

「ああ、少し考え事というか、思い出したというか」

「なんだよそれ……いいことでも思いついた、ってか？」

「いいえ、思いついたのは」

キノの口元が、ニヤリと笑う。

自分が培って持っているもの。そして、周りを巻き込んで問題を起すもの。

「悪いことですよ」

「月夜様、失礼します」

「んー？ 影やんではないしたん？」

「先ほど、このようなものが」

『請求書』……って何やのこの額!? しかも、え、へ叡智の三角から

!?! 何で?!」

「同封された手紙によると……キノ様との契約に基づいて製作した銃器の代金を請求、ということのようですが？」

「高すぎやん。一定額以上は払わなくてええから無視しとこ」

「……いえ。この請求書、無視しては些かまずいかと」

「何でなん？」

「まず、この請求書そのものがまずいです。戦争前にこの額をドラィフのクランに支払うと言うことは、資金流出と問題視されかねません」

「……せやね」

「その場合。無視されたからと表沙汰にされると……まず間違いなく王国にとっては裏切り行為と見なされるでしょう。払っていないくとも、『資金流出をする手段へ叡智の三角』とのパイプを持っている』と見られます。加えて契約書の内容も公開されますと月夜様が引き起こした問題と分かってしまいます。こちらの意図したものでなくとも、何らかのペナルティは避けられないかと」

「……………」

「それでもう一つ。この請求先は月夜様個人ではなくクランへ月世の会です。月夜様個人は契約によって払う必要はありません。が、クランへの請求を月夜様がオーナーとして拒否した場合……それは月

夜様が”協力を拒否”したことになるのでは？」

「……………」

「此からも良いかしら？　ねえ月夜、貴方、キノさんに対して『王国の敵と勘違いされてもウチは知らんえ？』なんて言って怒らせたから、逆に国の敵にされかねないようなことをされたんじゃないの？」

「……………」

「月夜様。さっさと支払った上で、この件を内密にしていたたく旨、対価を用意した上でキノ様と契約書で約束したほうが良いかと」

「月夜、人を巻き込んで利益を得ようなんて欲張るから逆に損するのよ？」

「知らん。　ウチは知らーんー」

第15話 待ち焦がれた話 — Demanda  
Rematch—

ああ。ああ！

見つけた！

見つけた！

その人物は、飛び上がらんばかりに歓喜した。

やっと見つけた、と。

慣れない旅をした甲斐はあった。

世話になった人に頭を下げ、長らく過ごした国を飛び出した甲斐はあった。

全ては、この時のために。

「おいお嬢ちゃん、そんなに目をキラキラさせてどうした？ 試合開始はまだだろうか？」

いくら〈超級激突〉を楽しみにしてたとしても気が早いだろう、と隣に座っていた男性が言う。

それに対し、肩にも届かない程度の短い髪型をした少女は答えた。ずっと探していた人を、観客席に見つけたと。

少女が今いるのはテラス席。

探し人がいる席よりも遠く離れているし、試合開始も近い。

相手もまた隣にいる人物と話しているようで、邪魔をするのも気が引ける。

ならば待とう。

試合が終われば、時間もできる。邪魔にもなるまい。

これまでずっと待っていたのだ、試合一つ分くらいなんてことはない。

もともとは試合を楽しみに来たのだから。

少女は決闘はしない。一度決闘設備を使った大会には出たが、それ以降は決闘に参加しなかった。

しかし、野試合ならば何度か経験があった。

そのためこの〈超級激突〉を見ることはきつと自分の糧にもなる、そう思っていた。

だから、あの人のところへ行くのは少し待とう。

そして、出会えたならば今度こそ。

己の全力をもって殺しあおう。

相手が話している人物も相当強い。

戦ってみたくて、でもやはりまずは探し続けてきた相手と戦いたくて。

そんな飢えるような視線をずっと向けていた。

「楽しみだね。あの人は私を覚えているかな？ タマ」

「きつと覚えているでしょう」

少女の足元で、床に座った白い犬は尻尾を振りながら答える。

少女もまた、犬の言葉に頷いた。

「そうだね。早く会いたいなあ……キノさん」

タマと呼ばれたのは、犬の姿を借りた彼女のエンブリオ。

その到達形態は……第七形態。

デンドロ内において、百としない〈超級エンブリオ〉が一つ。

その〈マスター〉である少女の名は、雫。

”野試合無敗”、”一斬必殺”、”剣霊”と呼ばれる〈超級〉の一人。

「な……な……」

試合が終わる。

そしてこの時、雫の目論見は見事に崩壊していた。

本来なら、試合が終わった後、すぐにでもキノの元に向かって野試合を……あのとき出来なかった、己の全力を用いた戦いを申し込むつもりだった。

キノが相手なら、結界を用いた決闘でも構わない。

彼女との戦いは、紛れもなく命を懸けた本当の殺しあいであったのだから。

だが。

『ゲームをしよう！』

それに待ったをかけたかのように……「フランクリンのゲーム」が幕を開けた。

実質的には都市ギデオンを狙ったテロだ。

そして、当然と言えば当然なのだが。

このテロのさなか、「自分と戦ってくれ」だなどと自分本位なことを言えるはずもなかったのである。

「雫様……」

「どうして……どうして、こうなったっ……！」

頭を抱える雫。

しかし人の危機というなら、黙って見ているわけにはいかない。

天地の〈超級〉が王国と皇国の争いに首を突っ込んで良いものかと迷いはしたが……雫は数秒迷った後、まあいいやと考えを放棄した。

現在は天地を出ていること、そしてそこまでの目的であるキノとの決着をつける機会を台無しにされたのだ。

テロを起こしたフランクリンら皇国側に配慮する必要はどこにもない、と考えた。

パニック状態の中、下に降りて現状を確認する。

結界で閉じ込められていることがわかると、雫は人気のない壁際へと移動する。

「まずはここから出ないと。タマ、一度消えてくれる？」

「かしこまりました、雫様」

次の瞬間、犬の姿が消えた。

そして雫はウインドウを操作すると、一つの装備を装備する。

【全身甲冑 暁一式】。全身鎧に分類される装備であり、これ一つで頭・上半身・籠手・下半身・ブーツの5カ所の装備スロットが消費される。

パーティーメンバー強化のスキルを持つこの装備は、ソロのため普段は滅多に使わず、どちらかというとタマが使うのだが今回はまた別の用途で装備した。

「タマ」

「はい、雫様」

声はどこかから聞こえたかと思うと、雫が腕に付けていた鈴のある腕輪から煙が出るかのように一人の女性が飛び出した。

長い黒髪が揺れ、白に花柄の着物を着た女性はかすかに透けているかのように見え……TYPE：メイデン with アドバンス・アームズである雫のエンブリオは次に鎧の中へと入っていった。

それはまるで、憑依するかのよう。

「さて……行くかうか。《朧月》」

壁に手を付けたままスキルを行使した雫は、そのまま壁を通り抜けて闘技場から脱出した。

元の装備に戻した雫は、とりあえず敵の多そうなところへと向かう。

闘技場の結界は、合計レベル50以下の者には効果がなく、通り抜けることが可能。

しかし、結界を操作できるのならフランクリンがそれを見逃すとも思えない。必ず何かしら刺客を用意していると踏んでいた。

(そもそも、フランクリンは私相性悪いんだよね……)

フランクリンが広域制圧型であることはかつての戦争から容易に想像できる。

そして、雫は広域制圧型とは相性が悪いのでできれば戦いたくはなかった。

厳密には、真価を發揮できないと言うべきか。

目立たないように忍びつつ走っていった先で雫はPKの一団が闘技場の入口を注視していることに気づく。

雫は結界ごと壁を通り抜けることで脱出したため、彼らは予期していなかったのだろう。

雫としても、半分以上賭けだった結果はこの通り。

「……やっとうか。見た感じ、ほとんどはそこまで強くなさそう。亡命目当てで今回フランクリンに協力しているんだろうね」

「私は雫様の命に従うまでです」

「ほんとはタマはそればかり……。それじゃ、多人数用のいつもの、やるよ」

右手をチョキの形にして、忍者のように顔の前で印を結ぶ。

腕に付けた腕輪が怪しく光り、付けられた鈴がチリンと鳴った。

「カラリン・チョウ・カラリン・ソウワカ来たれ我が眷属よ、霊獣よ」

腕輪は伝説級特典武具のアクセサリ、【霊獣召鈴 リンドウイン】。天地にいた頃雫が手に入れた特典武具だ。

とある陰陽師のなれの果てであった【リンドウイン】は多数の霊獣を召喚し、使役する（UBM）だった。

雫にとっては苦手な相手ではあったが、苦戦の末に倒したこの（UBM）の特性に合わせた召喚スキルが装備スキルとして備わっている。

「では雫様、行って参ります」

召喚されたのは、多数の犬の姿をした霊獣達。

その中でもひととき大きな白い犬が、タマだ。

タマは能力の一つとして、装備等アイテムに憑依するメイデン。さらにこの【リンドウイン】に憑依した場合、召喚される霊獣にも憑依できるらしい。

普段はコスト削減のため戦力・数を抑えることで低燃費で召喚を保っており、その際は自然回復で補える程度のMPで維持が可能。

しかし現在は戦闘のため雫の負担が増す分、ステータスを増強し、さらに他にも多数の霊獣を召喚している。

「全員、攻撃開始！」



雫の指示で、一斉に霊獣達が駆け出す。

気づいたPK達が慌てて攻撃し始めるが、霊獣達は一匹が倒されると他の霊獣がそのPKに襲いかかる。

「うわ、止まらねえー!」

「くそ、【呪縛】がかかって動けな……うわあつ!」

「やめろ、俺は動けないんだ、やめつ!」

一部のPKには【呪縛】といった呪怨系状態異常が発生し、そこを他の霊獣に襲われる。

もちろん、状態異常にかからない者もいるのだが……

「こ、こいつが術者だあつ!」

「くっそ、《燃え盛る刃》……がはッ!」

「な、召喚系の後方職じゃないのか!」

次々に雫が近づき、斬り伏せていく。

天地で鍛え上げた剣術は【神】に届くものではないとは言え、安易に勝ち馬に乗ろうとしたPK程度造作もなく対処できる。

「くっそ、俺たちは複数人だぞ!? それは何でここまで少なくなっちゃまってるんだよお!」

PKの一人が吠える。

しかし、それはもはや負け犬の遠吠えでしかなかった。

彼はかつて王国のヘゴブリンストリートに所属していたが、クランが大打撃を受けたために勝ち馬に乗り換えようとドライブへの鞍替えする機会を待っていた。

しかし、今死んでしまつては……

「待ちわびた機会をぶち壊したあなたたちが悪いのです。これはただの、憂さ晴らしだよ」

「ふざ、けんじゃ」

武器を振り上げる男だったが、すでに雫はその懐にいた。

剣士系統派生剣鬼系統超級職、【修羅】。

それが雫のメインジョブ。

数多い剣士の中でも、死にかける、あるいは死ぬほどの死闘を繰り返した【剣鬼】の頂点。

その奥義にしてパッシブスキルである《血戦舞台》の効果は……斬れば斬るほど、相手にダメージを与えれば与えるほどステータスが增加するというもの。

霊獣達が与えたダメージもまた加算されているため、すでに並のPKなぞで軽く凌駕していた。

「あ——」

「御免」

《血戦舞台》で強化されている上に、《居合い》で倍加したAGIによる攻撃。

それはPKに逃げることを許さず、とどめを刺した。

「……どうやら、向こうもルーキー達が頑張ったようだね」

「もし雫様がいなければ、この集団が追加戦力として彼らに襲いかかったのでしょうか」

数刻後。

すでに雫の周りは壊滅している。

別の集団がルーキー達によって撃破されたことを知って、雫は撤退を決めた。

後はこの騒動が解決するのを待っていよう、と。

「待っていました」

そして、「フランクリンのゲーム」が終結した後のこと。

雫の前には、一人の女性が立っていた。

いや、厳密には……一人と一匹。

「……何の用かな？」

「そちらこそ用があったのでは？　ずっと戦いに飢えた視線を向けていたのはあなたでしょう」

鬱陶しいことこの上なかつた、と秘書のような女性は首を振ると、獲物を見るような目で雫を睨みつけた。

「今回私は見ているだけだったので少々欲求不満です」

「……………」

「今後ちよつかいを出されても面倒ですし」

グシャツ！

「か、はっ……………」

「少しは期待したのですが……………天地の〈超級〉と言っても、この程度がかわせないのですか」

超音速で近距離から胸を貫かれた雫は血を吐く。

ただでさえ高い女性の攻撃力に加え、急所を抉られた雫はもう助からない。

女性はため息をつくど、死んでいく雫に背を向ける。

「期待はずれでしたか、この程度で死ぬなら——っ!？」

急にゾクリとした悪寒を感じた。

何事かと振り返ると、長い黒髪をたなびかせ、今まさに刀を女性へと振り抜く雫の姿が。

死んだはずの雫が動くことにも、その鬼気迫る姿にも驚かされたが……………何よりも、その刀から発せられるオーラが危機感を募らせた。

あれは、まずい。

聞かなくても分かる、あの刀に込められているのは恐らく……………必殺スキル。

『レヴィー!』

普段は言葉を発さぬ女性のパートナーが慌てて彼女の名を呼ぶ。

そして、女性の腕の中にいた小動物は「爪拳士」のスキルで雫の肉体を細切れに

『!?!』

できなかつた。

攻撃をすり抜け、まるで幽体となったようなその姿は、よく見ればおかしい。

彼女は……………あんなにも、髪が長かつたか？

咄嗟に女性は小動物を抱きしめて自らの体を盾とし、

「《タマズサ》」

雫の必殺スキルを受け、消滅した。

(あーあ、やっとキノさんと再戦できると思ったのになあ……また、待たなきゃ……)

そして雫も、デスペナルティとなって消えていった。

第16話 手紙の話 — Game or World?  
—

キノは王国の西の方にある、旧ブリティス伯爵領をバイクで走っていた。

町を目指して走るキノは、手紙の配達を依頼されている。

届け先はブルンガム邸。

裕福な商家であり、港町のある旧ブリティス伯爵領において海産物など食糧を中心に扱っている。

今回キノが運んでいる手紙も、王都の商会から配達を依頼されたものの。

内容までは知らされていないが、キノにとってはさほど問題ではない。

『ねえキノ、配達が終わったらどうするの?』

「そうだなあ、とりあえず」

『とりあえず?』

「おいしいものが食べたい」

エンブリオであり相棒であるヘルメスとたわいもない会話を交わす。

やがて、木や草ばかりの道を進んでいくうちに、遠くにはあるが建物が見えてきた。

それはすなわち、目的地に近づいてきたということも意味していた。

『あ、海だね。キノ』

「海産物、楽しみだなあ」

『アルター王国に来る前はカルディナにいたから、海産物なんてめつたに食べられなかったもんね』

「そりゃあ、商業国家というだけあって売ってはいたよ? でも輸送費とかでえらく割高になってたから……」

カルディナは大陸の中心に位置する砂漠の国。

いかに商業国家とはいえ、地理的問題がある以上どうしても海産物は割高になってしまっていた。

もつとも、海上国家グランバロアにいた頃は飽きるまでひたすら海産物の料理を食べていたのだが。

カルディナにいた時にはそこまで気にしなかったのだが、グランバロアにいた時にたくさん食べたからかもしれない。

「目的地はもうすぐだ。飛ばすよ、ヘルメス」

『転ばないように気をつけてね!』

速度を上げると、バイクは町へと走っていった。

町に着くと、まずは依頼完遂のためブルンガム邸へと向かう。

話は通っていたようで、門番に依頼された手紙を持ってきたと伝えるとすぐに屋敷の中へと通された。

通された応接間には絵や彫刻が並べられており、一通り眺めたところで屋敷の主であるブルンガム氏が入ってきた。

「はるばるどうも。私がブルンガムです」

「初めまして、ボクはキノといいます。王都から依頼された手紙を持ってきました。」

うむ、と頷いたブルンガム氏が手を伸ばしてきたので、アイテムボックスの中に仕舞っていた手紙を取り出し、彼へと手渡した。

そのまま退出しようとしたのだが、予定がなければこちらの依頼も受けてくれないか、と声をかけられた。

「目を通したら、返事を書く。その配達を依頼したいのだが……構わないかね? 冒険者ギルドを通して指名依頼を出そうかと思つているのだが」

「わかりました。ボクもこの町で1日はゆつくりしたいので、その後で良ければ」

分かった、とブルンガム氏は頷く。

その時、扉の外から急ぐような足音が聞こえたかと思うと、扉を開けて少女が入ってきた。

「お父様！ 手紙を持ってきたへマスター」の方がいらした、と、ケホツ、コホツ」

「イレーヌ！ 部屋でゆっくりしていなさいと言ったではないか」

咳き込む少女の背中を優しくさすると、メイドを呼び、少女を部屋へと連れていかせた。

その様子を見送り、ほっとした息を漏らしたブルンガム氏は苦笑いをしてキノの方を見た。

「先ほどの方は……」

「私の娘です。病弱なので部屋のベッドに寝かせているのですが……あなたのことを勘違いしたらしい」

勘違い？ と首をかしげるが、ブルンガム氏はその理由を説明する。

「娘は外の者と文通をしております。ずっと部屋にいては気が滅入るでしょうし良い気晴らしとなっているでしょう」

「なるほど、その手紙が届いたのだと」

「ええ。最近はあるへマスター」の方がずっと配達を引き受けてくれています。その方が来たのだと勘違いしたのでしよう」

わざわざこの部屋まで来たのだから、よほど楽しみにしていたのでしような、と彼は呟く。

どうやら彼女を期待させてしまったことに罪悪感があつたらしい。

そうだ、とブルンガム氏は提案する。

「明日、手紙をこの屋敷に取りに来て欲しい。その時に、良ければ娘に外の話をしてやってくれないだろうか」

「ええ、構いませんよ」

ではまた明日、と頭を下げ、キノはブルンガム邸を後にした。

屋敷を出て紋章からヘルメスを出すと、跨がってエンジンをかける。

「さて、ひとまず手紙を届けたことだし、次は」

『次は？』

「ご飯にしよう」

翌日。

ブルンガム邸に着いたキノは、再び応接間に通された。

やがて現れたブルンガム氏は王都に配達して欲しい手紙をキノに渡すと、娘のイレエヌがいる部屋へとメイドに案内させた。

「こちらがお嬢様のお部屋です」

「失礼します」

カチャリとドアノブを捻って入った部屋は……ひどくこざっぱりしていた。

クローゼットや本棚、机などはあるが、えらく家具が少ないように感じられた。

中心にあるベッドの上では……イレエヌが身を起こして、キノのことを待っていた。

「ようこそ。わざわざお時間をいただき、ありがとうございます」

「いえいえ。ボクとしても、旅をする上で人と話すことを楽しみにしていますから」

「まあ！ キノさんは旅人だったのでですね。今まではどのような国に？」

「主要な国家は全てまわりました。例えば、レジエンダリアでは……」  
こうして、キノは刺激の大きいものは避けつつ、旅の話をしていった。

キノの話にイレエヌは様々な反応を見せ、キノもまたいつかこんなことがあったなと思いつつ話をしていた。

そんな時、コンコン、とノックがされメイドが入ってくる。

「お嬢様、お待ちかねのお手紙が届きましたよ」

「まあ、本当ですか！ すぐにへマスター」の方を呼んで！」

え、と驚いて声を漏らすキノだったが、イレエヌの関心は完全に届けられた手紙へと移っていた。

やがて、一人の若い男性のへマスターが部屋へと入ってきた。

キノを見て驚いた様子を見せたが、イレエヌの方を向くと手紙を取



り出す。

「お待ちしておりました！」

「これが、今回のお手紙です。返事は、あー、お客さんがいるようだし、しばらく時間を置いて後で来ますから……」

「はい、急いで書きますのでー！」

男が出て行くと、いそいそと手紙の封を開けて読み始める。

キノの方を向くと、少し恥ずかしそうな顔をした。

「すみません……その、どうしても早く返事を書いて早くまたお返事をもらいたいので……」

「良ければ、今度はその手紙について話を聞かせてくれませんか。返事は書きながらいいので」

はい、と頷いたイレーヌは読みながら話す。

手紙の相手はフリックとって、王都の北の方に住んでいる青年らしい。

文通はもう1年以上続いているらしく、病弱な彼女にとっては何よりの励みになっているらしい。

やがてイレーヌは手紙を読み終わると、返事を書き始める。

「私にとっては、もう生きがいと言ってもいいのかもしれませんが。私はこんな体ですし、彼も今は遠出ができないともう長いこと会っていません」

もともとはブルンガム商会の商人の子供だったそうだが、別の町へと引っ越したらしい。

面識は一度だがあり、その時に文通を提案されたそうだ。

「でも、こうして手紙を交わしているだけで……私は、この部屋に一人きりの存在ではないと、思えるのです」

やがて、大事そうに書き終えた返事を封筒に入れる。

「すみません、こんなつまらない話を」

「いえいえ、ボクとしてはとても興味深い話でしたよ。お話、ありがとうございました」

立ち上がると、キノは一礼して部屋を出る。

部屋を出た後、キノはメイドによってまた応接間へと案内され

「キノさん。もう一つ、依頼したいことがあるのですが」

「こんにちは。相席してもよろしいですか？」

「えっ？ ええ、構いませんよ……」

町にある喫茶店。そこで、キノは一人のへマスターと会っていた。彼はイレーヌに手紙を持ってきた男性だった。

「でも、俺はここで待ち合わせがあつて……」

「ああ、その心配なら不要ですよ。ブルンガム氏の使いというのは、ボクですから」

え、と男は驚く。

確かに、イレーヌから手紙の返事を受け取った後、屋敷でブルンガム氏から喫茶店にて自分の使いと待ち合わせをして欲しい頼まれた。

しかし一体何の用なのか、と彼は顔を固くする。

「単刀直入に言いますが……ブルンガム氏は、次から別の人に配達を頼む予定のようです」

「な!? どうして!」

「なのでフリックさんの家をあなたに聞いて、一度彼に会ってきて欲しいと頼まれ」

「それは困るっ!」

ガタン! と大きな音をたて彼は立ち上がった。

その音に視線が集まったことに気づき、男は静かに座り、そしてキノを説得し始めた。

「頼む、それは困るんだ。なんとか今まで通りの状態を続けさせてもらえないかな」

「難しいと思います。大事な娘さんのことですからね、彼も考えた末の決断かと」

「それでも……それでも、困る。フリックと会わせろと言われても、それは……」

言いよどむ男に、キノは告げる。

確かに難しいでしょうね、と。

「フリックさんは、もう亡くなってますもんね」

その時の男性は、呆然とした顔をしていた。

それは、彼がずっと隠し通してきた……少なくとも、イレーヌの關係者には絶対知られたくなかった秘密だったから。

「なん、で……」

「ずっとあなたが配達を続けていたことを不審に思ったらしいです。それで、何故だろうとフリックさんのことを調べて……彼がすでに亡くなったことを知ったそうです」

「あ……ああ……」

項垂れる男は、呻き声しか漏らさない。

「でも手紙は今も書かれている。ずっとあなたが届けている。誰が、フリックさんの代わりに文通をしていたのですか？」

「………分かった。話す。全部話すよ……」

生気を失ったような顔をした男は、静かに話し始めた。  
まるで懺悔をするかのように。

いや、彼にとつては懺悔そのものだったのかもしれない。

「俺は昔、ドライブ所属のヘマスターだった。トツプクラスじゃないけどランキングには入る程度のクランの一員で……あの日、戦争に参加したんだ」

アルター王国とドライブ皇国との間で起こった戦争。

その結末をキノは知っている。

トツプランカーが参加せず士気の低かった王国に対し、報酬も提示されトツプランカー全員が参加した皇国。

その結果は火を見るより明らかで、王国のテイアンには国王を含め

大量の死者が出た。

その中に……フリックもいた。

彼は、戦争に参加し、そこで亡くなったのだ。

「俺が殺した若い兵士は……最後に、『イレーヌ……すまない』、そう言つて死んだんだ。戦利品としてアイテムボックスを手に入れて、中を見て……そのイレーヌ宛の手紙を見つけたんだ」

必ず帰ってくる、そう書かれていた手紙には紛れもなくフリックの遺志が込められていた。

男は頭を抱えて話し続ける。

「あの声が、あの顔が今でも忘れられない。そいつを殺した時、俺はその顔に手が止まっちゃまって、何とかアイテムボックスを手に入れて呆然としたところをやられてデスペナになった」

「……そして戻って、手紙を見た」

「ああ。だから……俺は戦争が終わった後、王国に来たんだ。せめて手紙だけでも渡そうと思って、持っていった」

そして、男はイレーヌと会った。

フリックとの文通に元気をもらい、病弱な自分の支えとしていたイレーヌと。

そして……男は嫌というほど苦悩した。

返事を届けて欲しいと渡されたその封筒を、どこに持っていけば良いのか分からなかった。

どうすればいいか分からなくなって……自分が代わりになることにした。

死んだ男の代わりに、イレーヌと文通を始めたのだ。

「DINでフリックの家をどうにか調べて、過去の手紙を手に入れた。それを読んで……寝る間も惜しんで転職した【筆写師】のレベルを上げたよ。筆跡を真似る必要があつたからな……」

「あのジョブのスキルならできなくはないでしょうが……文書の偽造ができるほどのものではないのでは？」

「女の子一人騙せたらそれでいい。それで良かったんだ……」

しかし、配達を人に任せるわけにはいかない。

フリックがいないこと、代わりに自分が書いていることを知られる訳にはいかなかった。

だが、秘密はここに暴かれた。

「これはゲームだろ!?　なんで、なんでこんなことに……。あれじゃまるで、本当に人が死んだようで……。本当に人が笑って生きていたよ  
うで……」

フリックやイレヌのことを思い出し、男は慟哭した。

これはゲームじゃなかったのかと。ティアンがもうただのNPCには見えないと。

「なあ、あんたは違うだろ!?　俺がおかしいだけなんだろ!?　そう言ってくれ、お前はゲームのストーリーを真に受けすぎてるだけなんだってそう言ってくれよ!」

継るような男の言葉に……。キノは、首を横に振るしかできなかった。

キノには、ティアンが自分たちと同じ生命ではないと否定することはできなかったから。

「いいえ。ボクにはそんなこと言えません。ボクには……」

キノの表情を見て、男は悟った。

相手もまた、世界が自分と同じように見えているのだと。

「そう、か……。あんたも、世界派なんだな……」

男は再び訴える。

自分のしてきたことは全て話した、真意も明かした。

だから……。どうかブルンガム氏を説得してくれと。イレヌに真実を知らせないでくれと。

「ボクが依頼されていたのは、ことの真相とあなたの真意を知ることです。ブルンガム氏には報告しますが、イレヌさんには伝えませんが、あなたの希望は伝えておきます。……。最後に決めるのは、ブルンガム氏です」

そのままキノは席を立つと、お茶代を机の上に置いて喫茶店を出て行った。

男はしばらく黙ったまま座っていたが……やがて、アイテムボックスから手紙を取り出し、封を開けた。

第17話 惑わされる話 — I m p o s t o r —

キノはレジエンダリアの森の中を移動していた。  
頭上には良く晴れた青空

森の中で昼寝でもしたくなるような天気だったが、残念ながらそれはあまりに危険。

PKに襲われる可能性や盗賊、強盗といった系統のジョブ持ちに荷物を盗まれる可能性。

そしてモンスターに襲われる可能性。

フィールドでの昼寝はこのような危険が色々とある。

そしてもう一つ。

レジエンダリアには特有の危険がある。

「まずい、まずいまずいまずい！」

『キノ、急いで前進！』

その名を、アクシデントサークル。

空気中に魔力が多いレジエンダリアでは、自然魔力が集合した結果、一定濃度を上回ると発生する自然魔法現象。

ようするに、自然現象として魔法が発生するのである。どのような魔法かはその時によって異なるが……

命に関わる魔法の場合もある。だから今、キノ達は大層焦っていた。

「駄目だ、逃げ切れない……」

『このままじゃ巻き込まれるよ！ 専用のマジックアイテムはどうしたのさあ！』

「買った使い捨てのは効果が切れて……新しく買うのは、忘れてた！」

『キノのバカああああ！』

そして、アクシデントサークルが発動し……

「う、ん……」

『どうやら攻撃系の魔法じゃなかったみたいだね。良かったー、スク

ラップにならなくて』

森の中でキノは起き上がる。

辺りには霧が漂っているものの、それ以外はただ森が静まりかえっているだけであった。

「アクシデントサークルは、発動したよね？」

『そうだろうね』

「でも、ダメージは受けていない。他の効果がある魔法が発動したのか……？」

ステータスを見る。異常はない。

だったら周りに何か手掛かりになるものが……そう思っただけを  
見回してみたのだが。

よくよく見れば、ここはどこだ？

森とはいえ、先ほどとは違う木や道。明らかに自分たちがいた森とは違う。

マップ情報を確認しようとしたが……それはエルメスの声で止められる。

『キノ。お客さん』

「わかった」

無論、これは人が来たということではない。

ガサガサと木陰から姿を見せるのは、狐の姿をしたモンスター。

牙をむき出して唸り、明らかな敵意を見せている。

それに対し、キノも銃のホルスターへと手を伸ばす。

次の瞬間、銃声が森に響いた。

『お見事』

「旅に出るにあたって、まあ戦える程度にはね……。まだ上級職にもついてないけど」

ドライブを出てアルター、レジエンダリアと旅をした。

そのさなかレベル上げもしてはいるが、まだまだ上級職はとっていない。これはせっかく国をめぐるならいいのが見つかるかもしれない、という考えもあるし、そもそもまだ下級職が埋まっていないことにも起因する。



とはいえ、旅を通して銃の技量は多少は身に着いた。

「それよりも、ここはどこかな……えっ」

『どうしたのさ』

「これ、この表示……」

表示された言葉は……【天地・〈霞ヶ森〉】。

「……天地？ まさかさっきのアクシデントサークルは、転移魔法？」

『西のレジエンダリアにいたのに、一気に東の先まで飛ばされちゃったね』

どうやらキノたちは一気に天地へと飛ばされてしまったらしい。

もつとも、セーブポイントはレジエンダリアのままだ。戻ろうと思えばおそらくログアウトすれば戻ることは可能。

考えた末に、キノは……

「うん。このまま天地を旅しよう。武者修行気分で」

新たに天地を旅することを決めた。

せっかく移動が難しいとされる天地に行けたのだ。ならばこの幸運に甘えようと言うのがキノの考えだった。

土地勘はない、地図もない。モンスターの情報なども持つておらず、真正銘霧の中をさまように等しい。

しかし、それもまた旅の醍醐味。キノはそう割り切ることにした。

万が一デスペナルティになってしまえばレジエンダリアに逆戻りだが、それはそれ。

木陰から現れた【霧狐】と呼ばれるモンスターを銃で撃ち、使った分の弾丸を再装填する。

だが、キノの目は厳しかった。

モンスターを倒したからではない。むしろその逆。

確かに撃ち抜いた霧狐が、通常のモンスターののような光の塵にはならず、霧になったように消えたからだ。

(……あれはフェイクだろう。本体はどこにいった……?)

次の瞬間、背中に鈍い衝撃。

振り返るとそこには、見失っていた霧狐の姿が。すぐに銃を構えて引き金を引くも、やはり霧のようにかすんで消えてしまう。

まずい、と思っていたそのとき……

「何をしているんですか！ 《危険察知》や《殺気感知》もないならこのモンスターと戦うのは危険すぎます！」

声に続いて、投げられる短刀。

複数のうち一つの先でギャウツという悲鳴があがり、《隠蔽》状態だった霧狐の姿があらわになった。

その体は短刀で貫かれており、やがて光の塵となって消えた。

ガサツ、と草を踏む音とともに声の主がキノの方へと歩いてくる。

「まったく……どうしてこんな危険なところに」

「助かりました。ボクは、レジエンダリアにいたところアクシデントサークルによる転移魔法に巻き込まれて……」

「転移魔法？ それはまた」

キノの前に立ったのは一人の女性。見た目は二十代半ばだろうか。

長い黒髪を結ばず伸ばしており、腰に巻いたベルトには投げたもの以外にも短刀が複数備えられている。

左手にも短刀を持っており、キノを見つつも周囲に気を配っているあたり、相当に戦闘慣れしていることがキノにもわかった。

「あなた、この森で女の子に会わなかった？ 私みたいに長い黒髪で、ジト目の」

「いいえ、会っていません」

そう、と呟いた後女性は呆れた顔をしてキノの方を見る。

「それで？ レジエンダリアから来たならこの辺のことはわからないのではないですか？」

「おっしゃる、とおりで……」

困った顔をしたキノの前に、女性はハア、とため息をこぼした。

「いいわ、ついてきなさい。私が道まで案内してあげます」

「ありがとうございます。ボクはキノといいます。あの、あなたは……」

「私？ 私は……」

キノに問われて顎に手を当て少し考える。

その後、女性はニヤリとした顔でこう言った。

「私のことは、『師匠』と呼びなさい」

女性は歩きながら、キノにこの辺のことを教えてくれた。

この〈霞ヶ森〉というエリアは名前の通り霞がかかっており、見通しがよくない森。

そこに生息するモンスターには、先ほどの【霧狐】のように他者を欺くことができるモンスターが多いという。

故に、ここでの戦いで『視覚』を頼ってはいけない。

もちろん無駄というわけではない。視覚だけに頼って攻撃しては必ず負けるということである。

事実、霧狐を目で追っていたキノが銃で撃つたのはすべて幻だった。

なので、ここは実のところ修行の場としては密かに有用視されている。

もつとも、いきなり挑める場所というわけでもないので人は多くないのだが。

「ここから町はさほど遠くはありません。時間をかければ歩いていける距離ですし、あなたのエンブリオが移動に特化しているということならなおさらです」

『よかったね、キノ』

女性は天地のティアンのため、「バイク」とは何か知らなかった。

しかし似たようなものは別の〈マスター〉のエンブリオとして見たことがあったため、キノが少し説明しただけで概要を理解し、町への移動手段は問題ありませんねと頷いた。

「ありがとうございます、師匠さん。いきなり天地に飛ばされたものの、このように教えてくれる人に会えたのは幸運でした」

「そうですね。ええ、素直にその感謝は受け取っておきましょう」

どことなく嬉しそうな女性。しかし、本心は隠そうと表情を固めようとしていたことに気づき、キノは何も言わなかった。

わざわざ指摘するのも、かえって女性の不興を買う恐れがある。

「！何か、いる……！」

しかし途中で、突然女性が顔を険しくした。今までモンスターが忍び寄っても涼しい顔をして対処していた女性が、だ。

その危険度の高さはキノでもわかる。キノもまた銃を構え、女性の背後へと向けながら気配を探っていた。

『人の子よ、汝らは我が視界に踏み入った』

「人語……？」

「まずいですね、まさか……」

人の言葉をしゃべれるモンスターなど、そう多くはない。

人型のモンスターであれば例外もあるだろうが、〈霞ヶ森〉にある程度慣れた女性はそのようなモンスターはいない、ということをよく知っていた。

ならば可能性が一つ。

人の言葉を喋れるほどに力を持った……強力なモンスター。

例えば、そう、〈UBM〉と呼ばれるような。

『故に、貴様らを見過ぐす道理はない』

ズシン、と音を立て現れたのは……巨大な白い狐。

七つあるその尾は霧のようにかすんでおり、【霧狐】の上位種であることが察せられる。

もつとも、ただの上位種でないことはすぐにわかった。

狐の頭上には【狐狸霧柱 カスミシラギ】という表示があったのだから。

それはつまり……相手が〈UBM〉であることの証。

「………よりによって、ですか」

短刀を構える女性の顔を冷汗が流れる。

カスミシラギの尻尾が揺らめくと、カスミシラギの姿が6つに増える。

これはすべて幻なのか、それとも本体が紛れ込んでいるのか。

あきらかに幻惑を得意とする〈UBM〉であり、ただでさえ手に余ると言うのにキノという足手まといがいる中、女性は明らかに不利で

あった。

(せめて実体があるのだけでも……！)

そう考えた女性はアイテムボックスから出した短刀を6体すべてに投げつける。

そして……全ての分身が短刀を叩き落した。

あるものは爪で、あるものは牙で、あるものは尾で。

「なっ」

『我が分身は全て実体を持つ。幻を身に包んで変化させることもできる』

6体いるカスミシラギのうち、2体がその姿を変える。

1体は女性の姿に。1体はキノの姿に。

それを見て女性は舌打ちする。仮に逃げても、分断でもされればキノと偽って襲ってくる可能性があったからだ。

思った以上に厄介だ、そう思わずにはいられない。

いつそキノを見捨てて逃げに徹するか、と考えたその時。

「やっと見つけましたよ、コトハ」

その場にいた全員の視線が、声のした方へと向けられた。

無理もない、声が聞こえるまで誰もその気配に気づけなかったのだから。

コトハをじっと見つめる声の主は、黒髪を長く伸ばした少女だった。

背丈はキノよりも低く、顔も幼い。童顔だと考えても、多くの人間がせいぜいが15歳までにしか見ないだろう。

ただし、その目つきだけは子供らしからぬものであり、僅かに細めたその目は明らかに威厳、そして威圧を感じさせるものだった。

「師匠さん、あの少女は」

「あ、ちよっ」

探していた女の子ですか、そうキノが聞こうとした言葉に女性……コトハは焦ったような声を出す。

一方で少女の方からは、ほーうという低い声が漏れた。

同時に、コトハを射抜くような視線を放つ目がより細くなる。

「師匠、ですか。まあそれは」

次の瞬間、キノには見えぬスピードで少女が自分の左側への空間を殴りつけ

『ギャアアア!?!』

「この狐を片付けてからにしましょう。あなた達を狙っていました  
が、私に標的を変えたようです」

キノ達を取り囲んでいた6体の姿が揺らぎ、代わりに少女の左にカスミシラギの姿が現れた。

牙が折れ、顔から血を流すカスミシラギはわけがわからないと言わんばかりに叫ぶ。

『どういうことだ!? 貴様のような小娘が、このような力を……』

「見た目に惑わされるようでは、〈UBM〉とさえどその程度でしょうね。〈古代伝説級〉に届くような器でもないでしょう」

この小娘は危険だ、今更そう気づいて逃げようとするカスミシラギだったが、もう遅かった。

背を向けたカスミシラギの横にぴったり張り付くようにして走っていた少女が、勢いよく、拳をカスミシラギへとたたきつける。

その衝撃に、カスミシラギは白目をむいて悶絶する。

『ぐっ、は……』

「これで、とどめです」

首筋を狙った蹴りが炸裂し、完全にカスミシラギの息の根を止めた。

〔UBM〕〔狐狸霧柱 カスミシラギ〕が討伐されました〕

〔MVPを選出します〕

〔御柱〕がMVPに選出されました〕

〔御柱〕にMVP特典〔幻霧装飾 カスミシラギ〕を贈与します〕

アナウンスが流れた後、少女が特典武器として手に入れたイヤリン

グを鑑定する。

「なるほど、実体つき変化能力ですか……。幻なのでいくつか欠点はあるのでしようが、まあ悪くないですね」

「カスミシラギ」をつけた少女は、ゆっくりとキノ達に近づくと、まずはコトハへとデコピンを放った。

ぎやうっ！ と叫び声をあげもだえるコトハに対し、少女は呆れた声で言う。

「なにが師匠ですか。見たところそちらの人はまだ下級職。大方いい恰好をしたかっただけなのでしょう？ このお調子者」

「うう……。すみません、ししよお」

え、とキノが驚いて口を開ける。

女の子が自分より年上の女性をしかりつける光景にも驚いたが……。コトハが口にした言葉には思わず声が出た。

そこで少女がキノの方を向いたので、キノは自己紹介をした。

「えっと、助けていただきありがとうございます。ボクはキノとい  
います」

「キノさん、ですか。はじめまして、私は御柱みはしらです」

名前としては妙だと思うでしょうね、と少女は笑う。

しかし彼女にとつてはこれが名前であり、看破しようとしてもこの名が出るのだという。

そしてキノは気が付いた。彼女の手にはコトハ同様紋章がない。

つまり……。隠蔽しているのでもない限り、へUBMを軽く屠ったこの少女は、ティアン。

「コトハをはじめ、多くの方からは“師匠”と呼ばれています。どうぞよろしく」

第18話 向かうべき話 — He was a Hero. —

『キノー！ やっぱり無謀だつて！』

「うん……ちよつと、期待したんだけど、厳しいかも……」

彼らは今……空を飛んでいた。

正確には、空中を走っていた、というのが正しいが。

ヘルメスの固有スキル、《行路適応》。このスキルを使用した場合、MPを消費することで荒地であろうと水面であろうと空中であろうと、平坦な道として走行することができるようになる。

もちろん、場所によつてMPの消費量は異なる。空中ともなると、陸路を安全に走れるようにするよりもはるかにMP消費量は多くなる。

「まさか、ここまで船が見つからないとは……」

キノ達は今、天地での旅を終え、新たに海上国家グランバロアを指していた。

……どちらかというと、天地では旅に費やした時間よりも、修行に費やされた時間の方が多かった気もするが、それは天地に来たその日にあの女性に会ってしまったからかもしれない。

“師匠”と呼ばれる少女からの厳しい修行を潜り抜け、上級職にも就いたキノは天地を出て、新たな国へと向かおうとしていた。

したの、だが……。

『しかしどうやって次の国に向かうつもりですか？ あなたの力量なら、まあ通常ルートでも大丈夫でしょうが……ここからだといふ時間がかかりますよ？』

『そこは、ボクに考えがあります』

キノが思いついた方法こそ、ヘルメスによる空中走行。

水面走行も可能ではあるのだが……水棲モンスターに襲われる可能性が否めないため、MP消費を覚悟してでも空中という道を選んだ。



『それでMP切れが近づいてたら意味ないんじゃないの!?!』  
「うん……」

しかし現実は一層厳しかった。

海上国家ということで海の上に都市があるのがグランバロア。

万が一都市までたどり着けなくとも、途中で船があればそこで一度降り、休憩させてもらおう、というのがキノの考えだった。

なのに、船一隻見つからない現状はキノ達に多大な焦りを与えていた。

霧が集まっている領域へとキノ達はつつこむ。

目に見える範囲では海の上には船はない。だから、霧で見えていないその中になら船があるのでは、という賭けだった。

そして、キノは……

「あれは」

賭けに、勝った。

「船、に見えるんだけど」

『なら早く降りてー！ キノのMP的に今から降りないとそのまま海にダイブだよ！』

「それは困るね！」

MPが切れて《行路適応》が効果を失う前に、キノは船へと進んでいく。

早く、早く……とハンドルを握る手にも力が入る。

そして、そのまま飛び込むように船の甲板へと飛び込んだ。

衝撃を抑えて着地すると、急ブレーキをかけて停止する。

「な、なんだ!?!」

「空から何か……人じゃねーか!?!」

何事かと甲板に船員たちが集まってくる。

無理もない、彼らからすれば空から突然人が船に降りてきたのだ。警戒されても仕方のないことだろう。

顔を陰しくして迫る海の男たちに、キノも若干顔をこわばらせながら弁解する。

「す、すみません、ボクは怪しい者ではありません」

「空から降りてきた時点で怪しいだろうが！」

『だめだキノ、まったくもって正論だ！』

う、と声を漏らすキノ。

「だいたいなんだそれは!? 空を飛ぶアイテムなんて聞いたことがねえぞー！」

「こ、これはボクのエンブリオです！」

「えんぶりおだあ!?!」

船員たちの顔はなおも険しいまま。

キノとしてはここで、最低でもMPが回復するまで休ませてほしいだけで、決して船員たちと事を荒立てたいわけではない。

その時、甲板にひときわ大きい声が響いた。

「おう、なんだこの騒ぎは！」

「せ、船長！」

「空から変なヤツが……」

ああん? という声と共に、甲板がきしむ足音が響く。

船員達が道を空けた先にいたのは、不精ヒゲにボロボロの上着といった見るからに見た目に気をつかっていない男。

しかし、よくよく見ればその服装はどの船員よりも豪華なことがある。

ガシガシと頭をかき、船長と呼ばれた男はキノの前に立つと目を細めるようにしてキノを見た。

「こんなところに何の用だ、坊や」

「坊やはやめてくれませんか、ボクはキノです」

坊や呼ばわりにキノの方も不機嫌そうな声で答える。

だが、男は全く気にしていないようで話を進めていた。

「んなことあどうだっついていいんだ。質問に答えろよ。てめえは何者だ、俺の船に、何の用だ？」

のぞき込むように見てくる船長に若干不愉快さは感じながらも、キノはしぶしぶ答えた。

そもそもキノの方がここでは不審者なのだから。

「ボクはへマスターで、こちらはエンブリオのヘルメス。グランバロ

アを目指してヘルメスに乗って空中を移動していたのですが、MPが切れてしまったのでこの船で休ませてもらいたいのです。グランバロアまで乗せていってもらえるならとてもありがたいのですが」

キノが要望を伝えると、船長はふうむとあごをさすり、横にいた船員に声をかけた。

「おい、今のヤツの言葉は本当か？」

「《真偽判定》に反応はありません！」

「ますたあ、ますたあねえ。伝説には詳しいから知っちゃあいるが、見るのは初めてだな。」

物珍しいものを見たとき口元をゆがめた船長は、笑うと自らへ親指を向けた。

「俺あこの船の【船長】、ヴィンセントだ。お前がここで休むことは許可してやろう、グランバロアの……まあ、近くまでなら運んでもいい。ただし問題を起こしたら即海へ放り出す。あと、物資に余裕があるわけでもなし、休む場所は与えても飯までは出せねえ、それでもいいか？」

「わかりました。それで構いません」

キノは旅人。道中で野営する場合に備えて食料は常にアイテムボックスの中に日持ちするものを用意している。

【料理人】のジョブはとつていないが、それでも火を起こして肉を焼くなどではできる。もちろん船の上ではそんなことはできないため、保存食を食べることになるだろう。

まあ、味はもう慣れたものだ。今更どうということはない。

他にもいくつか船長としてキノに注意をする。このあたりは床が壊れかけているから通るなどか、船員や自分たちに《看破》をかけたりするなどか、必要がない限りキノから話しかけて仕事の邪魔をするなどか。

ヴィンセントはニヤリと笑うと、集まっている船員へと怒鳴る。

「話はこれですまないだ！ 野郎ども、持ち場に戻れえ！」

「「はい、船長！」」

そこからキノは船旅を楽しんだ。

一つ難点があるとすれば、この船にはセーブポイントがない。

街にあるデスペナルティになった際に復帰できるセーブポイントとは別に、一部の乗り物には移動式セーブポイントというものがあるのだが、どうやらこの船にはないらしい。

これがどうい問題があるかというところ、一言で言えばログアウトできない。

システムのできないというわけではない。

ただ、ここでもしキノがログアウトし、船が移動したとする。その場合、キノが「前回ログアウトした地点でログイン」を選んだとしてもそこに船はないため、そのまま海へと真つ逆さまだ。

『その点大丈夫?』

「ああ、一応海を渡ろうとした時点でこうなることは考えていたからね。今日は休みだから、MPが回復するまで乗せてもらうくらいならログアウトする必要はないよ」

時間的問題はないように出発の日は選んだ。

MPの回復だが、基本的には自動回復とポジションの併用だ。

さすがに一気に飲み続けるときつい。特にキノはジョブ構成上純粋な魔法職ほどではないが、MPが多い方だ。

「おうてめえら、しっかり休めてるか」

「はい、船長」

甲板で海原を眺めていると、ヴィンセントが近づいてくる。

初対面こそ剣呑な空気はあったが、話してみるとたんに気分屋で大雑把なだけであるということがよくわかった。

「この海はでけえだろ。俺たちあこの海の上で育った、そして」

『そして?』

「ああいや、なんでもねえさ」

何かを言いかけたヴィンセントは頭を振ると、キノ達の方を向く。

「それにしても、空を飛んでグランバロアを目指すとはずいぶん思い切ったことを考えたもんだな、ええ?」

「まあ、自覚はしています……」

『危うく失敗するところだったけどねー』

痛いところを突かれた、という顔をするキノをヴァインセントはガハハと笑う。

馬鹿にした笑い方ではない、単に愉快な笑い方だった。

「まあ水面移動するよりはましだろうな。船よりも小さいなりに水面を移動しようもんなら、あつという間にモンスターの餌食だ」

「そう、ですよね」

「おう。だから、空中つて選択はまあ悪くはねえ。モンスターどもを軽く返り討ちにできるほどの力があるってんならまた別だろうが……そういうわけでもねえだろ？」

「〈超級〉の人たちならまだしも、ボクはとてな」

超級職のやつでも無理なもんは無理だけどな、とヴァインセントは笑い、まあ気にするなと軽く手を振った。

「海のモンスターは侮るなつてことだ。船で旅してりやあともないもんと出くわすこともある。そう、あれは嵐の夜のことだった……」

ちよつと、いやだいな長くなりそうな話だったので、キノたちはヴァインセントの冒険譚を話半分聞いていた。

もつとも、途中でヘルメスの反応が消えたのはなぜかはわからない。

「おいキノ。キノー！」

一日たった後、ぼんやりと船を眺めていたキノはヴァインセントの怒鳴り声で振り返る。

一日休めたこともあり、すでにキノのMPは全快していた。

近付いてきたヴァインセントは手にコンパスをもっており、普段のニヤニヤ顔とは違ったまじめな顔をして立っていた。

「休むのはいい、しかしグランバロアは近くまでしか運んでやれない。

「そう言ったな？」

「はい。確かにそう言われました」

「今がその時だ」

ヴィンセントは持っていたコンパスを見せる。

「こいつは一番近くにあるグランバロア所属の船がどの方角に、どのくらいの距離にいるのかを見るマジックアイテムだ。詳しい原理は俺も知らん。が、何が言いたいかというところと近くにグランバロアの船があるということだ。そこに乗せてもらえ」

「わかりました」

ヴィンセントたちにも都合はある、今船を降りろと言われても仕方がないことだろうとキノは考えた。

MPは回復したし、近くに船があるという。手助けとしては十分だ。

『でもさ、何にも見えないけど？』

「ああ、霧が邪魔だな……。これを使ってみてみる、あっちの方角だ」  
腰から下げていた、星の装飾がされた望遠鏡をキノに手渡す。

受け取ったキノが指さされた方角を見ると、まるで霧が晴れたかのような光景になっており、確かに船が先にあるのが見えた。

「すごいですね、これ」

「欲しいか？ 欲しけりやくれてやる」

「え？」

「こんなすごいものを、やると言われても素直に受け取ることはできない。」

困ったような顔をするキノだったが、みかねたヴィンセントはそれなら、と提案した。

彼は腰に下げていたボロボロの鞘の剣を外すと、キノへと押し付ける。

「どうせ頼むつもりだったし、ちょうどいいな。こいつを、カイナルっていうやつに渡してくれ。カイナル・グランライトだ。間違えるなよ。その望遠鏡は依頼の報酬として受け取れ。どうせもう、俺には必要ない」

「そういうこと、ですか……では、受け取ります」

キノが二つを受け取ったのを見て、ヴィンセントは満足げな顔をする。

出立する用意を終えたキノはそれでは、と握手のために手を差し出したのだが、彼は困った顔をした。

「悪いな、握手はできねえんだ。短い間だが楽しかったぜ、坊や」

「坊やはやめてくれませんか、ボクは女性です」

「マジで!?!」

どうやら本気でキノを男だと思っていたらしい。

キノは手を振ると、ヴィンセント達に背を向けヘルメスのエンジンをかけた。

少しだけ助走をすると、すぐに空中へと走り出す。

キノが霧を超えた辺りで、ヴィンセントの後ろからガシャン、ガシャンと何かが崩れる音が何度もした。

「悪いな、野郎ども。長かった旅も、これで終わりだ。ゆっくり眠れ」  
振り返ったそこには、誰もいなかった。

「お前は何者だ!」

「ボクはキノ、へマスター」の旅人です! こちらはエンブリオのヘルメス!」

「へマスター」はどうしてこうも変なヤツばかり……」

「空飛ぶエンブリオとかあるのか……」

船員達がざわめく中で、キノは忘れないようにと声を張り上げる。  
どこかで見たような繰り返ししの光景だった。

「ボクはグランバロアを目指しています! そして、カイナル・グランライトという方に届けないといけない物があります! その方について何かご存じありませんか!」

ピタツ、とざわめきが収まった。

やがて船員達をかき分けて現れたのは一人の老人。老人といっても堂々とした佇まいをした男だった。

彼こそ【大提督】カイナル・グランライト。

「ワシがカイナルだ。何の用じや？」

「こちらをあなたにと」

カイナルに、キノはボロボロの鞘の剣を渡す。

これが何かはキノも知らない。ヴィンセントに託されただけなのだから。

だから

「馬鹿な、これはっ！」

カイナルが目を見開いて剣を凝視する理由も、彼が驚愕した理由も分からなかった。

老人はキノの肩を掴んで揺さぶり、質問を浴びせる。

「これはどこで、いや誰に渡された!? ワシに届けに来たというのは、頼まれたからではないのか!？」

ガクガク揺さぶられるキノだったが、驚きつつも何とか答える。

ヴィンセントという人物から渡されたのだと。

その人物の名を、カイナルは確かに知っていた。

「どこにいた！」

「霧の向こうまで、船に乗せてもらいました! もうすぐ船体が見えるは、ず……ええ？」

朧気に船の影が見えた霧の向こうから、ゆつくりとそれは姿を現した。

ちぎれて古くなった帆。

一部が欠け、ボロボロになったマスト。

あちこちに穴の空いた甲板。

傷だらけで朽ちかけた船が、そこにいた。

「どういっ……んっ？」

『幻、認識障害、理由ははつきりとはわからないけれど、確かにあんな船ではなかったよね』

船の上にはあれだけ多かった船員が一人も見当たらない。

ただ、それだけの骨が甲板に散らばっている。

そして一人だけ……やはりボロボロになった服を着た骸骨が、立つ



てこちらを見ていた。

「あの服」

『船長さんだね』

「ヴィンセント……！」

朽ちかけた船の方へと駆けよったカイナルは、欄干に手を当てると精一杯の声で叫んだ。

「ヴィンセント！ お前たちのおかげでワシらは無事帰り着いた！

お前の奥さんも息子も無事だった、もうすっかり一人前に育ったぞ！」

その声はきつと届いていた。

骸骨はどこか嬉しそうに……そして、誇らしげにカイナルへと敬礼してみせた。

カイナルも、それに敬礼を返す。

「船が……」

見た目通り、限界だったのだろう。

船が軋んだ音をあげ、まずはマストが折れた。

その衝撃で甲板も船も割れ、ゆっくりと崩れ沈んでいく。

「あれは、嵐の夜だった……」

沈んでいく船を見つめながら、静かにカイナルが言葉を紡ぐ。

「ワシらの船団が、航海中アンデッドのへU B Mへに襲われた。亡霊船を操るヤツは手下を多く従えており、逃げることは不可能じゃった。誰かが足止めにならぬ限り」

あれからもう30年だ、と彼は言う。

「ヴィンセントは帰ってこなかった。何度かその海域を搜索したがついぞ見つけれなかった……！」

キノが持ってきた剣は、別れる間にカイナルがヴィンセントに託したものだ。

必ず返せ、と約束を交わし……長い年月を経て、その約束は守られた。

骸骨も、船と共に沈んでいく。

自分で返しに来んか、馬鹿者が。

そう呟くカイナルとキノは、沈んでいく船をずっと見つめていた。

第19話 かき乱す話① — Who am I? —

カルディナの都市から都市へと移動する道中。

彼らは、それを様々な表情を浮かべて見つめていた。

彼らの視線の先にあるもの……それは、一人の男性の死体。

「だ、誰がこんなことを……」

よく晴れた青い空に、鳥が1羽飛んでいる。

まるで呆然とする彼らとは関係ないと言わんばかりに悠々と飛び続ける下で、彼らは言葉を失っていた。

死体となっている人物は、この場にいる誰もが知っていた。

死んだ男性も彼らと共に移動していた人物の一人。

夜になったのでそれぞれが自分たちの、あるいはクエストの依頼主から貸与された砂漠でも使えるテントを用意して中で休み、見張りだった一人だけが外にいた。

しかし、朝になって男性一人だけがいつまでもテントから出てこなかった。

不思議に思ったので確認してみたところ、死体となって見つかったというわけだ。

モンスターに襲われた、ということはない。

それは彼の胸に突き立てられたナイフが言葉以上にその事実を語っている。

彼は殺された。この中の、誰かに。

「誰だ、誰がセイカを殺した!?!」

叫んだのは商会で重役に就いている商人、マックスフォンド。クエストを発注し「マスター」を雇った依頼人でもある。

取り乱す彼を支えるようにしている少々地味に見える眼鏡の女性がエルホー。気が休まらないように目を泳がせている男性がカマル。そして腰が抜けてあわあわと震えている男性がヒイエ。全員マックスフォンドの部下である。

この四人、そして殺されたマックスフォンドの補佐、セイカがテイアんだ。

彼らとは別に、この場にはマックスフォンドに雇われた「マスター」が四人いる。

「おい、見張りはお前だったろ！ お前まさか……」

「違う、俺じゃないっ！」

【剛剣士】ANZと【翠風術師】めしうま。共に男性の「マスター」であり、ANZは昨晚唯一見張りとしてテントの外にいたためしうまを疑っていた。

それに対し、めしうまはかたくなに違うと言っている。

その顔は必死さが見えるが無理もない。「マスター」同士で相手をデスペナにしても何も問題はないのだが、ティアンを殺害した場合基本的に罪に問われ、場合によっては「指名手配」されてもおかしくはない。

「指名手配」されると、その国でのセーブポイントが使用不可能となる。セーブポイントが使えなければ「マスター」は死亡すると「監獄」と呼ばれる別空間へと送られる。

もしめしうまが無実であるなら、冤罪で指名手配されることになる。たまったものではないだろう。

「……………」

【竜騎兵】キノ。旅人であり、現在はカルディナに滞在している「マスター」。

彼女は何も言わず、考え込むようにして他の者たちを見渡していた。

パン、と手を叩く音がして全員がそちらを見る。

そこにいるのは4人目の「マスター」、【大狩人】エルウエス。

キノ同様女性の「マスター」であり、キャラメイキングの段階で耳をエルフをイメージした尖った耳にしている。

ちなみに、レジエンダリア出身ではあるが数少ない常識人枠と認識されていた。

「收拾がつきませんね……私のエンブリオで解決します」

彼女の紋章が光ると、彼女の肩に現れたのは人の少年の姿をしているものの、耳だけが異様に大きな、そう、ロバのような耳をした人形。

それがエルウエスのエンブリオ、「告口人形 ロバノミミ」。

この能力は……

「私のロバノミミは、看破と鑑定に特化したエンブリオ。《真偽判定》も当然持っています。この意味が分かりますね？」

その言葉を聞いて、全員が理解する。

このデンドロ世界において、証言は証拠と同等の証明力を持つ。なぜなら《真偽判定》という、嘘かどうかを判定するスキルが存在しているからだ。

つまり、この場において、「お前が殺したのか？」と問えば。嘘をついても必ずわかる。

「まずは〈マスター〉に聞きましょう。あなたが殺したの？」

「違う、俺じゃない！」

「俺でもないぞ！ 見張りをしていたが何も気づかなかったのも本当だ！」

ロバノミミはへらへらとした顔をしているものの、何もしやべらな

い。嘘をついていれば主人であるエルウエスに密告するので、これでANZとめしうまは無実だと証明された。

ちなみに、ロバノミミの密告能力は音声として全員に聞こえるものとエルウエスだけに聞こえるようにできるものと変更が可能であるが、今回は全員にそのこと伝えたくて全員がわかるようにしていた。

つづいて、エルウエスはキノへと指を向ける。

「あなたが殺したの？」

「いいえ。ボクではありません」

反応はない。キノもまた無実。

そしてエルウエスは「私はセイカを殺していない」と宣言。ロバノミミは何も言わない。

さらに《真偽判定》を自前で持っているというエルホーが彼女は嘘をついていないと確認。

これで、〈マスター〉全員が無実だと証明された。

つまり、犯人はティアンにいるということになる。

「わ、私ではないぞ!」「僕は殺していませんよおお!」「私も違います」  
ティアンのうち三人が、自分ではないと宣言した。

そして、最後の一人……顔を真っ青にして冷汗を流す、カマルだけが残った。

全員が、カマルへと視線を向けている。疑惑を込めて。

「さあ、最後はあなたです。あなたが殺したのですか?」

「……………ち、ちが、違う……………」

絞るように小さな声だった。

そしてカマルが答えたとたん、それまで何も言わなかったロバノミミがケタケタと笑いながらエルウエスへと顔を向けた。

『この人はウソをついている! この人はウソをついているんだ! 間違いないよ!』

それが何よりの証拠だった。

マックスフォンドの目がつりあがり、怒りと共に怒鳴り声をあげた。

「貴様か、カマル! お前は野心が強い男だったな、セイカを妬んで私の補佐という地位を奪うために殺したのか!」

「う、うううう……………」

言い逃れができるわけがない。

それほどまでに、『真偽判定』の信用度は高い。特にティアンの間では長く使われてきただけになおさらだ。

頭を抱えるようにして唸り声をあげる。カマル。

しかし一方で、エルウエスは不思議そうな顔をしていた。

「しかし気になることがあります。先ほど、めしうまさんの言葉に対しロバノミミは嘘と判断しませんでした。つまり、彼はめしうまさんの見張りをかいくぐってセイカさんを殺したことになりますが……彼にそんなことが可能なのですか?」

「き、聞いてくれ! 俺は嵌められたんだ!」

エルウエスの疑問に答えるように、カマルは叫び声をあげた。

ロバノミミが何も言わないことから、この事件はただの同僚を妬ん

だ殺人というだけでは終わらない裏があることがその場の全員理解できた。

「た、確かに殺したのは俺だ。けど、けど……」  
「けど？」

「お、俺があいつを殺したのは4日前なんだ！ 本当はここに死体なんてあるわけないんだよお！」

「ふざけるな！」

マックスフォンドが叫ぶ。

彼にはカマルの言葉を一蹴するだけの根拠があった。

「おとといも昨日も、セイカは私と共に働いていた！ 昨日に至ってはここにいる全員がその姿を見ているはずだ！ 違うか！」

「それはヤツがアリバイを作ってくれてるって言ったから、てつきりその関係だと思っただよ……。ここで死体を出して俺が犯人だってわかる状況を作る予定じゃなかったんだ！ 俺はヤツに嵌められたんだよ！」

彼が殺人を犯したのは紛れもない事実。故に彼が嵌められたと喚こうが彼が許されるわけもない。

マックスフォンドは言い逃れしようとでたらめを言うな、と怒る。

だが、怒りに燃えるマックスフォンドは、二つのことを見逃していた。

「ちよつといいですか」

それに気がついていたのが、キノだ。

キノはエルウエスの方を指さすと、静かに言った。

「ロバノミミが黙ったままです。つまり、彼は嘘をついていません」

あ、と漏れた声は誰のものだったか。

指摘を受けマックスフォンドの頭も冷える。

そしてもう一つ、キノが気づいたのは……

「そして。それはつまり、何者かがセイカさんのふりをしてボク達の中に潜り込んでいた、ということですよ」

全員がお互いを見渡す。

この中にもしかしたらまだ侵入者がいるのかもしれない。

ANZがカマルの首元を掴むと、揺さぶって怒鳴りつけた。

「誰だ、お前に協力したふりをしてお前をはめたってのは何者なんだ！」

「あいつは、あいつは……〈マスター〉で、名前は——」

下手人の名を告げた直後。

カマルの体が震え出す。目は焦点が合わなくなり、何やら恐ろしいものを見たかのように暴れ出した。

咄嗟に看破をしたキノには、カマルが【混乱】状態になっていたことがわかった。

「ひゃあああああ！ ひいあああああ」

「おい馬鹿、そっちは……！」

テントをはっていた安全な地帯から、カマルは狂乱したまま砂漠の中でもモンスターの徘徊地域に走って行く。

次の瞬間、彼は砂の中から飛び出したモンスターに襲われ、死んだ。

「……………」

全員何も言わない。

彼らはこれからの不安と、最後にカマルが言い残した名前を頭に浮かべていた。

指名手配された悪名高い〈マスター〉の一人。

「殺したはずなのに監獄に行っていない」と噂になっており、エンブリオについても不明。

罪状は……数多の殺人”教唆”、及び共犯。

自分では手を下さず、ティアンや〈マスター〉を騙し、誘導し、欺く人物。

その名は……

（うん、まずは上々。【混乱】かけたら自分から死んだのは予定外だったけどまあ問題ないね！）



その人物は、顔には出さずに内心で笑顔を浮かべていた。

(ティアンに関しては直接手は出さない。目的の人物も今回集まったメンバーの中にはいるし。うん、悪くない!)

次はどうしようかなと、頭の中で悪辣な計画を組み立てていく。

(それじゃあ続きを進めよう。僕はただかき乱すだけだから、皆頑張ってね!)

翌日、ログを確認した結果見張りをしていたはずのエルウエスがデスペナルティになったことが判明し、残された7人は疑心暗鬼にとられていく。

いや、訂正しよう。

(「マスター」だから、まあたまには手を下しても罪じゃないよね—!

より謎が深まるよう真偽判定もちを減らしてあげたんだから、僕って優しいよねえ……)

疑心暗鬼にとられていく5人を見ながら、その人物は心の中で笑顔を作る。

6人のうち誰かを演じるその人物の名は、ノーフェイス。

## 第20話 かき乱す話②

エルウエスがデスペナルティとなって姿を消したことにより、多くの者がパニックに陥っていた。

「なんだよ、どうなってんだよお!？」

「くそっ、お前か? お前か!？」

「……ダメだ、みんな混乱してしまってる」

エルウエスがデスペナルティになった。これが意味するものは大きい。

彼女はソロでもモンスターくらいは対処できる、何よりモンスターが襲ってきたのなら他の者に危機を伝えなくてはだ。

彼女のエンブリオ、ロバノミミは喋ることができる、いざというときは警報として機能したはずだった。

だからこそ彼女が見張りに名乗りでたとき、誰も反対はしなかった。

なのに、その彼女が誰に気づかれることもなく死んでしまった。

ロバノミミの欠点を一つ挙げるなら……それは、エルウエスが「正常にロバノミミの言葉を聞ける状態」でなければ機能しないということ。

例えば【睡眠】や【気絶】といった状態異常にかかった場合。

そしてもう一つ、エルウエスが死んだことがもたらした混乱がある。

それは……

「ノーフェイスはこの中にいないはずだったろ!? どういうことだよ!」

カマルが死んだあと、念のためエルウエスのロバノミミやエルホーの《真偽判定》を使って、全員に「お前はノーフェイスか?」という質問をして確認した。

結果は、全員が「自分はノーフェイスではない」と否定し、反応はなし。だからこそ残った7人の中にノーフェイスはいないと誰もが安心しきっていた。

それなのにエルウエスがデスペナルティになるというのは、異常事態でしかない。

「くっそ！ 誰も信用できねえ……」

もともと短気なANZは全員を疑い、すでに武器を抜いて疑いの目を向けながら周りを威嚇している。

ティアンたちは戦闘能力など皆無なので、鬼気迫る表情のANZからは距離をとっていた。

特にヒイエは臆病らしくあわあわとうろたえ、あろうことかへマスタ―であるめしうまの後ろに隠れるようにして縮こまっている。

壁にされたためしうまも若干迷惑そうにはいるが、それよりは今の状況への混乱が勝っているらしい。

「どうすればいいのだ……。これでは先へと進もうにも進めんではないか……」

商人らしくマックスフオンドは行程が遅れそうなこと、そしてこれ以上足踏みが進まないことは何の意味もないと頭を抱えている。

これについてはキノも同感だった。先に進むこともできず、かといって互いを信用できない状態でこのままとどまっていられるとも思わなかった。

「キノさん」

そこへ、話しかけてきたのはエルホーだった。

彼女はこの中でも比較的冷静な方で、考えた末にキノと話すことを選んだ。

「なんででしょう？」

「このままでは我々は全滅を待つだけです。しかし、かといって私の《真偽判定》ではどうにもなりません。何かしら対策をうたれてしまっているようですから」

それはその通りだ、とキノは頷く。

しかし、だからこそこの状況を打開する手段が思いつかない。

「《真偽判定》は通用しません。でも、どうしてエルウエスさんが襲われたのでしょうか？」

「それは……昨日見張りで一人だったからでは……？」

「そういうことではありません。なぜ襲われた、正確には……」なぜ事件が起こったのか」です」

エルホーの言う意味がよくわからず、キノは首をかしげる。

そんなキノにわかりやすいよう、エルホーは噛み砕いて説明を始めた。

「最初の、セイカが殺された事件。あれは正確にはノーフェイスがセイカのふりをしており、生きていたように見せていただけです。つまり最初の事件はここで起きたのではない。4日前に起きた事件をここで明らかにしただけなんです」

では、次のエルウエスは？

彼女はエンブリオから見てもまず本物だったのだろう。ログにきちんとエルウエスの名とデスペナルティになったという事実があることからそれはわかる。

セイカのようにもともと死んでいた人物をノーフェイスが演じていたわけではない。それはおそらくノーフェイスが彼女をこの場で殺害したことを意味する。

つまりエルホーが言いたいのは、問題はエルウエスが殺害の相手として選ばれた理由ではないということ。

なぜ、ヘマスターがデスペナルティになるという事態を引き起こしたのか。

ノーフェイスが何を目的としているのかという、その一点に尽きる。

「……ああ、なるほど。わかりました」

得心がいったキノは頷くと、全員に向かって大きな声をあげた。

その声に驚いたのか近くに止まっていた鳥が飛んでいったが、キノは構わずに続ける。

紋章から自信のエンブリオであるヘルメスを出すと、全員に向かって提案する。

「ボクから提案があります！ ボクのこのエンブリオで、今から援軍を呼んできます。人が増えればノーフェイスも何かすることはできないでしょう」

キノのその提案に

「ふぎけるな、お前がノーフェイスで逃げるつもりじゃないのか!？」

「俺はもう……解決するならどうでもいい……」

ANZとめしうまが答え。

「……頼んだほうが、いいのかもしれないな」

「そんな!? 戦力である〈マスター〉が減るのは困ります!」

「私は、異論ありません」

マックスフオンド、ヒイエ、エルホーが答え。

「……なるほど。よくわかりました」

キノはゆつくりと銃を抜き、

「あなたに聞きたいことがあります。ヒイエさん」

ヒイエへとその銃口を向けた。

「な、な」

「あなたが子供のころに親しかった友人の名前を、三人あげてください。そして、その人の出身の国も」

答えようとしたヒイエの口が、固まる。

ヒイエが本物ならば、答えることに何の支障もない。

友人の名前だけなら、リアルの友人の名前を答えれば《真偽判定》をすり抜けられる。

だが……その場合、リアルの国の名前をテイアンが答えなくてはならなくなる。

答えられないヒイエを前に、キノは静かに目を細め、

「あなたがノーフェイスだ」

【ガルカノン】の引き金を引いた。

「まいったなー。どうしてわかったの?」

非戦闘系ティアンとは思えない動きでかわしたヒイエは、どこからともなく仮面を取り出した。

三日月状の目と口があざ笑っているかのようなデザインの仮面。取り出した仮面を手で持ちながら、その人物はキノへと問いかける。

「あなたが何をしたいのか考えたんです。セイカさんの事件でカマルさんから自分の名前と存在をみんなに伝えた。そしてエルウェスさんを襲うことで、現在確かにノーフェイスがこの中に紛れ込んでいるのだということアピールした。その結果どうなるか? ……先ほどのような、疑心暗鬼状態が生まれ……最後の一押しさえあれば、殺し合いに発展する」

だからキノはあえて離脱を提案した。殺し合いをさせることが目的なら、ここで「マスター」が減ることはノーフェイスにとって望まないことだと考えて。

その結果、キノの離脱に反対したのはANZとヒイエの二人。

「あとはかまをかけて炙りだすつもりでいました」

「なるほどねー。なるほどなるほど。『ペンタゴン・キャラバン』の時は【殺人姫】をたきつけるだけでうまくいったんだけどね。全部が全部あの時ほどうまくはいかないか」

大正解だ、とその人物は笑って仮面をつける。

姿や服装はヒイエのままに、顔だけが嗤う仮面となったその人物は両手を広げて宣言した。

「いかにも。僕が、ノーフェイスだ」

ノーフェイスが指を鳴らす。

次の瞬間、ANZが叫び声をあげて剣を振り上げる。

めしうまは詠唱を始めて攻撃呪文を放とうとする。

キノは銃をノーフェイスへ向け……咄嗟に、左へと向けた。

自分へと剣を振り下ろしてきた、ANZへと。

「な、あ」

「え、ちよ、なんでANZがキノを狙う!？」

キノに肩を撃たれるANZ。めしうまは何が起こったのかわからずそのまま呪文をノーフェイスへ撃とうとしたのだが……その呪文は、ANZへと命中した。

近場で大きなダメージを受け、ANZのHPは一気に危険値まで減少する。

「あーははははは！ 僕がただ静観してるだけだと思った？ 勝負つてのはよーいドンで始めるものじゃないんだよ？」

キノが《看破》を使って二人の状態を確認する。二人には状態異常【魅了】がかかっていることがすぐにわかった。

この状態異常は対象の価値観を狂わせ、術者を最上位に置く。もつとわかりやすくいうなら敵を守り、味方を攻撃するようになってしまいう状態異常だ。

【高位催眠術師<sup>ハイ・ヒブノシスト</sup>】のスキルで、2日前から【魅了】を効果とした《範囲催眠術》をかけておいた。エルウエスも【強制睡眠】効果のある《催眠術》をかけたところを襲ったんだよ。時間をかければ、《催眠術》で効果や成功率は上がるからね！」

【催眠術師】というジョブは精神系状態異常に特化したジョブ。しかし催眠術師系統のジョブスキルは「使いにくい」というのが定石だった。

なぜかというと、固有のスキル《催眠術》の内容だ。

《催眠術》はスキルレベルに応じて様々な精神系状態異常をかけられるのだが、スキルの効果や成功率をスキル使用から任意発動までの時間に比例して決定するという性質を持っていた。

つまり、【催眠術師】のジョブスキルはスキルを使用してすぐにはほとんど効果が見込めないのである。

敵を目の前にして効果がすぐに出ないというのは多くのプレイヤーにとっては不満の元だった。

時間をかけて戦うほど強い相手だと、そもそも状態異常への抵抗が強くレジストされることもある。

結論として、「催眠術師」は不人気なジョブとなった。

だが、ノーフェイスにとっては当てはまらない。

ノーフェイスは時間をかけて仕込んだ上で、戦闘になつてはじめてその罠が牙をむく、そのような戦い方を得意としていた。そもそも引つ掻き回すまでに時間をかけるのだから、その時に《催眠術》を開始しておけばいいのだ。

「さあ、みんなで存分に殺しあつて」

パァン！

一発の銃声が、ノーフェイスの胸を貫いた。

今までの余裕が消え、仮面の下で驚きをあらわにしたノーフェイスの視線の先にはキノがいた。

【魅了】の効果など見られず、まっすぐにノーフェイスへと銃口を向けていたキノが。

「なん、で……う？」

「全体にむけて《催眠術》を使ったそうですね。範囲技は……ボクには効かないんですよ」

キノが着るコートは古代伝説級特典武器、「紫苑界套 エリクシア」。

その装備スキルである《忘憂結界》は効果範囲や術者との距離によって受ける攻撃の効果を大幅にレジストする。

範囲型で、しかも使用してすぐには大した効果の出ない《範囲催眠術》は最初から《忘憂結界》によってはじかれてしまっていたのだ。

「くっ……！」

「当たりませんよ。ここであなただは退場してください」

「ちっ、くしょおおお……」

風属性の攻撃魔法をキノへと放つが、キノはたやすくかわすと再び銃を構え、ノーフェイスの頭部を撃ち抜いた。

ノーフェイスの体は光の塵となり、大きく息を吐いたキノの前で消えていった。



(まあ、死んでないんだけどねええええつ!!)

「殺したはずなのに監獄に行っていない」。

ノーフェイスにまつわる逸話の一つにこのようなものがある。

しかし、その真実に関しては実にシンプルなお話。

“ノーフェイスは、死んでいなかった”。ただそれだけの話。

(やっぱり便利だねえ……僕の必殺スキル、《僕は君で君は僕》!!)

## 第21話 かき乱す話③

ノーフェイスのエンブリオの名は、「模倣人形 ドツペルゲンガー」。

通常状態の姿は顔のない木でできた等身大の人形。この人形がスキルによって対象の姿に変化したり表記上だけステータスを偽る。これがドツペルゲンガーの基本的な能力。

対象とそっくりそのままもう一人の分身となる、それがノーフェイスのエンブリオ。

そのエンブリオが第0形態から孵化してノーフェイスの前に現れた時……彼女の胸に渦巻いた感情の奔流は彼女にとって初の経験だった。

その感情をはつきりと理解するより先に、彼女は自身のエンブリオを前にして人生において初めてと言っていいほどに笑い転げた。

彼女の胸に渦巻いたのは納得、愉快、滑稽……

そして——失望だった。

ドツペルゲンガーの必殺スキル、《僕は君で君は僕》。

このスキルはドツペルゲンガーというモチーフに実に沿ったものだった。ドツペルゲンガーとはそもそも“自己像幻視”と呼ばれる現象であり、簡単に言えば「もう一人の自分」である。

この必殺スキルも基本的には同じ。《マスター》であるノーフェイスをそのままドツペルゲンガーに投影するスキルである。対象にできるのはノーフェイスのみ。

ただし、ここで投影されるのは姿だけではない。

ジョブ、スキル、ステータス……全てがノーフェイスと同一になる、だけではなく。ノーフェイスにもドツペルゲンガーが持つ姿変化やステータス偽造のスキルが投影される。

つまり、この必殺スキルはノーフェイスとドツペルゲンガーが持つ全てを共有化するスキルといえる。

そして、ドツペルゲンガーのカテゴリーはTYPE：ルール・ガー  
ディアン。

そう、独立行動が可能なガーディアンの要素を含んでいる。今回  
ノーフェイス本体がセイカの姿をして潜り込んでいた時……ドツペ  
ルゲンガーは最初からヒイエの姿に変化していた。ノーフェイスの  
意思とは独立して、場合によっては“自身がヒイエだと思い込んで  
”、《真偽判定》をも潜り抜ける。

ノーフェイスがセイカの姿から別の姿に変わり、あらかじめ回収し  
ていた死体と入れ替わった後も、ドツペルゲンガーは独立してヒイエ  
の姿をしたまま紛れ込んでいた。

これが今回の事件の裏側であった。

なお、ドツペルゲンガーとノーフェイスはスキルによって意識を交  
代することも可能。

当初ドツペルゲンガーの体はドツペルゲンガーが操作していたの  
だが、キノがヒイエに変化していたことを見抜いた時点でノーフェイ  
スはドツペルゲンガーと意識を交代し、偽りの体を操っていた。

キノが先ほど撃ち抜いたのはヒイエの変化を解いたノーフェイス  
……つまり、ドツペルゲンガーの体。

ノーフェイスが操作していたと言えども、ノーフェイス自身が殺さ  
れたわけではない。これまでノーフェイスが殺されたにもかかわら  
ず監獄に行っていない理由はここにある。

これまで倒されたのは「ノーフェイスの意識をもったドツペルゲン  
ガーの体」。【猫神】トム・キャットが本体を倒されると分身へと意識  
が移るように、ドツペルゲンガーが倒されてもノーフェイスの意識は  
本体へと戻っていた。今回も同じ。

そしてもう一つ、この必殺スキルの大きな特徴は……エンブリオが  
破壊されても、必殺スキルによってノーフェイスへとコピーされた  
ドツペルゲンガーのスキルはログアウトするかデスペナルティにな  
るまで残る半永続性にある。

だから今も……ノーフェイスは、変化した別の姿でキノ達を眺めて  
いた。

(魅了にかかっていないとは痛恨のミスだった……。確認を怠るべきではなかった、油断したね)

キノは現在襲い掛かってくるANZと戦っている。

術者であるノーフェイスは厳密には死亡していないのだから、かけた状態異常も解除されることはない。そもそも、状態異常とは術者が死んでも残るものがほとんどだ。

とはいえ、自由に動けるAGI型のキノと魅了で全力を出せるわけではないANZとではすぐ決着がつくだろうと考えた。

(あ、撃たれた)

そして思った通り、ANZはキノによってデスペナルティとなる。

残るはめしうまだが彼は【翠風術師】。魔法職であるが、遠距離攻撃が可能という点ではキノも同じ。広範囲攻撃がなければ速度重視のキノに懐に入られては終わりであり、そもそもキノは特典武器により広範囲攻撃はほぼ効かないと言っている。相性が明らかに悪かった。

(……………)

失敗だった。

自分の目論見はこんなものではなかった。まだ自分はノーフェイスとしてキノと言葉をほとんど交わせていない。

無駄な喋りに偏りすぎたということだろう。ロールプレイに意識を傾けすぎた。

頭の中に、かつで読んだDIN発行の記事を思い出す。それはDINが様々な「ハマスター」をピックアップし、インタビューを行うコーナーの記事だった。

世界中を旅する「ハマスター」としてインタビューを受けていたのがキノ。

(……………知りたい。なんとしても、知りたいっ……………！)

インタビュー記事を読んだあの時、ノーフェイスの心は決まった。

即座に元々用意を進めていた計画の実行を決断し、その際にキノを巻き込むことを決めた。

今回の一連の事件は、キノを巻き込むために起こされたと言っても過言ではない。

全ては、記事に書かれたあの内容について彼女の言葉を聞くために。

ノーフェイスがデンドロを始めてでも知りたかった「答え」に近づくために。

心をかき乱されたかのようなあの時の衝動が、今のノーフェイスを突き動かしていた。

心の内ですら貫いていたルールプレイが崩れつつあるほどに。

（どうしたものかな……【翠風術師】を使うことも考えていたんだけど、あれじゃダメだ。いつも通り、自分のジョブを使うしかないかな……）

ノーフェイスのメインジョブは《催眠術》を使って見せた【高位催眠術師】……ではない。

かといって超級職をとっているわけでもない。

ノーフェイスのメインジョブはもう一つの上級職である【<sup>ギガ・アクト</sup>大役者】。

ステータス補正はさほどない。メインジョブにしていなければ固有のジョブスキルはまず使えない。ただ、《変声》といった演技に関するスキルを有するほか、役者系統の特徴的なスキルである《役作り》を持つ。

このスキルはサブジョブ、または一定範囲内の人間範疇生物が就いているジョブを一つ対象として発動する。

その効果は「対象のジョブスキルを使うことができる」、というものの。

つまり理論上、《役作り》を使うと条件次第だがどのジョブのスキルでも使用することができる。

ただし、制限はある。例えば、スキルレベルが5になってようやく下級職のジョブスキルを100%の効果で使える。上級職のジョブスキルを使うにはジョブスキルを6以上に、つまりは役者系統上級職の【大役者】に就く必要があった。

またジョブのステータス補正までもがコピーできるわけではないので、他人のジョブを対象とすると相手ほどの効果を見込めないことも多い。

先ほど、ドツペルゲンガーの体でキノと戦った時に風属性の魔法が使えたのも、《役作り》スキルによって【翠風術師】のジョブスキルを使ったからだ。

（忍び寄って【呪術師】のスキルで動きを止めるしかない、ね。幸い、今は戦いに気を取られているだろうから不可能ではない。範囲攻撃が効かないというのなら、それを使わなければいいだけのこと）

ゆつくりとノーフェイスは下りていく。

近付きすぎないように、そして相手の視界に入ることも極力避けながらキノとの距離を詰めていく。

動きを止めて、キノの戦闘能力を封じたら……めしうまを始末して、一対一で問う。

（《役作り》、【呪術師】……！）

距離をある程度詰めたところで、ノーフェイスはスキルを発動。

さらに、【拘束】の状態異常になるスキルを発動させようとして……

「やつと近くまで来ましたね」

「えっ？」

銃声がパンパンと複数鳴る。

“鳥”に化けていたノーフェイスは全身を撃たれ、【出血】などの状態異常を受け倒れる。

戦えないほどのダメージを受けたことで、姿も本来のものに戻っていた。ドツペルゲンガーの体の時つけた仮面の他、シルクハットに燕尾服といった「小説に出てくる怪人のイメージ」の服装をした人物がキノの前で倒れていた。

ノーフェイスは大きく息を吐く。

何が起こったのかはわからないが、自分が完全にキノに敗れたことはよくわかった。自分を待つのはデスペナルティだということも、それが「監獄」に行くことを意味するとも分かっていた。

だからこそ、ここで聞く必要があった。今ここが最後のチャンスだから。

「……ひとつ、聞いていいかなあ……」

「あなたが鳥に扮していると気づいた理由ですか？ それは」

「違う、そんなのどうだっていい」

手に持ったのは、キノのインタビュ어가載ったあの記事。

それを見せると、ノーフェイスは尋ねた。

自分のこれまでを思い返しながら。

せいしゅういん かすみ  
星秋院 霞は名家に生まれ育った。

「星秋院の人間として」「星秋院ならこれくらい当然」などの言葉と共に様々な習い事や教育を受けた。わがままなど一切許されず、幼稚園の頃にはもう、自分の気持ちを押し殺すということを理解し、実践していた。

その結果、霞は名家のお嬢様として親の望んだとおりに育った。暮らしは裕福だったので人によつては羨まれる生活だったということ。は彼女自身理解している。

だが、その暮らしに大きくヒビが入ったのはいつのことだったか。

ある日、「自分の夢」について作文を書くという課題が学校で出たとき、ふと彼女は思った。

思ってしまった。

自分の夢とは何か。

いや、そもそも……

(自分とは誰のことだ？ 私は誰だ？)

これまで周りから望まれた「星秋院霞」であろうとは努力した。

何を思おうとも笑顔の仮面を付け、求められるままに「星秋院霞」を演じてきた。

では……そう演じてきた「私」は誰だ？

求められてきた偶像を除いたとき……「これは自分の意思だ」というものを、彼女は自分の中から見つけることができなかった。

自分の気持ちを押し殺し続けたせいで、自己というものが認識できなくなっていた。

その次は、周りの言葉が恐ろしくきこえてきた。

誰もが「星秋院霞」に話しかける。

しかし、それを自己ではなく演じてきた偶像と認識するようになっていた彼女は、自分に話しかけられていることすら認識できなくなっていた。

アイデンティティの認識障害から、ついには霞は衝動的に錯乱した結果階段で足を踏み外して転落し、入院する事態にまで発展した。

意識を失って目覚めた後、最初に口にしたのが「私は、誰……？」だったことから「記憶喪失か」と騒ぎは余計に大きくなった。

だが、彼女にとってはちようど良かった。

慣れ親しんだ演技で今度は「記憶を失った娘」を演じ続けた。

自分が誰か分からないと思っていた彼女にとっては全く苦ではなく、周りも完全に記憶喪失だと勘違いしてしまっていた。

自分とは誰か。自分とは何か。

それを求めた彼女は病院で知り合った関西弁の女性（院長の娘と聞いている）から勧められ、デンドロを始めた。

「あなただけのオンリーワンを提供します」という言葉に心惹かれ、自分だけの可能性というエンブリオの孵化を心待ちにしていた。

そして生まれたのが……【模倣人形 ドツペルゲンガー】。

彼女は自分のエンブリオを前に

「は、はは」

自分が正真正銘人形のようなものと突きつけられたかのようなそのエンブリオを前に。

誰でもないもう一人の自分というそのモチーフを前に。

「あはははははハハはははははハハははははハハハハ！」

ただただ笑い転げた。



愉快と納得、そして失望を抱えて。

(違う、そうじゃない。私が知りたかったものはそんなことじゃない！)

だが、彼女のパーソナリティから生まれたエンブリオとしてはあまりに納得できてしまった。

彼女が求めていたのは、紛れもなくもう一人の<sup>本</sup>当<sup>の</sup>自分<sup>分</sup>だったのだから。

エンブリオを作り直すことはできない。それはチュートリアルの特典で聞かされている。

ならばここからどうしたものかと考えた彼女は……チュートリアルで言われたことから、一つの結論に至った。

「何をしてもいい」、というのなら……リアルではできなかったことをしよう。

これまで名家の裏で見てきた人々の感情。陰口、悪意……それらは誰もが抱えている。

それを少し後押ししたらどうなるのかという疑問のもと、ノーフェイスはこれがエンブリオをうまく活かそうだと判断し、人の中に潜り込むためのジョブを模索し始める。

彼女が選んだ選択。それは「現実でできないのなら、この世界で犯罪を犯す」こと。

現実では一番できないことを、彼女は選択した。その先に「自分」を見つける何かがあることを願って。

そして、彼女はレベルを上げ殺人教唆を繰り返し、指名手配までされた頃。

彼女はその記事を読んだのだ。

「その記事には、書いてあった。君が自分を『籠の中だったが外へはばいた鳥』に例えていたことが」

傷ついた体で、ノーフェイスは何度も何度も繰り返し読んだその言

葉を口にした。

籠の中……それはまさに、求められたものを演じてきただけの自分と同じだ。

だが、目の前の彼女はそこから抜け出すことができたのだと直感した。

だからこそ、ノーフェイスはどうしても知りたかった。聞きたかった。

『あなたは どうして旅をしているのですか？』

『以前、リアルでは両親が厳しくて旅行になどは連れて行ってもらえませんでした。だから、ボクはどうしても見たことのない場所に行く旅に憧れていたんです。デンドロを始めたのも、このデンドロの世界で旅をするためでしたからね。今のボクは、籠の中にいたが外へはばいたいた鳥、のようなものだと思います』

あのインタビュー記事で、キノは「星秋院霞」に似た背景を持っていたことが察せられた。

しかし、彼女は自分とは明らかに違っていた。

彼女は「旅に憧れる」という明確な「自分」を持っていた。そして、自分の手でそれを成し遂げた。

「教えて欲しい……」

それがとても、羨ましかった……。

「どうすれば、私は、あなたのように夢を持った「自分」を見つけることができるのですか……？」

その言葉に、キノは何も表情を変えなかった。

ただ、静かにノーフェイスを見つめていた。

「わたし……いや。僕は、君になりたかった」

一人称や口調が本来の、リアルでのものに戻っていることに気づき、ノーフェイスは口調をロールプレイのそれに戻す。

そんなノーフェイスを前にして、キノは考え込んだ末にゆっくりと口を開いた。

「あなたはボクにはなれませんし……なる必要もありません。ボクはただ、子供のころに抱いた憧れをずっと抱え込んでいただけです」

それでは、もう自分に夢を持つことはできないのだろうか。

子供の頃から自分の思いを押し殺してきたノーフェイスは、もう自分には無理なのだろうかと思いい悩む。

だが、

「でも、夢を持ちたいというのなら」

その言葉に、ゆっくりと顔をあげた。

「まずは自分に正直になつてはどうですか？ 自分の気持ちにふたをするのではなく、日々の中で何かに興味を持った時に、それと正面から向き合つてはどうでしょう。選択する権利はいつだってあなたにあります。それが最初の一步だとボクは思います」

自分の心の中を見抜かれたようなその言葉は、すんと彼女の胸に落ちた。

「まあ、今のあなたみたいに犯罪をやりたいとかいうのは、おすすめできませんけど」

続く彼女の言葉にはさすがに苦笑した。

現実ではできないからと自分探しのために始めたことだ。さすがに現実で犯罪を犯すつもりはさらさらない。

それくらいは分別は彼女にもあった。

だからまずは、現実でもう一度「星秋院霞」に戻ろう。

そして、自分の気持ちを少しだけでも、「星秋院霞」として持つて生きていこう。

「……ありがとう」

ノーフェイスは《瞬間装着》を発動し、一つのアクセサリーを外した。

それはずっとつけていた仮面。

ヒイエの姿の時も本来の姿でもずっとつけていた仮面を、ノーフェイスは外して見せた。

「……………」

キノはその顔に絶句する。

ニヤリと笑うその顔は、キノの顔だった。

(まずはこれが最初。最後はノーフェイスという悪人らしく、ふてぶてしく退場させてもらいましょう。これくらい不気味な方がそれっぽいと思ったんですけど、別にかまいませんよね?)

まだ必殺スキルの効果で自分に残っているドツペルゲンガーのスキルを使ったノーフェイスは最後のいたずらとばかりに、仮面をつけているうちに顔だけをキノのものへと変化させていた。

見せられた顔に、キノは、驚きを顔に出した後、無表情になって銃口をノーフェイスの額に向けた。

ノーフェイスは最後に、キノへとほほ笑む。

「バイバイキノさん。また遊ぼうね」

一発の銃声が鳴り、ノーフェイスはデスペナルティとなった。

数日後・カルディナのある都市。

女性は通信用のアイテムを起動させた。

『エルホーです。ノーフェイスは死亡、監獄に行ったようです』

『そうか……戦闘力が高いわけじゃなかったがその演技力や潜入能力は惜しかった。指名手配という条件の一つはクリアしていたし、へ超級に進化したら即スカウトするつもりだったんだが……残念だ』

『ですが、最後に彼女は「何か」を得たようですよ？ キノさんのおかげで』

『キノ、か。あいつも面白い奴だったからな……。ノーフェイスとい  
いキノといい、協力者としてまずは声くらいはかけておくべきだった  
な』

『ご主人様はうつかりですからね！』

『黙つとけマキナ。とにかく、報告ご苦労だった。また連絡する』

『では失礼します、ラスカルさん』

## 第22話 歌う話 — Her flower —

キノは皇都ヴァンデルヘイムの街並みを歩いていた。

現在はエンブリオであるヘルメスを出してはいない。町の中というだけではなく、今日はお祭りがあるらしく人通りが多いせいだ。

無論、出して手で押して歩いてもいいのだが……やはり人の邪魔になってもいけないなど自粛していた。

それにしても、本当ににぎやかだ。

食糧難が徐々に問題視されており、ドライブ皇国は一部では滅亡の危機などと噂されているが、こうして歩いているとそのようなことは感じられない。

皇帝もまた国庫を開いて食糧支援をしているらしく、そのせいもあるのだろう。

「……お腹、すいてきたなあ」

食料のことを考えているとおなかですいてきた。

〈マスター〉であるキノにとつてこの空腹感はいくまで疑似的なものであり、アラートが鳴っていない以上リアルな体において空腹状態はない。

とはいえ、空腹状態のままだと悪影響が出る。幸い、屋台などが多く出ているのでキノはそちらの方へと歩いていった。

数分後。

キノの手には串に刺さった香ばしい肉や鉄板焼きの入った簡易食器が握られていた。

歩きながらパクパクと食べていく。最近【銃士】のレベル上げも兼ねて狩りをしていたため、屋台で外食する程度なら十分余裕があった。

お肉を食べながら歩いている途中で、何かがキノの体に当たった。

「にゃーん。にゃーん……」

「迷子の……子猫？」

それは悲しそうな鳴き声をあげる猫……ケットシーだった。モンスターとも思えないし、レジエンダリアにいるような獣人がドライブ

にいるのも珍しすぎる。

キノはガードナー系統のエンブリオと推察し、とりあえず声をかけてみることにした。

「迷子ですか？」

コクン。

喋れないらしく、声は上げずにケットシーは上目づかいでキノを見る。

その目はうるうるとうるんでおり、庇護欲すら感じさせた。

「あなたはエンブリオですか？」

コクン。

「マスターは近くにいますか？」

フルフル。

「どこにいるかはわかりますか？」

フルフル。

「なるほど。はぐれてしまったので探している途中なのですね」

コクン。

首を縦に振るか横に振るかでどうにか意思疎通をしたキノ。

しかし、YESNOだけではケットシーのマスターについて詳細な情報を得ることができない。

どうしたものかと首をひねっていると……キノはケットシーが手にしっかりと握っているものに気が付いた。

それはフルートと呼ばれる管楽器。

「……もしかして、あなたのマスターは【音楽家】とかの音楽関係だったりしますか？」

ひよつとしたらと思っただけ聞いてみると、案の定ケットシーはコクンと首を縦に振る。

確かここから少し歩いたところの広場で【音楽家】などが出し物ができるようになっていたはず。もしかしたらそこにいるかもしれないと思ったキノは、そのことを伝えて案内してあげることにした。

「おお、それはすまない。助かったよ」

「いえいえ」

その後、無事にケットシーは老人の〈マスター〉のもとへと送り届けることができた。

老人は穏やかな顔で泣くケットシーをなでるとキノにも頭を下げ  
る。

「私はベルドルベル。まだまだこの世界では未熟な【指揮者】だよ」

「ボクはキノです。ボクもまだ【銃士】のレベル上げ中の未熟者です」  
【指揮者】とは、【音楽家】から派生したジョブであり、パーティーマ  
ンバーの音楽系スキルを強化することに特化したジョブだ。音楽系  
スキルの大半が支援系であるために、「支援職を支援するジョブ」と言  
える。

だが、このジョブを彼が選んだ理由をキノはなんとなく察してい  
た。

それは彼のエンブリオ。キノが案内したケットシーの他にも数体  
のガードナーがいるらしい。小型で楽器もそれに見合ったサイズで  
あるため見方によってはおもちゃの楽器にも見えるかもしれない。

だが、それらのエンブリオが音楽系スキルを持つていることは想像  
にかたくなかった。

「やれやれ、なんとか演奏前に間に合ったか」

「やはり、この広場で演奏を？」

「ああ。ジョブクエストを受けているからジョブのレベル上げも兼ね  
ているがね。それ以上に、私は音楽を奏でる機会は逃したくないのだ  
よ」

ひよっとしてもリアルでも音楽関係の仕事をしているのかもしれない  
な、と感じるほどに彼からは音楽への熱意が感じられた。

しかし……それだけではない、というようにも感じられた。

それはまるで、キノのチュートリアルを担当した管理AIと話した  
時のように。

だから、まずは彼の演奏を聴くことにして……驚愕した。

「すごい……」



エンブリオがまだ育ち切っていない状態で、ベルドルベル自身もまだ下級職。

にもかかわらず、彼の演奏を通りかかる者が足を止めては聞き惚れるほどにその演奏は素晴らしいものだった。

これで彼が上級職、いや超級職まで至つたらどのような演奏になるのか。彼のエンブリオが育つた時、その楽器の音色はどこまで素晴らしいものへと変わるのか。

彼の演奏が終わった後、キノは立ち上がって拍手をした。

「素晴らしいものでした」

「そう言ってくれると嬉しいよ」

彼の演奏が終わった後、キノはベルドルベルとならんで広場にある椅子に座っていた。

先ほどベルドルベルが上がった特設ステージの前に並べられた座席であり、他にも多くのマスターやティアンが座っている。

「次はアカペラ大会、みたいですね」

「ふむ……飛び入り歓迎、とあるな。君も出てきてはどうかね。私の演奏を聞かせたんだ、次は君の歌をこちらが聞いてみたいね」

「……そう、ですね。下手でも笑わないでくださいよ」

ベルドルベルの後押しもあって、キノは若干恥ずかしそうな顔をして参加受付のカウンターへと向かい、飛び入り参加の手続きをする。

彼女が舞台裏へ移動した後もベルドルベルは一人舞台を眺めていた。彼は作曲家であるが、その関係でプロの歌手の歌を何度も聞いている。それと比べたら技術的に圧倒的な差があるのがこのステージだ。

しかし、彼にとつてそれは問題ではなかった。そんなこと関係ないと言わんばかりに、舞台上上がった彼らは歌っていたのだから。何人かの歌が終わった後、ついに緊張した顔でキノが舞台上上がった。

そして、歌い出す。

「――」

それは、日本ではよく知られた春の代名詞とも言える花をテーマにした歌だった。ベルドルベルも以前日本に行ったことがあり、木に咲いたその花を見たことがある。

キノがその歌を選んだのは、大会規定でそう長い歌は歌えないのでサビの部分で十分印象を与えられると思ったこと、そして自分の名前にもなった花の歌でもあったことからよく知っていた、という理由だった。

「なん、とも……」

歌いきつて晴れやかな顔で頭を下げるキノ。

彼女の礼を受け、ベルドルベルは他の観衆同様に大きな拍手を送っていた。

彼女の歌は、正直予想以上だった。もちろんプロと比べたら粗削りな面が見られることは否めない。しかし、それ以上に彼女の歌は十分上手だと思えるほどだった。彼女が「歌手」のジョブをとっているという話は聞いていないから、きつとりアルの彼女もまた上手なのだろう。

それに、何より。

彼女の歌は、彼にとって――

「とても素晴らしかったよ」

「ありがとうございます。さすがに緊張しました……」

戻ってきたキノをベルドルベルは一切の世辞抜きで賞賛する。

彼女の歌は、ベルドルベルに一つの情景を思わせた。去っていく英雄に花を贈る一人の少女の姿を。

これは彼にとって大きな収穫であった。英雄の生涯を描く歌劇を作りたいと願う彼にとって、大きな一歩だ。

だからだろう。

「唐突だが……私にはな、デンドロを始めた理由がある」

「何でしょう」

ベルドルベルはこの世界ではまだ誰にも語っていないなかった夢を、キ

ノに語った。

「私はな、英雄が見たいのだ」

「英雄……ですか？」

「ああ。本物の英雄の姿を、私はこの目に焼き付けたいのだ。私の作品を完成させるためには、本物の英雄というものが分からなければならぬ。私はそう考えて、この世界に来たのだよ」

「そう、ですか……ボクは、世界を旅するために、旅ができるこの世界を訪れました。たくさんの方の光景を眺めて、たくさんの方に出会うために」

旅の中で、いつか、あなたの求めるものを目にするところがあるかもしれないですねとキノは空を見上げる。

それにつられるように、ベルドルベルも空を見た。

「旅か……それもいいのかもしねん」

キノとベルドルベルがその後、皇国で再び巡り合うことはなかった。

それでも、二人はこの出会いを忘れなかった。

「久しぶり、ですね」

「おお、なんとも久しい顔だ」

『そういえば知り合いだったっけ？』

皇国で巡り合うことはなかった。

しかし……アルター王国のカルチエラタン伯爵領にて、二人は再会した。

キノがカルチエラタン伯爵夫人とお茶会をした時、聞き覚えのある音楽が聞こえていた。なので、もしかしたら……と探していたのだ。

「随分と旅を重ねたようだな。1, 2……3つも特典武器を持っているとは。羨ましいものだな」

「そういうベルドルベルさんこそ、超級職に就いているじゃないですか。ボクはいまだに上級職止まりですから」

「それで特典武器が3つというのもすさまじいのだがな……」

ベルドルベルは感慨深そうに息を吐くと、そこで少し食事でもどうか、と近くの喫茶店へとキノを誘う。

キノはヘルメスを押してテラス席へと移動すると、スタンドを立ててヘルメスを固定し、椅子に座る。

「先日はギデオンにもいたそうですね。久しぶりにフランクリンさんと会いましたよ」

「ああ、彼の計画に私も参加することになってな。もつとも、一番大事な場面を見逃してしまったのが悔やまれてならん」

英雄のごとく、ボロボロになりながらも右腕を掲げた【聖騎士】の姿を、キノも闘技場のモニターから見ていた。

なるほど、あの時すでにベルドルベルがデスペナルティになっていたのなら、彼にとっては非常に悔しいだろう。

しかし、ベルドルベルはそこまで気にしていないようにも感じられた。

「その割には、穏やかな顔をしていますね」

「ああ。最近このあたりで起こった事件は知っているだろう？」

「ええ」

皇国の〈超級〉である【魔將軍】が悪魔を大量に召喚し街を襲った事件のことは聞いている。

この事件の際に、【魔將軍】は〈超級〉どころか下級エンブリオのヘマスターに敗れ、しかも指名手配までされている。【魔將軍】が敗れる動画はキノも見っていた。

「その時にな、私は求めていた者の片鱗を見たのだよ。あの背中が、私はずっと求めていた英雄の背中を彷彿とさせたのだ」

「そう、ですか」

「君もこの世界を旅して、様々なものを見てきたのだろう。君の言葉を思い出して、私も皇国を離れ、旅の手始めとしてこの国に来たのだが……来てよかった」

それぞれコーヒー一杯しか頼んでいないため、いつのまにか二人のカップは空になっている。

「さて。これから私は演奏の予定があるのだが……よければ君も来ないか?」

「喜んで。久々にあなたの演奏を他の人と一緒に聞かせてもらいます」

「いやいや、何を言っているのかね」

ここでベルドルベルはいたずらっ子のような顔で笑った。

「君はこちら側だよ。あの日君が歌った歌を調べて、伴奏を私なりにアレンジしたスコアがある。以前とはブレーメンの演奏もより優美なものになった。ぜひ君にも“歌い手”として参加してほしい」

「えええ!?!」

『いいじゃん! 頑張れキノー』

「ヘルメスまで!?!」

その日、カルチエラタン伯爵領には壮大なオーケストラのような演奏と一緒に、一人の少女の歌声が流れた。

少女の歌声を聞きながら老指揮者は、心の中で決意していた。

自分が描こうと願う歌劇の中に、一人の少女の歌を入れよう。

去っていく英雄へ、花を贈る少女の歌を。

## 第23話 知らなかった話 — Judgment

キノが乗ったヘルメスは最後に大きくエンジン音を鳴らして止まった。

キノが訪れたのはアルター王国にある大きな教会。

今回、キノが受けたクエストの依頼人がこの教会に勤めているとのことで待ち合わせ場所がここに指定されたのだ。

キノが教会に来て、一番に思ったことは……

「なんか、思ったよりも……」

『騒がしい？ それとも賑やか？』

「どっちだろう。どっちもかな」

教会と聞くと厳かで静かなイメージがあっただが……いざ着いてみると、子供たちの声が聞こえてくる。それも、一人二人の声ではない。

どうやら裏手の方から聞こえてくるようだとはとまずキノは声が聞こえてくる裏へと足を運んだ。

「あ、だれか来たー！」

「うーん、このひとおとこ？ おんな？」

「うわあ……」

そこにいたのはたくさんの子供たち。

遊具などがあつたりと遊ぶためにそれなりの広さのスペースが作られている。

彼らは見知らぬキノの姿を見つけたとたん、幼き所以の好奇心により一気に集まってきたのだから子供になれていないキノとしては大勢が自分へと向かってくるその光景に硬直してしまう。

「ねーねー！ なまえなんていうのー？」

「あそびにきたの？」

「うわーじゅう持つてる！ かけー！」

「あわわわわ」

マシンガンのごとくキノへと向けられる言葉に、仕方ないことではあるがキノは対応しきれずに目を回すばかり。

これが子供ではない普通のヘマスターやモンスターなら銃を抜いて散らすという選択肢もあるのだが、さすがに子供相手にそれはどうかとキノは何もできない。

「こらー！ お客さんが困ってるでしょ。みんな一旦離れなさい」

「「はーい」」

そこへ現れたキノにとつての救世主。

一人の女性の言葉で子供たちはキノから離れ、再びそれぞれの遊びに戻っていく。

散っていった子供たちを前に、キノはふーっと大きな息を吐いて女性へと礼を述べた。

「ありがとうございます。その、子供には慣れていないもので……」  
「たくさん来ると慣れてない人にはきついでしょうね。こちらこそ、子供たちが失礼しました」

頭を下げた女性は20代後半くらいで、シスター服を着た女性。

優しい笑顔を浮かべた彼女こそ、今回依頼人としてクエストを発行了した張本人だ。

エルザと名乗った彼女は、皆ここで遊んでいてねと声をかけるとキノを建物の中へと案内した。

「詳しい話中です。どうぞキノさん」

「では、失礼します」

案内されたのは応接室のように整えられた、だが応接室と呼ぶにはいささか狭い小さな部屋。

窓からは子供たちが遊ぶスペースがよく見える。

そんな部屋の中でキノとエルザは向かい合って座る。

「では、早速詳しい話を聞かせてくれますか」

「ええ……」

エルザが先ほどとはまるで違う、暗い表情で話を始める。

今回のエルザの依頼を、一言で言うならば「調査」。

つい最近、この教会の子供たちが二人、姿を消すという事件があつ

た。

彼女もはじめ、官憲の力も借りて捜索を行ったものの、ついぞ二人は見つからなかった。

もちろん、キノは人捜しに向いたエンブリオを持ったわけでもなく、官憲以上の捜査能力を持つわけでもない。

キノが今回依頼されたのは、盗賊団や人さらいといった、犯罪組織が関わってないかの調査。ティアンである彼女には、多少官憲にツテはあっても、それ以上のことが調べられない。また、〈マスター〉ならではの情報網、キノの旅人としての情報網で何か手がかりを得られないか、ということだった。

「わかりました。できる限り調べてみますが、それでも……」  
「はい。空振りになってしまうことも覚悟の上です。しかし、それでも……諦めきれないのです」

わらをもつかむ心持ちなのだろう。

面倒を見ていた子供が姿を消したというのは、それだけ彼女にとっては重荷なのだろう。

そこへ、一人の男が入ってきた。

「エルザさん、頼まれていたものを持ってきたよ」

「ああ、リオルさん、すみません」

入ってきた男は司祭服を着た若い男で、おとなしそうな容貌をしていた。

彼が入ってきたのを見ると、エルザは腰を浮かせ彼をキノに紹介する。

「彼はリオルさん。私がここで働き始めてすぐの頃に新しく来られた【司祭】の方で、様々な雑務を手伝ってくださいりとても助かってます」

「いやいや、僕はエルザさんの役に立ちたいだけだから」

「彼は、前の仕事からこの仕事に移って不慣れだった私に……いつも気を使ってくれているの」

そして、今度はリオルのほうへキノのことが紹介され、彼女は軽く頭を下げた。



キノが子供が消えた件での依頼で来たということを知り、リオルは難しそうな顔を浮かべて口を開く。

「なるほど。官憲の方が捜査してくれた後ではありますが……ヘマスタ―の方ならまた違った捜査ができるかもしれません。どうかエルザさんの力になってください」

「ええ。できる限りのことはします」

依頼を受けてから三日。

難しい顔をして建物から出てきたキノを、のんきな声でヘルメスが迎える。

その気になればエンブリオである以上ヘルメスを紋章に入れることもできるが、割とキノは外に停めておくだけにすることも多い。

「むう……」

『どうだった？』

「一応、犯罪関係でも情報がいくつかでてきた。あまりいい情報でもなかったけど」

直接的な子供たちの失踪についての情報は集まっていない。

もちろん、キノとしても〈D I N〉……D e n d r o g r a m ・ I n f o r m a t i o n ・ N e t w o r k、デンドロにおける国境なき情報屋集団の支部に出入りして拉致や誘拐についての情報を優先して探してみた。

ただ、さすが情報屋。犯罪者や山賊などの情報も集まってはおり、その中には拉致や誘拐を主にしていた犯罪者もいる。

例えば、カルディナに連なる奴隷商人などだ。

そして、そんな情報の中でも、特に際立っていたのが……

「……改造人源<sup>エラーソース</sup>」か

“改造人源”の異名を持つ有名な犯罪者のマスターであり〈超級〉、

【魂売】ラ・クリマ。

姿もはつきりしておらず、自らの奴隷を通して商売を行っているこ

の人物だが、その仲介人とされている奴隷が目撃されているらしい。しかし、その人物はあくまで仲介人。

ラ・クリマには誘拐の罪状もあるが、それにはやはり拉致に適した奴隷を使うと聞く。ラ・クリマは奴隷を改造する力があるのだから。だが仲介人は拉致を行うわけでもなく、あくまで商売を行うはずだ。

もちろん、実はその仲介人にも改造が施されている可能性はある。

「でも、子供二人を狙うのは不自然だな……」

ラ・クリマは戦闘奴隷をメインに販売している。

上級職どころかジョブにすらついていないような子供をわざわざ攫うだろうか？

むしろ、拉致ではなくまるで売買を行ったと考える方が自然では……

「だめだ、犯罪者プレイヤーの思考なんて完全にはわからない」

自分たちとは大きく思考が違うであろうラ・クリマの行動を思考から追うのはよほどの推理力でもない限りまず不可能だ。

それよりも、とキノは手に持っていた紙の束をめくる。

紙に書かれた文面を眺める目が、僅かに細くなる。

「こっちの情報の方が……ボクにとってはとても気になるんだ」

『え、なにになに？』

念のため、ということとDIN所属の調査員に調べてもらった内容。

それは……

「あれ？ エルザさんは？」

「エルザさんは用事があって外出するとのこと。すぐに戻るから待っててほしい、と聞いています」

「そうかい……それじゃ、待たせてもらおうかな」

教会の部屋に入ったリオルを迎えたのは、旅人のキノ。

最近知り合ったばかりの者に留守を任せていることに僅かに眉を寄せるも、それでも誰も残さないほうが不安だっただけなのだろうなと納得してそのまま椅子に腰かける。

「それで、調査の方はどうですか？」

「あいにくと……これといった情報は出てきません。依頼された身で申し訳ないのですが」

「いえ、仕方ないでしょう。官憲が調べた後なんだから」

申し訳なさそうなキノの声に対し、リオルはゆっくりと首を振る。

仕方ないとリオルは言うが、一方でキノはエルザの名前を出す。彼女にとってはやはりつらいだろうと。

「エルザさんにとつて、子供のことはとても心配のほうです。彼女はあなたのように、仕方ないと割り切るのは難しいでしょう。だからこそ、ボクに依頼を出したのでしょうか」

「……そう、だね。僕としては、正直これ以上エルザさんには心労を重ねてほしくはない。あの人は優しすぎる、これ以上ここで子供の世話をしているも彼女の心が疲れるだけだ……」

リオルは顔を暗くする。

「その手助けができるなら僕は何だってやる。彼女を養うことも、できないわけじゃない」

「しかし、子供たちを世話している彼女は、きつと責任を感じています。そう簡単に投げ出すとも思えませんよ？ それこそ、例の拉致事件も含め」

「そうだね。でも、僕はその件については何もできない。何も知らない以上、できることもない」

ガチャリ。

そこへ、ドアが開く音と共にエルザが入って来た。

手にはポットとコップが乗せられたお盆を持っており、穏やかな笑みを浮かべて二人のもとへと歩いてきた。

「ごめんなさいね。二人とも待たせてしまつて」

「いえいえ、エルザさんが気にすることはないですよ」

キノは黙って頭をさげ、リオルは若干照れた顔で手を振る。  
エルザはニコリとだけ微笑んで答え、コップにお茶を注いでリオルの前に置く。

同様にキノの前にもコップを置いて、お茶を注ぐ。そのままエルザはゆつくりと座った。

「それで……キノさん。調査はどうでしたか？」

「ええ……結論から言うと、子供たちに直接つながるような情報はありませんでした」

そうですか、とエルザが顔を伏せる。

そんな彼女の横顔を見ながら、キノはただ……と静かに続けた。

「失礼ながら、皆さんについても一応調査させてもらいました。その結果……」

ゆつくりと取り出した紙の束。

そこには……キノの前で顔を青くする、リオルについての調査報告が書かれていた。

彼の変化に気づきながらも、キノはゆつくりとエルザに調べて得た情報を伝えた。

「リオルさん……つい最近。そう、子供たちの失踪があった頃に、昔の借金の返済をされたそうですね。金回りが急によくになっている、と。宝石のついた指輪を購入したところも目撃されていますよ」

「な、な、な……」

「あなたが事件当日、子供たちと歩いているのを目撃した者もいますよ」

ガタン！ と音をたて椅子を弾き飛ばすように立ち上がったリオル。

その目には戸惑いと焦りが浮かんでいた。

「いい加減な嘘をつくな！ 僕は子供たちとその日歩いていない！」  
「ではなぜ、この目撃証言が？」

「そんなのただの偽物の話じゃないか！ どうせ間違いか作り話、いや、君がでっちあげてるんじゃないのか!？」

「ではあなたは、子供たちの失踪には無関係なんですか？」

「ああ、そうだ！」  
震える声で、彼は叫んだ。

「嘘つき」

小さな。

小さな、声で、彼女はそう呟いた。

それはキノではない。もちろん、リオルでもない。

「……知らなかったんです。私は、あなたが私と同じように子供たちのことを大事にしてくれていると思ってた。私が子供たちの面倒を見ることに異論があるなんて思ってた、なかったんです……」

「なに、を」

突然喋り出したエルザに、リオルは動揺した顔を向ける。

彼女は聞いていたのだ。この部屋に入る前に、彼がキノに話していた全てを。

リオルはエルザに対し、キノが言うことは全て間違いだ、自分は無実だと訴え続ける。

それが、何をもたらすのかも知らずに。

「エルザさんについても調べさせてもらいました。この教会の仕事につくまでは……官憲の仕事がされていたそうですね」

「……えっ？」

呆然とした顔をするリオルとは対照的に、エルザは静かに頷いた。彼女はかつて官憲として働いていた。だから、官憲にツテがあつ

た。

「知らなかったでしょう？ あなたがこの教会に来たのは、エルザさんが教会で働き始めた後のことだった。だから、知らなかった」

「……あ……あ……」

「そして、官憲の仕事上……大抵の人が、あるスキルを持っている。取り調べのための、『真偽判定』を」

「……………」

リオルがこれまで以上に焦った顔でエルザを見る。彼を見るエルザの目はとても静かで……様々な感情が渦巻いているかのようだった。

それはまるで、怒りと悲しみがなまぜになったかのような。

無理もない。

信じていた彼の言葉は……自分が無実だという反論は、全て“嘘”だったのだから。

「確かに子供たちと歩いていた、という目撃証言は嘘です。しかしあなたが嘘をついたことは、この場の全員が理解しています。さしずめ、情報だけを流して、あるいは子供たちを言葉で誘導して拉致させたのでしょうか。そして見返りを得たのでしょうか？」

反論ができない。

「さて、エルザさん。依頼された内容とは少し違います……これで拉致事件についての依頼は完了、ということでしょうか？ 彼を官憲のところへ連れて行って……」

「……ええ。でも、官憲のところ连接到行く必要はありません」

「えっ？」

その時。

「あ……あ……」

リオルが突然苦しみだした。

何が起こったかわからないキノに対し、エルザは静かに答えを告げた。

「キノさんは知らなかったでしょうが……彼のコップには毒を入れていました。飲んでから数分後に【猛毒】が発生する強力な毒を」

「ひっ……！」

扉ごしに聞いた、彼の「何も知らない」という言葉。

それが嘘だとわかったとき、薄々リオルを疑っていた彼女はコップに毒を入れることを決意していた。

その結果が……今の、この光景。

「下級職の【司祭】であるあなたでは、この毒の解毒は不可能です。子供たちの無念、その身で思い知ってください」

「嫌だ……嫌だ……！」

【猛毒】に苦しむリオルは床をのたうちまわりながらエルザへと手を伸ばす。

涙を流しながら、いやだいやだと子供のように呟きながら。

「僕は……エルザさんのことが、ずっと、好きで……！ だから、子供たちのことに気をかけてばかりで、結婚も恋愛もする気がないみたいで、だから……」

「私は、今まで一度もあなたの気持ちを口にしてもらっていません。そんなこと、私は知りませんよ。ただあなたが、そう思っていただけです」

「……あ」

ばかり、とリオルの手が落ちる。

それを見届けてから、エルザはキノへと振り返った。

「さあ、キノさん。最後の依頼です。この殺人犯を、官憲に通報してくれませんか？」

できれば、子供たちにはわからないように。

それが、子供たちを置いてここを去ることになるエルザが、最後にできる気づかいだった。

## 第24話 堂々とした話 — Big Body —

キノがヘルメスに乗って走っているのは、森の中。

今回のキノの目的はまず第一がクエスト……一定のアイテムの採集。

ここ、レジエンダリアは空気中に魔力が漂っている。そのせいか、自然環境で育つ植物などにも自然と魔力を帯びたりするものがある。

そのようなアイテムは素材としても評価が高く、したがって需要も出てくる。

だが、まずこの森にはモンスターが出るので戦闘職でもないテイアンには危険である。また、それ以前にレジエンダリアには「アクシデントサークル」という自然魔法現象が存在する。

迂闊に巻き込まれてしまえばなにが起こるかわからない。

ただ……キノにはもう一つ、目的があった。

『巨人?』

「うん、この森でつい最近、巨大な人影が目撃されている。突然現れ、突然消えた……このことから、町では新たな〈UBM〉が現れたんじゃないかって話になってる」

今のキノは下級職でありエンブリオもまだ上級エンブリオには至っていないただのルーキー。

旅をしているとはいえ、さすがに〈UBM〉に挑めるとは思っていない。

もちろん倒せるなら倒して特典武器を手に入れたいものだが、〈UBM〉はそんな甘い相手ではない。

「でもね、何かしら情報が手に入ればそれは売れる。さっきの話だつてあくまで巨大な人影の目撃、その程度なんだ。どんな相手かも、どんな力を持っているのかもわかっていない。だからこそ、情報には価値がある」

〈DIN〉あたりにも情報を持ち込めばさぞいい値段で売れるだろう。



なにせへU B Mはその強さはもちろんだが、1体限りのモンスターであるが故に遭遇することがまず難しい。

そして特異の能力を持つているがゆえに倒すことも難しい。

故に情報が重要となってくるというのがキノの言葉だ。

『なるほど。逃げ足くらいにはなれるから、頑張つてね』

「もちろん、ボクだって無謀な挑戦をするつもりはないさ」

それから、バイクは……ヘルメスはずっと森の中を走り続ける。

途中で出てきたモンスターはキノが銃を使って倒す。場合によっては逃げる。

その都度ヘルメスを紋章に戻すのが手間といえは手間だが、今のキノではバイクに乗りながら戦うということがうまくできないから仕方ない。

そんなふうな適度に狩り続けつつ、無事に目的の素材を手に入れて軽く情報収集しようかなとも思っていたところで、“それ”は起こった。

『キノ、左！ 避けて！』

「っ!？」

突然飛んできた魔法を避けるため、キノは慌ててハンドルを回して大きくバイクの方向を転換する。

相手にも放った魔法が避けられたことがわかったのだろう、それまで潜んでいた人数がどんどん姿を見せていく。

奇襲は一撃で決めてこそ意味がある。一度襲撃者の存在を悟られてしまったなら隠れ続けるよりは一気に攻撃を仕掛けるのは“彼ら”の常套手段だった。

「おいおい、なに外してんだよルーキー相手にさ」

「バイク型のエンブリオか……戦闘系ではなさそうだな、楽でいい」

「ケケケ、お嬢ちゃあん、逃がさないよお」

姿を見せ始めたのはへマスター、それも集団。

彼らが服やアクセサリなどにつけているマークを見て、キノは舌打ちしたくなるような気持ちだった。

そのマークは、とあるクランのシンボルだったからだ。

「へデモンアーツ……くそつ、よりにもよって……PKのクランか！」  
PK。プレイヤー・キラー。

このゲームではプレイヤーをキルする……つまり殺すことが可能だ。

当然、殺された側はデスペナルティになる他、アイテムを落とすこともある。その他にも経験値などを得られるので、利益目当てにPKをする者もいれば、単にプレイヤーを殺すのが楽しいから、悪役が楽しいから、そういった理由でPKを行う者もいる。

ともなれば、「PKのクラン」が出現するのは自明の理であり……今キノの目の前に現れた面々もまた、PKクランであった。しかもへデモンズアーツ」というクランは、ランキング上位というわけでもないがレジエンダリアではそれなりに知られたPKクランだ。

「へUBM」を先取りされちやかなわねえ……狩るぞ」  
「ルーキーには無理だろ？　ま、情報を独占できないからキルするけどな」

「ウヒツ、お嬢ちゃあん、ごめんねえ」

PKたちは次々に武器を手を取ったり、エンブリオを出したりし始める。

一方で、キノも全力でアクセルを踏んだ。

「逃げるよ！　《ギアシフト》お！」

多勢に無勢、しかも相手は格上。

キノがここにとどまっている理由はもはやなく、キノは速度増加スキルの《ギアシフト》を限界まで引き上げて発動させる。

だが、そのぶん早いペースでMPが削られていくことにキノは焦りを顔に浮かべていた。

「逃がすか！　《ホールド・チェイン》！」

「くうっ……！」

おまけに、まだヘルメスは下級エンブリオ。速度補正もありはするがどうしても逃げ切れない。

さらにPKの一人がエンブリオの固有スキルを発動させ、現れた鎖によりヘルメスがからめとられ、キノは勢いのままに地面に投げ出さ

れた。

呻くキノにむけて駆け寄るPKの一人が、勝ち誇った顔をしてとどめを刺さんとキノに手を向ける。

「《クリムゾン・スフィア》！」

「むうんー！」

響き渡る爆音、そして爆風。

煙が晴れたそこには……キノがダメージのない無事な姿で、そこにいた。

いや、それだけではない。キノの前にはもう一人……男が立っていた。

2メートルは超えるだろう巨体は、銀色の鎧でおおわれている。全身鎧であるが頭だけは兜をつけていない。

兜がないために見えるその顔は短い金髪に褐色の肌、そして鋭い目でPK達を見つめている。

《クリムゾン・スフィア》を止めた盾を左手に持ったまま、彼は僅かに視線をキノの方へと向けた。

「無事か？」

「え、ええ……あなたは？」

「俺はこの森でスキルの練習もかねて狩りをしていたのだが……そこでお前たちを見つけた。俺はPKが好きではない。故にお前を守つたというわけだ」

一方でPK達は男の姿を見て、僅かに身じろぎする。

彼らの前に立つその男は、いくつかの理由でレジエンダリアでは有名であり、その理由の一つはPKたちにとっては歓迎できない理由だったからだ。

「お、おい、あれってガマイナー・ヘイルじゃねえか……？」

「『装備不明』のガマイナー・ヘイル……くっそ、なんだって腕利きのPKKがここにいるんだよ！」

プレイヤーを狩るのがPKならば、PKを狩るのがPKK。

ガマイナーはレジエンダリアにおいて、エンブリオが第5形態でありながらも腕利きのPKと渡り合える凄腕として知られていた。

PK達が構える中、ガマイナーは堂々とした佇まいで彼らを一瞥すると、自らのエンブリオの固有スキルを発動させる。

「いかにも、俺は【アーチャー・ジャイアント鎧巨人】のガマイナー・ヘイルだ。いくぞ……  
《愚者に我が装いは見えず》!!」

すさまじい迫力と共に宣言されたスキルにより、ガマイナーが来ている鎧が光を放つ。

そして。

次の瞬間。

キノの前に立っていたのは。鍛え上げられた筋肉を誇る男だった。ブーメランパンツのような下半身部位以外、一切何も身に付けていない半裸の大男だった。

「……………!!?」

『なんで!? なんて脱いだの!?!』

未成年の女の子にはあまりに衝撃的な映像を前に言葉を失ったキノを代弁して、転がったままのヘルメスが声をあげる。

あの銀色に輝く立派な鎧はどこにいったのだ。というか【鎧巨人】が鎧を脱いでどうするのだ。

キノはもはや【混乱】の精神系状態異常が発生する寸前だったが、一方で《デモンアーツ》の面々は驚くことなく警戒心をさらに強めていた。

中にはスキルを放ったものもいたが、ガマイナーが手を振るとそれは何も無いはずの空中で弾き飛ばされた。

「脱いだのではない……見えなくなったのだ!」

《愚者に我が装いは見えず》。これはガマイナーのエンブリオの固有スキルの一つ。

効果は実に単純なもので、彼が装備した全ての装備が透明化される。ブーメランパンツはプレイヤー保護機能が働いたが故のセーフティにすぎない。それがなければ正真正銘の全裸男が戦場に爆誕していただろう。

半裸でもまごうことなき変態にしか見えないが。

これがレジエンダリアかと、呆然とした頭でキノはそんなことを考えていた。

「くっそ、こんな露出狂に負けてたまるかああ！」

「《クリムゾン・スフィア》！」

「おおお！ 《サンダー・スラッシュ》！」

「ヒイ、男が来るな、来るなあ！ 《ホワイトランス》！」

様々なスキルが飛んでくる中、ガマイナーはただその場で腕を動かして次々にスキルを防いでいく。

まるで、そこに見えない武器があるかのように。そこに見えない盾があるかのように。

それでも防ぎきれない攻撃は、ガマイナーが自らの防御スキルで耐える。

「《アストロガード》お！ フン、露出狂ではない。このガマイナー・ヘイル、我が肉体に恥じるころもなければ隠すころもないッ！」

「『隠せよ!!!』」

ヘルメスも含め大勢からツツコミが入るが、ガマイナーは何も気にした様子はなく、無造作に腕を振るった。

「くっそ、軌道が見えねえ……ががははッ!？」

何をされているかもわからないままに、まずは一人が透明な何かによって派手にふつとばされ、光の塵となって消えていく。どうやら彼は「救命のブローチ」はつけていなかったらしい。

ガマイナーが振り回していたのはムチだ。それも、棘がついており殺傷能力に長けた太いムチである。そのムチは、ガマイナーの鎧から伸びていた。

「次だ。《シフトアーマー：ガトリング》」

ガチャリ、と音がしたが何が起こったかを見ることが出来る者はい

ない。

両手を前に出したガマイナーは、次の瞬間大量の弾丸をPK達に向けてばらまいていた。

見えないムチを警戒し、離れていたPK達は突然の弾丸に対処できず、ENDの低いAGI型のPK達が逃げ切れずに蜂の巣にされていく。

彼の鎧はただの鎧ではなかった。あの鎧こそが彼のエンブリオ。

ムチもガトリングも全て鎧が《シフトアーマー》のスキルによって変形したものだ。しかし当然ながら、その武器を見ることはできない。透明化しているからだ。

故に彼は“装備不明”。

通常装備が不明なのではない。これから“何を装備するのか”わからないからこそその“装備不明”。

しかし、歴戦の彼は理解している。PK達はまだエンブリオのスキルを使っていない者が大半である。だから、使われる前に切り札を切ることにした。

「このまま攻め落とさせてもらおうか……！ 最近習得したばかりの必殺スキルだ、プレイヤーに使うのはこれが初めてだがな！」

「や、やべえ……」

PK達がエンブリオのスキルを発動させるも、もう遅い。

いくつかの攻撃を受けるも、元来END型であるガマイナーは全て耐えきってみせた。そして発動させる。

彼の必殺スキルを。

（装備を透明に……まさか、あの人のエンブリオのモチーフって……！）

透明な服を着た王の話。

それは、デンマークの童話作家、アンデルセンが書いた有名な童話。《刮目せよ、我が妹》アアアアア！

ガマイナーを中心として、爆風が吹き荒れた。

ダメージがあるほどではなかったが、それでも勢いのある爆風にその場にいた全員が顔を腕で覆った。

その後。PK達の一部が何かに押しつぶされて光の塵となった。  
「……は？」

【救命のブローチ】で致死ダメージを防いだのだろうPKは間抜けな声を出したが、胸からブローチが落ちた直後、今度は他の潰されなかったPKと共に何かに吹き飛ばされてデスペナルティになる。

何が起こっているのかわからない彼らに対し、上空から響くような声が聞こえた。

『そろそろ時間だ。完全透明化が解ける今なら見えるだろう。我が姿が！』

言葉の通り、世界の一部から浮き出てきたかのように、“それ”は現れた。

銀色に光り輝くその姿。

ムキムキの肉体が銀色に輝き、光を放っているかのように日光を反射する。

それは……15メートルを超える巨人であった。姿はどう見ても、半裸状態のガマイナーが銀色になったような姿であったが。

『言ったはずだ、俺は【鎧巨人】だと。どうやらこれも巨大とはいえ鎧に分類されるそうだな……。さあサービスはここまでだ、《我が装いは愚者に見えず》！』

再び巨人の姿が透明になっていく。

厳密には、最初と違いガマイナーの姿だけは消えずに残っているのだが……上空に浮かんだガマイナーは高笑いを続けながら見えない巨人を操り、PK達を殴り、蹴り、蹂躪していった。

その姿を見ながら、キノは死んだような目でその光景を見ていた。PKを蹂躪するその姿は紛れもない強者のそれだったが……

半裸男が宙に浮いて高笑いしているその絵面で、全部台無しだった。

第25話 信念の話 — My Reason to Die —

天地。

それは、修羅の国とも呼ばれる地。戦乱が絶えず、いつの時代も争いが続いている国である。

各地を大名が治めており、領地をめぐる争いが起こる。故に。

「くそっ……くそお……」

「しつかりしろ！ おい！」

人が血を流し、傷ついて倒れ伏す。

一人、また一人と斬られ、貫かれ、その命を散らしていく。

そんな光景が、この天地では当たり前のように国の各地で繰り返られていた。

「この戦、我らの負けだ……撤退を！」

今回の戦いは、前園家が同盟を組んでいた南朱門家の力を借りて敵対していた丸川家の領地に攻め入ったことが発端であった。最初は勢いづいていた前園・南朱門だったが……。

たった、一人。

たった一人の「ハマスター」の出現によって、一気に情勢がひっくり返されてしまった。

「チクショウ……〈超級〉め……」

南朱門家に協力していた「ハマスター」の一人が、恨み節を残して光の塵となり、デスペナルティになる。

丸川家もまた、前園家同様、しかし秘密裏に同盟を組んでいた大名家に応援を要請していた。

その家とは、北玄院家。天地の中でも有数の勢力を誇る大名家の一つであり、客分として実力者の「ハマスター」を抱え込んでいる家でもあった。

今回この戦いに派遣されたのも、その〈超級〉の一人。



数々の逸話を持つその男によつて、前園・南朱門は瞬く間に数多くいた兵たちを失った。

男が手に持った武器を振るうたびに離れた場所にいたはずの者までまとめて斬り伏せられる。

さらには巨大な武器が襲い掛かる。

そんな中、傷ついた南朱門家の男が覚悟を決めたような顔で遠くの敵を見やる。

「ならば仕方なし。俺はこの命かけてでも、奴に一矢報いて皆が逃げる時間を稼ぐ」

「若……我々もお供いたします」

若と呼ばれた男は、まだ青年と呼べる年だ。

今回の戦には実績と経験を重ねる目的で参加したのだが……北玄院家が陰で同盟を組んでいた上に〈超級〉を送り込んでくるとは思つてもおらず、予想以上の苦戦を強いられることになった。

そして今、南朱門家の一人として、その命を使う覚悟であった。

男は持っていた爆弾に火をつけようとして

「馬鹿ですか若は」

ポカリ、と頭を叩かれた。

「なっ」

「ここは私が時間を稼ぎます。だからあなた方は逃げてください」

「しかし、おぬしはまだ……」

男の頭を叩いたのは、まだ年若い少女。しかも先日ようやくレベルがカンストしたとはいえ、所詮は合計レベル500。超級職にも、〈超級〉にも至っていない。

しかしそれは、彼女が命をかけない理由にはならない。

「あなたはティアン。私はマスター。私の命くらい何度でも替えがききますがあなた方はそうではない。まして、若は南朱門家の大事な身分なのですから、ここで命を懸けるくらいなら私が時間を稼ぐその間に逃げてください。未熟な身ですが多少なりとも時間を稼げる自負はあります。それでもだめなら、その時に決めればいいじゃないですか、今じゃなくていいんですって」

僅かに微笑んで見せると、一転して少女は厳しい顔をして腰の刀に手をかけ、男たちの前に立つ。

もはや振り返ることもなく、最期の別れにならぬようにと祈りながら言葉をかける。

「さあ、行つてください。……………早く行けえええ!!」

彼らだって戦いたかつただろう。

だが、そんなことを少女は許さない。男たちだつてわかっている。生きていればなんとでもなるし、確かにマスターである彼女はたとえここで倒れたとしてもまた復活することは可能である。テイアンである自分たちとは違って。

だから、すまないと言い残して彼女に後を託して走っていった。

「……………ようやく、行つたね。なんで皆して命を簡単にかけようとするのかな」

『雫様……………』

少女……………雫の傍らに現れた白い犬は心配そうに己の「マスター」を見やるが、雫は心配ないとも言うように不敵に微笑んで、辺りを覆う霧のその先を睨みつける。

霧の先で数多の味方を斬り伏せていた、大男の影を。

男は雫の存在に気が付くが、今までと同じように、まるで邪魔なものを感じ払うかのように武器を振るう。

それは明らかに両者との間には距離があつた。通常なら届く範囲ではない。

だが、この霧の中では距離などあつてないようなもの。男が振るつた斬撃は距離を超えて雫を他の「マスター」同様斬り伏せようとし、「……………ふっ」

キーン！ と甲高い音を立てて弾き飛ばされた。

斬られるその一瞬、雫は《居合い》のスキルと共に敵の攻撃を刀で弾いたのである。

二度、三度と離れた攻撃が繰り返されるが、雫は冷静に弾いて見せた。

「……………うむ、驚いたな。俺の斬撃がこうも弾かれるとは思つてな

かったぞ」

やがて、ゆつくりと霧の中から男がその姿を見せる。

二メートルを超えるような長身に対し、その体は筋肉の塊のような、それでいて無駄なく筋肉に覆われているような男。

茶色の髪は無造作に伸びており、髭もまた伸びかけている。

その男の名を、雫は知っていた。否、この戦場にいた誰もが知っていた。

「ヤマギリ」のビッグマン……」

「いかにも、俺がビッグマンだ」

〈超級〉にして【山賊王】の超級職を持つ男。

かつて〈UBM〉ごと山を両断したことから「ヤマギリ」の異名をもつ討伐ランキング第二位の男。それがビッグマンだ。

「それで聞かせてほしいのだがな。なぜ俺の攻撃を防げた？」

「……ただの、慣れですよ」

訝しげに眉を寄せるビッグマンに対し、雫は静かに刀を構える。

「ここに来たのがあなたでよかった。距離を無視するかの如き斬撃なら……幸運にも、私はもう慣れてるんだよ。私を鍛えてくれた人の〈エンブリオ〉が、あなたのものと似た力を持っていた」

人によって千差万別のエンブリオとはいえ、場合によってはモチーフや能力の方向性が他人と似たものになることはある。

雫に戦いを、剣術を叩き込んだ〈マスター〉は、奇遇にもビッグマン同様距離を超えた斬撃を可能とする〈エンブリオ〉を持っていたのだ。

むしろ「距離を無視すること」に特化していたともいえる分、その点においてはビッグマンよりも上かもしれない。

だからこそ、雫は耐えられた。

ご丁寧にも武器を振るうその動きが見えるのだ。あとはその動きに合わせ、距離を無視した攻撃に対しいつも通りに防ぐ、それだけでよかった。

スキルの補正もあって、攻撃を刀でいなすのは雫がキノと初めて戦った頃からできたこと。

「ふうむ……慣れか。俺の攻撃が慣れだけで防がれるのには思うところがあるが、だからといって俺がそれだけと思われるのも癪なものだ」

良きかな、良きかなとビッグマンは笑いながら左手に持った煙管キセルを霰へと向ける。

先ほど霰は武器か何かが巨大化する光景も見たばかりだ。向けられた煙管がいつ巨大化するかと冷汗を流す。霰にとっては、刀を向けられているのとなんら変わりはない。

「そら……これならどうだ？」

こうしてビッグマンは蹂躪を始める。

〈超級〉と、〈超級〉に満たぬ者との戦い。

霰に、勝ち目などなかった。

「ガハッ！ はあ……はあ……」

「よく粘るのは見事なものよ。正直俺もここまでかと驚いているが……悲しいかな、俺とてそう簡単に負けてやるわけにもいかん」

巨大化した煙管で殴り飛ばされた。

防ぎきれない斬撃で斬られた。

なんとか致命傷は避けたものの、それでも霰がボロボロの満身創痍なのに対し、ビッグマンの体にはほとんど傷がなく、その差は歴然だった。

（霊獣の陽動も一気に斬られて通じない、そもそも距離を無視してくるから近づくことすら難しい……！）

肩で息をしながらも力を振り絞って刀を構える霰に対し、ビッグマンはポリポリと煙管で頭をかいた。

確かに霰の技量は目を見張るものがあった。特典武具まで持っていたことには驚かされた。

しかし、圧倒的なまでの……力の差があった。

「【剣鬼】の者は、特にティアンは意固地なものが多かったが……お前さんも大概だな」

「……………」

「正直、わかっているだろう？ 俺に対して勝ち目なんぞない。なのになぜお前さんは諦めずに向かってくる？ 戦はそもそもこちらの勝ちが決まったようなものだ。今更俺を討つことにそこまで意味はないと思うが？」

もう戦うのもつらいだろうという状態ですら、雫は諦めていない。

【出血】や【骨折】の状態異常もある以上、とても最初の本調子ではないだろうし、事実ビッグマンの攻撃が徐々に防げなくなってきた。

それでも戦い続けようとする雫に対し、ビッグマンは問いを投げかけた。

彼の問いに対し、雫の答えは――

「諦める理由が、ないからだよ。それに……大見栄切っちゃったからね」

ここで彼を見逃せば、ビッグマンは前に進むだろう。

自分が大した時間を稼げたとは思っていないが、それでも時間稼ぎにはなっているはずだ。だったらまだ、若たちが逃げられる可能性がある。

しかし、ここで自分が膝を屈してしまえば、それすらも無為になってしまうかもしれない。

「私は彼らが逃げる時間を稼ぐ、私には彼らと違って一度限りじゃない命があるからこそ、彼らよりも前に立って命を懸ける価値がある！」

【同調者生命危機感知】

【同調者生存意思感知】

ゴホッ、と息をはいてよろめくも、雫はまっすぐにビッグマンの目を見据える。

「無駄な戦いなんかじゃない、きっとその先に命を懸けただけの未来がある！」

〔ヘエンブリオ〕TYPE：メイデン 【怨霊憑姫 タマズサ】の蓄積経  
験値——グリーン】

【■■■■実行可能】

【■■■■起動準備中】

「たとえここで私が力及ばず死ぬとしても……」

僅かに見えたアナウンスの意味はわからずとも、20秒後に何か  
起こるということをは感した。

ならば、その時間を稼ぐ。無様であろうと、何としてでも。

「私の死に、意味はあったのだと信じて死にたい！」

一方で、ビッグマンは雫の言葉を静かに、そして山賊のような姿  
をした彼に似合わずまじめな顔で聞いていた。

一度瞑目した後、ゆっくりとその瞼を開く。

「あいわかった。……その覚悟確かに聞き届けた。故に、俺の全力を  
もって排除させてもらう」

その顔にあるのは真剣な表情。彼と並ぶ強者と相対するときのよ  
うな顔。

次の瞬間、今までとは段違いの猛攻が雫へと襲い掛かる。

巨大な煙管、鉈、不意の斬撃……

それらを全てさばききすることはできず、まず左腕が落ちた。

かろうじて防ぐも脇腹に大きな傷が入る。

HPも、もう残り心もとない。隙を見て飲んでいた薬ももうない。

【救命のブローチ】はとつくに碎け散った。

そして、その時は訪れる。敵の無慈悲な宣告と共に。

【カウント終了】

【■■■■による緊急進化プロセス実行の意思を認めます】

【現状蓄積経験より採りうる六パターンより現状最適解を算出】

【対象ヘエンブリオ】：【怨霊憑姫 タマズサ】に対して■■■■による緊  
急進化を実行します】

【負荷軽減のため次回進化までの蓄積期間を延長します】

【超級進化シークエンスを実行します】

そんなアナウンズが流れるのを横目で見ながら  
《撫露通劍》

雫の体は、両断された。

だが、まだ終わらない。

「これは……!?!」

雫の体は確かに両断された。

しかし、彼女が握っていた刀から溢れた光が、優しく雫の遺体を包み込む。

土壇場で発動した雫のあらたな固有スキル、《今際の霊姫》。

それは死んで初めて発動するスキル。

メイデンだからこそできた、メイデン体との合体スキル。

今の雫は両断された体ではなく、自身のエンブリオ、タマズサと同様実体のない体を得てそこにいた。顔は雫のまま、しかし短かった髪はタマズサの如く長い艶やかな黒髪を揺らし、服装もボロボロになったそれではなく美麗な着物姿であった。

「馬鹿な、確かに両断して致命傷を負ったはず、死んでしまっただけはスキルが発動するはずが……いや、まさか!?!」

かつての南朱門家との戦いを思い出してビッグマンは思い至る。

南朱門家の人間が何名かついていたジョブ。その名を【死兵】。

唯一習得できるスキル《ラスト・コマンド》は、HPが0になったとしても活動することが可能となる。僅か1分にも満たない時間ではあるが。

そして雫は、南朱門家に仕える中でこの【死兵】に就いていた。《今際の霊姫》は合体までのチャージ時間がなくコストも少ない代わりに

……死亡後に存在を維持するためのリソースの一切を省いている。ようは《ラスト・コマンド》の力だけがこの《今際の霊姫》を確立させているのだ。

最期の力を振り絞り、雫はビッグマンへと接近する。

何度かビッグマンが武器を振るうも、実体のない彼女には一切当たらない。

「う、おおおおおおおおお！」

「《朧月》」

雫が振り上げた刀にだけは実体がある。それに気づき咄嗟に巨大化した煙管を盾とするが……

それに対し雫は「非生物を透過する」スキルを付与することでこれを回避。今もなおその力の核は刀に宿らせたままの雫は最後のスキルを宣言する。

それは、「自らが相手に削られたHPの割合と同じ確率で耐性を無視し、即死を与える」必殺スキル。

HPをビッグマン一人にすべて削り取られ、死して尚振るう今なら100%の即死を与える真正銘の“必殺”スキル。

「……見事ー」

「《所業無情》!!」

二人の〈超級〉は、光の塵となった。



第26話 仲間たちの話① — You are Not Alone —

「ではよろしくお願いします、キノさん！」

「はい、こちらこそよろしくお願いします」

カルディナのたとある街で、キノは一人の「マスター」と握手をしていた。

快活な少女という印象を受ける彼女の名前はアイリーン。今回は、彼女率いるパーティーと合同で、モンスターの討伐依頼を受けることとなった。

もともと、何かいい依頼はないものかと冒険者ギルドを訪れていたのだが、そこでたまにあるパーティー募集の一つに目が留まったのだ。

「募集に応じてくれて助かりました。いやー、クエストを受けたのはいいんだけど、まさかあそこまで硬いとは……」

たはは、と恥ずかしそうに頭をかくアイリーン。

話を聞いたところによると、彼女たちのパーティーは少し前にクエストを受けたようだ。それがモンスターの討伐依頼のだが、彼女たち5人で挑んでみたところ予想以上の防御力によつてモンスターを倒し切れなかった。

もう少し時間か火力があれば、と彼女は言う。

モンスターが出現する場所は標的のモンスターだけではない、他のモンスターも出没する場所であり、長期戦に移行しようものなら他のモンスターの対処にも手を取られ倒し切れないと判断したのだそうだ。

話を聞いている限り、それもそうだな、とキノは納得した。

そして、キノがもしこの討伐に参加した場合難易度は大きく変わる。まず、単純に戦力が一人増えることに加え、キノは特典武器「ガルカノン」を持っている。注いだMPに応じてENDを無視した攻撃を放つたり、防御力を減算できるこの装備は大きな力になる。

「準備できたんなら、とつとと行くぞ」

「まあまあ、キノさんにそういう言い方しなくてもいいだろ、ヘリツシュ……」

キノとアイリーンが手を離れたのを見て、腕を組み壁に寄りかかっていたへマスター……ヘリツシュが苛立たしげに言う。

それを諫めるのはウォルトという名の【盾巨人】。パーティーで一番の巨漢である彼はアイリーンのパーティーにおいてタンクと言われる役割に当たり、背中には大きな盾を背負っている。

「うっせえ木偶人形！ てめえには何も言っちゃいねエンだよ！」

「ちよつと、ヘリツシュ！ いくらなんでも怒るよ！」

仲間への暴言に憤慨したらしく、咎めるような声を出すアイリーンだったが、反論されたことが気に入らないとでもいうようにヘリツシュはむしろ声を荒げて怒鳴り返した。

「てめえもてめえだアイリーン！ オレは友達ごっこに付き合う気はねエぞ！ だからこそイラつくんだろうが！」

「うっわ、感じ悪……」

吐き捨てて一人冒険者ギルドの外に出ていったヘリツシュの背中を見ながら、ヒーラー役で【司教】のリーダーが不機嫌な顔で呟く。彼女の言葉に、【黒土術師】アレイズも苦笑して頷いた。

アイリーン、ヘリツシュ、ウォルト、リーダー、アレイズ。この5人がアイリーン率いるパーティーのメンバーであり、今回はこの中にキノが参加するということになる。

少し空気が悪くなってしまうてはいるものの、それをごまかすようにアイリーンはキノへと恥ずかしげに笑ってみせ、実際に戦闘になった時は問題ないから、と弁明する。確かに人によっては、これからクエストに行くというのにパーティー間の連携は大丈夫なのかと気にするところだろう。

「最近、ヘリツシュと皆がどうもうまくいなくなつて……でも、いつかきつと仲直りできると思うんだ。だって以前は皆仲良かったからね。ほら」

「これは……」

「パーティーを結成して少しした頃の写真だよ。スクリーンショット、つていうんだっけ？」

アイリーンがキノに見せたのは、5人が笑顔で笑っている写真。

あれだけ仲が悪そうに見えたヘリツシユは、先ほどからはとてもできないような無邪気な顔で笑ってウォルトと肩組んでいる。そんな光景がいつか戻ってくるのだと、アイリーンはそう信じているようだった。

「私たちは、仲間だから」

問題のモンスターが出現するところまではしばし移動となる。

もちろん、移動する間もヘリツシユはウォルトやアレイズが話しかけてくるたびに怒鳴り返し、リーリーがイラつき、アイリーンがたしなめる。そんなやりとりが1, 2回ほどあったがキノはあえて何も言わないでいた。

部外者が口を出すものでもないと思っただし、出したところで改善できるような気の利いた言葉がキノには浮かばなかった。

「あ、キノさん。アクセサリー枠、一つ空いてる？」

「え？ まあ、埋めてはいますけど空けようと思えば空けられますが……」

「よければ、これを装備してくれないかな？」

そう言っただけでアイリーンが差し出したのは藍色に光る腕輪だった。

よく見ると、アイリーンだけでなく他のメンバー、ヘリツシユまでもが皆同じ腕輪をつけていた。

「これは私のエンブリオ。もちろん本体は私がつけているんだけど……いわば付属品だね。これを装備しているパーティーメンバーには、《共に目指す先》っていうパッシブスキルが発動して、少しだけステータスを強化できるんだよ。あと、私のジョブスキルによるバフ効果も上がる」

「なるほど……では、遠慮なく。ジョブだけではなく、エンブリオもサポート型なんですな」

アイリーンのメインジョブは【司令官】コマンド。パーティーメンバーを強化する各種スキルをもっているため、装備するだけでステータスが上がるだけでなく、さらに【司令官】のスキルで大きな強化を得られることになる。彼女が差し出したエンブリオはパーティー専用ということやアクセサリや杖の一つを消費して装備しないとイケないという難点はあるものの、それでもジョブとシナジーさせたことで仲間を支える強力なバフをもたらすメリットがあった。

「うん。さあ、もうすぐ戦闘だよ！ 気合い入れて行こう！」

加えて、パーティーを鼓舞し引つ張る彼女は、まさにパーティーの司令塔であった。

「う、うわあああああああああ！」

「今のは!?!」

「もしかして、誰が襲われてるんじゃないや……」

「急ぐよ！」

砂漠に響く叫び声。

その切羽詰まる声を聞いて、一同は声が出た方へ走る。遠目でも、そこには巨大なモンスターが出現しており、集団でいた人々を襲っていることが容易に見て取れた。恰好から見ると、あれはおそらく商人の集団だろう。

キノはすぐにガルカノンを抜くとスキルを使って発砲。防御力を貫通させたその攻撃に、モンスターは襲っていた商隊ではなくキノ達の方へと頭を向ける。

モンスターがこちらへと体の向きを変えるのを見ながら、アイリーンはすぐに仲間たちに指示を出し始めた。

「ウォルト、抑えて商人さんたちを守って！ アレイズはゴーレムを横から挟撃させて！ 取り巻きが出てくるだろうからその時はゴーレムで対処！ 一匹も通さないように！」

「了解！」

「ヘリッシュはとにかくモンスターの体力を削って！ リーリーはダメージを負った人の回復を！」

「任せろ！」

「わかったー」

ウォルトが巨大モンスター、“鋼殻垂竜”の攻撃を耐え凌ぐ中、アレイズはスキルでゴーレムを次々に作り出し、地面の下から現れたトカゲ型のモンスターへと突撃させていく。【剛拳士】であるヘリツシユも攻撃に加わり、モンスターを攻撃していく。もちろん、キノも要所所でガルカノンを使って攻撃するが、アイリーンによるとこのモンスターは追い詰められるほど固くなっていくという。そのため、ガルカノンのスキルはMP温存のためまだあまり使わないで欲しいと指示を受けていた。

動けない商人に対してはリーリーが駆け寄って回復魔法をかける。ある程度動けるようになると、今度は攻撃を防ぎ続けているウォルトの回復に専念し始めた。

「それにしても、ゴーレムはすごいですね。いくら砂がたくさんあるとはいえ、ああもたくさん……」

「ウォルトのエンブリオはクヌムって言ってね、ゴーレム運用に特化してるんだって。数とか、能力とか」

クヌムとはエジプトの神の一柱であり、粘土から人間を作ったと言われる創造神である。実際のところ今ゴーレムを生み出しているのは粘土ではなく砂なのだが、そこまで細かく気にはいけないだろう。

元より、地属性とは固体の操作を得意としている。いくら元が砂であろうと、固めてゴーレムへと変えてしまうのもまさに地属性魔法といったところか。

そんな地属性に特化した【黒土術師】であるアレイズは周りに気を配りつつもゴーレムを操作する。

「ドリアアアア！」

しかし、このパーティーにおけるメイン火力はアレイズのゴーレムではない。ヘリツシユだ。

手にはエンブリオである巨大な手甲を装備し、スキルを用いながら敵を殴り飛ばしている。ウォルトも堅実に盾を駆使してモンスターの攻撃をいなしつつ、ヘイトを稼ぎ続けていた。

彼らが亜竜を抑えている間に、商人たちは礼を言いつつ必死な顔で逃げていく。

「！ 今だよ、キノさん！」

「装填！」

やがて、商人たちがモンスターから離れ、好機と見たアイリーンが指示を出すと同時に、キノはガルカノンにMPを込め、ENDを減算する《一碎貫通》を発動させる。

そして、亜竜の頭部めがけてガルカノンの引き金を引いた。

グギヤアアアア！

今までとは違う、大きな悲鳴がモンスターからあがる。少しずつしか与えられなかったダメージと違い、キノの一撃は防御力を貫通させている分今までより遥かに大きなダメージを与えている。それが頭部ならなおさらだ。

これだとどめとばかりに、キノはさらにもう一発と引き金をひいた。

ギアアアアアアア!! ……アアアア……

ズウン、と大きな音をたて鋼殻亜竜は倒れ伏した。それに思わずやったあ！ とガツツポーズをするアイリーン。

難敵を倒したことで全員が大きく息を吐き、気を緩めた。

それがいけなかったのだろう、ここはまだ砂漠だというのに。まさか先ほどの鋼殻亜竜が、最後のあがきとばかりに取りまきのモンスターを呼び出していたことに気づいていなかった。

「……危ない！」

「ぐあっ!？」

誰かが気づいて声をあげるも、もう遅い。

突然地面から現れたトカゲ型モンスターが、完全に気が緩んでいた隙についてアレイズの腹に深々とその爪を突き立てていた。さらに他にも現れたモンスターたちはアレイズへと集中的に攻撃を仕掛けていた。ダメージを受け動けなかったのが災いしたのだろう。

すぐにキノが引き金を引いて、モンスターを倒す。数匹しかいなかったために、キノだけでなくヘリツシユも参加するだけで時間をか

けずに一掃できた。やはり取りまきというだけあって、鋼殻亜竜よりははるかに弱い。

(アレイズさんはデスペナかな……ただの引っかけじゃなくて内臓の多いお腹をグツサリと貫かれてる。ダメージも多いしあれじゃ回復魔法でも厳しいんじゃない)

デスペナルティになるのは仕方ないかな、と思った、その時だった。アイリーンの、絶叫がその場に響いたのは。

「だ、だめ、ダメエエエエエエエエエエエエ!!  
《偽・地よ固まり合つて人と成れ》アアア!!」

え？ とキノが声を漏らすより早く、倒れたアレイズの体に変化が現れる。

まず、周りの砂が急にアレイズに吸い込まれるかのように動き始める。そして、集まった砂はアレイズの穴が開いたお腹を埋めるだけでなく、さらに彼の体を取り囲んでいく。いや、アレイズの体もまた同様に砂となって混ざり合い、やがて大きな人型となっていく。

「これは、どういう……」

「どういふことだ、アイリーン!!」

キノが聞くよりも大きな声で、ヘリツシュが叫ぶようにアイリーンへと詰め寄った。

その様子を、ウォルトとリーリーは何も言わずに見つめている。

「どういうことって……何が?」

「何がじゃねえよ! もとからこいつらが普通じゃねえってのはわかっていたが、何だありやあ! あれはまるで……モンスターじゃねえか!」

彼が作るものと同様、いや、明らかに異なったゴーレムと化したアレイズだった何かを指さしながらヘリツシユは叫ぶ。なぜ怒鳴られているのかわからないと、きよとんとした顔のアイリーンに対して。そしてキノも、ヘリツシユとは別に気になっていたことを尋ねた。「ボクからも聞かせてください。あなたが口にした”クヌト・イデア”。その意味を。まさかわかっていないわけ、ないですよね？」  
「……何だよ、それ。クヌトはアレイズのエンブリオだろうが……イデアって関係あるのか？」

「イデア」は、あるへ超級エンブリオの名前です。そしてそのエンブリオを用いてティアンを改造した奴隷。それを「改人<sup>イデア</sup>」というのです」

な、と答えを聞いたヘリツシユが愕然とした表情になる。

一方でアイリーンは、実に自然に……ただ聞かれたから答えた、それだけのように自然に答えた。

「キノさんの言う通りだよ。あれは私が作ってもらった「改人」。へマスターじゃやないから死んじやうからね、だから死ぬ前に”起動”させて砂による回復を……ッ!」

次の瞬間、アイリーンの体は後方へと吹き飛んでいた。

肩で息をするヘリツシユの体勢を見れば、彼がアイリーンを殴り飛ばしたことは一目瞭然であった。痛みに震えながらも顔を伏せ、起き上がらないアイリーンに向かって、ヘリツシユは何度目かわからない叫び声をあげた。

「ふざけんな……ふざつけんなよ！　ずっと言ってたよなア！　”友達<sup>ごっこ</sup>”に付き合う気はねエって！

それでも、それでもお前の気持ちだつてわからないわけじゃねエから、お前がそいつらを連れてパーティー組んで、友達<sup>ごっこ</sup>してても我慢はしてきた！　なのにな……」

噛み締めるような、辛そうな声でヘリツシユはアイリー<sup>仲</sup>に叫んだ。

「仲間<sup>ダチ</sup>そっくりに似せた奴隷連れて遊ぶだけじゃねえ……ティアンを改造なんざして人格までいじって！　拳<sup>こぶし</sup>仲間<sup>の</sup>姿したそいつをモ



ンスターの姿に変えて！ てめえは！ 何も感じねエのかよ！  
なア！」

「……思わないよ」

ゆっくりと。ゆっくりとアイリーンが立ち上げる。

顔は依然伏せたままなので、彼女がどんな表情をしているのかはわからない。けれど、ヘリツシュと自分の腕から腕輪が消えたのを見て、キノはゆっくりと武器に手を伸ばしていた。

気が付けば無表情のウォルト、リーリー……いや、「改人」たちもアイリーの側にいる。

ただならぬ雰囲気を感じながら、警戒を続けるキノとヘリツシュに向かつてアイリーンは続ける。

「仕方ないじゃん。アレイズが死んだら嫌だもん。だから「クヌト・イデア」を起動させた。何でわかってくれないの？」

アイリーンが静かに腕をあげる。

その腕に輝くのは藍色の腕輪。“スキルを使うために”キノとヘリツシュからは強制的に外された、アイリーンのエンブリオ。

それが示すのはつまり……明確な敵意。

「ドウシテワカツテクレナイノ？」

「ごんの……馬鹿野郎がアアアアアアアアアアアアアアアアアアア  
!!」

ヘリツシュが駆けだしたのと同時に、アイリーンはぼそりと口にした。

「《仲間か奴隷がいればいい》」

## 第27話 仲間たちの話②

アイリーンという少女の話をしよう。

彼女は一言で言えば「ぼっち」であった。

幼い頃から人に混ざることが苦手であり、加えて引つ込み思案であったことが主な原因である。

さらに悪いことに……そういつた性格だから、いじめにもあった。

最初はわからなかった。なぜ自分はいじめられるのか。なぜ自分をいじめめる子供たちは笑っていられるのかと。

そして思ったのだ。

「彼らは自分をいじめめることで楽しんでいる。他人を下に見るのがきつと楽しいのだろう」と。

人は誰かを下に見なければ気が済まないのだろう、と。

その反省をもとに、進学すると彼女は一転して他人に合わせることを覚えた。

他人に合わせて人の悪口を言い、そしてかつて自分がされたようなことを他人にやる。それで自分が標的にならなければ、自分が誰かと一緒にいらればそれでいいと思っていた。

たとえば誰かの気持ちを踏みにじってでも、それで得られるものがあるのだと、いじめられた時の経験からそう信じていた。

だが、結局のところ、それが彼女の性に合うわけもなく。

さらに言うのであれば、思ってもいない悪口や意にそわないいじめをしたところで……彼女の心が満たされるはずもなかった。

現実に居場所を感じられなかった彼女は……違う場所に居場所を求めた。

もつとありのままの自分でいられる場所を。より心からの自分を受け入れてくれる誰かを。

そして彼女はたどり着いた。その新天地の名前は<Infinite Dendrogram>。

ウォルト、リーリー、アレイズ、そしてヘリッシュ。

自分を偽ることなく、誰かを踏みにじることなく。一緒にいて心か

ら笑顔でいられる仲間が、確かにいたのだ。

「《仲間か奴隷がいればいい》」

アイリーンは自らのエンブリオ、【友隷両輪 コロンブス】の必殺スキルを宣言する。

さらに【クヌト・イデア】だけでなくウォルト、リーリーの姿をしていた【改人】達も本来の姿へと変身させていく。

ウォルトはまず体の大きさは鎧があるために変化しないものの、しかしその顔が人から狼のものへと変化していった【スコル・イデア】に。

リーリーは腕が翼へと変化し、足も鳥のように変わった【セイレーン・イデア】に。

「【スコル・イデア】に【セイレーン・イデア】……！ やはり、こいつらもかよお……」

「ただ、それだけじゃない……！ 【改人】が本当の姿に変化したとしても、ステータスの上がりが異常すぎる……！」

《看破》で【改人】達のステータスを確認したキノが訝しげにアイリーン達の方を見る。

もともと、ステータスの変化がなぜ起こったのか、その原因については心当たりはすであつた。アイリーンが宣言した必殺スキルである。

キノに腕輪を渡した時、アイリーンは「PTのステータスを強化できる」と言っていた。エンブリオの必殺スキルはエンブリオの特性を突き詰めたものである傾向が強いことを考えると……

（おそらくPT内強化スキル……ボク達には反映されてないところを見ると、腕輪を装備してないと強化できない、という条件はそのまま。確か《共に目指す先》だっけ？ そのスキルの強化版と見るべきだ。だけど）

だけど、それにしてもステータスが上がりすぎている。キノの推論

だけでは明らかに効果がおかしいのだ。

事実、《仲間か奴隷がいればいい》に対するキノの推論は正しく……  
そして、足りない。

アイリーンの必殺スキルは、確かに《共に目指す先》よりも強力なPT内ステータス強化の効果をもっている。腕輪を装備していないとその恩恵を受けられないというのも、キノが想像した通り。

だが、それだけではない。《共に目指す先》にはなかった内容が彼女の必殺スキルには含まれている。

それは……” 奴隷”。

《仲間か奴隷がいればいい》の効果は……腕輪を装備しているPT内メンバー、または同じように腕輪を装備している、アイリーン配下の奴隷に適用される。

ではPT内かつアイリーンの奴隷ならば、どうなるのか？ その強化は重複する。

これこそがキノが疑問視したステータス強化の正体。必殺スキルによるPT内強化と奴隷強化が重複したからこそその大きな強化となったのである。

「仕方ねえ……こいつら全員、ぶっとばす！」

「待っててくださいー！」

しびれを切らしたのか、ヘリツシユは拳を固めて全力で飛び掛かる。狙いはリーリーが変化した「セイレーン・イデア」。おそらくは回復役を潰そうという魂胆だろう。集団戦において回復役の対処は確かに定石である。

だが、敵もそう甘くはなかった。

「アオオオオオオオオン！」

「がつー！ ああ……？」

「スコル・イデア」による咆哮が彼の体を止める。それは強力なダウン効果があった。

「忘れたのヘリツシユ？」「スコル」はヘイト集中や足止めのエンブリオだったでしょ？ だからウォルトは優れた盾役だったじゃない」

ウォルトの「スコル」はテリトリイ系列に類するエンブリオだった。

対象のヘイトを自分に向けさせ、ずっと太陽を追いかけて続ける狼スコルの如く、自分だけを狙わせる効果を持つエンブリオ。

そしてそれを模倣して作られた「スコル・イデア」もまた、ヘイト集中能力を持つ咆哮、狼の素早さと力を持つ「改人」。

そう。「クヌト・イデア」もそして「セイレーン・イデア」も。全て元々この世界にいたアイリーンの仲間たちが持っていたエンブリオの能力を元に作られている。姿かたちだけではなく、名前も、能力も全て、アイリーンの希望によって、かつての仲間たちを再現したものである。

「さあ、このままとどめを差してしまおうリーリー！ ヘリツシュがあなた達を殺すなんてことをする前に！」

「くそつ、どきやがれ、デクノボーがア！」

唸り声をあげる「スコル・イデア」は獣のモンスターの力が素材として用いられているため、ヘリツシュでもそのSTRで対抗することができない。さらにかつてのウォルトにはなかった俊敏さをも兼ね備えてしまっており、振り切ることもすらできない。

その防御を突破して何度か攻撃を当ててはいるが、そのダメージは「セイレーン・イデア」によって回復されている。

「セイレーン・イデア」が得意とするのは範囲技。正確には音波による攻撃、そして回復技。敵は音波によって広範囲にわたる継続ダメージを与え、そして逆に味方には継続的な回復を与えていく。

そして、攻めあぐねているヘリツシュに向けて一点集中型の攻撃を放とうとして……

「隙あり」

その胸を、一発の銃弾に貫かれた。

「なっ、あっ」

「《世界を駆ける旅人》!!」

「に、逃げてりーりー!？」

「スコル・イデア」の広範囲タウント、そして「セイレーン・イデア」広範囲音波攻撃。

その影響を受けていたのにもかかわらず、飛び出して銃撃を放ったキノにアイリーンは驚愕の声をあげる。特に「スコル・イデア」はヘイトを集中させるが故に、一定ダメージを与えなければ他の相手に攻撃をすることはできなかったはず。

なのに実際はたやすく銃の引き金を引いた。キノが自由に動けたのは、彼女が持つ古代伝説級特典装備により範囲攻撃が無力化、およびレジストされたことによる。

そしてキノが先ほど宣言したのはアイリーンが発動させているのと同じ必殺スキル。アイリーンが危機感を覚えるのも当然だった。

「キイイイイイ！」

「——遅い」

必殺スキルを発動したことにより、キノのAGIは超級職以上へと跳ね上がる。さらに《行路適応》も用いることで空を駆け、空中を飛んでいる「セイレーン・イデア」へと距離を詰める。逃げようとするも、強化された「セイレーン・イデア」ですら、キノからは逃げられない。そのまま彼女は、左手に持った森の狩人で、追尾弾をいくつも放つ。

その銃弾は一発も逃すことなく、「セイレーン・イデア」の体を貫いた。

「い、いや、いやああアアアアああああ!!」

「ヘリツシユさん! そのまま【スコル・イデア】を抑えてください!」  
「任せろ、やア!」

ヘリツシユもまた、エンブリオのスキルを発動させて攻撃力を強化すると、続いて【剛拳士】のジョブスキルを使って【スコル・イデア】ヘラツシユを放つ。

ステータスが強化されているため、その防御を突破するまではかなわないのだが、それでも足止めには十分だ。

そして、キノが持つ伝説級の特典装備。防御突破に特化した銃であ

る【要碎銃 ガルカノン】が【スコル・イデア】へと向けられる。

この武器ならばいかにステータスが強化されていようと、強固な防御力を突破することが可能。さらに、【スコル・イデア】は確かに俊敏さを持っているが……しかし、AGI型のキノから逃げられるほどではない。

重い鎧を装備している以上、フルに狼の俊敏さを発揮することはできない。設計ミスといえばそれまでだが、アイリーンがウォルトの再現を求めた以上、そうならざるを得なかったのだ。

ヘリツシュを逃がさないように素早く立ち回ることではできたが、それはヘリツシュがAGIに重きをおいたステータスではないだけだ。完全なAGI型であるうえに、必殺スキルでさらに速くなったキノからは逃げられない。

腕を振り回して妨害しようとする【クヌト・イデア】を牽制しつつ、キノは【スコル・イデア】へ引き金を引いた。

「ガアアアアアアアア！」

「ウ、ウォルト……」

頭部へ銃弾をくらい、倒れ伏す【スコル・イデア】。二人もの【改人】を失い、アイリーンは呆然としている。彼女自身はバッファアアであり、純粋な戦闘職であるヘリツシュ達には立ち向かうこともできない。

しかしまだ終わりではない。自らを妨害していた盾役が倒れたことで、ヘリツシュは最後の【改人】も屠るつもりでいた。

「あの砂でできたゴーレムはボクとは相性が悪いです……。何発か撃ちましたが、さつきみたいに防御突破すればいいわけではない、みたくいですし……」

「周りの砂吸い込んで回復してやがるからな。後はオレがやる」

ガツン、と両手の拳を突き合わせると、彼のエンブリオが赤く光り、熱を放ち始める。

彼のエンブリオは今までも強化によって熱を持つてはいたが、先ほどまではオーバーヒートを避けるためまだ全開ではなかった。だが、残る【改人】は一体。全てにケリをつけようと、ヘリツシュは出し惜

しみするつもりはもうなかった。

「■■■■■■——」

「砂で体作ってるっていつても、もとは人間だ……だったら全部が砂になってるわけじゃねエ、どこかが核になって周りを砂で覆ってるだけだろ？ だったら、全部まとめて吹き飛ばせばいいんだろオ!？」

周囲の土や砂を吸収したゴーレムである「クヌト・イデア」。しかし人間としての姿、つまりアレイズの姿は残す必要があったため、改造の際完全にモンスターの体へとつくりかえられたわけではない。どうしても「人間」としての部分が残ってしまうのだ。

それこそが狙い目だと、ヘリツシユは理屈ではなく直感で理解していた。

腕をヘリツシユへと振り下ろさんとする「クヌト・イデア」を前に、ヘリツシユは拳を握りしめる。

「もう人形ごっこも友達ごっこもうんざりなんだよ……これで！ 終わりだア!! 《<sup>アポロ</sup>天柱熱拳》!!」

アポロンという神は様々な側面を持つ。

太陽神としての側面も持っているが、実はボクシングを創始した神としても知られている。そのことをモチーフにしたのがヘリツシユのエンブリオ、「太熱拳 アポロン」。

彼の必殺スキルは直情的な彼の性格を反映したのか、純粹な攻撃スキル。ただしその規模、熱量は桁違いであり、一発拳をアッパーのように振り上げるだけで巨大な火柱が上がる。ヘリツシユの目の前で発生するため、対策アクセサリーを装備していなければ彼自身も熱によるダメージを受けるほどだ。

そんな巨大な火柱が、「クヌト・イデア」を覆って燃やし尽くす。

砂だけでは防ぎきれない熱量が、内部にあった「クヌト・イデア」の生体部分までもを熱していき、灰へと変えていった。

「■■■■■■……」

「砂に還れ、偽者野郎」

塵となっていく「クヌト・イデア」に、ヘリツシユはやるせない顔をしてそう呟いた。



キノは戦闘態勢を解き、銃をホルスターにしまう。彼女の視線の先には、空中に漂う塵へと手を伸ばして泣きじやくるアイリーンの姿があった。

もう何も残っていないというのに、それを取り戻さんとするばかりに空をつかむ彼女の姿はもはや哀れでしかなかった。

「あ、ああ、ああああ……。ウォルトお、アレイズう、リーリー……。嫌だよ、みんな、みんなあ……。私を一人にしないで……！  
一人はもう嫌だよお……！」

彼女の脳裏に思い浮かぶのは、今までの日々。

かつて仲間と笑いあっていた楽しい思い出。

彼女に別れを告げていった、つらい記憶。

ヘリツシユが一時期ログインできなかつた頃の、一人ぼつちの記憶。

『俺、ついにアニメの主役もらつてさ……！ ただでさえ忙しくなつてたんだけど、評価してもらつたおかげで色んなところからも声かかるようになったんだ！ だから俺は、仕事にもっと時間をあてることになりそうだから……』

『す……いじゃんウォルト！ いなくなるのは寂しいけど……これからも応援してるからね！』

『私、今まで付き合っていた彼氏に、プロポーズされたの……。これからは、彼の支えになりたいから、もう一人でゲームする時間もなくなつてくると思うから、お別れね』

『おめでとうリーリー。旦那さんと仲良くしてね。今まで、ありがとう……』

『ごめんな、アイリーン。俺はあの大学、絶対に受かりたいんだ。どうしても就きたい仕事がある。やりたいことがある。だから、他の奴よりは早いだろうけど娯楽断ちして受験勉強に集中することにしたんだ。ウォルトやリーリーに続けて俺までいなくなるのは悪いけど……』

『仕方ない、よ……。また、受験が終わった頃に、一緒に遊べたらいいね……』

『悪いな、大会が近くてよ。しばらくオレは練習が忙しくてログインできなくなると思う』

『……そう、なんだ。うん、頑張つてね。私は、大丈夫だから……』

『誰も、いない……。みんないない……。う、うう……。寂しいよ……。寂しいよみんなあ……。一人は、やだよお……』

一人泣いていたその時に、ローブ姿の人物から声をかけられたのだ。

『私の主は、人の涙を歓喜のそれへと変えることを望んでいます。あなたが望むのであれば、あなたの仲間が戻つて来たかのような奴隷を、ご用意できるでしょう』

『できるん、ですか……。？　もし、それが本当なら……。！』

『ええ。姿も、顔も、力も。主はリクエストには応えとおっしゃっています』

そして彼女は、三人の奴隷を……。【改人】を手に入れた。

彼女は仲間たちのエンブリオの名を冠した【改人】達を、仲間が戻つて来たかのようにPTを組んで日々を過ごした。ヘリツシユが大会を終えログインした時も、驚愕するヘリツシユに「みんなが帰つて来たよ！」と紹介した。

そこまで彼女が仲間たちの面影を求めたのは……

「みんないなくなったら……。私は……。私は……。寂しくて……。一人は、いやだあ……」

彼女は一人になるのが嫌だったのだ。リアルでずっと一人だった彼女は、＜Infinite Dendrogram＞にて本当の仲間を……。友達を得た。

だが、また一人に戻ってしまう……。それだけは嫌だったのだ。だか

ら、《仲間か奴隷がいればいい》と考えた。

仲間がいなくなった悲しみを、仲間そっくりの奴隷で埋めようとしたのだ。

だが……ヘリツシユの言う通り、それは“友達ごっこ”に過ぎない。彼女が本当に求めたものではない。

それに……

「一人だなんて、言うんじゃねエよ……」

オレがいるだろうが。

そう言つてヘリツシユは手を伸ばした。彼は、紛れもなく、アイリーンの仲間だから。

泣きじやくるアイリーンは、何度か目を瞬かせた後、静かに彼の手を握った。

第28話 約束の話 — I want to Me  
et You. —

机を挟んで、二人の女性が向かい合っていた。

一人は二十代半ばか後半くらい。もう一人はまだ十代の、少女というべき年齢の人物。

机の上には、それぞれの前にコーヒーカップが置かれており、そこから湯気がほんのりと立ち上っている。

「改めて自己紹介するわね。私はハンニヤよ」

「ボクはキノといいます」

二人は互いに自己紹介すると、笑って話しながらコーヒーを飲む。基本的にハンニヤが話し、それをキノが静かに聞く、という構図ができあがっている。

最初の出会いこそ事故のようなものであわや大惨事となりかけたが……今の二人からは、そのような殺伐とした雰囲気など欠片も見られなかった。

「そしてね、私がお会いするのが待ちきれないって送ったら、彼も早く会いたい、って言ってくれて！」

「うらやましいですね。ボクにはそのようなお相手はいないので」  
自分を待つてくれている人間がいるのがうらやましい、とキノは答えた。

ハンニヤはそんなことないわよ、とキノに優しく言う。

「今はまだでも、きつと見つかるわ」

「そう、でしょうか……」

「ええ」

彼女の言葉に、キノはコーヒーを飲み、しばし考える。

やがて、カチャリとカップを置いて今度は自分の話を始めた。

「ボクには……ハンニヤさんのように愛し合っているような相手はいません。ですが、会いたい人がこの世界にはいます」

「まあ！ 素敵ね」

「といっても、本当に恋愛とかそういうのは関係ないんですけどね。なんというか、そう……また会おうと約束しただけにすぎないのですが」

厳密には少し違う言葉だったし、約束と言っても、自分から一方的に言ったようなもの。それを約束と言ってもいいのだろうか。

そんな彼女の困った様子に、ハンニャはそれでいいんじゃないかしらと優雅に笑って答えた。

「気持ちなんて押し付けるくらいがちょうどいいんじゃないかしら？  
もちろん、程度はあるだろうけど」

この言葉を、ハンニャのリアルについて知っている……例えば、クマの着ぐるみを普段着ている男が聞いていたらなんと言っただろうか。

少なくとも、クリスマスの日に引くほど準備万全の状態にしてプロポーズを待っていたり、ゲームでの出会いを理由に振られた結果現実で裁判沙汰を起こしている彼女が「程度はあるだろうけど」などとの口で言うのだろうか和本気で思ったことだろう。

もちろん、今ハンニャの目の前にいる人物はそんなことは知らない。

「フフ、私たちって意外と似た者同士なのかしらね？ 早く会いたい人がいる。今はその日が来るのを待つことしかできないけれど、でもお互いにその約束を胸に確信している。その日がいつか来るってね」  
「……ええ。その通りです」

アイテムボックスから取り出した懐中時計を見ると、キノは穏やかな表情を見せる。

ハンニャもその意味を悟ったのか、暴走した時からは想像もつかないような優しい顔で彼女の顔を眺めていた。

二人を閉じ込めているのは時間であり、そしてこの空間。

だからこそ、時間は彼女たち二人にとって、大きな意味を持つ。

コーヒーがなくなってしまうので、手をあげて店の人間を呼ぶ。その手に気づいてやってきた男性が、二人の注文を聞き、しばらくすると今度はアイスコーヒーが注がれたグラスをお盆にのせて戻っ

てきた。

一礼して去っていた男性を目で見送った後、氷と一緒にミルクとコーヒーをかき混ぜながら考え込むようにしてハンニヤは口を開く。「……いけないわ。つい自分がもう少し待てば会いに行けるからって思ってたから軽く言ってしまったけれど。貴方はどれくらいで会いに行けるようになるのかしら……?」

人によつては意味が分からない、しかしこの場にいる人間なら全員が理解している質問をハンニヤは投げかける。

いつ、というのは重要な問題だ。

場合によつては、一年や二年ではすまない可能性が十分にあるのだから。

心配そうに様子をうかがうハンニヤに対し。キノは落ち着いた顔で答えた。

「まあ、確かに短くはありませんが……そこは気にしなくて大丈夫ですよ。うまくいけば何も問題はないのですから」

「……そう。なら私がどうこう言うことではないわね」

カチャリ、とコーヒーを飲み干しグラスを置いたハンニヤは立ち上がる。

それに伴い、彼女の手の甲にある紋章から彼女の〈エンブリオ〉……サンダルフォンが現れた。

彼は話の邪魔にならないようにと二人の会話の間ずっと紋章の中にいたのだ。もちろん何か異変があったりハンニヤの要請があれば出てきただろうが、今回は特にそのようなこともなく。

「それじゃ、今日はこの辺で。また会いましょうね」  
「失礼いたします」

二人が店を出ていくと、周りの人間の間にはどこか弛緩した空気が流れる。

それも当然といえば当然だろう。ハンニヤは……数少ない〈超級〉の一人。格が違う強者なのだから。

まして、彼女は「ファイガ口の悪口を言うな」「往来でいちやつくな」といったルールが暗黙の了解になっているほどに。精神面で爆弾を

抱えた危険な人物でもあるのだから。

だが。そんなハンニヤと対峙していた彼女にとっては、些細なことでありさして気にすることでもなかったのであろう。

そうでなければ、どうしておふざけをしたまま話ができるというのか。

“ここ……” 監獄” と呼ばれる空間において、残された彼女は一人、懐中時計を手に穏やかに笑う。

「キノさん！ キノさん！」

『ん？ 知り合い？』

時は少し流れて、アルター王国にて。

キノが店で消耗品を買い込み、ほかに何か掘り出し物はないかとあるいているところで、突然声をかけられた。

声のしたほうへ振りかえってみると、彼女のほうへと手を振りながら走ってくる女性がいる。

しかし……キノには彼女に手を振ってまで話しかけられるような心当たりがなかった。

「まさかあなたも出てきていたなんて驚いたわ……。あなたは入ってきてまだそんなに時間が経ってないって聞いていたからまだかかると思っていたもの。『うまくいけば』、だなんて言っていたけれど何かしていたのかしら？」

「ちよ、ちよつと待つてください」

興奮して話しかけてくるハンニヤを手で制止させて、キノは言いにくそうに問う。

「ええつと……あなたはハンニヤさん、ですよね？ 【狂王】の」

「ええ。そうよ？」

彼女のことを知らないわけではない。彼女が先日愛闘祭で暴走した事件はキノも知っている。その原因がフィガロのゴシツプ記事だ

ということももちろん知っていた。

しかし、そこまでだ。彼女がフィガロのことを好いているというのは知ったが、それ以上彼女について知っているわけではない。

だからこそわからない。

どうして今日のの前にいる彼女は、まるで以前の知り合いだったかのように話しかけてきているのかが。

「もしかして覚えていないのかしら？」 “監獄”で一緒にコーヒーを飲んだりしたのだけれど」

『え、“監獄”？』

「待ってください。ボクは、“監獄”に行ったことはありませんよ？」

そう、キノは指名手配などされていないし、それ故に“監獄”に行つたということはない。

だから、“監獄”でハンニヤと会うのはあり得ないのだ。

にもかかわらず、ハンニヤは依然として不思議そうな顔をしている。

「と、言われても……。確かに目の前にいるあなたと同じ顔をしていたわよ？ ステータスに表示されていた名前もキノだったし。まあ、思い出してみるとそのバイク……貴方の＜エンブリオ＞かしら？

それはなかった気がするわね」

『ええっ！ そんなー』

「ならばなおさらボクではないと思うのですが……」

どうやら違う人物だったらしい、と彼女も思ったのか二人でうーん、と考えこむ。

どんな話をしたのか？ とキノに聞かれハンニヤはフィガロとのメールのことや会いたいけど会いに行けない自分の気持ちなどを話した、と答える。

なら相手はどんなことを話していたか？ という問いに関してはすぐに答えた。

「会いたい人がこの世界にいる、って言ってたわ。だから私と同じだなんだな、って思ってた話はずんでね」

「むむ……ますますボクとは違うようなイメージが……いや、ちよっ



と待ってください」

ここで少し嫌な予感がした。

なぜキノの姿をしてその人物はハンニヤと会話をしたのか？ いや、そもそも、なぜキノのことを知っていたのか？ という疑問が最初にあつてしかるべきだった。

自分の名前や姿を模倣するということは、当然それを知っていなければならぬ。

そして、「会いたい人がいる」というその人物の言葉。考えられるとしたら一番の候補は、やはりわざわざその姿をとったキノの可能性が極めて高い。

「あ、そうそう……」

一人、心当たりがあるような……と考え始めたキノに追い打ちをかけるように、ハンニヤは思い出したことを素直に伝えた。

「また会おうと約束したって言ってたわね。いや、確か正確には……」

『また遊ぼうね』、だったかしら？

「……………」

『いたねえ、キノ。キノの顔をしてそんなことを言ってた人が、監獄に。良かったね、キノモツテモテ』

「うるさい」

『んぎゃ！』

ゴツンとヘルメスを殴りつけたキノは、その人物の正体に確信を持ち、顔を手で覆うと大きいため息をついた。

ハンニヤが店を出た、その後のこと。“監獄”内にある喫茶店では、次のような会話が あつた。

「嬉しそうですね」

「ええ……その通りですよ、ゼクスさん」

喫茶店の主である人物……先ほどまで一緒に会話をしていた人物同様、〈超級〉として恐れられている【犯罪王】ゼクス・ヴュルフェルに対し彼女は笑顔で肯定した。

「いつ自分の正体を明かすのかと見ていましたが、結局そのまま通したのですね」

「ま、ハンニャさんは僕よりも早くここから出ていくだろうからねえ。もしキノさんに会ったらそれもまた一興さ。そう思うと、キノさんのままでいた方が面白いと思わない？ だからこの私はそうします」

「……最後は私の真似、ですかね。貴方らしいものです」

それはもう、と頷いて彼女はアイテムボックスから仮面を取り出した。

姿を変えていても、それをつけていればある程度情報に通じているものなら誰でもわかる。ましてこの「監獄」の中にある程度いる〈マスター〉なら、もう見慣れているものだ。

「しかし、ここを出るのに、貴方は貴方で何やら計画があるようですね」

「まあ、そうだねー。あいにくと、僕のプランとあなたのプランは両立させることはできないし、あなたと一緒にってわけにもいかない。こっちはこっちでやらせてもらうさ。とは言っても僕はただ待つしかできないんだけどねえ」

パチン、と懐中時計……逸話級特典武具の蓋を閉じた彼女は立ち上がると仮面の下でニヤリと笑う。

それが彼女の在り方だから。

それが、この世界ではそう演じようと決めた彼女の役割だから。

たとえ相手が迷惑に思おうが、彼女のやることでティアンや他の〈マスター〉が巻き込まれようが。

大事なものは、約束を守ること。今“自分”がやりたいことを明確に自覚できていると悦んでいる彼女が、他人を気にして止まるわけがない。

喫茶店を出た【大役者】は、大きく手を広げ、空を仰いで天に届けとばかりに叫んだ。

「約束を守るものだからねえ……また遊ぼうねキノさん、次はもつと大きな騒動で！」

第29話 愉悅の話① — Pleasure —

のどかな昼下がりの頃。

レジエンダリアにある店の一席で、緩みきった笑顔を浮かべ、背もたれに体を預けるキノの姿があった。

彼女の前にあるテーブルには、空になった皿が乗せられている。

「ああ……幸せだ。ボクは幸せだよ、ヘルメス」

『あーあー、そんなだらしのない顔しちやって。そんなにおいしかった？』

「おいしかった……。期待した以上のものだったよ……」

人気で行列ができるほどという【菓子職人】の店のうわさを聞き、ずつと行きたいと思っていたキノ。だが、人気店ということもあつて予約をとることはできず、唯一の手段は行列に並ぶのみ。

しかし、タイミングによつては品切れになることも多く、また【菓子職人】が「ハマスター」であるために毎日ずつとログインしていると、いうわけでもない。

なのでなかなか機会に恵まれず、ついに先ほど待望のデザートにありつけたというわけだ。

辺りを見回してみれば他の客も皆満足げな顔で食べている。

もちろん、買ってすぐ食べるのが全員というわけでもなく、アイテムボックスに入れて持ち帰る人もいる。それでもこの庭のような食事テラスには人は多いのだから、その人気ぶりがうかがえる。

『食べ終わったなら早く出ようよ、キノ』

「まったくね。こちらにも話があるのだし、さっさと店から出てきなさいな」

「ん？」

『ん？』

カツン！ というヒールの足音と共にかけられた声に、キノとヘルメスは揃って不思議そうな声を出した。

キノが声のした方をむくと、店の敷地外からこちらを睨んでいる女性の顔があった。その顔はキノも見覚えがある。先日共闘したばかり

りのへマスター」だ。

彼女の名はサリイ・S・デイエス。

蹴士系統の超級職である【蹴キック・プリンセス 姫】をメインジョブとして持つ女性である。つまりは準へ超級」。

紺色に近い長い髪をたなびかせた彼女は、キノが店を出て彼女の元に来るまでコツン、コツン、とつま先を地面にぶつけて待っていた。

「お待ちせしました。【神揉師ゴッドタッチ】との戦闘以来ですね」

キノとしては以前彼女と出会った時のことを口にして話題を振るだけのつもりだったのだが、その名を聞いてサリイはすごく嫌そうな顔をした。件の人物がいろいろとアレだっただけに、彼女の反応も決しておかしくはないのだが。

「やめなさいよ、あの変態のことを思い出させるのは。ま、大勢で討伐戦行っただけあってどうにかデスペナさせることもできたんだし？

今頃は“監獄”に行ってるでしょ。いい気味だわ」

「あ、今王国にいるらしいですよ。“監獄”にはいかなかったそうです」

「……は？ どういうこと？」

キノによって自身の予想を否定され、唾然とした顔になるサリイ。もともと【神揉師】の罪状も指名手配されるほどのものかと考えると微妙なところだが、それでもかの【妖精女王】にまで手を出そうとしたのだからつきり指名手配されていると思っただのだ。故に“監獄”に送られたものとばかり思っていた。

「レジエンダリアにはさすがに戻れないでしょうが……国際指名手配になるわけでもなかったでしょうから、王国にあらかじめセーブポイントを作っていたんでしょうね。噂じゃカルディナでは有力者にも顧客はいるそうですから、“監獄”に行く可能性はおそらく……」

「ええい、忌々しいわね！ ……いいわ、この国にいないならまず私と会うことはないでしょうし。それよりも！」

これ以上は【神揉師】の話をしたくなかったのだろう、自分で話を断ち切るとサリイはキノへ指をつきつける。

「本題よ。私のクエストに付き合いなさい。あなたはまだ下級職だけ

れど、まあ戦えるっていうのはこの前の戦闘で分かったから……」

「クエスト、ですか」

「あなた以外にも克蘭のメンバーに声をかけるつもりだけれど、人手はあつて困らないもの」

今回のクエストはティアンから依頼されたものだが、その内容は「ティアンに犯罪行為を行った〈ハマスター〉の討伐」。

正直なところ、キノとしてはあまり気乗りするものではない。それにサリイは小規模ではあるが克蘭のオーナーをしているという。なら彼女と克蘭のメンバーで十分ではないかと思つた。

だが、サリイはしっかりと彼女にとつてのメリットを提示する。

もつとも……それをメリットと呼んでいいのかは、わからないが。

「あなた、人に銃を向けることについて、何か思うことあるんじゃない？」

「え？」

指摘されたことは、キノ個人としては全く意識していないことだつた。

彼女の困惑をよそに、サリイは以前共闘した時からずっと思つてきたことを指摘する。

「前の戦いのときに思ったのだけれどね。あなたは人に銃を向けるとき、僅かにためらいが生まれている。もちろんこれはゲームだし、ましてこの前、そして今回相手にするのは死んでも復活できる〈ハマスター〉なのよ？　なのにあなたは“命”を意識しすぎてる」

言われて彼女は、王国での出来事を思い出す。

この世界のティアンにも人生がある、それは〈ハマスター〉の自分たちと同じだと言つて子どもたちのいる養護施設に通つていた聖職者の姿をした女性。

この世界のティアンにも命がある、それは現実の自分たちと同じだと言つて傷ついた人の命を救うことに鬼気迫るほどに尽力していたナースキャップの女性。

そして、もう一つ。

「世界派の〈ハマスター〉にはたまにしていると聞いたわ。……ティアンを殺

した結果、ティアンだけでなく同じ人型である「ハマスター」に対しても攻撃をためらうようになる人もいる、と」

「……」

彼女たちとの出会いやとある事件との遭遇があつてキノはこの世界の“命”を今まで以上に重く見ていた。

そしてそれ故に、たとえ「ハマスター」といえど、どうしても「命あるもの」として試みよう。

だから、銃口がブレる。だから、引き金を引くのが遅れる。

「やっぱりね。まあ、ティアンを傷つけるのは避けたい、そう思つてしまふのは百歩譲つていいとしましょう。だけど「ハマスター」は違つてしよう」

キノが王国を出る頃から生じていたその不調を、サリイは共闘の中で敏感に感じ取つていた。

彼女はキノが不調に陥る前から知り合ひだった、というわけではない。ただ、わかつてしまふのだ。

キノがまだまだ上級職にも届かぬ「ハマスター」であるとはいへ、それでも戦いの節々から「この子はこれくらいならでき」「これくらいならできておかしくない」、といったことをサリイは見抜くことができた。

行動、判断、動きからその実力を見抜くことができるのはリアルにおけるサリイの才能であり技術であるのだが……それは些末事。

つまるところ、彼女の提示するメリットとは、次のようなことだ。

「だから、このクエストであなたの根性を叩き直す。それが私からの報酬よ」

「……………」

しかし、それを提示されてもキノの顔が晴れることはない。

サリイは表情が変わらないキノへどう言葉をかけたものかと考え……そして

「ああもう、じれったいー！」

「ぶべっ!?!」

考えるのがめんどくさくなつたので、とりあえず蹴り飛ばした。

【蹴姫】の一撃だ、それはもう痛い。

さらにサリイは倒れたキノに近づくと、容赦なく頭の横の地面を、ヒールで踏みつけた。

「い、いきなり何を……うぎゃ!?!」

「言葉で説得するのがめんどくさくなつたから蹴り飛ばしたわ」

真つ青な顔のキノを見下ろしながら、サリイは笑みを浮かべて言う。

「私のように戦いを楽しめなんて言わない。だけどせめて、そのためにはここで捨てていきなさい。あなたが望んだ彼女は、そんなものもっちゃいなかつたわよ?」

「……ええ、そうですね」

諭され、そして蹴り飛ばされようやくキノも覚悟がきまる。

いきなりティアンを、定めある命を奪うわけではない。まずはへマスターへ同士の戦い。

前回のような姿は見せられないなど気合をいれて臨むことにした。

「そもそも、今回はどうしてクエストが発行されるに至ったんですか?」

サリイの仲間とも合流して、敵であるへマスターへが潜んでいると言われる場所へ向かう道中、キノがサリイに尋ねる。

依頼人が言うには、へマスターへが徒党を組んで一部の村や集落に通じる道を塞ぎ、盗賊行為を行っているのだという。

だが、サリイに言わせてみれば「ただの八つ当たり」に過ぎないのだそう。

「あなたは聞いたことあるかしら? ガードナー獣戦士理論って」

「ええ。そういえば、この先にある場所では【獣戦士】につく風習があるとか……」

「そうよ。そして、今回集まっている奴らはいわば敗残兵。……」

【<sup>頂</sup>獣王】に至れなかつた負け犬どもよ」



ガードナー獣戦士理論とは、ビルド構成理論の一つだ。エンブリオのカテゴリの一つ、ガードナーが従属キャパシティ0であることを元に、【獣戦士】のスキルによって「マスタール」のステータスを底上げすることでより強いビルドにしようというもの。

だからこそ、特に「最強」を求める「マスタール」たちはこぞって獣戦士系統の超級職である【獣王】を求めた。

しかし、超級職につけるのはたった一人だけ。その一つだけの座が先日、ついに埋まってしまったのだという。

当然、彼らの落胆は大きく……中には「ティアンが超級職の就職条件を自分にちゃんと伝えなかったせいだ」などと逆恨みをするようなものまで出てきてしまった。それが今回討伐対象となっている連中である。

なるほど、と納得して歩いてしばらくした後。

「！ 姐さん、上！」

メンバーの一人が警戒した声をあげた。

全員がその声によって上を見上げると、鳥型のモンスター、否、ガードナー系列の「エンブリオ」が羽ばたきながらじつとこちらを見つめていた。

さらに、「マスタール」がスキルを使ったのだろう、突然足に何か現れたかと思うと頭上からそれ……爆発物をキノ達へと落としてきた。

「斥候兼爆撃機つてことかしら……！ 盾役！」

「アイヨォー！」

サリイの掛け声で一人の男が「エンブリオ」の固有スキルを使い、範囲攻撃でもある爆発を一手に引き受ける。

爆風や爆熱、その全てが吸い込まれるかのようにその男へと向かっていって……

「う、おおおお……キモチイイイ」

「えっ」

何か変な声が聞こえた気がしたが、キノ以外誰も反応しない。

むしろ平然と当たり前のような顔をしているのだから、キノとしては面子についていささか心配になってしまった。

攻撃を防いだところで、サリイはガツン、と足を地面にたたきつけた。

「アイツ、私の上を飛ぶなんていい度胸ね……《私に跪け》」

サリイもまた、エンブリオの固有スキルを発動させる。

すると空を悠々と飛んでいた鳥が突然、地面へとたたきつけられ、まるで頭を下げるかのような体制で【拘束】されていた。

(今のは……重力?)

王国で似たようなエンブリオの話をキノは聞いたことがある。

もつとも、効果時間はさほど長くはないようですがすぐ鳥は動き出すのだが……それをサリイが見逃すわけもなかった。

「頭を下げているのなら……それを蹴り飛ばすのが礼儀よね?」

口にするやいなや、一瞬でその頭を蹴り飛ばす。【蹴姫】のキックを受けた鳥の頭は破裂したかのように吹き飛び、すぐに体ごと消えていった。

相手側も焦りだしたのだろう、奥で声や音がし始める。

「さあ……殲滅するわよ!」

### 第30話 愉悦の話②

混戦が始まる中、まず最初に奥から襲い掛かって来たのは硬い甲殻を纏った「ハマスター」だった。

ガードナー系列でよくある代表的なスキルの一つが合体スキル。ガードナーと「ハマスター」が合体することでガードナーの特性を「ハマスター」が得るスキル。

場合によっては、「獣戦士」系列のスキル、「獣心憑依」によりステータスが向上されたうえでさらに合体スキルの恩恵を得ていることも考えられる。

「なるほど、まずは硬いやつが先に出てくるってわけね」

他にも奥からは光線などの遠距離攻撃などが行われているが、真っ先に出てきた人物は一人のみだ。よほど防御力に自信があるのだろう。

それを見越してか、サリイの近くにいた一人の「ハマスター」が彼女に声をかけて、一番前に出る。

「では、私が参りますわお姉様。いつものようにお願いいたします」

「ええ、行きなさいなヴィラ」

その「ハマスター」……ヴィラ・マリーは銀色の鎧を装備した金髪の女性。

彼女のジョブは「聖騎士」であり、元々はアルター王国にいた人物だ。

彼女のステータスやジョブを《看破》した甲殻の「ハマスター」は、この辺りではあまり見ないジョブに若干驚くも、自分と比べれば大した防御力は持たないと判断した。

（フン、俺の方が硬さでは圧倒的に上。回復能力があるから盾対決に名乗り出たのかもしれないが……大した敵じゃないな）

自分が防いでいる間にも後ろからの援護が来るだろう。防御力に自信のあった彼は何の警戒もなくヴィラのもとへと突進していった。

対するヴィラは冷静に彼に攻撃を受け止め――

「ぐふっ」

なかった。彼が突き出した拳をそのまま受けるヴィラ。

しかし、攻撃が成立すると、彼女の〈エンブリオ〉……鎖でつながれた巨大な手錠が片方は甲殻の〈マスター〉、片方はヴィラ自身の腕に取り付けられる。

互いの腕についた輪が鎖でつながっている以上、二人は互いを拘束し合っていることになる。

だが……このエンブリオの真価はここからであった。

「なに!？」

「さあいくわよ、《ニー・レイピア》！」

ヴィラの後ろから高いA G Iにより高速移動してきたサリイは、名前通りレイピアの突きのような鋭い膝蹴りを……ヴィラに向けて放った。

威力よりはスピードに重きを置いたスキルとはいえ、超級職の手加減なしの攻撃を背中に受けたヴィラはのけぞる

ように悲鳴をあげる。

「んああああああつ！ さ、さすがお姉様、激しいですつ……！」

だが。

「ぐおおおおお!!？」

悲鳴をあげたのはヴィラだけではなく、鎖でつながれた相手の〈マスター〉もであった。

自分の防御力をいともたやすく貫かれたかのようなダメージ。しかし、何が起こったのかを理解するのには、笑顔のサリイによる二発目の蹴りが振るわれてからであった。

「んふっ」

「ぐうっ」

ヴィラを痛めつけることによって結果的に自分もダメージを受けている。

二人が手錠でつながれていることを鑑みると、答えは一つしかないことに彼は、そして後ろから見ていたキノは気づいた。

「そうか、あのエンブリオの能力は、ダメージの共有……！」

キノが気づいた通り、ヴィラのエンブリオのスキル、《二人の痛み》

は互いが受けたダメージを共有するスキル。このスキルには防御力など関係なく、一方がダメージを受ければもう一方も同じダメージを受けることになる。

これはつまり、ウイルスもまた相手に攻撃すれば自らもダメージを負うという諸刃の剣ではあるが……

「そろそろですかね……《フォースヒール》」

「あつ！ てめえ、きたねえぞ！」

【聖騎士】であり、【司祭】のジョブも持っているウイルスは自分で自分を回復させることが可能。

相手が回復手段を持たない限り……HPの残量にはどんどん差ができていく。ダメージを共有されても、回復は共有されない。

そうなると当然、相手はエンブリオの破壊を試みるのだが……

「ぐああああ！」

「ああああ。言ってますませんでしたね？ この鎖を断ち切ろうとする  
と、ダメージが跳ね返ってきますよ？」

必殺スキル、《誰も二人を引き裂けない》。エンブリオに対する全ての攻撃を反射するスキル。

これによって事実上エンブリオの破壊は不可能となる。発動には、あらかじめ一定量のダメージを受ける必要があり、ダメージの総量によって発動時間は変わるのが……

このダメージはストックが可能。そしてそのストックはスキル発動の際に一気に消費するのではなく、発動を保つためにストックから発動時間に応じてどんどん減っていく方式になっている。つまり……

「くそつ、くそつ、離せえ！」

「さあ……同じ痛みを感じましょう……？ あはっ、アハハハハハハハハハハツ!!」

相手が自分を攻撃してもダメージを受ける。自分が相手を攻撃してもダメージを受ける。

必殺スキル発動中でも、受けたダメージは再びストックされる。これではきりが無い。

したがってヴィラに勝つには、彼女の回復を止めるなどして、自らが死ぬより先にヴィラを殺さなくてはならない。あるいは逆に必殺スキルの維持ができなくなるまで時間を引き延ばしてからエンブリオを破壊するか。どちらかが必要になってくる。

しかしいずれの手段も、甲殻の〈マスター〉は持っていなかった。「か、数だ、数で押し切れ！」

甲殻の〈マスター〉は集まった徒党の中では上位の実力者。その人物が事実上封殺されたのだから残った面々としてはたまったものではない。

それぞれが散開しつつ自らのガードナーを解放し、人によっては武装させたり強化したりしてキノ達へと向かわせる。

しかし、それはどちらかと言えば悪手であった。

……TYPE：ワールドであるサリイの〈エンブリオ〉の範囲に、足を踏み入れてしまったのだから。

「わらわらと集まって来たわね……《私に傳け》」

サリイが発動させたのは《私に跪け》に続く第二のスキル、《私に傳け》。

効果は……範囲内における生物への【魅了】付与。精神系状態異常に対するレジスト装備をしている〈マスター〉の中には【魅了】を防いだものもいるが……その〈エンブリオ〉であるガードナーたちはと、いうとそうはいかない。

「み、【魅了】だと……!?!」

「さあ！ 私に傳きなさい！ 味方同士で争い合つて、生き残ったら蹴り飛ばしてあげる！」

数の有利が、一転して数の不利となる。

TYPE：レギオンの〈エンブリオ〉を操っていた〈マスター〉などは特に悲惨だ。数が多いとその分リソースが分散され、一体あたりの力は落ちる傾向にある。したがってその分抵抗力も弱い。サリイのスキルの本質は【魅了】ではないため、それに特化した〈マスター〉や〈エンブリオ〉と比べるとレジストされる可能性は高いが……それでも今サリイが対峙している集団相手なら十分であった。

【魅了】にかかった者たちは同士討ちを続け、残った者はサリイの宣言通り彼女自身や彼女が連れてきたへマスター〜によつて次々に倒されて行く。

そんな中……キノは、ガードナー相手には銃を向けて戦うことができていたものの、未だ人……へマスター〜に向かって発砲することをためらっていた。今彼女は事前の指示通り前線には立たず、後方からの射撃に徹している。

相手がへマスター〜なら死ぬことはない、そんなこと頭ではわかっている。なのにどうしても、その引き金が引けなかった。

(撃てる、相手はへマスター〜、なら撃てる……！)  
なのに手は震えて動かない。

予想以上に、自分がティアンを撃ち殺した……あの時の感触がぬぐえていないらしい。

あの時引き金を引いたことは正しいと今でも思っている。必要なことだったと自分に言い聞かせている。

なのに――

「う、動くな！　これ以上暴れるなら、このティアンのガキを殺す！」

突如響いた声。

全員がそつちをむくと、そこにはサリイ達の快進撃に怯えるへマスター〜の男性と、そのへエンブリオ〜らしき木の怪物トレント。そして怪物に拘束されている子供の姿だった。

「……人質だなんて、つまらない真似するじゃないの」

「う、うるさいうるさいっ！　本来なら、このガキは集落を落とすときに使うつもりだったのに……！　みんなやられちまつてるじゃねえ

かよ！」

騒ぎ立てる男を倒すことはたやすい。倒すだけなら、だが。

何が問題かと言われれば、やはり人質の存在だ。彼はサリイ達から300メートルほど離れたところにいる。ギリギリまで隠れていたらしいが、ただ逃げようとしても逃げ切れないのではと恐怖した結果人質を使つての逃走を考えたようだ。

事前の情報にはなかったことから、子供が彼らに捕らえられたのはごく最近のことなのだろう。しかし聞いてなかったからといって見殺しにするわけにもいかない。

「へ、へへ、そうだ。全部悪いのはこいつらなんだよ、こいつらが悪いんだ。俺が【獣王】にさえなれていたら、こんなことする必要なんてなかったんだから……」

さすがに、男も人質一人がいるだけでこの場にいる全員を倒そうだなんてことは思わなかったらしく、おとなしく逃げることを画策しているようだった。

サリイが受けたクエストから考えれば、徒党を壊滅状態に追い込んでいる以上、一人くらい逃してもいいのかもしれないが……

キノは考える。

もし彼を見逃した場合、人質にされている子供はどうなるのか？と。

どう考えても、ろくなことになるかわかったものではない。ならば

……

「い、いいか！ お前たち5人が何かしようとすれば！俺が死ぬより先に俺の〈ヘエンブリオ〉にガキを殺させるからな！」

……5人。

サリイ、ヴィラ、他3人……前線に立っていたメンバーは確かに5人だ。

だが、明らかに一人足りない。

そう……後方で隠れて銃撃に徹していた、キノが数に入っていない。

（ブラフ？ いや、相手にそんな余裕はない。だったら……！）



キノは気づかれていない。

ならば一瞬、ほんの一瞬でいい、時間を稼げれば。サリイがスキルを使うその隙さえ作れれば……！

「フウ………」

静かに、手を動かして弾丸を装填する。今まで使っていた狙撃銃は消音器が付いている。だから男はキノの存在に気付かなかったのだろう。キノは前線に出ずに隠れて狙撃を行っていた。「狙撃手」のジョブを持っていることをサリイが知っていたからこそその采配だ。ゆつくりと男に照準を向ける。

不思議と、先ほどまでの手の震えは消えていた。今狙っているのは人間だというのに。

先ほどの後悔は？ 恐怖は？ いったいどこへ行ったというのだ。

(……あ)

その刹那、キノは気づいた。何ということではない。

思い出せ。どうしてあの日。ティアンに向かって引き金を引いたのか。

「それが、必要なことだったからだ」

キノは、引き金を引いた。彼女が憧れた少女のように。

「ぐああ!?!」

遠くから放たれた銃弾が男の胸を貫く。即死はしなかったようだが、それでもエンブリオの指示を出すまでには至らない一瞬の隙ができた。

そして、その隙を見逃すほどサリイは甘くない。未だ男はエンブリオの範囲内から逃れられてはおらず……彼女は何も考えずに、必殺スキルを宣言した。

「《この領域では私が絶対》ア！」

「クソツッ！ ガキを殺せえ！ 撃ちやがったつ、ちくしよお！」

サリイのエンブリオの名は「絶対領域 デイストピア」。その特性は……”支配”。

《私に跪け》による重力と拘束も、《私に傅け》による魅了も、全て相手の体を支配するもの。

そして必殺スキルでは……体だけではなく、その力を支配する。

「お、おい！ 何で言うことをきかねえ！ 何で動かねえ!？」

範囲内の存在に対する「拘束」付与だけではなく……さらに一切のスキルを発動することができなくなる。

動けず、力も使えず、そして副次効果として従属キャパシティ内への命令権をも失う。

体も力も、配下すらも支配するスキル。それがサリイの必殺スキル。格上相手にはたやすくレジストされるといふ欠点があるのだが、超級職【蹴姫】であるサリイと超級職に至れなかった敗残者の男。どちらが格上かは言うまでもない。

「……あつ」

「よくやったわキノ！ ……それじゃ、あなたにはさよならつてことで」

男が何かを言うよりも早く、サリイのジョブスキルによる回し蹴りが男の頭を吹き飛ばした。

「いい狙撃だったじゃないの。これであなたも人をまた撃てるようになったのかしら?」

「ええ。今はもう……大丈夫だと思います」

「あつそ。それじゃ、報酬は渡したわよ。じゃあね」

ヒラヒラと手を振ると、サリイは踵を返しゆつくりと歩いていった。その後ろを、ヴィラがついていく。

キノの方を一度ちらりと見た後、頭を下げて微笑んでからサリイの後を追いかけていった。

二人の背中を見送るキノに、男性の「マスター」が声をかけた。

「まったく。姐さんも相変わらずだ……。キノさんも振り回されて大変だったでしょう」

「まあ、否定はしませんが……。それは一緒にいるあなたの方がよほど」

「でも楽しいからいいんですよ。楽しいから一緒にいるんです」

……興味本位で、キノは尋ねてみた。

「ちなみに、何が一番楽しいんですか？」

その質問に対し、男性は笑顔で答えた。

「美しい女性が進んで私を踏んでくれるなんて場所、ここしかありません。男冥利に尽きるというものです」

第31話 追いかける話 — Hard Days —

——何度も、壁は見てきたはずだった。

「遅い」

「うわあああつ?!」

——超級職に至った。

「今代の【修羅】に就いただけはあって剣筋は悪くないです。しかし、それでもまだ拙い」

——〈<sup>スベリオール</sup>超級〉にも至った。

『零様!』

「あなたの〈エンブリオ〉は命をかけた殺し合いでこそ真価を發揮する。だからこそ貴方は〃野試合無敗〃とまで呼ばれたのでしよう。たとえ勝てずとも、自分を殺した強者は死んでも殺すその妖刀の如き力で」

——だが、この壁はあまりにも高い。

「だからまあ、野試合とも言えないこの打ち合いではあなたの本領が發揮できずとも仕方ありません」

——命懸けじゃないから本領が發揮できていない? そんなわけがないだろう!

「……なるほど、これが噂に聞く《今際の靈姫》。あの子のように、〈マスター〉だから死ぬことを気にしなくていいのは助かります。手加減するのはどうにも苦手で」

——ああ。こんなにも高い壁が……

「では、少しでも力を上げます。もう間もなく死ぬでしょうから、全力で来なさい」

——彼女の“師匠”か……!

天地の中でも靈山として知られる場所、〈畏怖山〉。

ふもとは〈霞ヶ森〉などの危険な地帯が多い山で、とりわけ危険

なその山に登る人間などなかなかいない。

だが、そんな危険地帯だからこそ、修行のためにと向かう人間もいるのがこの天地という国だ。

そして、その危険地帯にログインした〈マスター〉が一人。

「ま……うわあっ！」

「ふむ。いい反応です。」

目的地に到着したとたんいきなり振るわれた刃を咄嗟に回避した雫はぜえぜえと息を吐く。

対して、下手人はなんら悪びれた様子はないように肩をすくめてみせた。

「ど、どうしてログインするタイミングが……」

「いえ、いつあなたが戻ってくるかなんてさすがに予測しきれません。早くとも3日後というのはわかっていましたが、それ以上はあなた次第ですからね。とりあえず待つていたタイミングでちょうどよく来たようなので試させていただきました」

もし雫が避けることができなければ、せつかくデスペナルティが明けたというのにまたデスペナルティによるログアウトが待つていたことだろう。

ちなみに、デスペナルティになっていた原因はもちろん目の前の女性である。

デスペナルティが明けた後、セーブポイントから少し離れたこの場所へわざわざ戻ってきたらこの仕打ち。

危うく死ぬところであった危険を回避し今もまだ心臓がバクバクと音を立てているような雫を気にすることもなく、下手人……御柱は刀を構えなおした。

「さあ、あなたも構えなさい。今回は私もステータスでごり押しした面があります。なので次は」

刀の構えを見て、雫はゴクリと息をのんだ。

今までの御柱の剣筋も確かに洗練されたものだったが……それだけではない。確かに以前手合わせした時の印象はSTR、AGI共に圧倒的な差を感じさせたが……今はその時以上の雰囲気を感じる。

それはステータスの話ではなく、もつと違う何か。

例えるならそう……【修羅】への転職クエストの際、立ち会った一人の男が雫の脳裏に浮かぶ。

あの老人と向かい合った時のような、達人と向き合うようなプレッシャーが雫に冷汗をかかせていた。

だが引くという選択肢はない。

キノを追ったところで、また負けては意味がない。彼女を追いかけるためには、彼女が師事したこの人物の修行を受けて彼女がたどった道を追うべきだ。

「先ほどとは違い、技術メインでいきますよ。才能のない私ですがまあ……多少は時間をかけて修行したので、そこそこの腕とは思っています」

才能がないだなんてどの口が言うんですかね、などと軽口をたたく暇もない。

瞬きのうちに御柱は雫との距離を詰め、雫へと刀を振るい始めたので雫も慌てて刀を抜いて対応する。

だが、雫の攻撃は当たらない。

今までは力<sup>STR</sup>で受け止められるか、圧倒的な速度<sup>AGI</sup>で避けられるか、であった。

それが今は全て丁寧に見切られたうえで対処されている。その対処も必要最小限の動きで避けたり、刀で受け止めるのではなく受け流されたりといった対処だ。

(明らかに技術で対応されてる……！　いくらティアンとへマスターへでは技術に差があるとはいえ、ここまであるものなのか……!?)

戦闘技術という一点において、基本的にへマスターへよりもティアンの方が優れていることが多い。

一番の理由は、時間だ。

戦闘技術というものは長い時間、訓練と実戦を通して成長していくものだが、へInfinite Dedrogramのサービス開始してから経過した時間はほんの数年。三倍加速時間を考えても、十年を少し超えた程度。

それに対して熟練のテイアンが費やした時間は十年では足りないのが大半だ。

(そしてこの人はあちこちで噂を聞く「師匠」！ 南朱門家でもお世話になった人がいたって聞いたけど、あの人は私よりも年上だった……！ だったらこの人の年齢、そして費やした時間はその比じゃない……！)

「なにか変なことを考えていませんか？」  
「ッ!？」

思考が引き戻される。

刀を振るう御柱に対し、雫は防戦一方となる。リアルでは運動すらできなかつた彼女が剣術をたしなんでいたわけではないのだから、これまで何十年も技術を磨いてきた御柱の技術にとうていおよぶわけがない。

だが、彼女に全く剣術の心得がないわけでもなかった。

「はあああああつー！」

「ほお……最低限の心得はあるようですね」

雫がキノと出会う前……まだデンドロを始めて間もないころ出会った一人の「マスター」、みどりがめ緑亀。

ある理由からひたすら戦いに明け暮れていた彼女は、思うところもあつたようで、右も左もわからない雫の面倒を見てくれたのだ。その際、リアルでも剣術をしているという彼女の指導を受けた。

刀と刀がぶつかり合い、金属音が鳴り響く。

だんだんと押され始めた雫の体に、ひとつ、またひとつと傷が増えていく。

傷つくこともいとわれないあたり、御柱の修行の厳しさがわかる。

「ほらほら、【修羅】になった技術はその程度ですか!!？」

「【神】じゃないん、です、からっ！」

もちろん、【修羅】に至るのは簡単なことではない。

【修羅】は【剣鬼】の先にある超級職。血に塗れ、戦いに身を置く剣士の至る果て。強者でなければ就けるジョブではないし、強者なら就けるジョブでもない。

雫がこのジョブに就けたのは、正直なところへエンブリオの存在が大きい。雫が【修羅】になったのは彼女が〈超級〉になった後である。

だからこそ、彼女にとって一番の武器であり、頼れる力は言うまでもない。

「タマアアアアア！」

『はい、雫様！』

彼女の〈超級エンブリオ〉、【怨霊憑姫 タマズサ】が雫の持つ刀に宿る。

以前の手合わせでは《今際の霊姫》のスキルまで使わされた雫だったが……だからといって、その時全ての手札をさらしたわけではない。

「《朧月》なら通じませんよ。刀で防げなくても私なら反応できますから」

「そんなつもりは、ない、ですよ……！」

前回まさに《朧月》での攻撃にカウンターを食らって腕を斬り飛ばされた雫。もちろん、通じない攻撃を闇雲に繰り返すような彼女ではない。

刀を振り下ろし、それを御柱がなれた手つきで受け止めようとしたとき……！

「《濁れ村雨》」

(今までとは違うスキル……いったい何を……っ!?)

刀と刀がぶつかったその瞬間、御柱の持つ刀が呪いに汚染されている。

これこそはタマズサの固有スキルの一つ、《濁れ村雨》。

武器をはじめとした雫の装備に宿るタマズサの力が、他者の装備にも影響を及ぼすまでに成長した結果のスキルである。効果は【暗黒騎士】の《告別の黒闇》とほとんど同じ。しいていうなら《告別の黒闇》よりも効果は高い。

もちろん制限はあり、発動の際はタマズサが憑依した装備で相手の武器に触れる必要がある。また、呪いを流し込むというものではなく



タマズサが直接移り、憑依するスキルであるために対象は一つだけだし、相手の武器を呪っている間は《朧月》や《所業無情》必殺スキルなどの固有スキルは使えない。例外は《今際の霊姫》くらいだが、もちろん《今際の霊姫》が発動した時点で呪いは解除される。

呪われた装備を持ち続けていては御柱の方に動作制限やHP減少などの不利益が発生する。

咄嗟に刀から手をはなした御柱であったが、その行動は雫にとって予期していた行動。

すぐさまタマズサを自分の刀に憑依させなすと、第一の固有スキルを発動させながら、御柱の左腕を斬りつけた。

「《怨、返、し》おんがえ いっ！」

「く、うっ」

受けたダメージをコストにして任意の呪怨系状態異常を与えるスキル。今回は低いコストでも発動できる分効果が上乗せできる【呪縛】を選んだ。

動けなくなれば、これで勝利は――

「――《輪廻展成》」

御柱から、状態異常が消えた。斬りつけられた時の傷も消えた。

それは再生というレベルではない。戦う前の最初の状態に戻ったかのようなスキル。

何が起こったのかわからず、雫の意識に一瞬の空白が生まれたのを

御柱は見逃さなかった。

雫の足を払ってバランスを崩し、体勢が不安定になった雫の腕に打撃を入れて刀をその手から叩き落とす。

「頭が真っ白になるのは減点ですよ」

(格闘、術……!?)

最後に腹部に叩き込まれた拳の一撃で雫は倒れ伏した。

本来なら死んでもおかしくない。御柱がその気になれば今の一撃でどめをさすこともできただろう。

しかし、そこはあえて手加減した。

「私の上級職、【師範】のジョブスキルで最低限のダメージにとどめておきました。汎用スキルなので私でも使えるのは便利なのですが……いかんせん稽古をつけているとスキルを発動させる前に勢いで倒してしまうことも多くて」

「それでキノさんは何度も死ぬ羽目になったんですね……この前の私も」

「ティアン相手にはそのぶんかなり気を使うんですがね。へマスターへ相手だとやはり楽です」

微笑む御柱だったが、一方で結局御柱には手も足も出さず負けてしまった雫はそのままごろんと地面にあおむけで転がった。

また負けてしまった……と。もちろんあくまで修行であり命の奪い合いではなかったのでもここまでシヨックは大きくなかったが、それでも負けていい気持ちになどなるわけがない。

「何が才能がない、ですか。最後の渾身の一撃だって、結局回復されてしまつて。しかも思い出してみたら、最後以外一つもスキル使われてないじゃないですか。」

「才能がないのは本当ですよ。現に私は上級職2つに下級職3つ、計350レベルまでしか器がありませんでしたから」

「えっ」

「まあ、ジョブに関して言えば特定の系統には適性があつたようですよ。でも戦闘系のジョブはほとんどダメですね。だから戦闘系のジョブスキルは使わなかつたんじゃないやなくて使えなかつたんですよ」

そこで口を閉じた御柱だったが、戦った雫にはわかる。

以前手合わせした時のあの高いステータスはどう考えても350レベルのものではない。彼女が何か別の力を持っているのは確実だ。雫は《看破》で御柱のステータスを完全に見ることができなかったが、それでも何かしらの超級職には就いていると確信していた。

そもそも、そこまでレベル差がなければ《看破》できないわけがない。

疑いの視線で見つめていたせいも、御柱はやれやれといった顔でためいきをついた。

「……………」

「…………ええ、そうですよ。お察しの通り超級職には就いています。霊媒師系統超級職、【霊媒姫】。戦闘系ジョブの才能がない私でしたが、《霊媒》によって多くの実力者をこの身に宿し、技術をその身で学びました」

「《霊媒》、ですか」

《霊媒》スキルは自らの体に霊を招き入れるスキル。霊が持つ技術やスキルが使えるようになるが霊が体の操作権を持つので自身では体を操作できない。ゲーム的に言えば霊による自動操作になる。

確かにこれで、御柱の戦闘技術に関しては説明がつく。

だが、御柱の説明だけでは雫は納得できなかつた。

まずスキルは使えてもステータスまでは再現できない。だから高ステータスに関しての謎は残ったまま。

さらに言えば、最後に御柱が使ったスキル、あれは果たしてジョブスキルだろうか？

【霊媒師】については御柱も知っているが、《霊媒》は人の霊しか効果を発揮できないはず。だからジョブスキルとしか思えないのだが、何か違うような違和感があった。

しかしあの一瞬だけ《霊媒》を使ったとも思えない。

気になると言えば、もう一つ。

彼女の左腕を斬った時、服の下に見えたその肌には……爬虫類のような鱗があるように見えた。今となつては復元した服によつて隠さ

れているから見ることもかなわないのだが。

考え込むようにしている雫の頭に、御柱は拳骨を落とす。

「でっ」

「考察はそこまでにしておきなさい。私とて全てを明かすつもりはありません。それより、次の修行を……」

彼女は今日も、キノという好敵手を追いかける。

好敵手がたどった道を、一歩ずつ、しかし確実に、歩み続けて追いかける。

「今日は《危険察知》を鍛えましょう。とことん逃げてください。追いついたら殺します」

「うわああああああああああ!!」

ただし、“師匠”に追いかけられるこの恐怖体験までは、追いかける必要はよかったと強く思った。

第32話 信じていた話 — Prayer for

P a s t —

昼から夕方へと太陽が動き始めた時間帯。

女性は、ログインしてくるとゆつくりと周りを見渡した。

昔とは変わり果てた光景。目を閉じれば思い出せるあの光景も、目を開けてみれば誰もいない、荒れ果てた寂しい情景が見えるだけ。

「……………」

女性は、賑やかな声が聞こえないことを寂しく思った。

この気持ちを抱いたのは、もう何回目のことだろうか。全てが変わってしまったあの日から、女性は何度も繰り返している。

女性の視界の中で、ひときわ目立つぼろぼろになった建物。女性にとってはこの日々の日々は何よりも大事なものだっし、あの明るく平和な日々がずっと続くと信じていた。

「そろそろ、行きましようか」

目指すは——講和会議。

さらに言えば、今はまだ講和会議の前。彼女が目指しているのは、講和会議を目指す皇国の代表やへマスター達であった。

何のために？ その理由は至ってシンプルである。

——講和会議の妨害。

より正確に言えば、講和会議を破綻させることが彼女の目的であった。

そのために、皇国のへマスター達も……必要であれば、皇国のテイアンも。全て、殺すつもりでいた。

【獣王】の存在は聞いている。へ超級へならざる自分が太刀打ちできるはずもないだろう、とは理解している。

だが、それは……諦める理由にはならない。

そう決意し、歩みを進めようとしたところで……

「そこで止まってください。スキルを行使しようとするればその時点で撃ちます」

後ろから声をかけられた。カチャリという、撃鉄を起こす金属音と共に。

女性がゆっくりと振り向くと……そこには茶色いコートを着た少女が、まっすぐ銃を彼女へと向けて立っていた。

少女の顔を見ると、女性はわずかに笑みを浮かべる。

「……キノさん、でしたね。お久しぶりです」

「……ええ。お久しぶりです、エリーゼさん」

エリーゼと呼ばれた女性の笑顔は、どこか弱弱しく、そして痛ましげだった。

キノが旅を始めて間もないころ、二人はかつて出会ったことがあった。それがこのような再開になるとは、両者ともに思ってもいなかった。

キノが向けている銃やコート、ブーツといった特典装備を見て、エリーゼは優し気に声をかける。

「ずいぶんと成長されたのね。特典装備を複数持っているなんてすごいわ。きつと、たくさんの修羅場をくぐってきたのでしょうか？ その姿をみればわかるわ」

「そう、ですか。ボクは……あなたのそんな姿を、見たくはありませんでした」

昔と比べて、充実したキノの装備や姿と比べ、エリーゼの今の姿は昔と比べ大きくそのありようを変えている。

かつては聖職者の姿にエプロンをつけていたものだが、いつもつけていたエプロンはもはやどこにもなく、代わりにボロボロの外套を纏っていた。額には以前つけていなかったようなサークレット。

そして彼女の表情は、かつてたくさんの子供に囲まれ浮かべていた笑顔と違い、目の下に隈があるような、疲れはてた笑顔となっていた。「……質問があります。あなたは、これからどこに行くつもりですか

？ 何を、するつもりですか」

「私に銃を向けているということは、もう予想がついているのでしよう？。」

穏やかな表情に、キノはコクリと頷きを返す。

「でしようね。私がドライブ皇国に指名手配されているのなんてわかってるもの」

「でもあなたはここにいます。いくら皇国が実効支配しているとしても、ここは……旧ルニングス公爵領のセーブポイントは、まだ王国に帰属しているから。だから、あなたはここにいます」

「そしてあなたは、どこに帰属しているわけでもない旅人。でも、かつては皇国にいたへマスター。だから、あなたはここにいます。どうかしら？。」

今でこそ王国メインで動いているキノだが、あくまで今の話であり彼女は旅人だ。

そしてエリーゼの指摘も正しい。キノが今ここにいるのは、フランクリンを通して皇国から依頼を受けたからである。

彼女は皇国では、大量の器物損壊、及び農作業の妨害の罪で指名手配されている。

具体的に言えば。エリーゼは、旧ルニングス公爵領という土地において皇国が農業を進めようとしたのを徹底して妨害したのだ。

凶作が続いている皇国にとって、王国領であった土地で農作物を育てるのは急務と言える。それを妨害され続けてはたまったものではない。

「エリーゼさん。そこまでわかっているならこれ以上の説明はいりませんよね。あなたがしようとしていることを、見過ごすことはできない」

「だから退けと？ それができればどんなに……気が、楽だったか」

大きく息を吐くと、エリーゼはキノに向き合った。

胸に手を当てたまま、エリーゼは訴えるかのように、祈るかのよう  
に言葉を紡ぐ。

「私に退く道はありません。帰る場所も、帰りを待つあの子たちも

なく」

「ですが、それでも」

「——それでも私は抗い続ける」

「……しまったっ、まさか!」

バアン!

すぐさまキノは引き金を引いたが、放たれた弾丸はエリーゼの体を貫く前に、彼女の前にある見えない障壁に弾かれた。

キノが二発、三発と撃ち込むうちに障壁はひび割れていくが、その数秒があればエリーゼには十分。

「あなたに勝って願いを遂げるために。主よ翼を与え給え」

先ほどからエリーゼが口に行っているのは祈りの言葉を、思いの丈を呪文とした《詠唱》。主に魔術師系統のジョブが使うスキルであり、MPを込めて詠唱することで魔法スキルの威力をあげたり、範囲を拡張するスキル。

しかし、先ほどの障壁はともかく……今の《詠唱》で、エリーゼの背に光の翼を作り出したのは魔法スキルではない。

翼で空中へと飛び上がったエリーゼを見上げ、キノは歯噛みして彼女が何を使ったのかを察する。

「それは、魔法じゃない……まさか、特典武器のスキルですか!?!」

「はい。【光翼十字 フェルザーヌ】。翼を作り、飛ぶまでの装備で攻撃スキルは引き継がれなかったようですが……そちらは、私で十分です」

首に下げた十字架のアクセサリの特典武器を握ってエリーゼは告げる。

この装備のスキル、《光翼飛翔》はMPを消費して翼を作り、高速で飛翔するスキルである。元となったへUBMはこの光の翼によって高速で飛翔するだけでなく、数多の光線や光弾を放ってくるエレメンタルだった。その攻撃スキルが失われた分、翼での飛翔にリソースがそそがれている。したがってこの特典武器は装備補正として高いAGI補正を持つだけでなく、唯一の装備スキルである《光翼飛翔》により、後衛型のビルドであるエリーゼであっても、AGI型前衛職と



同様の機動力を持つことが可能となる。

そして……その効果をさらに後押しするのが、彼女の《詠唱》であり、〈エンブリオ〉である。

「私の〈エンブリオ〉については、ご存知でしたよね？」

エリーゼの〈エンブリオ〉はTYPE:ルールの「出祈斉唱 ゴルゴタ」。詠唱に特化した〈エンブリオ〉。

スキルの一つ、《祈る先を知らず》によって、魔法スキルに限らず、MPを使うスキルには全て《詠唱》の効果を乗せることができる。これによって上級職、いや超級職レベルのAGIに至る。

さらに《詠唱》には他の固有スキルの効果が乗るため、彼女が放つ魔法スキルは強大だ。

「ええ、よく知っていますよ……っ！ ヘルメス！ 出てきて！」

「あの子らに捧ぐ光となれ！」 《ブラスト・レイ》！」

紋章から自分の〈エンブリオ〉であるバイクに跨るキノに向け、エリーゼは容赦なく光属性の魔法スキルを放つ。

しかし、彼女の魔法はいくら《詠唱》を込めたと言えど、その威力が桁違いすぎた。本来なら銃弾くらいの直径のスキルなのに、キノの体を丸々飲み込んで蒸発させかねないほどの大きな光線となって放たれる。

「《ギアシフト》、《世界を駆ける旅人》！」

地上にいたままでは高速で空を飛ぶエリーゼに対処できない。ましてや、相手は《詠唱》と〈エンブリオ〉で増幅された強力な光魔法を使ってくるのだ、銃を武器とするキノではとても魔法は防ぎきれない。

だからこそ、同じレベルのAGIを得られなければ太刀打ちできないと判断して必殺スキルの発動に踏み切った。

《行路適応》も併用することでキノは空中を駆けることが可能となる。事実上、空中での高速戦闘となった。

二人は空を飛び回りながら、あるいは駆け回りながら、互いの攻撃を相手へと向け放つ。

やはり一撃一撃が大きいのはエリーゼ。〈エンブリオ〉で強化され

た《詠唱》により、一撃の魔法スキルの威力が大幅に上がっている。さらに《エンブリオ》の固有スキル、《楽園の祈り》によつてMP消費量も一部減算されているため、大幅にコストパフォーマンスが上がっている。

一方、キノはどうしても火力という点では一步劣る。彼女の持つ特典武器〔ガルカノン〕は防御力の高い相手には大きく有利だが、エリーゼはもともと後衛型。防御力は最初からあまり高くないので意味がないのである。そのため、現在は追尾性のある〔森の狩人〕を中心に発砲している。こちらだと無理な角度でも補正が入るため、直線的なエリーゼの魔法を避けて攻撃できたりするのだ。

銃声と爆発音が響く中、キノは大声を張り上げる。

「どうして……どうして講和会議を妨害するつもりなんですか！」

「簡単な話ですよ……この講和だけは認めるわけにはいかない！ どうしても！」

「きつと悲しみますよ……あの子たちも、ミユルルちゃんも、ホワイトキャップさんも、チャイルドビュースさんも！」

その言葉に、エリーゼの顔が歪む。

脳裏によぎるのは、面倒を見てきたたくさんの子供たちの顔。そして、時にそれを手伝ってくれた《マスター》達の顔。

「なぜ、止まれないんですか！ この土地に皇国が侵攻してきたからですか！」

今でこそこの土地を実効支配しているのはドライブだが、そもそもこの土地が滅びに瀕したのは《SUBM》である《三極竜 グローリア》による襲撃が原因。ドライブはあくまで、その後の第一次騎鋼戦争の際に滅んだこの地に侵攻してきたにすぎない。

「否定はしません、だが……それだけじゃない！ 私の願いは、ただ私のためのもの！」 《ブラスト・レイ》！

確かに、グローリアの襲撃から回復しきれなかったこの地に侵攻してきた皇国のことをエリーゼは許せない。

しかし、それは指名手配になるまで旧ルニングス公爵領における皇国の農作業を妨害しようとした理由ではあるが、講和会議を妨害する

理由にはならない。

彼女が行動に出たのは、もっと単純な理由にすぎない。

「講和会議が成立してしまえば……今度こそ、ここが皇国になってしまおう！」

それだけは、許容できなかった。

ここで……かつて教会の手伝いをしながら面倒を見てきた子供たちが眠る場所は、皇国になってしまう。

何より、ここが皇国になってしまえば、エリーゼはここにいられなくなってしまう。今はセーブポイントが王国のものであるからこそ、何度殺されてもこの地で復活ができる。

しかし、講和会議において王国が譲歩するとすれば……旧ルニングス公爵領の放棄。これが一番現実的だ。不作が続き大至急農耕地を求める皇国に対し、王国は滅んでしまった旧ルニングス公爵領を必要としてはいない。

キノは知らないことであつたが、事実王国の代表であるアルティミア第一王女はこれを講和の譲歩内容として決めていた。

「だから私は譲れない。譲るわけにはいかないのです。“絶対に譲れない、あの子たちとの思い出が、この地での思い出が、私の胸にある限り！” 《レイズ・レイ・ブレイズ》！」

エリーゼが腕を振り上げると、その背後に数多くの光の剣が現れ、キノへと切っ先を向ける。

もちろん、本来のスキルであれば数はそこまで多くない。威力だけでは捉えられないとエリーゼが範囲・数を重視して《詠唱》した結果である。

「この、数はっ」

「これはきつと……幾度となく繰り返し、思い返し続けた思い出の数です」

もちろん全ての数を把握してそう言ったわけではない。ただ数え切れなかったからそう言っただけ。

子供たちを殺された怒りをグロリアにぶつけようにも、クレームルでは全然歯が立たなかった。そしてデスペナルティから戻って来たころには、全てが終わっていた。

……ぶつける先がもうなかったのだ。胸の中にくすぶる思いも、怒りも。だから戦争後、皇国にぶつけるしかなかった。

「これで、終わりです」

キノへと腕を振り下ろすと同時に、無数の光の剣が、キノへと飛んでいく。いくらこれまで超高速で駆け回っていたキノでも、これは避けられまいというのがエリーゼの考えだった。彼女の姿が光の中に飲み込まれて行くのを見つめながら、若干の申し訳なさを感じて背を向けた。

向けてしまった。

「……ゴホッ!？」

突如喉元に穴があき、傷口や口から溢れる血。痛覚をオフにしているため、痛みはないが言いようのない違和感が苦しさと一緒に溢れてくる。

振り返ってみると、そこにあるのは今までと違い、銃口から煙が流れる大きな狙撃銃をこちらへと向けるキノの姿だった。

(どう、して)

「あなたがボクと別れてから特典武具を手に入れたように……ボクのこのコートも、特典武具です。【紫苑界套 エリクシア】。この装備の固有スキルの効果は、遠距離攻撃や数による攻撃の威力減衰です。距離が遠いほど、こちらへ向けられた攻撃が多いほど、その威力は反比例します。」

つまり、エリーゼが最後に放った無数の《レイズ・レイ・ブレイズ》はその数故に、かえって威力を減じることになってしまったのだ。そこをキノは【FLT】……へ叡智の三角へ謹製ライフルでエリーゼを狙撃した、というのが真相である。

喉元を狙ったのはエリーゼの要である《詠唱》をさせないため。

「さすがはフランクリンさんのクラン。実戦で使ったのは初めてだけ  
どすごい精度だ……」

王国1位のクランに大金を出させて作っただけのことはあった。  
しかし……ここで銃へと視線を下ろしたのはキノのミスだった。

つい先ほど、相手が同じように油断したところを攻撃したというの  
に。

『主よ、この身を捧げます』

「ッ!? まさか、喉を撃ち抜いたのに!?!」

喉を撃ち抜いたからもう《詠唱》はできない……これはキノの思い  
込みだ。

ドライフのへマスター達と何度も戦った中で、エリーゼは《詠唱》  
ができなくなったら何もできないということは身をもって知ってい  
る。だから、すでに対策をしていた。

額につけたサークレットは口で話せなくても会話することができ  
る《腹話術》の装備スキルを持つ。さらに、エリーゼは【死兵】のサ  
ブジョブにも就いていた。

これにより、エリーゼは今……喉を撃ち抜かれ、本来なら傷痕系状  
態異常で死んでいるにも関わらず、必殺スキルの発動と《詠唱》を可  
能にしていた。

この必殺スキルはエリーゼのステータスを極限まで削って発動す  
る。ジョブがない状態のステータスまで削り取った分、そのリソース  
をMPへと変え、さらに最高効率で《詠唱》へと流れ込み、最期の魔  
法の効果を極限まで跳ね上げる。

『私から全てを奪った、あの邪竜の如き光を今、ここで!』  
「っ、のおおおおお!」

二人は互いへと奥義を発動させようとし、そして——一人のへマス  
ターが、講和会議へとたどり着くことなく光の塵となった。

相手のサークレットごと頭部を撃ち抜いたもう一人のへマスター  
は、MP切れのため空中から地上へと真っ逆さまに落ちていった。

この戦いに勝利はなかった。何かをもたらされたわけでもなかった。

それでも、この戦いは必要だった。

光の塵となったへマスターへにはかつて、信じていた未来があったのだから。

### 第33話 信じている話 — Prayer for

#### Future —

見る限りの草原地帯。

たくさんの草が風になびいて揺れている中、一台のバイクが走っていた。

『ずっと草原ばかりー。ほんとにこの先にあるの?』

「ああ。なにセルニングスは“草原都市”って呼ばれてるらしいからね。これだけの草原が広がっていても、何の問題もないさ」

皇国を出てまだ間もないキノは、アルター王国北西にあるルニングス公爵領へと訪れていた。

比較的温暖なこの地域は王国内でも有数の穀倉地帯であり、見渡す限り植物が目の前に広がっている。しばらく進んでいくと、青々とした草原の中心に都市が見えてきた。

「見えてきたよ」

草原都市ルニングスは、自然と街が一体になったかのような、違和感を感じさせない街であった。

自然があふれるだけで田舎というような印象は一切ないし、逆に建物だらけで都市周囲の草原から浮いているというようなこともない。

まさに、「草原都市」という名がふさわしい場所だった。

「綺麗な場所だね、ヘルメス」

『そうだね、いい場所なんじゃない?』

バイクの〈ヘンブリオ〉に乗ることなく、ゆつくりと手で押して街を回る。

のどかな日差しがさすなかで、人々の声も聞こえてくる。

一通り街を見て回ろうかとも思ったが……少し懐が寂しくなっていたことを思い出した。

「……しまった、お金がない」

『あーあー。調子に乗って前の街で買いあさるから』

「控えればよかったって？ ヘルメスの整備用アイテムもなかった方がよかったかな？」

『それは仕方ない。買い物は大切なことだよね』

そんな言葉を交わしながら、一人と一台は冒険者ギルドの建物を目指して移動していった。

冒険者ギルドは思ったよりは混んでいなかったが、それでも依頼を受けようとするへマスターやティアンが大勢いた。

すでに複数回冒険者ギルドを利用したことがあるキノは、今回もいい依頼がないものかと魔法のカタログをペラペラとめくっていく。

キノは王国に來たばかりで、皇国にいたところにカンストまで上げたジョブといえば【操縦士】や【整備士】くらいだ。今は【銃士】も少しずつ上げてはいるが、【騎兵】は最近とったばかりのため全然レベルが上がっていない。したがってキノの合計レベルは200もない。おまけにほとんどDEX寄りのためろくにAGIが上がっていない。幸い、へエンブリオであるヘルメスの《走行》スキルは《操縦》などがなくても使用できるため、今まで速度が必要な相手はヘルメスに乗りながら銃で撃っていた。

「うーん……」

そのため、難易度が高いクエストは対象外となる。賞金首となっているへUBMなどもってのほか。

これからこの町を出るのであれば配達系のクエストでもいいかもしれないが……来たばかりなのだからできれば避けたい。

したがって、このあたりのモンスターを一定数討伐したり、素材を集めるといった難易度1、2程度のクエストを見て考えることにする。

「よし、これにしよう」

考えた末に、手ごろそうなモンスターの討伐、ならびにそのモンスターの素材を納品するクエストを選ぶ。

カタログのページを開いたまま、カウンターへと持っていき受注し



ようと受付の人へと声をかけた。

そのまま希望するクエストを告げ、受注しようとしたのだが。

「ち、ちよつと待ってください、そのこのコートの人！」

後ろから声をかけられ、振り返ると女性が自分でも戸惑ったような顔でキノに手を伸ばしていた。

聖職者のような服装になぜかエプロンをつけていた彼女は、自分の状態に気付くと顔を赤くしてわたわたと手を振った。

「あ、その、すみません。聞こえたのですが、あなたが受けようとしていたクエスト……よろしければ、ご一緒させていただけませんか」

「え？」

申し出た女性の〈へマスター〉によると。

キノが受けようとしていたモンスターは群れるため数が多いのが難点だが比較的狩りやすく、その報酬からして彼女も狙っていた。しかし一人で数を狩るといえるのは正直時間がかかる。そこへ同じ依頼を受けようとしていたキノの言葉が聞こえてきたので、パーティを組めないかと思っただけそうだった。

特に素材に関しては納品数に応じた歩合制の報酬だったため、一緒に狩りができればその分報酬も稼げるのでは、と女性はキノに申し出た。

キノは少し考えた後、まあ時間も短縮できて稼ぎも増えるなら、と女性の申し出を了承した。

そのままキノは二人でクエストを受ける手続きを済ませ、冒険者ギルドを出た。

街を歩きながら、女性はキノへと握手を求め手を出す。

「それでは、改めまして。【魔術師】のエリーゼです」

「【銃士】キノです。よろしくお願ひします」

これが、エリーゼとの出会いである。

街を出ると、エリーゼは装備を変更していかにも魔法使いと思えるローブ姿になった。

「一気に【魔術師】らしくなりましたけど……どうしてエプロンとかしてたんです?」

「ああ。私は普段、教会で子供たちの世話をしているもので……」  
「なるほど。それであるの恰好」

聞けば今回お金が必要なのも、子供たちのご飯を作るためなのだからか。

もちろん教会の話なのだからそこで食費はあるのだろうが、エリーゼは少しでも子供たちの力になりたいのだそうだ。

彼女だけではなく、ホワイトキャップ、チャイルドビューといった〈マスター〉も手伝いをするところがあるらしい。ホワイトキャップに關しては王国中を飛び回っているためあまり来れないそうだが。

話も終わり、街の外で目当てのモンスターを見つけるとそこからの行動は早かった。

キノはヘルメスに乗って銃で撃ちぬいていく。そしてエリーゼは、《詠唱》を使って範囲を広げつつ、モンスターを魔法で狩っていった。

キノが何度か銃弾を入れ替えた頃、二人ということもあつてか思っていた以上に早く群れを一掃することができ、二人は帰路についていた。

「さすがに早かったですね。正直、ボクよりもエリーゼさんの魔法がすごかった気がします」

「そう言ってもらえると嬉しいですが。でも、私だって数を相手にするのは大変です。キノさんにフォローしてもらったおかげで《詠唱》する隙が作れましたから」

エリーゼが言うには、彼女の〈エンブリオ〉は《詠唱》を強化するものだという。【魔術師】にとっては垂涎ものの〈エンブリオ〉だが、本人としては「どちらかというと、魔法というよりは言葉を〴〵口にすること〴〵だから私の〈エンブリオ〉として出たんじゃないでしょうか」とのこと。

思い返してみれば、エリーゼの《詠唱》は祈りの言葉が多かったように感じる。普段リアルで祈りを口にすることが多いのだろうとキノは思った。

その後、冒険者ギルドについて報告を済ませ、報酬を受け取る。当初一人で受ける予定だったが、それ以上の報酬が得られ自然とキノの頬は緩む。

そのまま、エリーゼとは別れるかと思ったが……エリーゼにせっかくだからと教会へと誘われた。子供たちに旅の話をしてほしいし、よければ食事も一緒にどうかと。

キノとしては特に断る理由もなかったため、エリーゼの言葉に甘えることにした。

サブジョブで【料理人】もとっているというエリーゼの料理は十分おいしかった。子供たちもまた、彼女の料理をおいしそうに食べていた。

子供にじゃれつかれるのは慣れないが……それはもともと子供慣れしていないキノにとっては仕方のないことだった。

そんな明るい子供たちの様子を見て、エリーゼは穏やかに微笑む。

この教会は養護施設としての側面がある。親を失くしたりした子供が身を寄せている場所だ。ティアンはへマスターと違って死んだらそこで終わり。だからこそそういった子供たちも出てくる。

「ありがとうね、キノさん。子供たちと一緒に笑ってくれて」

「え……？」

「子供たちにとっては楽しい思い出ができる。それってとっても大切なことなのよ？」

エリーゼはリアルで子供がいるわけではない。しかし、このデンドロ世界において面倒を見てきた子供たちは、まるで自分の子供たちのようであった。

だからこそ、彼女はここにいる子供たち全てに幸あれと願う。

「この世界のティアンにも人生がある。それは私たちへマスターと同じ。彼らが成長していくうえで、思い出っというのはとっても大事」

「……………」

「だからこそ、私は彼らの未来が輝かしいものになると信じて

いる」

彼女は信じている。

子供たちの笑顔は、きつといつまでも――

「夢、か……」

地球・某所で、うたた寝していた女性はゆっくりと目を開けた。  
それは、懐かしい日々。

我が子のように思っていた子供たちの未来が、輝かしい未来があると信じていたあの頃の記憶。

今はもう戻れない、大切な記憶。

「……行かなくちゃ。皆のために。私のために」

死んだような目で、彼女は幸せな思い出と、そして残酷な現実がつまった世界へとつながる機械を手取る。

彼女は再び、*Infinite Dndrogram*の世界へと舞い降りる。

彼女を待つ者が、もう誰もいないとしても。

昼から夕方へと太陽が動き始めた時間帯。

女性は、ログインしてくるとゆっくりと周りを見渡した。

昔とは変わり果てた光景。目を閉じれば思い出せるあの光景も、目を開けてみれば誰もいない、荒れ果てた寂しい情景が見えるだけ。

「……………」

女性は、賑やかな声が聞こえないことを寂しく思った。

この気持ちを抱いたのは、もう何回目のことだろうか。全てが変わってしまったあの日から、女性は何度も繰り返し返している。

女性の視界の中で、ひととき目立つぼろぼろになった建物。女性にとってはここでの日々は何よりも大事なものだっし、あの明るく平和な日々がずっと続くと信じていた。

「そろそろ、行きましようか」

目指すは——講和会議。

### 第34話 予測できない話 —Equity—

賭博都市・ヘルマイネ。

カルディナにあるこの都市には、賭博場が密集している一角がある。

ここにある賭博施設はカルディナの商人だけでなく、各国の組織が出資しており、出資した組織によってその国らしさが建物などに現れている。

もちろん、その出資組織は健全な商人から裏社会の組織まで様々、だ。

このような施設に裏社会の組織が関わっているようが、カルディナは関知しない。

国が定めている一定の税金さえ納めていれば、何を咎められるまでもない。カルディナにとっては収入先であり、客にすぎないのだから。

逆に言えば、それを払っていないければこの国では生き残れない。

金があれば全てを許す。金がなければ全てを失う。それがカルディナだ。

「さて。用意はいいかな？」

「……ええ」

そしてここにも一人。金がないから追い詰められている一人の〈マスター〉がいた。

彼女の名はキノ。各国を旅している〈マスター〉である。

彼女はつい最近、とあるクエストを受けたのだが……突如現れた〈UBM〉により、クエストに失敗してしまった。

そのクエストとは配達系に分類されるクエスト。配達期日に遅れるだけではなく……〈UBM〉に襲われた際にアイテムボックスを壊され、その品物を失ってしまったのだ。

キノが品物を意図的に横領しようとしたわけではないことは、『真偽判定』などを用いた取り調べによって証明されている。なので指名手配などの処分は免れている。

が。それで災難でしたね、で終わらないのが悲しいところ。

いくらアクシデントがあつたとはいえ、品物を届けるのが遅れただけではなく紛失までしてしまったのだから、発注者側から損害賠償を求められたのだ。

先に言っておくと、これでも発注者側はかなり配慮している。遅れによる損害の請求は最低限で、ほとんどが品物の料金。だが、これも合計金額はかなり高額であつた。

しかし運の悪いことに、キノは金欠だつた。むしろ所持金が少なかつたからこそクエストを受けたのだ。

配達系のクエストを受けたのも移動に特化した〈エンブリオ〉を持つため、得意分野でこれまで何度も受けていたから。キノとしてもできるだけリスクは抑えようとしていたのだが……〈UBM〉の襲撃は運が悪かつたとしか言いようがない。

請求書を渡されて途方に暮れていたところに、たまたま事情を聴いていた一人の〈マスター〉がキノへと話しかけた。

『その代金、アタシが立て替えてあげようか？』

声をかけたのは、カルディナでは有名な〈マスター〉の一人。確かに彼女であれば今回のキノの損失を埋めることなどたやすいもの。

その女性は赤い髪をしており、下はホットパンツ、上はビキニのようなインナーにフライングジャケットを羽織っていた。また、彼女の右目は左目と違って万華鏡のように輝いていた。

彼女の名は【撃墜王】A R・I・C A。カルディナ最強のクラン〈セフィロト〉に所属する〈超級〉の一人。

しかしもちろん、タダでそんな話があるわけがなかつた。

『もちろん、タダでわけじゃないけどね？』

『……ボクに、何を求めるんです？』

『いやーたいしたことじゃないよ！ ちよつと仕事を手伝ってもらうくらいかな！ あ、あと夜に少しいいことしようぜ！』

嫌と言いたいが断るわけにもいかない。話は大金に関わってくるのだ。

そしてAR・I・CAも、お金を盾にしてキノに無理強いをしたいわけではない。なので提案されたのが……ギャンブルだった。

キノが勝とうと負けようとAR・I・CAがお金は立て替える。その上で、AR・I・CAが勝てばAR・I・CAの要求を受け入れる。キノが勝てばノーリスクで代金を立て替えてもらえる。そういう勝負に決まった。

しかし……この勝負、どう考えてもキノが圧倒的不利であった。

（彼女の〈エンブリオ〉……詳細は知られてないけど、彼女がどんな攻撃も回避する、優れたマジソギアの操縦士であることは有名だ。〈エンブリオ〉によってもたらされる絶対回避。それが《危険察知》の上位みたいなものであるなら）

キノは噂で聞いたことがある。AR・I・CAは、カジノで大金を稼ぐ様子がたまに見られる、と。

ここから考えられることは……彼女はギャンブルにおける“危険”すらも〈エンブリオ〉で察知することができるということ。

そしてそれは、これから勝負に挑むキノが圧倒的不利であることを示していた。

そんな不利を押し付けられたまま、キノはAR・I・CAと面と向かって卓へとつき――

「ではその勝負。この私がわたくしディーラーを務めさせていただきます」

ゆっくりと歩いてくる革靴の音、そして声。

キノとAR・I・CAがそちらを見るとひとりの男性……いや、服装こそこのカジノという場に見合ったタキシードだったが、よくよく見ればその人物は女性であった。しかしその茶色い髪は短く整えら



れており、男性と言っても十分通じただろう。

「うつひやー……マジかよ」

「……………」

「改めまして名乗らせていただきます。私、セントラル・ゼロと申します」

うやうやしく頭を下げた彼女はゆっくりと頭を上げ目線を二人に合わせる。

だが、眼鏡をかけたその目には……どこか光がないようにも思えた。

「僭越ながらAR・I・CA様。私のことをご存知ですか？」

「いやいや、そりゃー知ってるって。……ハハ、なんてこった。アンタがここにいるなんて、それは予測してなかった」

「人生とは予想外の連続でございますれば。当然のことかと」

勝てるはずの勝負だった。だが、AR・I・CAにとって彼女の存在は鬼門だ。

彼女の未来を見る〈超級エンブリオ〉……多くのものに優位をとれるこの力さえ、ことセントラルの前に限っては何の価値もない。

「ではディーラーとして、勝負を開始させていただきます。契約書はもう記入されているようですし、双方ともに内容に合意しているということで、よろしいですか？」

セントラルは卓の横側、二人の中心に位置する場所にて手を広げて問いかける。

まず先にうなずいたのはAR・I・CA。諦めたような顔で、やれやれと言わんばかりに「同意するよー」と口にする。

続いてキノも、状況が読み込めない部分はあつたが「同意します」しますと頷いた。

勝負するゲームはポーカー。宣言できるのは賭け額を上乗せする「レイズ」、上乗せしない「チェック」、勝負から降りる「フォールド」、相手のレイズ額に合わせ勝負する「コール」の4つ。レイズの権利は各一回ずつ、お互いに5コイン持った状態からスタート。手札の勝敗は基本的なポーカーの役やルールに沿うものとなっているが、今回は

お互いの役がブタだった場合、先に「レイズ」を宣言していたほうが負けとなる。どちらも「チェック」であったならば無効試合。

これが今回の勝負の内容である。先にコインがなくなつた方が負けだ。

「結構。では始めましょう。《悪平等結界》」

セントラルが宣言した瞬間、彼女たち三人の卓を覆うようにドーム状の結界が貼られる。AR・I・CAは結界が貼られたことを確認すると自らのヘエンブリオ〔超越演算機 カサンドラ〕の具合を確かめ……そして、苦笑した。

（あー。やっぱり、ダメか）

慣れた手つきでセントラルがカードを二人に配り、自分の手札を確認してからキノへと視線を向けたのだが、彼女の視界にはいつも通りの光景しか見えなかった。

そう。

本来なら見えるべきものが……見えなかった。それはつまり、彼女の固有スキル《災姫の予見》が機能していないことを意味する。〈超級〉である自らの固有スキルが、だ。

それがセントラル・ゼロによるものであることは言うまでもない。詳細は不明でヘエンブリオの名前も不明、つまり彼女が必殺スキルを発動したところも知られていないが、「固有スキルを禁じる固有スキル」だけで彼女は数多のヘマスターの有利を否定してきた。

陰での異名は……”エンブリオ潰し”。

先攻はキノ。手札のチェンジも各一回なので、チェンジした手札を見て無表情で何を宣言するか迷っている。

そんなキノを眺めながら、彼女の手札に危険を予知する光が一切見えないことであらためて自分の優位が失われていることを感じる。

（いつもなら強い役が来てたらすぐわかるんだけど。これはどうしようもないな）

「では始めましょう。まずはキノ様、チェックかレイズの宣言をお願いいたします」

「それじゃあ、1枚レイズ」

こうして勝負は何度か進み、互いのコインは減ったり増えたりを繰り返す。大きく場が動いたのは……AR・I・CAが先攻の場面。

現在AR・I・CAのコインが5枚、キノのコインが5枚。最初の状態に戻っていた。

「うん、3枚チェンジしようかな！」

「ボクは2枚チェンジです」

シュツシュツと手際よくカードが互いに配られる。チェンジの結果、AR・I・CAの手札は3と10のツーペア。

配られた手札を見て、AR・I・CAは心の中でほくそ笑んだ。

（おっとそれなりにいい手札。どれ、ここで勝負かけてみようか！）

「AR・I・CA様、宣言をお願いいたします」

セントラルの言葉に、AR・I・CAはニヤリと笑みを浮かべて3枚のコインを前に押し出した。

「レイズ！ 3枚！」

おおっ、とギャラリーからどよめきがあがる。

3枚レイズ、つまり合計で4枚。これにキノがコールして負けた場合、キノは残り1枚となり非常に追い詰められることになる。

もちろんAR・I・CAのハツタリも考えられるしキノがフォールドする場合もある。しかしAR・I・CAが勝負をかけたことは言うまでもなかった。

「さあどうする？ どうする？」

笑みを浮かべるAR・I・CA。一方でキノは押し黙ったままだったが……セントラルから「キノ様、いかがなさいますか？」と宣言を促されて、ゆつくりと腕を動かした。

全てのコインを押し出して。

「…………ふむ」

「レイズ！ 1枚っ！」

「……え？」  
オールイン  
全ベット。

キノから出てきたまさかの宣言、想定外の動きにA R・I・C Aの笑みがこぼれる。だがそんな彼女の表情を意に介することはなく、ディーラーであるセントラルは粛々とゲームを進めていく。

「ではA R・I・C A様！　ただ今のキノ様のレイズ、<sup>コール</sup>応じるか！  
<sup>フォールド</sup>降りるか！　宣言をお願いいたします！」

立場はすっかり逆転しており、今度はA R・I・C Aが考え込む場面だった。

すでに3枚レイズしている以上、<sup>フォールド</sup>ここで降りても無駄に3枚失うことになってしまう。

そして<sup>コール</sup>応じたらどうなるか？　もちろん5枚での勝負になるのだから、一発勝負で全てが決まる。

全てを賭けて勝負するか？　それとも降りるか？　彼女の持つ手札はツーペア、勝負できない役では

(いや、待った。彼女は何枚チェンジした？　確か……)

『ボクは2枚チェンジです』

(2枚！　つまり3枚は手元に残した！　シンプルに考えればスリーカードの可能性がある！　いや、仮にワンペア持っていてチェンジした結果スリーカードができたとしたら？　それに確率は低いけどスリーカードからフルハウスまで揃った可能性だってある……)

どのみち、ツーペアではスリーカードには勝てない。

散々迷った挙句……A R・I・C Aは

「……フォールド」

勝負に乗らないことを選んだ。キノが、自分より強い手札を持っていることに賭けたのだ。

(アタシが最初にレイズしたんだから、もし彼女がブタだったとして、アタシのレイズもハツタリと呼んだのならチェックすればいい話)

お互いがブタだった場合は最後にレイズした方の負け。そういうルールである。



キノはA R・I・C Aの顔を見て、このオールインは手札がどうか一切関係ないことを確信する。彼女はきつと、自分の手札がブタだろうがロイヤルストレートフラッシュだろうが同じことをしていただろうと。

「コール」

だから、自分もそれに乗る。こちらは酔狂ではなく、これに賭けるという正真正銘のギャンブル的思考から。

二人の宣言を聞いた後、セントラルは微笑と共に一度頷くと大きく手を広げた。

「宣言がなされました！ ではこれより手札の開示を行います！」

ギャラリーは固唾をのんで二人の手札に注目する。キノとA R・I・C Aもまた、笑みを浮かべながらも一方で相手の手札に視線を向ける。

「ショー……………ダウン！」

ギャラリーが解散して周りから人が散ってしまった卓で、A R・I・C Aは笑いながらキノと話していた。

すでにディーラーたるセントラルはここにはいない。勝負がついた時点で、結界を解除すると彼女は優雅に一礼して去っていった。「負けた、負けたよキノちゃん。いやーデンドロ内のギャンブルで負けるっていつ以来かな！」

二人が卓に出した手札は、両方が役無しの子。したがってレイズをしたA R・I・C Aの負けとなり、10枚のチップを獲得したことによるキノの勝利が確定した。

これによって、A R・I・C Aは得るものもなくキノの負債を肩代わりすることになった。もっとも、〈超級〉である彼女にとっては十分払いきれぬ額だったのでそこまで問題はない。

キノとの協力関係が得られるかもあわよくば、ぐらいいいものであつたのだから。

「しかし、聞きたいのですが」

「ん？ なーにー？」

「〈超級〉のあなたがボクに手を借りるようなことが何かあつたのですか…………？」

キノの疑問にAR・I・CAは何でもないと答えた。

「いやいや、各国を旅する〈マスター〉は多いけどさ。最近の「旅人」キノちゃんの話もちらほら聞くよ？ レジエンダリアの【神探師】討伐戦、グランバロアの【ガルカノン】討伐、黄河での「PK喰らいの森」事件……あとは噂だけど天地で暴れている「悲嘆樹」も元々はキノちゃんがきつかけだとか」

うあー、と声を出して頭を抱えるキノ。通り名がつくようなことはしてないと思っていたが、AR・I・CAが挙げた事件は確かにキノも関わっている。特に最後の「悲嘆樹」と呼ばれる〈マスター〉には仕方がなかつたとはいえ負い目もある。

「だからこそ、セントラルもキミに目をつけてたんだろうけどねー」

「え？ ボクはてつきりAR・I・CAさん対策でこのカジノにいたんだと思つてましたが」

唐突に出てきたセントラルについての話に目を白黒させるキノ。

だがAR・I・CAは確信した様子で、首を振った。確かにカジノに雇われた可能性も考えてはいたが、それ以上に考えられることがあつた。

一つは新聞。最近発行されたキノに対するインタビュー記事。そこには彼女の「通り名」も書かれていた。

そしてもう一つ。それは目だ。

AR・I・CAは以前その目を皇国で見たことがある。かつて絶対に負けを許容できない親友が、不意打ちにあつてPKされてから戻つて来た時の、あの目を。

「考えてみてよキノちゃん。〈エンブリオ〉という多様性を許さない〈エンブリオ〉。「固有スキル」という個性を認めない〈エンブリオ〉。

そんなへエンブリオを生子出すセントラルのパーソナルなんてそれこそ予測できないけどさ……

インタビュー記事に取り上げられ通り名がつくほど“個性的な”人間の存在を、彼女はどんな気持ちで見たとと思う？」



第35話 ある奴隷の話 — I live. —

カルディナにはあらゆる商人がいる。

食べ物を買う商人。武器を買う商人。モンスターの素材を買う商人。

そして中には、奴隷を買う商人がいる。【奴隷商】というジョブがこの世界に存在するほどだ。

大砂漠において、商人の移動は簡単ではない。大抵は国が認めた案内人を雇ったうえで、キャラバンを組んで行動する。しかしキャラバンというのは大所帯になりやすいものだ。だからこそ、あえてキャラバンを組まずに竜車を使って移動をするものもある。

この【奴隷商】の集団も、そのような手合いだった。主たる奴隷商とその部下が二人、そして護衛が二人の計五人が竜車へと乗っていた。護衛は道案内も兼ねている。

いや。正確には六人というべきだろう。六人目は……” 奴隷” だった。

オアシスに到着すると、奴隷商は部下に命じて休息の準備をする。しかし実際に働くのは奴隷だ。

護衛二人が武器を構えてモンスターなどの襲撃がないよう周辺を警戒する中、部下たちは奴隷を殴り、蹴り、働かせる。

よろよろと奴隷が動く姿を、護衛二人は複雑そうな顔をして見つめていた。

「あーあー……おかわいそうに」

「気持ちわかる。だが、俺たちが口を出すべきことじゃない」

奴隷は十代の少女だった。親の借金が膨らみ、返せなくなったので売られたらしい。

そんな彼女には大した力もないというのに、荷物を運ばされている。やがて奴隷商たちが準備を終えて楽しそうに食事をしていても、奴隷の少女には何も与えられない。

少女はその状況に何も言わない、いや、言えないのだろう。

その状況に護衛のうち、剣を腰に下げた若い男が馬鹿にしたような顔で呟く。

「自分は、ああはなりたくないもんですね。自分の意見も言えず他人に使われる人生なんて。おい奴隷！ 実の娘を売り飛ばすなんて、お前の家族はひどい奴らだな！」

剣の護衛の言葉は確実に少女に届いていただろうが、少女が反応することは無い。

それに気を害したらしく、男は舌打ちして放置されている奴隷の方に近づくと、いきおいよく髪をつかんで無理やり彼女の顔を自分の方向へと向けた。

「うあつ、ああつ」

「無視するとはいい度胸じゃねーか、なあ！ なんか言ったらどうなんだよ！」

そのまま投げて捨てられた彼女は呻きながら震えた後、ゆっくりと痛みを耐えながらその体を起こした。

たびたび虐げられていたため弱っており、声を出すのも辛そうではあった。しかし、それでも彼女は奴隷として男の言葉に応える。

「……何を、言えと言うのですか……？」

かすれた小さな声に対し、男はケツ、と苛立たしそうな顔をしたが、その表情は相手をいたぶるそれに変わる。

「家族に売られたんだからな、さぞ家族が憎いだろう？ 自分を虐げる俺たちが憎いだろう？ ハッ、まあ奴隷のお前にはどうすることもできないんだけどな！」

そう言っただけで奴隷の少女を馬鹿にする。挑発して少しでも少女の顔に悔しさや苦しみが浮かぶところを見たかったのだろう。

しかし男の予想に反して、少女の表情は何も変わることはなかった。

沈んだ表情のまま、静かに首を横に振ると、顔を上げて二人を見つめる。沈んだまま、浮かび上がってこない深い海のような瞳を向けて。

「私は……家族の生活のために、売られました……。でも、それは仕方のないことです……。だから私が恨むことはありません。ただ、受け入れるだけです……」

「……本気で言っているのか、お前は」

それまで黙っていた銃を持つ護衛の男が低い声を出す。少女が口にした言葉が納得できないとでも言うように険しい顔で少女へと詰め寄った。その剣幕に、剣の護衛の男は黙り込んでしまう。

厳しい表情のまま、男は胸ぐらをつかんで少女を無理やり立たせた。

「あ、うっ……」

「今ここで俺がお前を殺しても。お前はそれを受け入れるって言うのか？ なあ」

「ちよ、ちよっとそれはやめたほうがいいんじゃない……」

彼らの雇い主である奴隷商たちも何の騒ぎだところに視線を向けている。何より、護衛として雇われている彼が雇い主の商品である奴隷に手を上げるわけにはいかないだろう。そう思っただけの護衛の男はもう一人の護衛の男を止める。

やがて少女は奴隷商たちに呼ばれ、そちらへとよろよろ戻っていく。

その後ろ姿を見ながら、銃の護衛の男は吐き捨てるように言った。

「……さつきは悪かったな。あいつにいらついてつい、な」

「びっくりしましたよ急に……何か気に入らないことでも？」

剣の護衛の男は、銃の護衛の男に問いかけるが、しばらく男は黙っていた。

その後一言、気に入らないことだらけだ、と男は言う。

だが、特に一番許せなかったのは……少女の「ただ受け入れるだけ」という言葉だった。

「あいつには」自分」ってもんがない。ただ環境に振り回されて、それを馬鹿正直に受け入れて、それが仕方ないと言って当たり前のようにしている。自分の思いも、主張も、感情も、心も……何もかも押し込めて、見失って」

「はあ……それが？」

「俺が一番嫌いな人間だよ、「自分」のない人間ってのはな。だから、仕方がないからただ受け入れるしかないって口にするのも気に入らん」それは「受け入れている」のではない。ただ「諦めている」だけだ。確かに奴隷に落とされた彼女の身の上は同情すべき点もあるだろう。必死にこらえている気持ちもあるのだろう。

だが。

だからといって、彼女の思想が認められるかと言ったらまた別の話だった。

「自分の気持ちをただ押し込めて、周りの言われるまま……それはただの“人形”だ。人の形をしているだけの、何かでしかない」

「あー。まあ、そうですねえ。しかしまあ、さつきはほんとひやりとしましたよ。この道中、ずっと感情を見せないもんですから意外でしたわ」

「……忘れる。今後はもうあんな姿は見せんよ」

男の様子に、もう一人の男は気になるものを感じたのだが……話を切り上げられてはこれ以上聞くわけにもいかない。何か事情があるのかもとは思ったが、それを聞くのはご法度だ。

翌日。

竜車は護衛の男の案内のもと、カルデイナの砂漠を進んでいく。小型モンスターの襲撃は稀にあるが、護衛二人で何とでもなる程度の低レベルモンスターだった。

竜車の中で奴隷商たちはだらだらと酒を飲み、奴隷の少女は護衛たちの監視のもと御者をさせられている。

彼女は売られるまでも御者の経験があつたため、ちようどいいとばかりにここでもこき使われていた。そんな状況でもなお、少女は何も言わず、手綱を握りしめている。

しかし、砂漠を進んでしばらくした時……少女は気づいた。自らの持つスキルの一つ、《危険察知》が彼女に危険を知らせていることに。

(……今の、は)

護衛の人間も《危険察知》を持っていておかしくなさそうなものだが、なぜか反応しない。気づいているのは少女だけのようだった。

その事実に対し少女は……何も、しなかった。

助けを呼ぶことも、注意を促すことも、その場から逃げ出すこともなく。

ただ淡々と、そのまま竜車を進めていた。モンスターが出現するまで、何も気づかなかったかのよう。これから自分に降りかかる運命がどんなものであるかと……どうでもいいとでもいうように。

「おい、なんだ……？ う、うわああああ！」

突如として砂の下から現れる虫型のモンスター。巨大な鋏のような顎により、すぐに竜車が破壊され、乗っていた人々は地面の上へと投げ出された。護衛の男はすぐに戦闘態勢に入り、撃退を試みようとする。一体、二体程度なら撃退できたのかもしれない。

しかし、現れたのは強さはそこまででなくとも数が多かった。まるで何かのアイテムに誘導されたかのように群がっていたモンスターたちは、手当たり次第に剣を失った護衛の男や奴隷商たちへと襲い掛かった。

「……あ」

モンスターが次に少女へと狙いを定める中、ふと目を下ろすと。少女を竜車につないでいた鎖が壊れている。

しかし彼女には戦闘力がない。よって彼女が戦って倒せるわけもない。

そもそもを言えば、先ほど《危険察知》が発動しても何も思うことがなかった。それはまだ彼女を縛る鎖があったからだ。自分は“奴隷”だから逃げられないと、無意識のうちに自分自身をも縛り付けていた。

「あ。ああ……！」

だが、今彼女を縛る鎖は切れた。たったそれだけのことが、彼女の心境に劇的な変化をもたらす。

死んでもいいと、思っていたのに。

受け入れるしかない、思っていたのに。

「あああああああああつー！」

少女は立ち上がると、それまでとは違う強い瞳で走り出す。

モンスターに目をつけられたその時、思ってしまった。

生きたい、と思ってしまう。

だから少女は走る。

たとえ戦闘力のないひ弱な身でも、逃げ切れる可能性なんて0に近いとしても。

なぜなら――

「私は……私はもう、” 奴隷 ” じゃない！ 私は、エリア・アーレだつー！」

“ 奴隷 ” と呼ばれ蔑まれる何かではないのだと、自分の名を叫び、ただ生きたいと口に出す。

それでも、現実は無慈悲である。自分を取り戻した少女に対し、モンスターは容赦なく牙をむき――

「ああ、まったく。全滅で終わらせるつもりだったのに」

【強制睡眠】にかかったモンスターが地響きをたてて倒れ伏した。それも多数いたモンスター全部が一斉に、だ。

何が起こったのかわからず呆然とする少女……エリアだったが、やがてたちこめる砂煙の中から一人の人影が彼女の方へと歩み寄っていた。

やがてその砂煙が消えた時、エリアは驚きのあまり口を手に当てた。

「な、なんで……」

「話は後だ。さすがに全部倒すのは難しいから眠らせてただけだからな。離れるぞ」

そこにいたのは……銃の護衛の男だった。

竜車が襲われた場所からだいぶ離れた場所で、二人はたき火を前に座っていた。

エリアの方はそわそわした様子だったが無理もなかった。一度は脅しとはいえ自分を殺そうとした人間が、実際には自分を救おうとしたのだ。

いや、それもそれで理由の一つではあったが、もっとエリアを混乱させた理由がある。

「どうしました？ 私の顔に何か？」

「い、いえ」

離れた場所につき一息つこうとしたところで……護衛の男が手を振ったとたん、彼の姿が一瞬で変わった。

大柄な体は細身の姿となり、いかつい表情だった男の顔はあまり表情を感じられない女性の顔へと変わったのだ。その後女性は何かをアイテムボックスから出そうとしたが、手を止めて少し考えた後そのまま何も出さずに、己の顔でエリアへと向かい合った。

しばらく沈黙が二人の間に流れていたが、意を決したエリアは問いかける。どうして自分を助けたのかと。

「どうして、ですか」

理由を聞かれた女性は少し考えるようにしていたが、彼女自身その質問が来るのは予想していたらしく、あらかじめまとめていた答えをエリアへと答えた。

「まず最初にも言いましたが、本来私は誰も生かす気などなかったんです。あの【奴隷商】を殺すために仕込まれていたモンスターを呼び寄せるアイテム。それがなにかのアクシデントに失敗しないように」「あなたが仕掛けたわけじゃ、なかったんですか？」

「ええ。私はただ最初に殺意を煽って相手をそそのかし、あくまでその場を見届け、そして実行した方に利するよう動いただけです」

それが彼女のやり口。彼女は決して自分から実行することはない。

彼女は人が人を殺すその心理を知りたかった。道を外れてまで罪を犯すその過程に、自分が“自分”を見つける糸口をつかみたかった。その目的はまだかなったとはいえないが。

今回もまたその一環で護衛の一人として潜入していたのだが……そしてエリアに、奴隷の少女に出会った。

「あの時言った言葉は本心でした。私は、“自分”を持たない人間が嫌いです」

なぜなら、それはかつての自分だから。自分とは何かがわからなくなった彼女にとって、自分を持たない人間はかつての自分自身を思い出させてしまう。それが何よりも嫌だった。

だから、少女を助ける気なんて最初はなかった。同情なんてすることもなかった。

だが……エリアは、モンスターに襲われそうになったその時に、何もかもを諦めていたようなその束縛をぬぐいさった。

“自分”を取り戻し、新たな一步を踏み出そうとしたその姿は……この Infinite Dendrogramで、“自分”を見つけ出そうと一步を踏み出そうとした自分と重なった。奴隷としての彼女がかつての自分と重なったから余計に。

そんな彼女を見捨てることは……一步を踏み出そうとした自分を否定することに等しい。そう思うと、エリアを見捨てるという選択肢は彼女の中になかった。

だから、エリアを助けたのだ。

「……あなたを助けた理由について、全てを語る気はありません。ですが、あそこでああなたを見捨てるのは自分を否定するようなものでした。だから、助けた。それだけです」

「そう、ですか」

「……さつきからずっと私の顔を見ているようですが。何か、ありますか？」  
彼女は普段とは違って、アバターの素顔をそのままエリアに晒している。その素顔は彼女のリアルな顔を少々いじった程度のものであるため、整った横顔がエリアの目に映されていた。

「いえ、その。あんなにかっこいい人が実はこんなきれいな人だったなん



て、びつくりで。でもその割には、あの時みたいに表情が顔に出ないな、なんて……」

彼女の言葉にむう、とやや不満げな声を漏らして頬を引つ張り、表情を作ろうとする。護衛の男の時もそうだが、何かの役を演じているときは表情豊かになる一方で、素で人と接しようとするとなぜか表情が表に出てこない。リアルでも同じで友人にも言われたことがあるため、密かに気になっていた。

“星秋院 霞”を演じているときはちゃんとできていたのに。なぜ素ではダメなのだろうか。

それが、彼女……ノーフエイスの悩みである。

一通り話した後、ノーフエイスはゆっくりと立ち上がる。目の前に座っている少女を近くの都市まで送り届けなければならぬ。

ずっとログインしていられるわけでもないため、急がないとな、と彼女は大きく伸びをした。

あの時の出来事を、エリアは今も忘れていない。おそらく一生忘れることはないだろうと確信している。

「ありがとうございます！ またどうぞ！」

商家で働くことになったエリアは、大きな声で今日も客を見送っている。

彼女を都市に送り届けた後、ノーフエイスは仮面をつけたままどこかへと去っていった。去り際に初めて彼女の名前を聞くことができただが、あとでその名前が指名手配されている〈マスター〉と聞いて驚いた。でもよくよく思い出してみれば、自分と会った時も「奴隷商」を死に追いやっていたのだから今更か、と妙にすんと胸に落ちた。

そんな彼女も、しばらく前に“監獄”と呼ばれる場所に行ったのだから。そこでは今、彼女は何かをしているのだろうか。

そこは罪を重ねた〈マスター〉が閉じ込められる場所と聞く。そう

簡単に出られるわけではないだろう。なのに……何故か、また彼女とは出会う気がした。

「……あれ？」

先ほどまで買い物をしていた客が忘れたのだろうか、紙が一枚、置かれていた。

忘れものなら届けないと、と辺りを見回したが、すでに先ほどの人物らしき人影はどこにも見られなかった。仕方ないと紙を裏返して、そこに書かれた言葉にうつすらと笑みを浮かべた。

『自分らしく、生きていきなさい』

第36話 手を取り合う話 — Fast Win!

チリンチリン、というベルの音と共に、キノは木でできたドアを開けた。

中は昼時ということもあってへマスターもティアンも関係ないかのように食事を楽しんでおり、また人によっては連れと一緒に会話を楽しんでいる。

ここ、グランバロアは海の上の国ということもあって、海産物が豊富である。キノが今日訪れたこのレストランも海産物を売りにしている。

キノが入って来たことによつてティアンの店員が席へと案内しようとして近付いてきたが、キノはそれを断ると、代わりに一つ質問した。「この店で、今一番食べているお客さんはどこにいますか？ その人と約束をしているんですが」

通常、そんな曖昧な質問をしても誰が該当するかなんてわかるものではない。

だが……今回に関しては例外だった。キノの質問に対し、すぐに「ああ、なるほど」という表情を見せた店員は笑顔を浮かべて「ご案内します」とキノを奥にある個室エリアへと案内した。

案内された個室エリアは最初にキノが入って来た時に見たようなテーブルがたくさんあるエリアではなく、個室で食事をとることができるエリアだ。大勢の団体で食事するときや、他の人とは離れて食事をしたいときなどに使われる。

今回キノの相手が個室を選んだ理由は……ある意味“両方”と言えるだろう。

やがて一つの個室の前に着くと、店員は一札をして去っていった。ドアの前に立ったキノは一呼吸すると、ノックをしてドアを開けた。

部屋の中で待っていたのは……

「アラ、随分遅かったじゃないの」

カチャリと音を立てて指で直されたサングラス。黒いレンズの奥からは細められた目が彼女を見つめている。

その体は全体的に見て丸々とした印象を与え、どう見ても「太っている」以外の言葉はない。

その腕は脂肪と筋肉に覆われ丸みを帯びながらもがっしりとした印象を与え、その声は内容は女性的であっても、聞いたら誰もがわかる野太さを持っていた。

簡単に一言でいえば……「太ったオネエ」というところか。

「お久しぶりです、マダム」

「ええ、お久しぶりねキノちゃん。また会えて嬉しいわあ」

嬉しそうに話しながらも一方で食事続ける手は止めないその人物の名はマダム・ドンテイスト。

どの国家にも所属しない無所属の〈マスター〉であり、キノ同様あちこちの国を渡り歩いている。彼？ 彼女？ は今、机の上に多数乗せられた食事を味わっている真つ最中であつた。

一方で山積みになっていく空になった皿から、マダムがいかにかたくさん食事をしていたかがよくわかる。

「たくさん食事をとるのは相変わらずなのですわね」

「まあ、そうね。リアルじゃこんなに大食いできるわけじゃないのに、なぜかこつちだつたら手が止まらないのよねえ……。不思議だわ」

「あなたの能力から考えれば、確かに量をとることも大事だとは思いますが」

二人が話していると、扉をノックした音が聞こえ、そしてゆっくりと扉が開く。

そこにいたのはこのレストランの従業員。彼が押しているワゴンには今しがた作られたばかりの料理が数多く乗せられている。そして、その料理たちは新たに食卓へと乗せられていく。

「……まだ食べるんです？」

「だってキノちゃんが遅いのだもの……つい頼んでしまったのよ」

従業員が去った後は、料理のうちいくつかをキノはわけてもらい食

べることにする。しかしそれでも、通常ならキノが食べ終わるまでにマダムが食べ終えられるとは思えないほどの量が残っていた。

もつとも、通常なら……の話である。

「あんまり待たせるわけにもいかないわねえ……野暮だけどスキル、使いましょ」

十数分後。

キノが二つ目の皿を食べ終わる……それよりもさらに少し前に、キノの十何倍もの量の料理を食べ終わったマダムは口元を紙ナプキンで吹いていた。

「ごちそうさま」

「ごちそうさま、でした……」

相変わらずこのロブスター料理は絶品ね、などと余裕の表情を浮かべるマダムと違って、キノはもう満腹という表情を浮かべていた。

キノが本来のスピードでゆっくりと食事をしている間に、スキルを使ったとはいえマダムが超音速機動で食事を続けていった姿には十分胃もたれするような気持ちになっただけらしい。

微笑を浮かべてマダムは立ち上がると、ダウンしたキノを引きずって個室を出る。

そのまま勘定を済ませた頃には、キノも一人で歩き出すくらいには回復していたので二人で並んで別の船へと移動を始めた。

ちなみに、料理の金額に関してキノは見ないふりをしていた。いくらマダムが裕福とはいえ、いつ見ても彼女？の食事金額は明らかに度を超えていたのだから。

一時間後。キノとマダムは船に乗って海の上にあった。舵をとっているのは《操縦》スキルを持っているキノである。大型船を用意するのであれば船専用の《操船》スキルを持った【船員】などのジョブを持った者がいたほうが望ましいのだが、今回マダムが用意した船はそ

ここまで大きなものではない。なので、キノの《操縦》でも十分に航行可能であった。

「……ていのいい操舵士にされた気がしないでもないです」

「そんなこと言わないの。ちやあんとアタシだって報酬を用意したうえで貴方に打診したのよ？　引き受けたのは貴方自身なんだから。しっかり仕事はしてもらうわよ」

「だったら、あなたもお願いしますよ？」

もちろんよ、と頷くマダム。

今回の二人の目当てはオーシャンベアー。海に生息する熊のようなモンスターだが、その体は陸上の熊よりも大きく、下半身は鯨のようなヒレになっている。このモンスターのドロップ品である「オーシャンベアーの熊掌」、情報から考えると熊の手にあたるだろう食材が目当てである。

その手は海のミネラルや塩分をたっぷりと含み、肉と塩味が合わさったその味は実に濃厚な美味であるという。

このアイテムを手に入れたら、もちろん料理するのはマダムの担当だ。

マダムはサブジョブに「料理人」も持っているため、《料理》スキルだつて持っている。センススキルと呼ばれるこのスキルだが、料理の出来はスキルレベルだけでなく料理人の味覚にも左右される。そしてマダム・ドンテイストと言えばティアンの間でも知られるほどの食通であり、美食家である。

マダムの舌は一般人よりもはるかに優れており、また肥えている。そのマダムが作る料理も味は期待できるといふものだ。

キノも操縦する内心ではよだれをこらえている。

しばらく船を進めっていると、海からモンスターが近づいていると感知した。

今回の役割でいうと、キノが操縦ならマダムは戦闘。邪魔なモンスターを排除することが役割だ。

「おっと、モンスターですかね」

「目当てのじゃないけど……あれは魚系のモンスターね。そこそこ数

もいるし、捌くのもアリね」

「ではお願いします。ボクは舵から手が離せないので数はちよつと」  
任せなさい、とマダムはアイテムボックスが一振りの剣を取り出す。片刃の剣はどちらかという巨大な包丁、ともとれるかもしれない。

さらにマダムは、もう片方の手にアイテムボックスから取り出したハンバーガーを持つ。そこそこボリュームがあるハンバーガーだがマダムは《早食い》スキルを発動させてすぐに食べ終える。

もちろん、戦闘前に食事をしたのには理由があつた。料理のバフを得るためだ。マダムのメインジョブ、グレイト・フードファイター「大食戦士」は食事バフに大きな補正が入るといふ少し変わった戦士系統食戦士派生の上級職である。

戦士系統とはいえ、マダムのサブジョブは【料理人】や【美食家】など非戦闘系のジョブも多く、純粋に戦闘型のビルドにしている人と比べたら素のステータスはそこまで高くない。食事バフの効果があつても低ステータスから割合での補正は大したことがない、と思われるだろう。

しかし、マダム・ドンテイストにその常識は当てはまらない。

「カロリーの使い過ぎには、気をつけてくださいね？」

「メインディッシュはこれからよ？ 心得ているわ」

次の瞬間、マダムは並の戦闘系上級職以上のAGIで船から飛び出した。太った体に見合わない素早い動きで海の上を走りだすと次々に魚モンスターを手にした剣で斬り裂いていく。海の上を走れるのは専用のブーツを装備しているからだ。短時間水の上で動けるだけの代物だが、グランバロアでは需要も多いため金さえ積めば手に入る。

モンスターを一通り狩り終わると、水上歩行スキルの制限時間も近いのですぐに船の上に戻ると、先ほど手に入れたモンスターの食材と簡易キッチンを取り出す。さっそく調理しようというわけだ。

もちろん、この後もモンスターが襲ってくる可能性もあるし、何より目的の地まで近い。簡単にできる料理を選んでマダムは調理を始め

た。

「ふん♪ ふん♪ ふん♪」

「あまり時間をかけないでくださいね？ ……あと、ボクにも分けてください」

「ウフフ、もちろんよ。心配しなくていいわ」

魚の一部は処理した後海に放り投げたマダムだったが、残りの身を使って作られた料理はキノにもふるまわれた。

まかないのようなものだが、小腹を満たすには十分だし何よりマダムの料理だ。おいしいに決まっている。

何事もなく舌鼓をうっていたが……突然、船が大きく揺れた。

「ま、またモンスター!？」

「いや、この揺れは……キノちゃん！ しつかり舵を握っていないさい！」

突然の指示に驚きながらも必死で操縦を続けるキノ。マダムはというと先ほどのモンスターに使ったものとは比べ物にならないほど見た目も、そして素材も明らかに違う包丁、あるいは剣を両手に構える。

揺れる海の中から姿を現したのは、黒い毛並みを水で濡らし、巨大な腕を振り上げて大きな唸り声をあげる、熊であった。下半身は鯨のような魚状になっているが、よくよく見れば退化したような小さな足が脇に生えている。

この熊こそ二人が狙っていたモンスター、オーシャンベアー。

その巨体に恥じないステータスを保持しているモンスターであり、各地を渡り歩いた歴戦の「マスター」であるキノとマダム、二人で挑むのであれば十分戦える強さである。ただし、ルーキーが遭遇しようものならあつという間に葬られてしまうために恐れられてもいる。

ちなみに、カンストの「マスター」が一人で挑むとなると……いけなくもないが、決して容易ではない。

「ボクも加勢します。船の操縦はもちろんしますが、転覆を防ぐ程度ですし、後ろから銃でのフォローくらいはできるはずです」

「……しようがない子ねえ。アタシは必殺スキル使うことも考えてい



たのよ？ ま、手伝ってくれるのならその必要もないでしょ。カロリーは相当使うだろうけど……そういうへエンブリオだから仕方ないわよね」

剣を両手に持ったまま手を横に広げると、大きく息を吐いてスキルを宣言する。

「さて、料理の時間ね……《食は力なり》」

「G A A A A A A A A A !!」

オーシャンベアーが吠えながら腕を振り下ろしたが……その腕をマダムは片手の剣で難なく受け止める。その力はいくらなんでも、【大食戦士】のバフの効果だけでは説明ができないほどに強く、オーシャンベアーが困惑の唸り声を上げるほどには不自然な力であった。

「お返しよお」

軽い声とは対照的にブオン！ と風を切る音と共に、マダムは力強く剣を振るってオーシャンベアーに傷をつけていく。

もちろん、この本来ありえない力がいつまでも続くわけではないということはキノもわかっている。なので宣言した通り腰に下げている銃を手にするとは度もオーシャンベアーめがけて発砲していく。

火薬式銃器のいいところは、ステータスが低くても高いダメージを与えられること。現在【疾風操縦士】のレベルを上げる途中であるキノはサブジョブにおいている【銃士】のスキルが使えない。なのでステータス頼りの攻撃になるところだがあいにく操縦士のステータスはDEXやMPくらいしか上がらず戦闘には不向き。それを銃でカバーできるのは正直ありがたかった。

「これで……終わりよおおお！」

さらにカロリー……いや、へエンブリオに貯蔵されたりソースを費やしたのだろう、急に力だけでなく速度までも増加させたマダムは猛烈な勢いでオーシャンベアーを切り刻んでいく。

キノの銃撃に気をとられていたオーシャンベアーはマダムの連撃を防ぎきれず、やがて大きな水しぶきをあげて倒れこんだ。

船を止めると二人はドロップアイテムを確認する。今回の目当ては「オーシャンベアーの熊掌」。この食材が手に入らなければせつか

くの戦闘も無駄骨である。幸い、マダムの方が無事獲得しており、そのまま船に備え付けられたキッチンを使って料理を始めた。

どんな料理になるだろうと楽しみにしながらキノはアイテムボックスから出した机などを並べ、料理ができあがるのを待つ。あれほどの巨体のモンスターだったのだ。さぞボリユームのある肉が食べられることだろう。キノの口の中に唾液が溢れるのも仕方がない。

そして待つこと30分。ついにマダムが料理を手に戻って来た。

「お待たせしたわ、キノちゃん」

「待ってました！　これがオーシャンベアーの……手……？」

最初は高いテンションだったが、マダムが持ってきた皿を見てその声が急激にしぼんでいく。

確かにそれは熊の手だ。マダムという腕のいい【料理人】によつて絶妙に調理されたそれは食欲をそそる香りを放ち、茶色いソースがその味を高めていることは疑いようもない。

なの、だが。

「……小さいですね」

「小さいわね」

どうみても、それは戦闘に用いられたたくましい手とは程遠い大きさの熊の手だった。

いや、確かに皿の上にあるそれは普通の熊の手くらいのサイズはあるのだろうか……先ほど戦った手と同一とはとても思えない。どう考えても二人が見たそれよりも小さい。

ここには *Infinité Dendrogram* の仕組みが関わってくる。モンスターを倒すとその死骸がそのまま残るのではなく、管理AIによつてアイテムへと変換される。キノ達が手に入れることができたのは、「オーシャンベアーの手」ではなく、「オーシャンベアーの熊掌」という名前のアイテムにすぎない。

つまり、巨大なモンスターだったとはいえ、アイテムに調整された結果が、これなのである——！

「……そんなに落ち込んでも仕方ないでしょ。第一、本物の熊の手は調理にもものすごく時間がかかるのよ？　このオーシャンベアーの

熊掌っていうアイテムだからこそ、30分程度の調理で食べれるの」  
机の上に置いた皿を挟んで、二人は座る。正直なところ、一つだけでもあの大きさなら十分だろうと思っていたが……これを二人で分けるのだと思うと、どうにも物足りない。

「いただきます」

そんな不満を抱きつつキノとマダムは肉を口に運び……

「この味はっ……い！ 《早食い》！」

「ちよ、へ、ヘルメス!! 《世界を駆ける旅人》!!」

余りの美味に二人してAGIを増加させ、肉の取り合いになった。

第37話 尽くす話 — Leave to Oth  
ers —

「何と言うか、こういうのもいいもんだな。同じ放浪仲間と語り合うつてのも悪くない」

「そうですね。お誘いありがとうございます」

『どうもねー』

キノとヘルメスは今、旅の途中で出会った男の勧めで、とある部屋の中で腰を下ろしている。いや、バイクであるヘルメスはスタンドを下ろしていると云ったほうが正確か。

彼女らと向き合うようにして椅子に座っているのはキノを誘った〈マスター〉である。キノが座っているのが背もたれのある木製の椅子なのに対して、男が座っている椅子は「玉座」という言葉が正しいくらいには豪華なものだった。

「ローアークさんは、どちらから来られたんです？」

「俺か？ 出身がまずアルター王国なんだが……カルディナを通つてこの黄河に来た。なんだかんだ砂漠越えも大変だったが、さすがに海は渡れる気がしねえよ」

『まあそうだろうねー。リソース的にも手段ある方がびつくり』

ヘルメスの言葉に、まったくだと頷く〈マスター〉、ローアーク。

方向性は違うが、彼の〈エンブリオ〉もキノと同じく旅や移動に適した能力を持っている。もっとも、キノ程それに特化した能力ではない。どちらかという副産物に近く、本質はまた別にある。

移動に特化した分短時間なら空中でも水面でも移動できるキノの〈エンブリオ〉に対し、ローアークの〈エンブリオ〉は陸路の移動が限界だ。

「だが、それでいいんだ。アンタは世界中を旅したい。俺はとりあえずあちこちいければそれでいい。移動に関してはこうも考え方に違いがあるんだ。そりゃあパーソナルを参考にした〈エンブリオ〉なんだから、そういった変化がでもおかしくないさ」

『なるほど。どこに行きたいかに違いがあるなら、その手段にも違いが出る。当然か』

「ああ。当然さ」

理解が得られて嬉しそうな顔をしたローアークは机の上に置いていたカップを手に取りるとおいしそうに一杯を飲んだ。

カップはすぐ空になってしまったため、彼は腰かけていた玉座の肘掛けを拳で軽くコンコンと叩く。

それが合図になっているのか、数分もしないうちにドアがノックされ、お盆の上にティーカップとポットを乗せた黒髪のメイドが部屋の中へと入って来た。

一礼すると、メイドはローアークのティーカップを取り換え、ポットを持ってキノの方を向いた。

「あ……ボクもおかわりいただきたいいいですか」

コクリと頷いたメイドは、丁寧な所作で差し出されたキノのカップへとお茶を注ぐ。

注ぎ終わると、メイドはポットだけを机の上に残してまた一礼すると部屋を後にした。

「別の部屋には【料理人】のスキルが使えるメイドがいてね。お茶をとりあえず用意したが、もし要望があるなら簡単な食事くらいなら作らせる。気兼ねしなくていい」

「そう、ですか。もしお腹がすいたらお願いします」

「ああわかった。言ってくればすぐにメイドに伝えるから教えてくれ」

外からはズズン……と地響きのような音が聞こえる。

だが、そんな音にも二人は一切気にした様子はない。そのままお茶を口に運んでいた。

「先ほどのメイドさんは……ずっとここに？」

「ずっと？ ……ああ、まーずっとと言えばずっとか？」

『ねえキノ。気づかなかったの？』

何でもないことのように尋ねてきたヘルメスにえ？ と疑問を漏らしたキノ。一方で最初から知っているローアークはこっぴど気が

いたかと愉快そうに笑う。

『あのメイドさん、人間じゃないよ?』

「……え」

見た目はどう見ても普通の人間だった。せいぜい一言も口にしなかったのが気になったくらいか。

ならば一体何なのか。その答えは、この部屋の主であるローアークが教えてくれた。

「そのへエンブリオの言う通りだ。さっきのメイドも、【料理人】のスキルがあるメイドも。皆俺がスキルで作りに出した存在だ。人間じゃないのさ」

「でも、今【料理人】のスキルが使える、と」

へマスターやティアン、すなわち人間範疇生物とそうでない生物を分ける基準の一つが「ジョブにつけるか」、である。だからこそ、【料理人】ならば人間ではないのかと思ったのだが……

ローアークは「【料理人】のメイド」とは一言も口にしていない。彼はあくまで、「【料理人】のスキルがあるメイド」という言い方をしている。

「俺のサブジョブの一つが【料理人】だ。つまりスキルでメイドを作り出した際、任意で一つサブジョブを選び、そのジョブのスキルが使えるようになるのさ。ま、ステータスはそれこそ上級職一つ分くらいと大したことないから、へマスターやティアンと比べたらできることはどうしても限られちゃうけどな」

「へえ……ちなみに、その召喚コストはどうなってるんです?」

「【悪魔騎士】……だったか? どうも悪魔を召喚するジョブと同じ仕組みみたいだな。あらかじめ素材とかをコストとして捧げておいて、それをリソースに使うんだ。あとは召喚中のMP消費だな」

なるほど、とキノは頷いた。

便利なスキルだが、彼のへエンブリオを考えるとこの召喚スキルはいささか便利すぎる。だからこそ、召喚の際の外部コストや召喚維持のためのMP消費があるのだろう。

そのためかローアークの装備をよく見てみれば、つけているアクセ

サリーの全てがMPを継続的に回復させるものばかりだ。MPを上昇させるアクセサリーもこの世界には存在するが、彼のスタイルを鑑みるに継続回復の方が重要だろう。

無理もない、とキノは思う。

何度目かわからない振動と爆音を感じて視線を窓の外へ向けると、その視線に気づいたのかローアークも苦笑を浮かべた。

「悪いな、さすがに部屋に防音機能とかまではついてないんだ。この振動もそういうもんだと諦めてくれ」

「いえ、こちらこそ気にさせたようならすみません」

『ご自慢のお部屋でもさすがにそこまではないかー。完璧な理想の部屋！　ってわけにはいかないよね』

まあな、とヘルメスの言葉に頷くローアークだったが、一方で全てを肯定したわけではなかった。一つだけ訂正するなら、と指を一本立てる。

「俺はこの状態でも、十分理想の部屋だって胸を張って言えるぜ？

俺はただのんびり座っているだけでいい。腹が減ったらメイドを呼べばいい。掃除も不要だ。暇なら寝てもいいし、適当に本でも読んでいい。十分理想的だろう？　外の音なんて慣れりや気にならないよ」  
『うわー自堕落な部屋。キノがそんな部屋を手に入れてしまったらどうなることやら』

「余計なお世話だよ、ヘルメス」

アハハハ、と部屋の中に笑い声が満ちる。

一通り笑った後で、メイドに持つてこさせたサンドイッチを片手にローアークがキノへ問いかけた。

「なあ。アンタ、RPGはしたことあるか？　楽しかったか？」

「え？　ええ、まあ、少しはしたことがありますけど……」

RPG、ロールプレイングゲーム。

あるいは勇者に、あるいは狩人に。レベルを上げて仲間たちと戦うのがRPGの王道だ。

ゲームなら一つはプレイしたことがあるだろうジャンル。ローアークが急に何の話始めたのかよくわからなかったが……続く言

葉で合点がいった。

「俺はRPGが好きじゃなかった。特に、レベルを上げるのがとにかく嫌いだった」

レベル上げ。ゲーム、特にRPGではよく出てくる概念だし、何よりこのデンドロでも存在する言葉だ。

それがキャラのレベルかジョブのレベルかはゲーム次第だが……多くのゲームは、レベルを上げることで強くなる。

ローアークは、そのレベル上げがとにかく嫌いだったのだという。「倒す必要のない敵をとにかく倒しまくって、レベルのためだけに戦い続ける……何度時間の無駄だと思ったか数えきれねえ。デンドロにもジョブが、そしてレベルがあるって事前情報で聞いたとき俺は迷ったよ。またあのめんどくせえレベル上げをするくらいならプレイするのやめようかってな。だが一方でデンドロに対する数々の評判からはどうしても目を背けられなかった」

俺はレベル上げという“作業”が嫌いなのであって、ゲームは好きだったから……と。

迷った末に、彼はデンドロを始めた。そして、自分の判断は正しかったのだと知った。

理由はいくつがあるが、一番大きかったのが、やはりへエンブリオだろう。

ずっとレベル上げをしたくないと、可能ならば“何もせずに楽しみたい”と思っていたローアークの願いにこたえるように……彼のへエンブリオは孵化した。

「でも、結局ジョブにはついて、レベルは上げたのですね」

『それもへエンブリオで楽になったの?』

「まあな。お金を稼ぐために戦闘したから、つてのもあるが……。気づいてるだろうが、俺のへエンブリオはMPあつてのものだ。だからこそステータスは上げなきゃいけなかった。戦闘は全部へエンブリオに任せにできそうだったから、俺はとにかくジョブ構成でそれが実現できるか、そしていかに楽に過ごせるか考えたよ。レベル上げの作業と違って、自分のジョブ構成を探るのはこのゲームの醍醐味だ。わか



るだろ?」

その言葉にキノは頷く。

「キノ」というキャラクターに近づくために、そしてヘルメスで旅をするためにどんなジョブに就いた方がいいのか。ジョブについての情報を片っ端から見たり探ったりしたのはいい思い出だ。かつては【冒険家】などにも就いてみたことはあるし、天地では師匠に上級職についての助言をもらったこともある。

「最初はもちろんへエンブリオ一つで、今みたいにメイドなんて呼べなかった。今みたいに部屋でダラダラするだけ、とまではいかなかった。けれど俺のへエンブリオは一步一步、だが確実に、俺の理想へと近づいてくれたよ。俺もジョブを探った末に、今のジョブ構成に落ち着いた。サブジョブはメイドが持つて便利そうなものやステータスのために。そしてメインジョブは戦闘しなくていいうえにMPが上がるものに」

「それでそのジョブ、なんですね」

《看破》のスキルを持つキノには、すでにローアークのメインジョブが見えている。特に隠蔽するつもりもないようだし、アクセサリや杖が埋まっている以上隠す理由もないのだろう。

「おっと、そろそろ目的地か? 話に付き合ってもらって楽しかったよ、ありがとな」

「ええ。……こちらこそ、お話、ありがとうございました。いいへエンブリオですね」

「礼を言われるようなことじゃねえよ。言つたら? 理想の部屋だと胸を張って言える、と」

『ねえ、キノ』

「なんだい? ヘルメス」

キノとヘルメスは、遠ざかっていく大きな影を見送りながら話す。

キノの視線の先にあるのは……巨大な小屋のような、それでいて生

物のような物体だった。4本足でズンズンと歩いており、二つの側面にはそれぞれ顔のようなものがあり、その目や口からは光線が放たれて辺りのモンスターを攻撃している。壁からは大砲のようなものが飛び出ている箇所もあり、そこから砲撃が行われている。MPで魔力が充填され、「砲兵」あたりのジョブを持ったメイドが撃っているだろう。

その物体こそ、今までキノたちがいた“部屋”であり、ローアークのへエンブリオ。

『どつちだと思う?』

「それだけじゃわかんないよ、ヘルメス。なんとなく聞きたいことはわかるけどさ」

最後にキノが地上へと降りるとき、ローアークはメイドたちと一緒に見送りをしてくれた。

その彼の頭上には“【生贄】ローアーク”と、彼のメインジョブと名前が浮かんでいたこと、そして彼の後ろにいたメイドの姿をした悪魔たちのことをキノは思い出す。

にこやかな彼とは対照的に、無表情で並んでいた眷属たちのことを。

『メイド悪魔も含め、あのへエンブリオはへマスターのために働き続けている。そしてへマスターは、ずっとへエンブリオにMPを供給し続けている。MP継続回復のアクセサリまでつけてさ』

「まるで悪魔に捧げられた……生贄みたいに」

『そうそう』

一拍間をあけた後、ヘルメスはキノに再度問いかけた。

『相手に尽くし続けているのは……どつちだと思う?』

第38話 幻の話 — One of the Freedom —

キノが案内された部屋には、一人の男が椅子に座って待っていた。依頼をしたいとのことで訪れたキノであったが、その依頼主に関しては見覚えがない。

当初は以前会ったのに忘れたんだろうかと自分の記憶の中をあさっていたが……キノがやってきたのを見て男が「はじめまして」と挨拶をしたことで、初対面だとわかった。

「はじめまして。キノといいます」

「わざわざ来ていただき、ありがとうございます……。どうぞ、おかけください」

座ったキノは、挨拶もそこそこに男から説明を受ける。

「どうやら男も《マスター》のようであり、しかし一方でゲームプレイヤーのように見えない。装備も初期装備のままだし、キノが《看破》を使ったところ、ジョブレベルもさほど上げていないことがわかる。」

その理由も、男が語った話の中にあった。

「まずは自己紹介させていただきます。私の名前はダニエル・ウィルキンス。医師をしているものです」

それは《看破》で見た名前と同じものだったが、どうやらリアルの名前でもあるらしい。

そして彼がログインしている理由。それは彼の仕事に起因するものだった。

こののはじまりはこの《Infinite Dendrogram》。あまりにもリアルなそのゲームに世界中のゲーマー達は歓喜したが……一方で、ダニエル達医師はそのゲーム、さらにいえば既存のものとは比べ物にならないそのVR技術に目をつけた。

「私たちの患者さんたちの中には、現実で心に傷を負ってしまった方々も多くいます。社会にそのまま戻してしまえば自分だけでなく

他者を傷つけるかもしれない人もいれば、社会に復帰したくても、その心の傷のために抵抗を覚える方もいます」

ダニエルの言葉は紛れもなく事実である。

キノは知らないが……たとえば、精神病院にいるとある人物は、《Infinite Dendrogram》の中において敵と見なしたものを問答無用で殺害する大量殺人者である。

もちろん、他者に害をなすというだけでなく……心の傷という苦痛から戻れない者もいる。

「そうか、だから……」

「ええ。その前の段階として、仮想の世界……つまり《Infinite Dendrogram》での、言うなればリハビリを行うことにしたのです」

実際に社会に出るのは辛い。しかし少しずつ慣れていく必要がある。

そのために彼らが方法として選んだのがリアルと同じような感覚であるという《Infinite Dendrogram》だった。「しかし、どうしてボクなのですか？　ボクに何をしろというのですか？」

キノのリアルはただの学生であり、カウンセリングなどができるわけでもない。しかも今回の依頼は人づてにキノ個人へと依頼されたものである。キノが自分で冒険者ギルドで選んで受けた依頼ではない。

ダニエルの話を聞いて彼の背景はわかって、自分が呼ばれた理由がさっぱりわからなかった。

「……私の背景は今語った通り。そして、このゲームを始めた患者さんの一人が王国で日々を送っていました。多くの子供たちに囲まれ、少しずつ笑顔を取り戻していました」

その言葉を受け、キノの頭に浮かんだのは先日戦った女性の顔だった。

ボロボロに疲れ切った顔でなお、彼女は子供たちと過ごした思い出を胸に全力でキノと戦った。その戦いの結末は痛み分けであり、二人

ともデスペナルティになったが……あの後、彼女がどこへ行ったのか、どうすることにしたのか、キノは知らない。

「しかし、私たちは理解できてなかったんです。この世界は……私たちが思っていた以上に、リアルだった。私たちがゲームとしか思っていなかったこの世界は、あの人にとっては紛れもなく現実世界と同じものだった。それに、気づけなかったんです」

悔しそうに語るダニエルの言葉に、キノは頷く。

デンドロをゲームと捉える遊戯派と、もう一つの世界と捉える世界派。両者の意識には大きな隔りがある。今回の話で言えばダニエル達は前者にあたり、話に出てくる患者が後者だったのだろう。

そして、この話でキノはおおよそその予測ができた。

「もうだいぶ前になりますが、強大なボスモンスターがこの王国に出現したというのは、キノさんもご存知だと思います。その際に、モンスターは多くのNPCの死を招いた。その中には、彼女が親しくしていた人々もいたのです。皆、死んでしまったのです」

ただでさえ心の傷があつた患者にとつて、親しかった人々が皆死んだことがどれだけ大きな影響を与えるかは想像もできない。

ダニエルは今、ティアンのことをNPCと口にした。彼らにとつてはあくまでゲームのプログラムにしか見えないのだろうが、患者にとつてそれはただのデータではなく、紛れもなく人間だった。

「貴方に依頼するのは、ホワイトキャップさんという方から紹介を受けたからです。患者さんからもその方のことは聞いてまして……。もう一人、エリーゼさんという方の名前もうかがっていますが、その方には、依頼するのは難しいだろうと」

「……そう、でしょうね。この前エリーゼさんと会ったばかりですが、同じくその出来事にひどく心を痛めていました。街へ来ることもなかなかないでしょう」

「そうですか……。さて、そろそろ本題に入りましょう。私があなただけにお願いしたいのは、彼女に会って、そして話をできてほしい。ただそれだけです」

説得などを頼まれるのかと思っていたキノはこの依頼内容に拍子

抜けした。話を聞いて自分が名指しで依頼された理由はわかった。ホワイトキャップは知り合いの（マスター）だし、おそらくは今回の“患者”と自分との共通の知り合いでもある。

“患者”の名前は未だダニエルの口から伝えられてはいなかったが、ここまでの話で予測はできた。

その予測は見せられた写真によって確信に至る。幼い少女の姿をしたその人物は、確かに会ったことのある人物だった。

「聞くだけ、ですか？」

「ええ。お恥ずかしい話ですが、現在私どもと彼女はうまくコミュニケーションが取れていない状態です。今の彼女には、“医師”の私の言葉は届かない。だからこそこの世界の中で、この世界で知り合った人となら……今の胸の内を明かしてくれるかもしれない。彼女の胸の内がわかれば、そこからどうカウンセリングを進めるか筋道を立てることができます」

ダニエルは立ち上がると、深々と頭を下げた。

「いつ、どこで会えばいいかはこちらでどうにか段取りを組めます。現実の都合を持ち込むなんて厚かましいとは理解していますが、どうか……」

ダニエルとのやり取りから数日後。

日が落ちた夜の街をキノは歩いていた。指定された場所とはある廃屋の一つ。

正確には、空き家になっていたものを交渉の末借りているもの、らしい。多少古いとはいえ建物一つを買い受けるにはそれなりの金銭が必要となる。

聞いた話によると、今からキノが会おうとしている人物は、もはや金策すらしていない。

だからこそ、お金がかからない形で廃屋を利用しているのだろう。彼女はもう、家に住む、ということすら必要としていない。

やがてたどりついたそこでは、誰も住んでいないはずだというのに外からわかるほどに明かりが漏れ出ていた。

とはいえ、約束していた人物がいるのはわかっていたのだから、キノが不審に思うことはない。

ノックをし、返事を聞いたうえで部屋に入る。

そこには――

「「あー！ お客さんだー！」」

数人の子供たちが、わらわらとキノの方へ近づいてくる光景があった。

たくさんの子供たちに引つ張られたりする状況にキノはデジャビュを感じる。相も変わらず子供慣れしていない彼女は子供たちにされるがままになってしまう。

そんな光景を、部屋の奥のソファアに座って見つめる人物が三人。大人の男女と、二人の娘らしい子供。

彼らがニコニコと見つめる中で、キノは複雑な気持ちで子供たちを見つめていた。

ランタンの明かりが照らすこの部屋を、キノはかつて見たことがある。それは、エリーゼに連れられて訪れたあの教会だった。

そもそも、廃屋だったはずなのに中に入ってみれば廃屋とは思えない綺麗な部屋になっているこの光景が、まともなものであるわけがない。

今キノと触れ合っている子供たちは、すでに死んでいる子供たちだというのに、この光景が現実であるはずがない。

離れた三人に目をやれば、その中の一人だけに唯一《看破》が反応する。他の二人や子供たちには何も反応しないというのに。

キノの視線に反応したかのように、子供たちは、いや、子供たちの幻は、三人の方へと笑顔で駆け寄っていく。

女性と少女がソファアから立ち上がり、子供たちとのじゃれ合いを始める。

何も言わず、動くこともない男性の横に座ると、女性と少女に向かって声をかける。

「お久しぶりです、チャイルドビューさん。話は聞いていると思いますが……ボクは今日、あなたと話をするためにここへ来ました」

キノの言葉に、チャイルドビューは答えない。

「ダニエルさんに聞いたのですが……あなたはルニクスが滅んだあの日から、ずっとデンドロに出たり入ったりを繰り返しているそうですね。しかも狩りなどにいくことはなく、ずっとここにいて」

近所の人に話を聞く限り、チャイルドビューらしき人物が外に出ている姿は見られていない。

廃屋を借り受ける際にも、「特に工事やリフォームなどは何もしないし、長時間いるわけでもないから」という話があったと聞いている。つまり、彼女はずっとこの廃屋の中で、幻に包まれ続けているということになる。

「あなたの〈エンブリオ〉は一度見せてもらいましたね。【夢幻幻灯スウォウルステイガネ】。エレメンタルのガードナー系列。有する能力は……幻」

「……よく、覚えてますね」

ポオツ、とランタンよりも強い光が、少女が差し出した両手の上に集まって形を作る。

その形は球体がぼやけたような姿をしていたが、これがスウォウルステイガネの本来の姿だ。キノもかつて見せてもらったことがある。「聞かせてください、チャイルドビューさん。あなたは、ここで何をしているのですか？ いえ……何を考えているのですか？」

「何を……。それは、たいしたことじゃ、ないんです」

ぽつりぽつりと語るチャイルドビュー。

ダニエルは話を聞けなかったというが、キノにはどうやら思いを告げるらしい。あるいは、キノだからこそ、かもしれない。

エリーゼ同様この世界で子供たちと共に過ごした思い出を、共有できる人物が相手だからなのかもしれない。

そのことをよく知っていなければ……きつと自分の気持ちはわからないと、そう考えて。

「私は、嫌になったんです。現実にはもう家族がない。この世界に



はもう子供たちはいない。失って悲しい気持ちになるのは、もう嫌なんです」

母親がゆつくりと少女を抱きしめる。

キノは話を聞きながら、二人の姿を眺めていた。そして、話し続けるチャイルドビューのHPが、どんどん0へと近づいていくのをじつと見つめていた。

キノは詳細を知らないが、これは《エンブリオ》の必殺スキルのデメリットなのだろうということは予測がつく。

事実、廃屋の中をすべて幻の光景で埋めるだけでなく、まるで本当の人がいるかのような動いて話す幻まで作り上げる……これが《夢幻抱擁》スウォウルステイガネの効果。

「ねえ、キノさん」

HPが0になると共に、周りの風景が一瞬で変わる。明るい教会の部屋から、ランタン一つの明かりしかない薄暗い廃屋の部屋へと戻り、子供たちの笑顔は消え、そして残された人物は二人だけ。

一人はキノと……そして、ふよふよとスウォウルステイガネが浮かぶ側で、何かを抱きしめていたかのように腕を曲げ、俯いていた少女……チャイルドビューが残っていた。

大人の女性のような幻の姿から元の少女の姿に戻った彼女は、HPが0になったことにより光の塵となりながらキノへと問いかける。

このデンドロにおいて大事な子供たちの幻も、事故で失った愛する夫と娘の幻も消えた廃屋の中で、涙ながらに問いかけた。

「この世界が自由なら……たとえ幻でも、幸せな思い出に浸るだけでも……いいじゃないですか……」

デスペナルティによって消えてしまったチャイルドビューに、答える言葉がキノにはなく。

ふと横を見ると、ランタンに灯っていた火が揺れて、やがて消えた。

### 第39話 使い方の話① — F e a r —

「……どうしたものかしら」

フランクリンによるギデオンでのテロ事件から数日後。

〈流行病〉からようやく回復したアルター王国第一王女、アルティミア・A・アルターはテロ事件に関する膨大な量の報告書に早くも頭痛を覚えていた。

対処しなければならぬことが、あまりにも多い。幸いにも、民間人に死者は出なかったが、衛兵や騎士などには死者も出たと聞いている。まずは彼らや遺族への対応が急務だと考え、報告書を読み進める。

「……………」

報告書において、どうしても出てくるのが〈マスター〉の存在。

事件を起こしたのが〈マスター〉である一方で、その事件を解決へと導く立役者となったのもまた〈マスター〉。

正直、アルティミアは〈マスター〉に対して良い感情は抱いていない。王国と皇国との戦争において、彼女は父をはじめ、あまりにも多くを失っている。あくまでも戦争の結果ということは理性ではわかっているが、それでも〈マスター〉への不信が彼女の中には根強く存在している。

特に、〈超級〉という存在には。

尊敬する師を殺したのは皇国に所属していた〈超級〉であり、父を殺した〈マスター〉も今では〈超級〉の一人だ。

また、自国では常日頃から無理難題を吹っ掛ける〈超級〉が何度もアルティミアの頭を悩ませている。

正直〈マスター〉の中でも、一番強力だが一番信じられない者たちだ。

「……無所属と思われる〈超級〉の目撃証言。目撃されたときには離反者の〈マスター〉達と戦っていたそうだけど……厄介ね」

その中でも、今回アルティミアの頭を悩ませる一人の〈超級〉は少々特殊だ。

今は国家に所属していないフリーの〈超級〉らしく、各地で目撃情報があるため姿は情報に通じたものならティアンでも把握している。しかし、知られている〈超級〉こそ今回のような事件では姿を隠したり陰で静観していそうなものなのに、なぜか中途半端に騒動へと介入している。

姿が確認されただけでなくそれが余計に疑念を掻き立てるため、アルティミアへと報告されたのだろう。

「さすがに放置はできないわ。昔は天地に所属していたようだけれど、今は無所属というのなら皇国とつながりがあってもおかしくない。内側にいる危険な〈超級〉はあの寄生虫だけでも十分なのに」

頭の中によぎる女性の顔を無理やり追い払って、彼女は紙に書いてある名前を睨みつけた。

〈マスター〉に調査を依頼するのはナシだ。本来なら自分が調査に出向きたい。しかし病み上がりなうえにテロが起こったばかりのこの状況で自分が出るのはまずい。仕事が溜まっているし、万が一相手が皇国の手先であり、自分に何かが起こったら目も当てられない。

しばらく考えた後に……仕方がないと決心をした。

「忙しいでしょうが、彼女にお願いしましょう……」

「ふあ……あ……」

ログインしてから大きくあくびをしたこの少女、〈マスター〉としての名前は雫。

デンドロにおいて100人といない〈超級〉の一人であり、先日起こった事件の中ではキノとの再戦予定が見事に潰れた八つ当たりで大勢のPKを相手に暴れまわり、最後は「獣王」とその〈超級エンブリオ〉と遭遇した結果デスペナルティとなっていた。

『雫様、おはようございます』

「おはよう、タマ。もう昼だけだね」

ポン、と小さな音を立てて姿を見せたのは雫の〈エンブリオ〉であるタマズサ。彼女は普段からメイデン態としての姿をあまり表にし

たがらず、今回も白い犬の姿になって現れている。

「どうやら、王国は無事事件を乗り越えられたみたいだね。一応リアルの方でも情報集めたんだけど、【破壊王】が正体を明らかにしたうえで大活躍だったみたいだよ」

『確かに、町中に活気がありますね。もしフランクリンの企みが成功していたのならとてもこんな活気はないでしょう』

街を歩いてみれば、あちこちに破壊の跡が見られるものの、人々の多くは笑顔を浮かべている。もちろん、死者が出たほどの事件なのだから全ての人間が、とまではいかないが……それでも、街の中には「危機を乗り越った」という雰囲気を感じられていた。

あの事件の中で雫が行ったことは大したことではない。正直、〈超級〉でない誰かでも複数人いれば十分同じことは可能だっただろう。

「さて、何をしたものかな」

デンドロにはこれといった目的は存在しない。何をするもしないも個人の自由。

しかしこれをゲームとして考えるのであれば、「このクエストを進めなければならぬ」などの指標がない分何をしようかと手持ち無沙汰になってしまうことも多々ある。

冒険者ギルドにでも行つて何かクエストでも探そうと思つたが……

「失礼します。雫さん、で合っていますか?」

声をかけられて振り向くと、金髪の騎士が立っていた。

手に持った写真と雫の顔とで視線を行ったり来たりさせていたことから、どうやら雫個人に用があつて来たらしい。

近くを歩く〈マスター〉が何人か騎士の顔を見てえっ、と立ち止まることもあつたことから、この騎士は知ってる人が多いのかな? と疑問に思う。王国に来たばかりの雫は目の前にいるティアンの顔は知らなかった。

それこそ、彼女はフランククラブもできるほど王国では有名だということに。

「はじめまして。私は近衛騎士団副団長、【聖騎士】リリアーナ・グラ

ンドリアです。少しお話ししたいことがありますので、よろしければ場所を変えませんか？」

『いかがいたしますか、雫様？』

「……そうだね、いいですよ」

特にこれからすることが決まっていたわけでもない。雫はリリアーナの提案を飲み、そのまま騎士団の詰め所へと移動することになった。

「すみません、こんなところまで」

「いえ、お気になさらず」

にこやかに応対するリリアーナだったが、内心では割と緊張していた。

第二王女の警護の任に当たっていた彼女へと急に与えられた任務、それが雫への接触だった。〈流行病〉のためギデオンは来なかった第一王女からの指令には「フリーの〈超級〉がギデオンに滞在している。可能ならば目的や背景などを探ってほしい」というものだった。

先日はフランクリンの事件があったが、そもそもそれ以前に〈超級激突〉というイベントが開催されていた。それを見に來ただけという可能性もある。アルティミアもそれはわかっていたから、もし国外へ出るようだったら深追いは不要だと伝えている。しかし、姿を隠すようなこともなく堂々とギデオンに滞在する姿が確認されていたため、アルティミアまで報告があがってきたのも事実。

イベントだけならもう移動を始めてもおかしくない。それがないからこそ、雫の動きはいやでも注目されていた。

「雫さんはどうして王国に？ やはり〈超級激突〉ですか？」

「いえ、確かに〈超級激突〉は見ましたけど、それは本題ではなかったというか、ついでというか」

実に穏やかに話す雫であったが、リリアーナの心境まで穏やかになることはない。

彼女から見れば仕方がなかった。つい最近他国の〈超級〉フランクリンによつて

事件を起こされたばかりだというのに、目の前にいる〈超級〉は〈超級激突〉以外に目的があつてここにいるという。だからこそ、その目的が何か、と問うのは自然なことだった。

「そうですか……では何か他に目的が？」

「ええ。実は天地にいた時からずっと会いたかつた人がいて。いや、その！ こつちがライバルに思つてるだけなのかもしれないですけど！ その人は各国を旅している〈マスター〉なので、いつかまた再戦できたらつて追いかけたらここまで……」

少しワタワタしながら話す雫を見て、リリアーナは一気に緊張がほどけていくような気持ちになつた。

もちろん、まだ皇国とかかわりがないと確定したわけではないが……今の話に《真偽判定》は反応しなかつた。何より、恥ずかしいのか少し顔を赤くして手を振る彼女が王国に悪意があるようにも到底思えなかつた。

彼女が王国に訪れた主目的がわかつたところで、これならばとリリアーナはさらに雫へと話を持ち掛けることに決めた。

「ところで雫さん。今夜、お時間ありますか？」

一通り話をしたうえで、リリアーナは雫へと話を切り出した。

「え？ ええ、まあ……」

「よかつた。実は、天地にいたという雫さんの腕を見込んで、お願いがあるのです」

リリアーナの話はこうだ。

先日、ギデオンから離れた場所でアンデッドのUBMが発生した。そのUBM自体はある〈マスター〉に討伐されたので問題はないのだが、発生した経緯が問題であつた。

なんでも、盗賊団が怪しげな呪術によつた結果生まれたアンデッドがそのUBMであり、その特典武具が怨念に関わる能力を有していたことから、その場所で怨念が残つている可能性があり、モンスターが活性化していないか調査する必要があるという。

「アンデッドが相手ならば、我々【聖騎士】は相性的に有利です。本来ならば我々だけで動きたいところですが何分先ほどの事件があつて

人手が足りているわけではないので……」

忙しいだけではなく、犠牲者も出ていることから人員が減ってしまっている。そのため手を借りたいというのがリリアーナの話だった。

「なるほど、そういうことですか」

「もちろんお願いするだけではありません。今回、私も同行させていただきます。また、回復役としてもう一人、〈マスター〉の方に協力をお願いしています」

「……わかりました。その依頼引き受けましょう」

リリアーナの頼みに、任せてくださいと雫は笑顔で胸をたたいた。

それと同時に、クエストを受領したと認定されたためか雫へアノウンスによる通知と表示が現れる。

【クエスト「ゴウズメイズ山賊団アジト跡地の調査——難易度・七」が発生しました】

【クエスト詳細はクエスト画面をご確認ください】

（難易度……七か。そこそこ高いな……）

冒険者ギルドのクエストとは違い、イベントクエストの難易度は管理AIによってクエストの内容だけでなく周囲の環境などからその難易度が算出される仕組みになっている。

今回のクエストの主目的が「調査」であることを考えると……難易度が高いように感じられた。

「あ、そうだ。〴〵紹介しておきましょう」

思考していた雫は、リリアーナが急に話しかけてきたことで我に返る。

どうやらもともと詰め所にいたらしい人物がリリアーナに呼ばれたらしく部屋に入って来た。その女性はパツと見た感じは軍服のよきな服装をしており、短い銀髪と紫色の鋭い目つきが雫の目に映る。

しかし一方で、頭の上にはナース帽とよばれるものをつけているのが妙に違和感に感じられた。

「この方が、本日協力していただけることになった雫さんです。雫さん、こちらは」

「はじめまして、零殿。私は……」

背筋の伸びた姿勢から自然に、それでいてきつちりと礼をする女性からはだらしなきの欠片もない、整然とした印象が強く感じられる。

この女性こそ、かつての戦争においては戦闘もさることながら傷ついたティアンの手当て、回復に全力を尽くし、多くの犠牲が出たとはいえ、彼女がいなければもつと犠牲が増えていたとまで言わしめた人物。

属していた克蘭の意向に逆らって戦争に協力したことから克蘭のオーナーであり〈超級〉……『月世界』扶桑月夜と大口論の末、彼女を殴り飛ばして克蘭を脱退したという逸話を持つ〈マスター〉。

「ホワイトキャップ、と申します。よろしくお願いいたします」

そのモンスターは、恐れていた。

そのモンスターは、恐れているが故に何かの跡地らしき、怨念渦巻くその場所まで逃げてきた。

そのモンスターは、恐れているが故に“力”を得てなお、その恐怖心と警戒心を捨てることはなかった。

そのモンスターは、恐れているが故に……近づいてきた〈マスター〉を、誰彼構わず襲うつもりでいた。



## 第40話 使い方の話②

移動には馬が使われる……予定だったが、雫は馬ではなく、「リンドウイン」で作り出した霊獣の背に乗っていた。

『雫様、揺れは大丈夫ですか？』

「うん、大丈夫だよ。いつもありがとう、タマ。ところで、一つ聞いていいかな？ ホワイトキャップさん」

「ええ。なんででしょうか？」

移動している間、雫は一つ気になっていたことがあり、ホワイトキャップに質問を向けた。

「噂だと、王国の〈超級〉を殴り飛ばしたって聞いたんだけど……何があつたの？ 同じクランだったんでしょ？」

クエストまでの間、少しホワイトキャップという〈マスター〉について雫は調べていた。

リリアーナというティアンが自分に接触したことで、王国が〈超級〉である自分に注意を向けているのではないかとは思っていた。なにせフランクリンという〈超級〉が事件を起こしたばかりである。

同じ国外の〈超級〉に注意を向けるのは自然だと思った。

そこで、当然自分と一緒にクエストを受けるという〈マスター〉についても興味が出る。

自分が警戒されている以上、それなりの〈マスター〉が選ばれるものと雫は考えた。だからこそ、ホワイトキャップという〈マスター〉も知られた実力者ではないかと思ひ〈DIN〉で情報を集めてみた。どれだけの実力者か、ということがそのまま雫に対する警戒度にもつながる。

その結果出てきたのが、「『月世界』扶桑月夜を殴り飛ばしてクラウンを脱退した」という逸話だった。

「私も……気にはなっていました。ホワイトキャップさんらしくない気もしましたし」

「いえ、何と言うか……そこまで大したことではないのですが」

二人から向けられた視線に、ホワイトキャップは少し困ったような

表情を見せたが、興味津々でどこか輝いているような目を向ける雫を見ると、ハアと小さくため息をついた。

「扶桑月夜……彼女がどういう人間かは、ご存知ですか？」

「え？ ええ少しは」

「まずは彼女のこと、そして私が所属していた月世の会に関して、説明する必要があります」

克蘭“月世の会”のオーナー、“月世界”の扶桑月夜。

そもそも月世の会という克蘭は現実に存在する宗教団体がデンドロにおいて構成した宗教克蘭。扶桑月夜は克蘭オーナーであると同時に、宗教団体の教主でもある。

「この月世の会は戦後、医者であった扶桑月世によって作られたものです。〈月世の会〉を誕生させた扶桑家は現在でも病院を経営しています」

「……なるほど」

ホワイトキャップは知る由もなかったが……その病院のことを、雫はとてもよく知っていた。ホワイトキャップよりも、ずっと。

「ここからは他者のリアルの話になりますのであまり他言してほしくないのですが……当然、教主である扶桑月夜も医者への道を志します」

ホワイトキャップと扶桑月夜が揉めることとなった原因の一つが、扶桑月夜が「医者を目指している」こと。もちろんそれだけではホワイトキャップが激怒して口論まで発展することはなかった。発端となったのは扶桑月夜の立場に加え彼女の性格、そして……第一次騎鋼戦争。

「そういえば、あなたが抜けたのは戦争の後の話でした……」

「リリアーナさんの前では言い難いのですが……月世の会が王国と交渉の末、戦争に参加しなかった。それ自体に思うことはないのです。克蘭の人たちは皆王国に所属する人々であっても、王国が所持する戦力ではない」

だから、ホワイトキャップとしては皇国と違い王国が報酬を用意しなかった以上、彼女が〈月世の会〉を動かさなかったことはむしろ自

然なことだととらえていた。

「もちろん、彼女はクランを動かさず自身も参加しませんでした。クランメンバーに参戦を禁じたわけではありませんでした。だからこそ、当初は私も思うところはなかったのです」

それが翻ったのは……戦争後である。

その時ホワイトキャップは、戦争に参加したために甚大な被害を受けた王国のテイアンたちを目の当たりにしていた。皇国の〈超級〉達による被害も多かったが、それ以外でも多くの被害を受けていた。具体的に言うとそのままでは命が危うく、生き残ったものの重度の障害を抱えて生きる重傷者ばかり。

だからこそ……戦争が終わった後なら、月夜も重い腰を上げるだろうとホワイトキャップは考えたが……。

「リリアーナさんはご存知ですよ。その後の話を」「ええ……」

扶桑月夜はここぞとばかりに、「〈月世の会〉のメンバーが希望したら騎士系職業の推薦状を書くならば治療を行う」という条件をつきつけた。元々彼女は、最初から無茶な要求を掲げ、相手が飲まざるを得ない状況を待つというスタンスだった。さらに実現されはしなかったが、「王国が所有する宗教施設の一部を〈月世の会〉のものにする」という条件を当初は掲げていたらしい。

この足元を見るような提案に激怒したのが……ホワイトキャップ。「仮にも医者……人の命を救う職業に就こうとするものが、しかもメイデンの〈ヘマスター〉である彼女が。人の命を天秤にかけた要求をしたことは、どうしても許せませんでした。私も医療系の職業に就いていますので、余計に」

扶桑月夜の要求を知ったホワイトキャップは、怒りのままに月夜へと詰め寄った。

リリアーナの前である以上言葉を濁したが、メイデンの〈ヘマスター〉はデンドロ口の命を現実の命と同じ重さで見なしている、と言われている。つまり、ゲームだからと軽視することもなく、命の重みを理解して尚、その命を医者志望の月夜が天秤にかけるような要求を王国に

行った。戦争が終わった後でもそのような態度を見せる月夜に納得などできるわけがなかったのである。

そして、言及はやがて口論となり、最後には月夜を殴り飛ばしてクランを脱退することになった。

「……と、いうわけです」

「なるほど、そんなことがあったのですか」

「さて皆さん、そろそろ目的地ですよ」

話をしているうちに、ついに目的地へと到着した一行。

三人の目の前にあるのは崩れた砦跡。また、辺りにはところどころに何か巨大なものが暴れたかのような跡が残っている。おそらくこれが、リリアーナの話に出てきたUBMのことだろうな、と雫は思った。

到着するとすぐに、周囲の調査から始めていく。戦闘跡はところどころに見られるものの、今回の目的はあくまでUBMの影響が残っていないか、モンスターの活性化していないかの調査が目的である。

見たところ、アンデッドのモンスターが闊歩しているような光景は見られない。モンスター自体、周辺にはいないようであった。

「うーん……特に問題はなさそうですね」

「ならば、砦の中へ行くべきでしょう」

「一番アンデッドがいてもおかしくない場所ですからね、無視はできません」

アイテムボックスから手提げ型のランプを出すと、暗がりとなっている中を照らしながら足を進める。リリアーナもいつアンデッドのモンスターが出て問題ないように、アンデッド特攻の効果がある《聖別の銀光》を発動させている。

警戒しながら歩いてはいるが……外同様、モンスターがいる気配はしない。実際のところ、UBMが発生した際に発動した術式、《グラッジ・アンデッド・クリエイション》は辺りの怨念を根こそぎ吸収していた。そのため、砦内の怨念もほとんどが吸収されて残っていないからなのである。

中にいたアンデッドも、戦闘中である【聖騎士】が《聖別の銀光》

を使って倒したため、怨念は浄化されている。

三人が奥へと進んでいってもUBMの影響が残っているようには見られない。リリアーナの頭の中で、今回は問題なしとみていいか……そう思ったとき。

「あ、あれ！」

奥に、ふらふらと揺れるように佇む黒い影が見えた。そのシルエットは猿のようなもので、シルエットでも全身が毛に覆われていることがわかる。

「リリアーナさん！」

「はい！ 攻撃は私と雫さんで、ホワイトキャップさんは回復に専念を！」

「わかりました！」

何か相手が仕掛けてくる前に、そう考えた雫は腰にさした刀を構え、間合いに入った時点で《居合い》を用いてAGI強化からの抜刀攻撃を放とうとする。

だが……強化されたAGIにより振るわれた素早い抜刀は、驚くほどにあっさりとしルエットを両断した。手ごたえがなかったわけではない。

だがまるで、「避けようとしなかった」ような……？

「つつっ！」

次の瞬間、雫は肩に何かで斬られたような感触を受ける。

いや、何かとはそう、まるで刀のような……！

「リリアーナさんまずい！ この黒い影、受けたダメージを返す能力がある、いくなれば困だ！」

「そのよう、ですね……！」

雫がたじろいだ様子を見て、慌てて剣を止めたりリアーナ。しかしその隙に影は鋭い爪をもった手を振り上げてリリアーナへと攻撃しようとしたので、攻撃する代わりに剣で受けとめる。

「実体はある……ならば放置するわけにも……」

「返されたダメージは回復します、お二人はペースを見て攻撃を！」  
「わかりましたあ！」

ホワイトキヤップの支援を受け、ダメージに構わず雫は次から次へと湧き出してくる黒い影を切り捨てていく。確かにダメージが自分にもある程度返ってくるのは厄介だが……実のところ、雫にとっては都合がいい。

このまま少しづつ重ねていって、本体を見つけ出して叩く。それができれば雫たちの勝ちだ。

そう思っただけをかけたように振り返った雫の目に……離れた位置に立つホワイトキヤップの、その後ろに立つ黒い影が映りこんだ。

それは今まで自分たちが戦っていたほんやりとした影のように見えたが、爪を振り下ろそうとしたとき、黒い毛に覆われた獣の姿がはつきりと見えた。

「ホワイトキヤップさん！ 後ろ——」

間に合わない。

本体は隠れて自分たちの戦闘を見ていたのだろう。そしてそれぞれの動きを見定め、ホワイトキヤップを……回復役を的確に狙って攻撃を仕掛けてきたのだ。本体は《気配遮断》のスキルも持っていたのか、接近に誰も気が付かなかった。

そのまま、爪がホワイトキヤップへと振り下ろされ

「ハアツ!!」

……る、前に獣の方が大きく後ろへと殴り飛ばされた。

回復役であるはずの彼女はステータス的には雫たちには劣っていないはず。獣の目にはそう見えていた。

だがホワイトキヤップの動きは、ステータスでは説明しきれない。ステータスによる速さによるのではなく、的確な体さばきと技術に裏打ちされた殴打が、避けさせぬままに獣の腹へと突き刺さっていたのだから。

雫の脳裏には、天地での修行の日々と常人離れた戦闘能力を見せつけた女性の姿が浮かんでいた。

「あれは……間違いない、リアルで身につけた格闘術……!？」

一步下がった猿のような獣の前には、フウーと大きく息を吐いて構えをとる女。

彼女の名前は、ホワイトキャップ。

扶桑月夜を殴り飛ばした女。

ステータスで劣るはずの《超級職》……【女教皇】を、回復型のジョブ構成にもかかわらず、殴り飛ばせた女。

彼女のジョブ構成は、ゲーム界限でも珍しい……「殴りヒーラー」と呼ばれるジョブ構成である。

## 第41話 使い方の話③

クラウドモンキー、というモンスターがいる。

基本的に群れを作り、集団で行動をする猿型のモンスターである。かつてトップ・クラウドモンキーと呼ばれたそのモンスターは、群れの長として君臨していた。長として時に導き、時に自分のために盾として使いつぶしてきた。

そんな日々も……へマスターへ達に襲われたことで終わりを告げる。へマスターへによる圧倒的な火力でクラウドモンキーは瞬く間に群れの数を減らし、命の危機に陥った。

嫌だ、嫌だ、嫌だ。

ただただ恐怖に震えるトップ・クラウドモンキーは、群れを自分の盾として真っ先に逃げ出したが……自らを守るための群れはあつという間に討伐され、自らも多くの傷を負った。

クラウドモンキーの長たる彼には自分の群れのモンスターにダメージを移す《ライフリンク》に近いスキルがあつたが、群れがいなくなってしまうばダメージを移す相手もない。

幸いにも命だけはとりとめたが……へマスターへから姿を隠した先で、血を流して息絶える寸前であつた。

嫌だ、嫌だ、嫌だ……！

死に怯え、ぼんやりとした視界の中に、ふと小さな何かが映り込む。それが何かはわからなかったが、何となくそうしなければならぬ気がして、トップ・クラウドモンキーはそれに手を伸ばし、口に含んだ。

次の瞬間、彼には聞こえないアナウンスが流れる。

【デザイン適合】

【存在干渉】

【エネルギー供与】

【設計変更】

【固有スキル 《猿影生成》 付与】



【固有スキル《影傷反射》付与】

【スキル《MP自動回復》付与】

【死後特典化機能付与】

【魂魄維持】

〔逸話級UBM〕認定

【命名【代影体刻　ハリアーシ】】

それが、今ホワイトキャップ達の前に立つへUBM……【ハリアーシ】が誕生した瞬間だった。

「はあああー！」

『ゴギヤアア！』

ホワイトキャップが拳を振るうも、ハリアーシにはダメージが入った様子がない。代わりに離れた場所にいた影の一体が強力な打撃を受けたかのように爆散し、ホワイトキャップもまた腹に衝撃を受けたかと思うと吐血した。

「いけない、《フォースヒール》！」

咄嗟にリリアーナがホワイトキャップへと回復魔法を使用する。今彼女の身に起こったのは、今も影を斬り続けている雫の身に起こったのと同じ現象。すなわち、与えたダメージが自分にも反映されたということだ。なぜ本体を殴ったにもかかわらず影を殴ったのと同じ現象が起こったのか。ホワイトキャップの頭によぎった可能性は二つ。

一つ目。本体にも同種のスキルがあるから。しかしこの場合、相手に攻撃が完全に通らないことになってしまう。相手がそこまでランクの高いへUBMだとはいえない。それに、本体だけで防いだのなら別の影が爆散した理由が説明できない。

二つ目。本体が受けたダメージを、離れた場所にいた影が代わりに受けたから。影がダメージ反射の能力を持っていることはすでにかかっている。当初は影にできるだけダメージを与えずに、影を避けながら倒さなければならぬ……いわば広域殲滅型にとって相性が悪

いタイプかと思っていた。だが、この二つ目こそが正解であり、実際は避けるだけではだめなのだ。

ホワイトキャップの推測が正しければ。

この〈UBM〉を倒すには、影を全て排除したうえで、反射されたダメージを耐え抜かなくてはならない。迂闊に攻撃すれば複数体分のダメージがまとめて自分に返ってくる広域殲滅型にとって相性が悪いのは間違いないが、さらに言えばこの〈UBM〉はソロの個人戦闘型でも相性が悪い。ただ強いだけでは「ハリアーシ」には勝てない。パーティなどで回復手段を別に用意しなければならぬのだ。

だからこそ……

「雪殿！……いつはおそらく、影を全て倒さなければダメージが通らない！ 本体への対処は考えがあります！ リリアーナ殿は彼女の回復を優先してください！」

「了、解……！」

「わかりました！」

本体の足止めや攻撃役とは別に、影を全て倒す者がいればいい。彼女は察する。この〈UBM〉は、複数人の協力による討伐なら十分に狙える、と。

「《治癒者の領域》、展開！」

ホワイトキャップは自らの〈エンブリオ〉、赤く発光する魔法陣を足元から展開する。その範囲内にリリアーナが入ることは横目で確認済みだ。

彼女の〈エンブリオ〉の能力特性は回復強化。自らだけではなく、世界の範囲内にいるもの全てを対象として行使する回復スキルの効果増幅、コストの削減が《治癒者の領域》の能力だ。

欠点としては範囲を広げた代償か効果の対象を選べないこと。それこそ、敵の回復スキルでも強化してしまうことか。ただし今回の敵であるハリアーシに回復スキルはない。その辺りも確認して回復スキルを持ってないと判断したからこそその〈エンブリオ〉使用である。

「《来たれ我が眷属よ、霊獣よ》」

雫の特典武器である【霊獣召鈴 リンドウイン】、その腕輪についた

鈴がチリンと音を鳴らす。次の瞬間、多数の犬型の獣たちが我先にと影たちへと襲い掛かる。そのダメージ反射はあくまで雫ではなく、召喚された霊獣たちへと還る。その中で雫自らもまた刀を振るい続け、傷を負いながらも影の数を削っていく。その傷はホワイトキャップの「ヘエンブリオ」により強化されたりリアーナの回復魔法、そして雫の装備スキルで次から次へ治していく。

ホワイトキャップはというとハリアーシ本体を前に相手を殴りながら自分への回復を施しつつ、アイテムボックスから「ジエム」を取り出した。「ジエム」に込められた魔法を発動する前に、叫ぶ。

「聞こえていますね!? あなたはこの本体が逃げないように足止めと、不意打ちへの対処をお願いします!」

返事はない。

ただし言葉が返ってくる代わりに……【高位結界師】のスキルである結界が周囲を覆う。結界の外への逃亡を物理的に阻止し、AGIを減少させるものだ。結界の展開を確認したホワイトキャップは「ジエム」に込められた光魔法を発動させる。

大した威力のあるものではない。精々辺りを明るく照らすだけのもの。だがその光はハリアーシの影を伸ばし……

『《シャドウ・スタンプ》』

伸びた影を、背後ですつと気配と姿を隠していた男が踏みつけた。

彼女の言葉が投げかけられたのは、雫でもリアーナでもない。今回の調査対象である「超級」が万が一何か企んでいたり仕掛けてくる可能性を考慮して、ホワイトキャップが独自に雇っていた「マスター」だ。

『もう一つおまけで、《ブラッド・アレスト》』

『ギョオ!』

突如自分の身に降りかかった【呪縛】や【恐怖】、【吸魔】の状態異常にハリアーシは驚きと恐れで声をあげる。そして、その隙を逃すホワイトキャップではなかった。

ダン! と音が鳴るほどの踏み込みと共に、彼女はスキル名を口にする。

「《この血は傷つく人々のために》、《気孔拳》」

宣言したのは「治療前線 ナイチンゲール」の必殺スキル。もう一つのスキル、《気孔拳》は彼女のメインジョブである「高位僧兵」が持つスキル。

踏み込みと共に放たれた拳は、また一体の影を爆散させ、同時にホワイトキャップへとダメージを与える。だが、《気孔拳》はただの攻撃スキルではない。与えたダメージに応じた回復効果がある。ダメージが返ってくるといえども、《治療者の結界》によって増幅された回復効果ですぐに治る。

「《気孔拳》」

そして、必殺スキルである《この血は傷つく人々のために》は、簡単に言えば《治療者の領域》の上位スキル。上昇率は高くないが回復量をさらに高め、コストをかなり削減する。だが、もう一つ追加効果がある。

それは……

「《気孔拳》、《気孔拳》」

『ゴア、ガアア……！』

回復効果を持つスキルの、クールタイム消去。

「《気孔拳》《気孔拳》《気孔拳》《気孔拳》」

『ガアアアアアアアア！』

代償として、対象となった回復スキルの減少前コストに応じたダメージを受ける。さらに今はハリアーシからの反射ダメージやハリアーシ本体からの攻撃によるダメージも受けている。

だが、それらは繰り返し返される《気孔拳》の回復効果や、時折混ぜられる自身やリアーナの回復魔法で十分カバー可能。

その結果生まれるのは……

「《気孔拳》《気孔拳》《気孔拳》《気孔拳》《気孔拳》《気孔拳》  
《気孔拳》《気孔拳》《気孔拳》《気孔拳》《気孔拳》《気孔拳》  
《気孔拳》《気孔拳》《気孔拳》《気孔拳》《気孔拳》《気孔拳》  
《気孔拳》《気孔拳》《気孔拳》《気孔拳》《気孔拳》《気孔拳》！」

「う、つわぁ……」

『やっぱりえげつねえッスね、このコンボ……』

《気孔拳》が回復効果を持つ攻撃スキルであることを利用した、ヘエンブリオとのシナジー。絶え間ない回復と攻撃を繰り返す恐るべきコンビ。

初めて見る雫だけではなく、以前見たことのあるリリアーナや未だ姿を隠したままの男さえ唾然とするほどのラツシユだった。

だが、このラツシユによつて……影の数が、大きく減る。それはすなわち、ハリアーシ本体へと攻撃が届くことを意味する。

その光景は……かつて死にかけ、死に怯えてここまできたハリアーシの目にどう映るのか。

『アア、アアアアアア!?!』

「くっ、まだ影は増えるのですか!?!」

死にたくない。

死にたくない。

そんな気持ち悲鳴としてハリアーシの喉から溢れ、《猿影生成》のスキルを全力で行使する。自分を守る影さえあれば、自身が傷つくことはない、死ぬことはないからだ。

そして自身は……逃亡を図ろうとする。かかっていた【呪縛】や【恐怖】が時間経過で解除されたのもあり、体が自由に動くようになったハリアーシは影たちに足止めをさせ、全力で逃げようとした。

「この……逃げるな!」

リリアーナが追いかけてようとするも、AGIはハリアーシの方がはるかに高い。

「逃げるな!」

ホワイトキャップが追いかけてようとするも、影が今まで以上に彼女の妨害をしようとするため、それを殴り飛ばすことに気がとられてしまふ。

「逃げるなあ!」

雫はこの中で一番、影を大量に倒していたためその分受けたダメージも大きかった。回復が行われているとはいえ血を多く流しており、傷痕系状態異常も発生していた。

これで逃げられる。

そう思って入口へと走ろうとしたハリアーシは……

展開されていた、透明の結界に顔からぶつかり、その逃亡を遮られた。

『ガア!? ガアアアアアアア!!』

最初に男は結界スキルを使ってハリアーシの逃げ道をふさいでいた。たとえハリアーシを拘束していた状態異常が切れたとしても……結界のスキルは、まだ残っている。狂乱するハリアーシがガンガンと結界を殴り続けるも、男の〈エンブリオ〉によって増強されたMPにより、強固に組まれた結界は壊れる様子を見せない。

ハリアーシを逃がさないための檻が、破られたわけではなかったのだ。

「逃げるなああああああー!」

次の瞬間、その場にいた影のほとんどが断ち切られて、消えた。

ゲホ、と血を吐きながら雫が全力で刀を手に走り続け、影たちを両断していったのだ。

そう。全力。

それまでは一気にダメージが返ってくる可能性があるためにペースを抑えていたものの……【修羅】の奥義、《血戦舞台》によって雫のステータスは戦闘当初よりもはるかに上昇していた。その気になれば、影たちを一掃できるまでに。

相手にダメージを与えれば与えるほど。そして、自分がダメージを受ければ受けるほど。その上昇量は増え続ける。

自分と相手の血が流れれば流れるほど、【修羅】はその力を増していくのだ。

傷痕系の状態異常を多く抱えることにはなったが、体を動かすだけ

なら支障はない。今の雫は特典武具である紅い籠手と具足を装備している。その効果は、「HPの継続回復」、そして「傷痕系状態異常を無視して思うように体を動かす」もの。逸話級の特典武具故に強力なスキルでは決してないのだが……ダメージを受けてこそ強くなる【修羅】にとつては強力な後押しになる。

逃げられないと悟ったハリアーシは、生きあがくが故に《猿影生成》を使い続けるが……召喚のペースが間に合わない。さらに言えば、シャドウ・スタンプによって与えられた【吸魔】がここに来て召喚の限界を後押ししていた。

いかに《MP自動回復》があるといっても、ハイペースで召喚スキルを使っているのは消費のほうが多すぎる。

『アア、アアアアア……』

ハリアーシには理解できなかった。

こちらに与えようとしたダメージは間違いなく相手にも返っていた。ホワイトキャップも、雫も、血を流し続けていた。

なのになぜ。血まみれになってなお、戦おうとするのか。血を流し、傷だらけになっても、自分を殺そうとする彼女たちの姿はハリアーシにとつて恐怖以外の何物でもなかった。

雫が影を一掃していくことにより、ホワイトキャップが再度自由になる。一気に距離を詰めると、必殺スキルが切れたとはいえ拳を振り続け、ついにダメージが入り始める。

『アアアアアアアアアアアアアアアアアア!!』

ハリアーシも必死だ。雫とホワイトキャップによって影は一掃され、自分の身を守るものがない。全力で目の前のホワイトキャップを止めようと全神経を彼女に集中させ、

『待ってたツスよ、この時を』

首に強い痛みを感じ、動きを止めた。

男はずっと、姿を隠しながらサポートに徹し続けてきた。もともと彼自身が搦め手を得意とするタイプであり、下手に姿を見せたところで邪魔にしかならないだろうと思っていた。

また、彼はハリアーシを逃がさないための結界スキルを発動し続けていた。だからMPもそこまで余裕があるわけではなかったし、素のステータスが高くはない自分が倒され相手を逃がすよりはずっと耐え忍び、サポートに徹していた。

しかし今、影が一扫され、ハリアーシの意識はホワイトキャップへとむけられていた。その背後は完全に無防備になつており……

男はその首へと、ナイフを勢いよく突き刺したのだ。

『ガ、ア……』

急所へのダメージ。ダメージを転嫁する先はもうどこにもなかったハリアーシは、弱弱しく唸るとその体を光の粒子へと変えた。

〔UBM〕【代影体刻　ハリアーシ】が討伐されました】

【MVPを選出します】

【ジャンク・ラック】がMVPに選出されました】

【ジャンク・ラック】にMVP特典【代影体石　ハリアーシ】を贈与します】

アナウンスによって戦いの終わりが告げられると、彼らの空気が弛緩する。ずっと姿を隠していたジャンクは、リリアーナや雫へペコリと頭を下げる。

「どうも、おつかれさまです。オレの名前はジャンク・ラック。戦闘スタイルの関係でずっと姿隠しながらサポートさせてもらってたっす」「彼は私が個人的に雇っていました。その、万が一の事態が起こった時の対処として、です」

雫を疑っていて、というのには本人の手前言いづらいのでぼかしつつホワイトキャップが紹介したことで、二人も彼へと礼を言う。

ジャンクは問題なさそうだからとそのまま帰り、ホワイトキャップとリリアーナは一番ダメージの大きい雫へと回復魔法をかける。

「ああ、どうもありがとうございます」

「いえ、私こそ一番ダメージを負う役目を雫殿へとお願ひしていたの



で」

「私に至っては回復役として戦闘にはあまり参加してないので……さすがにもうMPが限界ですけどね」

笑って言うリリアーナ。

一方、ホワイトキャップは言うか言うまいか迷っていたのだが……表情を引き締め、雫へと口を開いた。

「最後に……その。言いづらいことですが言わせてほしいことがあります」

「なんででしょう?」

「あなたの、戦闘スタイルのことです。正直目を疑いました。あなたの最後の行動……影の一扫は、一歩間違えれば死ぬほどのダメージを受けていました。事実、かなりの傷を負っていたでしょう」

雫は何となく言われようとしていることを察し、違っているといなど思いながら苦笑いを浮かべ後ろを向く。

その背中へ、ホワイトキャップはなおも言葉をつづけた。

「血まみれになってもなお、戦い続ける姿はまるで、死を恐れていないように見えました。いえ、事実そうなのではありませんか? 私は、その目を知っています。リアルで何度も見てきた、あの目をしているんですよ、貴方は」

彼女はかつて、衛生兵として戦場にいた過去がある。格闘術もその時鍛えたものだ。

そして、戦場だからこそ彼女は見てきた。

死を受け入れてしまっている、その目を。  
「あなたにかつて何があつて、あなたが何を思ったのかは知りません。この世界であなたが死ぬことはないから単に死をリスクとしていないのかもしれないし、それ以外の理由があるのかもしれない。ですが、私は」

「死を恐れていないのは、悪いことですか? 死に恐怖を抱える必要があるのですか?」

ホワイトキャップの言葉を遮り口にした言葉には、雫が抱える何かが進められていた。

「ホワイトキャップさんが善意で言ってくれているのはわかります。私の戦闘スタイルは確かに死を前提としている部分がありますし、自分自身死を受け入れている面がある自覚はあります。ですが、あなたが心配する必要はありません」

それは、どうしようもないからだ。

どうしようもないから。死に怯え、恐怖し続けるのはもうやめた。

「私の命です。命の使い方は……私が決める」

彼女は振り返ることなく、さようならと口にして、その場を去っていく。

あとに残されたりリアーナとホワイトキャップは、どこか痛ましながら視線で……彼女の背を見つめていた。

第42話 味気ない話 — See you Lat  
er. —

バリ、バリ、バリ。

なにか硬いものを噛み砕くような咀嚼音がその場に響く。

「そんなもの、よく食べようと思いますね……」

「うまいよ？ 割と」

『キノも旅に出るなら野営が増えるでしょ？ 食べ方習っておけば？』

「いやあ……野営するからってキノがバリバリ鉄とか齧ってたら私は引くよ、きつと」

席についているのは三名。いや、厳密に言えば四名。

一人は黒いジャケットを着て傍らには自らのへエンブリオであるバイクを置いてある少女、キノ。

一人は真つ黒なローブに身を包み、真つ白な長い髪が腰まで伸びている女性、エリディナ・クロス。

「……慣れればいけるよ」

「慣れる前にボクの歯が折れます。あなたと違ってボクは歯が強化されるようなスキルはないですから」

残りの二人は、二人で同じ椅子に座っていた。

男性の方は長身かつ引き締まった体の成人男性。伸びた前髪が右目を隠しているのが特徴的だ。

女性の方は今までの会話には全く関わらず、ただ男性に身をくつつけたまま手で口元を隠して食事をしていた。

「三人のお茶会でカタだけ変な何かを食べる。もう何度も見た光景だけど、慣れたかって言われると複雑だね？」

「そこまで変なものは食べていないつもりだけど。二人とお茶会する時は俺だって食べるものは選んでる」

男性……カタ・ルーカン・エウアンジェリオンはエリディナの言葉に不満げそうに返事を返す。

キノ、エリディナ・クロス、カタ・ルーカン・エウアンジェリオン。この三人は共にドライブ王国をスタートとしており、とあるクエストで一緒だったのを機にお互いこのへ Infinite Dendrogramを始めた頃からしばしばこうしてお茶会をしている。

辺りは風のない草原。草原の中心に道が交わる交差点があり、その交差点にてティーテーブルを置いて、三人でティータイムをしていたわけだ。

一通り雑談を楽しんだところで、時間を確認したらしいエリディナが呟いた。

「おっと、もうこんな時間か。そろそろお開きとしようか？」

「ああ……。もうか」

「そうですね。今日も場所やお菓子ありがとうございます」

名残惜しそうにカタとニーズヘッグは席を立つ。キノもエリディナへ頭を下げると、席を立つ。

一人だけ座ったままのエリディナは残ったお菓子やお茶が入った食器ごと全て自分のアイテムボックスへと収納した。さらに立ち上がる所とそこにあるティーテーブルや椅子も全て自分のアイテムボックスへとしまつてからキノへとウインクを飛ばす。

「なあに、いいってことさ」

パチン、と指を鳴らし……次の瞬間、周囲の風景が一変した。

それまで広がっていた青空は煙漂う灰色の空へと変わり、一面に広がっていた草原はタイルが敷き詰められた地面へと変わる。

いや、正しくは戻ったというべきか。

なぜなら、今までの風景は全て……風景だけではない、その空間自体が彼女、エリディナによるへエンブリオ。テリトリー系列のへエンブリオを展開し、その空間の中にカタとキノを招いてお茶会を開いていたのだ。

「俺とは全然違うタイプへのエンブリオだからなあ……そういう使い方ができるのは少し羨ましいかも」

何気ないカタの言葉だったが、それに異を唱えるように無言でジッと視線をカタへと送る彼のへエンブリオ、ニーズヘッグ。

「まあ確かに、戦闘とは別の使い方ができるのはいいよねー」

「といつても、ボクはエリディナさんが戦闘で〈エンブリオ〉使うのは見たことがありますけどね。てつきり非戦闘型の〈エンブリオ〉だと思っただけですけど……戦闘にも使えるんですか？」

キノの疑問に、うーんと首を傾げるエリディナ。彼女としても、自分の〈エンブリオ〉については説明しづらいものがあるらしい。

「そう言われると戦闘に使えるとは言い難いかも。うん。キノやカタみたいなシンプルな〈エンブリオ〉だったらまだ説明しやすいんだけどね。私に似て少しややこしい能力なのさ」

あえてその詳細を問う者は誰もいない。

〈エンブリオ〉の能力というのは千差万別。その詳細という情報はそれだけで武器になる。キノもカタも、そしてエリディナですらも。互いの〈エンブリオ〉について基本的なことについては知っているが、その詳細は知らないし、互いにあえて伏せている能力もある。

余計な詮索はしないというのは、〈マスター〉同士の一種のマナーでもある。

「それじゃ、また今度」

「今度はクエストとかも行くのもいいかもね」

「ええ、また」

三人はその後も集まってはお茶会で雑談をしたり、時には一緒にクエストなどもこなした。

それが三人にとって、紛れもなく思い出の一つとなったのは間違いない。近接のカタ、遠距離のキノ、サポートのエリディナと、互いの役割ができていたことも大きいだろう。

しかし、その日々は――

「……今、なんて言った？」

いつまでも続くものではない。

「かねてからの夢だった世界をまわる旅。そろそろ、出発しようと思っんです。おかげ様である程度はレベルも上がりましたし、ヘルメスも第3形態まで進化した。いい頃合いだと思っんです」

「そういえば言っただねえ。そうか、もう旅立つんだね」

あるお茶会の際。キノから唐突に切り出されたのは、彼女が旅に出るという話。

それはつまりこの国から出るということであり、必然的に今まで三人でお茶会やクエストをしていた日々は終わるということだ。

〈Infinite Dendrogram〉はゲームだ。クランを組んだわけでもないし、今までの日々がずっと続くわけがないのは最初から分かり切っていたこと。

だが……それでも……

「……なあ。レベルが上がったといつても上級職すらついてないじゃないか」

「正確には【高位操縦士】だけは一応とってますよ、0レベルですけど。操縦士系統のジョブクリスタルが他の国で見つかる保証なんてありませんし」

ちなみにそのジョブは天地に行った際とある女性によって捨てさせられるのだが、今の時点でキノはそれを知る由もない。

「ならまだ早いんじゃないか？ ルーキーであることには変わらないんだ。もつと時間をかけた後でも」

「確かに安定をとるならそうなのかもしれない。でも、ボクは安定を求めているわけではないんです。ボクは旅をするためにこの世界に来了。最初こそ我慢はしていたんですが、本当は今すぐにでも旅に出たい気持ちなんです」

カタはキノの事情を知らない。だから旅になぜそこまで憧れているかを理解することはできない。

彼が理解できているのは、今までの楽しかった日々が終わりを告げようとしている、ただそれだけだ。

「なんだい、もしかして寂しいのかい？ カタは」

「茶化するよエリディナ。でも……そうだな。行ってほしくないっていうのは本心だ」

「それは……すみません。もう決めました」

まっすぐな目を向けるキノに、カタは言葉が出てこなかった。

エリディナには彼の手がどこか弱弱しく、まるで引き止めるように

伸ばそうとして引っ込んだのが見えた。だがそれを口にすることは  
ない。

その後カタの口数は少なくなり、逆にエリディナがひたすらに喋っ  
ていた。

キノに対しどのような道筋で旅をする予定なのか、とか今後とりた  
いジョブはあるのか、などひたすらに質問詰めにしていた。

キノもゆっくり、これからまず王国に向かうつもりで、いつ出発す  
るつもりかなどと答えていく。

最後の茶会は、こうして本人たちが感じるよりも早く時間が過ぎて  
いった。

出発当日。

(カタさんもエリディナさんも、いなかったな……)

〈叡知の三角〉のメンバー達や皇国で知り合った人に見送られ、晴れて  
夢だった旅へと踏み出したキノ。しかし、見送りのメンバーの中には  
カタもエリディナもいなかった。

都合が合わなかったのかもしれないが、一番パーティを組んだので  
はないかと思えるくらいには一緒に活動することが多かった二人が  
来てないと思うと少し寂しいものがある。

ヘルメスに乗って王国への道を進んでいたキノはあらかじめ調べ  
ていたこともあり、モンスターに遭遇しても大きな戦闘にならず、安  
全な道を進んでいく。

草木と土、あと岩くらいしかない道ばかりを進んでいったが……や  
がてキノが進む先に、一人の人物が立っているのが見えてきた。

『キノ』

「……うん」

なぜその人物が皇国ではなくこの道すがらにいるのかはわからな  
かったが、旅のルートの話はしていたからここで自分を待っていたの  
だろうということはある。

ただの見送りならばいいのだが……だったら出発の場所でもいいは

ずだ。だからこそ、ここにいる理由がわからない。

「……こんなところにいたんですね、カタさん」

「……まあ、ね」

キノを待ち受けていた人物……カタ・ルーカン・エウアンジエリオンはゆつくりとキノに視線を合わせた。

傍らにニーズヘッグの姿はない。それは紋章の中にいるか……あるいはカタと融合しているか。

そして後者ならば、その意味合いは明白だ。

「なぜここに、と聞いても？」

「なんていえばいいのかな。そう、強いて言うなら」

ヘルメスからは降りないまま、キノはゆつくりと右手を腰の方へと移動させる。

ルーキーのキノに対し、カタはキノよりもレベルが上だった。また、キノと違ってカタの能力は戦闘向きである。

そう――

「二度、キノと戦<sup>を食べて</sup>てみようかな、と。どのみち俺に倒されるくらいじゃあ、旅なんてまだ早いんだよ」

カタの手や腕に、口が現れる。これはカタのヘエンブリオ、ニーズヘッグの能力。

キノと戦うならカタはあまり相性が良くない。AGIはヘルメスに乗ったキノの方が上かもしれないが、近づかれてしまえばヘルメスや自分を喰われてそれで終わりだ。特にヘルメスをやられてしまうと頼みの綱であるスピードですら失ってしまう。

キノはすぐに銃を抜くが、内心かなり焦っていた。相性の問題、そしてレベルの問題。

今のキノにはカタを倒せるだけの力量があるかという点、はつきりいって怪しいものがあった。彼女自身、旅に憧れていたがために心が逸って出発の日を早めたという自覚はあったのだ。

ゆつくりと迫るカタに対し、キノは銃を構え――



「ああ、やっぱりこうなるよね……危惧した通りだった」

気がつけば、そこにもう一人立っていた。

光学迷彩でも使っていたのか、それとも隠密系統のような気配を消すスキルなのか、はたまた転移系のスキルなのか……彼女が何を使ったのかはわからない。

だが、カタとキノ、両方が認識していなかった場所に、彼女は突如として現れた。

「……エリディナ」

「やあカタ。せっかくのキノの晴れ舞台だっていうのに、直後に襲つてデスペナで逆戻りさせるなんて趣味悪いよー？　いくらまだあの時間を続けたかったって言ってもさ」

「うるさい……」

「そんな味気ないこととしてどうするのさ。また会おうって笑顔で手を振るものだけ？　こういうのはさ」

「うるさいっ!!」

エリディナの言葉は、的確にカタを煽っていた。

突然のことで頭に来てしまったのか、それとも心の内を言い当てられたのが許せなかったのか。彼はキノからエリディナへと狙いを変え、鋭い牙が生えた口をその手に生み出したまま、エリディナへと右手を振りかぶった。

エリディナは三人の中では支援を担当していた魔法職【魔女】。【魔術師】の派生ジョブでも特殊なものであり、女性しか就けないという〈マスタ―〉でも就けない者がいる数少ないジョブの一つ。しかし今で言うならば、この中では一番AGIやENDが低い存在であり……

「かふっ……」

「エリディナさん!？」

カタの右手の口はエリディナの腹部を噛みちぎり、エリディナの上半身と下半身を真っ二つに引き裂いた。

【救命のブローチ】のようなダメージを身代わりに受ける装備は持っていないかつたらしく、彼女の体は血を巻き散らしながら地面へと落ちる。

あとはキノだけ。そう思ったからこそ……血を流すその口が動き、閉じられたかに思えたその目がカタを見据えていたことには気づかなかった。

「……殺したね？」

「……ッ！」

光の塵となりかけていたその体。紛れもなく致命傷を受けていたはずのエリディナは、死ぬことが確定していたはずなのに、笑った。まるで、それが狙いだったかのように。

「さあいけ、キノ。旅立ちの時だ」

カタはとどめを刺そうとしたが……そもそも、彼女の体はもうHPが残っていない。今まさに死のうとしていいる体だ。ならばせめて、何も言えなくなるように頭を潰す。

しかし、それは何の意味もない。彼女の必殺スキルの発動には、発声が必要としない。

《生きるか死ぬかの分かれ道》

そんな声が風と共に聞こえたが……キノが気がついた時にはエリディナの死体も、そしてカタの姿も。

もう、どこにも見えなかった。

「ここは……いつものあの場所か……？ いや、なにか違う……」

エリディナとカタは、二人で灰色の大地に立っていた。カタがいつもの風のない草原かと思った根拠は、その足元にある。

足元には灰色の大地に道がひかれているのがわかる。それはまるで、いつもの草原のような十字路の交差点。

「その通り。おっと、攻撃はやめておくれよ。いきなり頭とか殺意高すぎじゃないのかい？」

「……口が、出ない」

背後からエリディナの声が聞こえたことで、勢いのままカタは背後に立っていたエリディナの頭部を食べようとする。だが、手に口が現れないことで、そもそもへエンブリオであるニーズヘッグと一緒にいないことに気がついた。

さらに言えば、手自体がエリディナの頭をすり抜けた。もし口ができたとしても、エリディナを攻撃することはできなかつただろう。

「君は【気絶】で何も無い空間に行ったことはあるかい？ 今いるここはちようどあんな状態なのさ。ここにいる我々はいわば魂だけの状態。装備もなければスキルも使えない。私たちの命を今握っているのはこの空間そのもの、というわけさ」

ニヤリとした笑みを浮かべたエリディナは、ゆっくりと両腕を広げる。

「ようこそ。私のへエンブリオへ、【選択試 ゲデ】へ」

「ゲデ……死神だっけ？」

「正確にはブードウー教の精霊の一種だけだね。まあ死神としても知られているから間違いじゃない」

“バロン・クロス 十字架男爵”とも呼ばれるこの死神は、死者が神々のもとへ向かう途中にある「永遠の交差点」に立っているとされる。

その逸話から、今二人が立っている十字路の交差点があることは大いに予想できた。

カタが自分のいる場所を見てみれば、正確には交差点の中心ではない。中心に立っていたのはエリディナの方であり、さしずめ自分は十字路の道の一つから進んできたような、そんな場所に立っていた。

「私のへエンブリオへは実にギャンブルじみた能力だね。通常であれば正しい道を行けばバフがかかり、間違った道を行けばデバフがかかる。普段皆を招いていたのも通常発動の方だ……だが今回発動したのは必殺スキルだね」

《生きるか死ぬかの分かれ道》。このスキルは誰かの死をトリガーと

して発動可能となる。エリディナ自身が死ねばエリディナと彼女を殺した人物を。他者が死んだ時に発動すれば、エリディナと死んだ他者を「ゲデ」へと取り込み、相手へ選択を迫る。

なお能力を説明するのが条件の一つのため、「ゲデ」に取り込める相手は意思疎通ができる人間範疇生物であることが条件となる。

エリディナは黙ったままのカタに向かって、指を三本立てて見せた。

「二つ目の道は私の命をコストにして、君がこの空間から生きて出る道。二つ目の道は君の命をコストにして、私がこの空間から生きて出る道」

「……二つ目は？」

二つまでを説明して黙ったエリディナに、カタは最後の道の意味を問いかける。もつとも、予想はついたが。

それは今、笑みを深くしたエリディナを見れば間違いないと確信できた。

「両方死ぬ。それが三つ目の道さ。ちなみに私はどれが正しい道かわからないし、私に選択権はない。相手がどの道を選ぶかを見守ることしかできないし、私にとってはそれで十分だ。人生とは選択の連続であり、私はただ人が決断するその選択を見ていただけなんだよ」

「人生とは選択の連続である」。シェイクスピアの言葉だ。

「実に至言だと思わないかい？ だから私は君の選択に興味がある。君がなぜキノの旅立ちを歓迎しないという選択をしたのか、あまつさえ戦って殺すことを選んだのか、非常に興味がつきない。だがそれを話してくれるとも思っていないのでね」

黙ったままのカタに対し、エリディナは道を選べと急かすことはない。だが、カタとしては選ぶしかない。

選ぶなければどうなるかを聞くことはしなかったが、聞かなくてもカタの意に沿うものでないことだけは確かだろう。ならば、選ぶしかないのだ。

「ならば君の選択が正しかったのかどうかは、今からの選択でわかるだろうさ。故にこそ私はその選択を尊重しよう。君が正しいという

のなら、君はきつと正しい道を選べるはずだ。その結果君がキノを追いかけることができてもできなくても私はもはや関知しない。君がいかなる選択をするのか、それだけが今の私の興味の対象であり、私がここに立っている理由の全てだ」

カタはもはや何も言わない。

この女性が、この十字路の【魔女】が、本気でそう言っていることがわかってしまったから。

こんなにも、“個人”に対して何の興味も持っておらず、味気ない対応をできるのが、彼女の本質だと気づいてしまったから。

「……残念だよ、エリディナ。今までの日々は、本当に楽しかったんだ」

「……………」

ゆつくりと、選んだ道を進んでいく。

カタは進んでいった道の先で姿を消し……それを見送ったエリディナはゆつくりと目を閉じた。

自分の体が光の塵になっていくのを感じ、そして——この十字路の空間は消滅した。

「…………ハア」

翌日。

デスペナルティから戻ってきたカタは、一人で喫茶店の椅子に座っていた。

いや、正確にはへエンブリオのニーズヘッグも一緒だが……カタにとつては、一人も同然だった。

机の上には食べ物がのっけてはいるが、全然手が進んでいない。知る者が見れば、とても珍しいと驚くだろう。

「なんか、食事が味気ないな。なんでだろうな」

キノとエリディナ、そしてカタ。三人でのお茶会はとても楽しかった。

食事がとてもおいしいと感じられた。なのに今はどうだ、食べ物が

悪いわけではないのに、どうしてこうも食事が進まないのだろう。

「一人で食べるのは……つまらないんだな」

どこかのクランにでも入ろうか。

そんな思いを抱きながら、カタは静かに席を立った。

第43話 拉麺の話 | d i n i n g m a n n e

r s l

バイクのエンジン音が草木茂る大地に響く。

相棒のへエンブリオであるヘルメスに乗り続けてデンドロ内ではや2日。ようやく町が見えてきた。

『今度の町は大きいね、キノ』

「そうだよ、ヘルメス。黄河帝国の中でも物流が盛んなところだね。だからこそ……」

『だからこそ?』

じゅるり、と女子にあるまじき音がした。

「きつとおいしいものがあるに違いない……!」

『あーあー。またキノの食い意地が』

旅の醍醐味の一つ。それはおいしいものを食べることに。

前にいたグランバロアでは海鮮物をがつつり食べ、巨漢のマダムと争奪戦を繰り広げながら“海の”熊の掌を食べ。

黄河帝国でも気になるものがあれば食べているが、今回の町でもおいしいものがあるのでと楽しみで仕方がない。

「よし、いそぐよヘルメス! 《ギアシフト》!」

『そこまで急がなくてもいいのになあ……』

わざわざAGI増加のスキルをつかわなくてもいいじゃないか……とぼやくヘルメスだったが、長い旅を一緒にしてきたのだ。自らのへマスターがそういう人物なのだ、理解している。

だからぼやいてそこで終わり。

二人の旅は、いつだってそんなやりとりの繰り返しなのだから。

「さて、中に入ったはいいいけど……食事するお店とかどこかないかなあ」

人の数は多く、活気もある街並みをキノはきよろきよろしながら歩

いていく。

商売が行われている地域にも着いたが、目をとられるものはあつてもこれぞというものがなかなか見つからない。

そんなキノの目に、ある光景が飛び込んできた。

「ん……う？ あれは……」

『行列……だね』

露店が立ち並んでいる通りの一番端、広い空間が空いているその一角。そこには、長い行列ができていた。

周りの店に負けず劣らずいい匂いが流れてくるそのお店からは、どこか熱気すら流れてくるように感じる。

たまに列を抜かそうとするものが出るほどで、そのたびに他の並んでいるものから後ろへ並べと追い払われているほどだった。

その行列の先には確かに店があつたが……ただの露店ではない。

『露店というより』

「屋台だね、ヘルメス。しかも出されているのは……なるほど」

外からでも、屋台の椅子に座つて客が食べている様子が見えた。

出された食器の中では湯気が出るほどあつあつのスープの上に、卵や海苔などが乗っているのが見える。別の客の食器には、スープの上に多くのモヤシらしき野菜が。

彼らに共通するのはただ一つ。ある人は音をたて、ある人は音をたてないように……麺を、その口へと運んでいる。

「ラーメンか」

ラーメン。

麺とスープを主とし、そこに様々な具を組み合わせた麺料理。中国の麺料理が本来のルーツとされているが日本で新たな発展を遂げたともいわれている料理であり、日本人であるキノにとっては大変馴染み深い料理だった。

デンドロは世界中のプレイヤーが同じ世界に集まっているわけだから、行列に並んでいるへマスターの中には、そもそもラーメン自体にあまり馴染みがない人も多いだろう。

「デンドロラーメンって興味があるな……せつかくだし、食べていこ



うか」

『お好きにどうぞー』

少しウキウキした気分で、キノは行列へと並ぶ。

流れてくる匂いには種類がいくつかあるようで、だからこそ味も数種類用意されているのだと予想できる。

並んでいる人間は老若男女様々であり、その中にはへマスターもティアンも両方いる。

「ああ寒い、寒いです……。早くラーメンを食べて温まらなくては。ラーメン、わたくしの心の薪……」

キノの前の方で順番待ちの行列に並ぶ銀髪の女性。正直全然寒くない気温のはずだが、白いコートとマフラーを装備し寒そうにしている。手袋もしているあたり寒がりな人なのかもしれない。

「ジジイ！ ジジイ！ オレ達の順番はまだなのかよー！」

「まだじゃから黙って待っておけ……。全く、堪え性のない奴だ」

黒い丸眼鏡をかけ、中国服を着た老齢らしき男性はびよんぴよんと自分の周りを飛び跳ねる赤毛の少女に対してめんどくさそうな顔をしていた。顔は全然似ておらず祖父と孫、のような関係にはとても見えない。何か別の関係なのだろうなとキノは思った。

彼らに続いて行列にて自分の順番を待つキノ。流れてくるラーメンの匂いは豚骨、味噌、醤油と様々な種類のものがあり、目を凝らししてみるとやはり今ラーメンを食べている人たちの器には、それぞれ違った色のスープが見える。一種類だけでなくいくつか種類を揃えているのだろう。リアルとは食材も違うだろうによくここまでラーメンを揃えることができたものだ。キノは内心感心していた。

（これならラーメンの味も期待して良さそう……。でも、種類が多いならその分どれにするか迷うな）

自分の番が来るのを今か今かと楽しみに待っているキノ。それは行列に並んでいる他の人々も同様だ。

しかし……。迷惑な人間というのは、どこにでも現れるものである。

「いいか？ 目的はあそこの屋台。あんだけ人がいるんだ、そこで俺たちの突発ドッキリが成功すればこの動画はきつと注目されるぜ！」  
「やっぱり人気が出るためにはでかいことしないとだしな」

屋台から離れているところで、三人の〈マスター〉がこつそりと話し込んでいた。

彼らはリアルにおいて学校の同級生であり、顔見知り。彼らが今企んでいるのは「ドッキリ」といえば聞こえはいいが、やろうとしているのは屋台を攻撃し、騒ぎを起こそうとするという迷惑行為でしかない。

「ああ、〈アンダーグラウンド・サンクチュアリ〉に続くのは俺たちだ！」

〈アンダーグラウンド・サンクチュアリ〉はレジェンダリアにて活動している犯罪クランである。〈超級〉の一人である「嫉妬魔王」ジューがオーナーを務めており、犯罪活動をネットに投稿しているのが特徴だ。

つまり彼らも、その動画に影響を受け、自分たちも同じようなことをして注目されようと考えていたのである。若者特有の目立ちたがりが出たのかはわからないが、いずれにしても他人に迷惑をかけようとしているのには変わらない。

「確認するぜ、まずカイリーがスキルで姿を隠して屋台に近づく。そしてマルランが離れたところで混乱を起こした隙にラーメンにあれこれ入れて台無しにする。俺は頃合いを見て、合図もかねた爆発を起こすから、爆発が起きたらトンスラしてくれ」

「わかったぜ、セルト」

「頼むぜ、へまするなよ」

打ち合わせを終えた三人は、それぞれの役割のために移動やスキルの準備を始める。この時、彼らの頭の中には自分たちが華々しく目的を遂げることしか想像できていなかった。

自分たちが攻撃しようとしている屋台のラーメンを、楽しみにしている人がどれだけいるか。想像できていなかったのだ。

(俺の役割は屋台に近づかないといけない……。慎重に、慎重にだな)  
自らの姿を隠す隠蔽系のスキルを発動し、カイリーはゆっくりと屋台へと近づいていく。近づけば近づくほど出されている料理のいい香りが鼻をくすぐる。少しおながへってきたが、自分たちの目的は食事ではない。

(ゆっくり、ゆっくり……。気づかれないように……)

客たちが並ぶ行列の方へと近づいていく。有力なへマスターやティアンに気づかれては邪魔されてしまうと慎重に歩みを進める。彼のへエンブリオのスキル効果もあって音も姿も隠せている

「……ちよつと、その貴方」

(えっ?)

……はずだった。

急に肩をつかまれ、驚いてそちらに顔を向けると自分へとしっかりと視線を向け、右手をカイリーの肩においた銀髪の女性の姿があった。

彼女の目は虹色に光っている。彼女には、「熱源を見る」、ピット器官のようなスキルがあったのだ。

(なんで? なんで俺のことがばれて)

「ああ、寒い……。行列に割り込むつもりだったのか、良からぬことを企んでいたのかは知りませんが」

肩をつかむその手に、力が入る。振りほどこうとするカイリーだったが、その前に女性のスキルが発動する方が早い。

女性が掴んでいた箇所から、カイリーの体が凍っていく。よほど強い冷気なのか、女性の体も一部氷に覆われていくが、女性は装備によって耐性を保持している。一方で術者を巻き込むほどの冷気のスキルを、耐性装備のないカイリーがレジストできるはずもなかった。

「何にしても、わたくしのラーメンを邪魔するのなら凍ってしまいな  
やっ」

氷漬けのカイリーから、返事は何も帰ってこない。  
急に人が氷漬けにされ、驚いた周りの視線は全く気にすることなく、女性は自分の番を楽しみに待っていた。

「ジジイ」

「ウム。わかっておるわい」

「食事の前の運動だ……手足だけでいい、解け、ジジイ」

「……良いじゃろう。【ピグマリオン】、限定解除」

老齢の男性は牙をむく少女の要望に応え、指を鳴らす。次の瞬間、少女は本来のステータスに身を任せて勢いよく地面を蹴り、標的のもどへと飛んでいく。

彼女の視線の先には、カイリーに注意がいかないよう陽動を起こすつもりだったマルランがいた。

「なっ!？」

マルランが驚いたのも仕方ない。自らの「エンブリオ」であるガードナーが突然飛んできた少女に……それも、まるで地竜のような手足を持った少女に踏みつぶされたのだから。

反応する間もなく、少女の鋭い爪がマルランへと振り下ろされ、彼の体を切り裂いてデスペナルティへと導いた。

「チツ……いちいちジジイの許可をとらなきゃこんな奴も倒せないのかよ、面倒くせえ」

本来の彼女であれば、たかが400レベルの「マスター」くらい、簡単に蹴散らせるというのに。

男性の許可がなければ戦闘すらできないことに、再び人間の姿へと変えられた地竜の苛立ちは消えない。マルランを一蹴したにも関わらず。

「とりあえず飯だ飯。たっぷり食わせてもらおうと……」

「な、なんだよあれ……」

こんなはずじゃなかったのに、とセルトは戦慄していた。

カイリーは銀髪の女性に見つかったと思っただけで氷漬けにされ、マルランにいたっては全身を切り裂かれてデスペナルティにされた。

自分はマルランとは別のところ……並んでいる建物の天井の上で、身を潜めていたがもはやここも安全ではないのではないのと思い始めていた

「とにかく、とにかく逃げなきゃ……いや、せめてカイリーだけでも回収を、そのためにあそこのへマスターへはどうにか……」

カイリーがいた行列の方へと魔法を向けようとしたとき、違和感に気づく。

「……え？」

自分が行列の方を見ているのと同様に。行列の方からも、こっちを見ている者がいる。

その者は、何か、こちらに向けているような――

『めいちゅー。お見事』

「よし。これでボクのラーメンは守られた」

『何だったんだらうね？　こちらに魔法を撃とうとしていたってことは、何か狙っていたんだらうけど』

そんなのどうでもいいよ、と狙撃銃をアイテムボックスに戻したキノは答える。

結局のところ。

食事を邪魔しようとした奴が、一番悪いのだ。